

続いのちささげて

——
戦中学徒・遺詠遺文抄
——



国文研叢書

No. 20

社団法人 国民文化研究会

続いのちささげて

— 戦中学徒・遺詠遺文抄 —

はしがき

『続いのち ささげて』と題したこの本は、一年前に出版した前編の『いのち ささげて』の続編であり、前編と同じく、——戦中学徒・遺詠遺文抄——といふ副題を添へました。「前編」に収録し得なかつたものを、ここに「続編」としてまとめたものです。

内容としては、大東亜戦争における「戦歿学徒」の遺詠遺文のほか、この諸君が出征する以前に、この諸君と一心同体となって活躍した人たち、すなはち、当時全国の旧制高等学校、旧制専門学校、ならびに官公私立の旧制大学に在学中、それらの学内にはびこつてゐた「日本の精神文化に対する軽蔑の言辞」に対して、また、それを不問に附してゐた当時の「学風」に対して、学生の身を以て身を挺して戦ひ続け、つひに不幸にも病魔に斃れていつた諸君についても、その遺詠遺文をあはせてこゝに収録いたしました。また、これらの諸君の先輩格としてすでに学窓を出て社会人として活躍してゐた数名の戦歿・病歿者も加へてあります。そのため、戦歿学徒のものが主ではありますが、

あへて「戦歿学徒」とはせず、「戦中[○]学徒」の名を本書の副題に冠したわけであります。

学業半ばにして軍籍に投じ、苛烈な戦局にあつて壮烈に戦ひ、その魂魄を祖国日本の悠久の生命に投じた人々と、死せる場所は戦場とかゝはりなくとも、尊い生命を燃焼しつゞけて学園の正常化に身を挺した人々との間に、深い友情の絆^{きずな}が結ばれてゐることを確認しつゝ編集されたのが、「前・後二編の本書」であります。「前編」には、戦歿七名、自刃一名、病歿四名、計十二名（数へ年、十七歳から二十九歳まで）のものを収録したのに続き、この「統編」には、戦歿二十九名、病歿五名、計三十四名（数へ年、二十一歳から三十六歳まで）のものを収録いたしました。これら二書に収録した合計四十六名の青年の間に通ひ合つてゐた「祖国日本の伝統への随順と没入」の精神は、必ずや読者各位のお心に深い感銘を与へずにはおかぬものがあるであらうと信じます。

この前・後二編の「遺詠遺文抄」の編集は、これらの諸君とともにその時代に学徒であつた仲間たちによつて、戦後直ちに企画され、その後、昭和三十一年に現在の「国民文化研究会」が生れて、鹿児島県・霧島で「第一回学生青年合同合宿教室」を開いたそ

の時から、さらに一層の熱意をもつて取り組み出しました。しかし、いくたびかの挫折をのりこえ、やうやくにしてこゝに上梓できたものであります。三十年といふ月日は、それは過ぎて見ればアツといふ間のやうでもありますが、さき逝きし友らの在りましゝ日々のことは、年月を経るに従つて鮮明に甦つてまゐり、委員諸氏を中核にして多くの同人の「果たさずにはやまぬ」追憶の一心が凝つて、こゝに至り得たのであります。

住所もわからぬご遺族を探し求めて遠く訪ねる作業も、各委員諸氏が、多忙な生業・勤務生活の合間を縫つてのことでありました。さき逝きし友らへの敬仰と思慕の情なくしては、到底なしうることではなかつたと思ひます。逝きし友らの「死にやう」「生き方」が、本書を通じて、いまの若い人々に通ふものがありとするならば、在天の霊もいかばかり喜びたまふことかと思はれます。かくあれかし、と祈念しつゝ、この「続編」の「はしがき」の拙文とさせていたゞきました。どうか「前編」と合せてお読みくださるやう祈念いたします。

昭和五十四年三月二十日

(社)国民文化研究会理事 小田村寅二郎
重 細 重 大 学 教 授

読者のご参考に供するため、本書に収録した学生諸君が、その生前に所属してゐたグループとそのグループ活動について、左に簡単に説明させていただきます。くことにいたしました。(同じ文を、『前編』の巻頭にも掲載してあります。)

一

これらの戦中学徒諸君が、その学生時代に具体的に所属してゐたのは、「日本学生協会」と名づけられたグループ(戦後になつて、同じ名前の会が、下宿幹旋業として東京に出来ましたが、それとは全く関係がありません)で、そのメンバーは、当時の全国の官公私立の大学・高専校にわたつてゐた。この「日本学生協会」は、昭和十五年五月に結成されたが、この会には「道統」の前身があり、また上部団体として、昭和十六年二月に結成された「精神科学研究所」といふグループを持つてゐた。後者は、すでに学窓を出て社会人となつてゐる先輩たちのグループであり、この二つが一体となつて、学園ならびに社会にみられる思想の混迷を是正すべく、渾身の努力を展開してゐたのである。そして、この二つの団体の理事長は、ともに一高・東大出身の若冠三十歳の田所広泰といふ方であつた。なほ、この「日本学生協会」の顧問に就任して下さつた方々は、公爵・近衛文麿、海軍大将・末

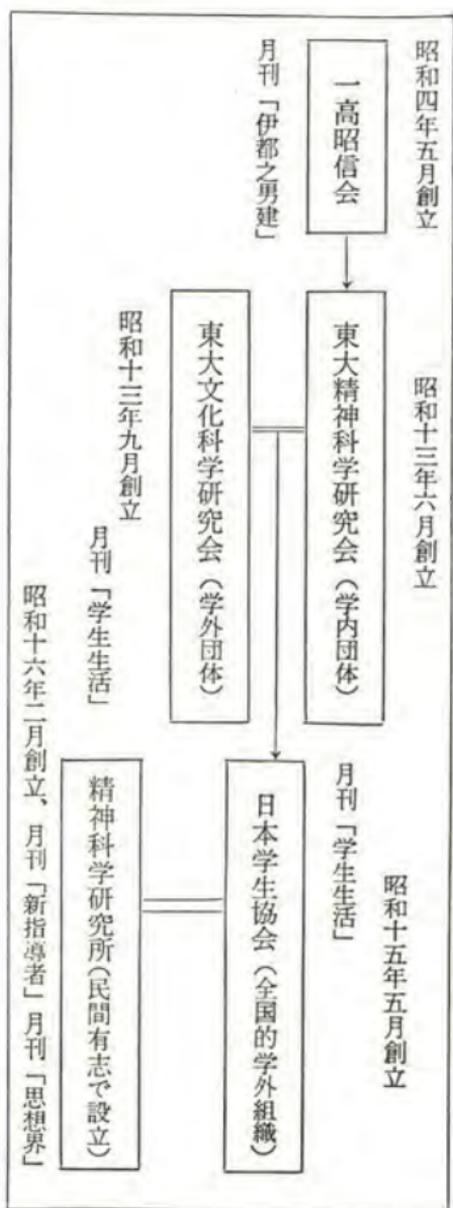
次信正、中島知久平、徳富猪一郎、平生鈆三郎、安井英二、陸軍中將・筑紫熊七、陸軍中將・柳川平助、白鳥敏夫、松井春生、宇田尚、文学博士・吉田熊二、文学博士・西晋一郎、栗本勇之助、堀切善次郎、文学博士・常盤大定、医学博士・暉峻義等、文学博士・鹿子木員信、清水重夫、角野久造、大坪保雄、三井甲之の諸先生であられた。

また、先に記した「日本学生協会」の前身といふのは、昭和十三年九月に生れた「東大文化科学研究会」(東大の学内団体としては「東大精神科学研究会」)であり、この「東大文化科学研究会」が発展的解消をとげて「日本学生協会」ができたのである。なほ、この「東大精神科学研究会」は、昭和十三年六月に東大の学内に創立されたが、これは、昭和四年五月に、旧制一高の中のできた「一高昭信会」の出身者たちが作ったものであった。この「一高昭信会」は、わづか三十歳で他界された篤学者、黒上正一郎先生を師と仰ぎ、聖徳太子と明治天皇の御思想を学問の中心として学んだグループであつた。

ついでに読者のご理解の便のために、左にこの道統を图表にして示しておきたいと思ふ。

一

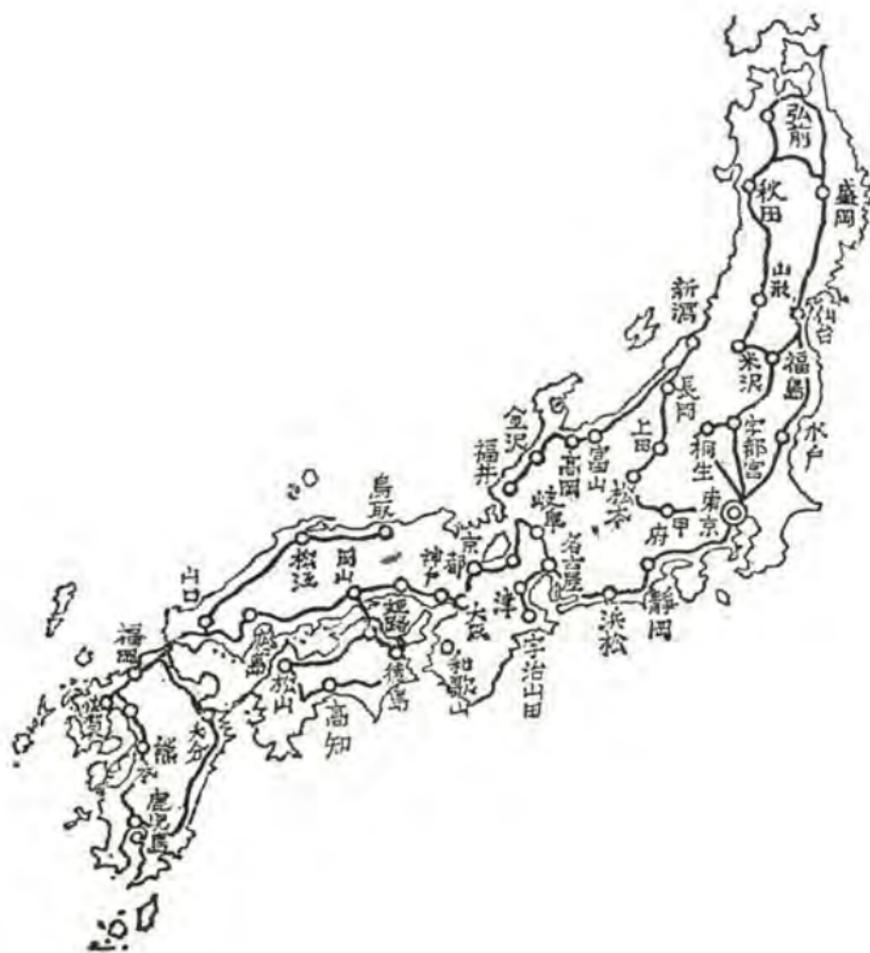
次に、右の「日本学生協会」が、どのやうに全国的な連絡網をもつてゐたかも知らせたいので、当時の月刊機関誌『学生生活』に掲載されてゐた、数次にわたる「全国巡訪地図」の一つをあとの九ページに掲載することにした。



三

当時、連絡がついてゐた学校はほぼ全国にまたがつてをり、具体例をもつて紹介すれば、昭和十五年七月、信州菅平高原で開催した「全国学生合同合宿」には、遠く満洲の建国大学、朝鮮の京城帝大、台湾の台北高商などからも参加者があり、八十四校、三百九十一名の学生の参加者がみられた。その学校名は次のごとくである。

旧制大学の部



昭和15年の全国遊説コース

東京帝大、京都帝大、大阪帝大、東北帝大、九州帝大、北海道帝大、名古屋帝大、京城帝大、東京商大、大阪商大、神戸商大、広島文理大、東京工大、新潟医大、建国大学（満洲）、満洲医大、慶応大学、早稲田大学、明治大学、拓殖大学、法政大学、日本大学、中央大学、同志社大学、立命館大学、関西大学、国学院大学、慈恵医大。

旧制高等学校の部

一高、二高、四高、五高、七高、八高、新潟高校、松本高校、山口高校、姫路高校、佐賀高校、福岡高校、水戸高校、松江高校、松山高校、高知高校、東京府立高校、浪速高校。山形高校
旧制専門学校の部

山口高商、福島高商、福岡高校、長崎高商、大倉高商、大阪高商、高岡高商、和歌山高商、台北高商、長岡高工、米沢高工、浜松高工、東京高工、名古屋高工、広島高工、徳島高工、福井高工、仙台高工、秋田鉱山専門、東京高師、国士館、東京美術学校、東京外語学校、大阪外語学校、天理外語学校、九州医専、宮崎高農、千葉高等園芸、関西学院、横浜専門学校、二松学舎、大東文化学院、奉天科学院、北京興亜学院、青山師範、正則予備校、日本聖書学校、日本神学校。小樽高商

四

ちなみに、右の信州菅平高原での約四百名による「全国学生台同合宿」は、それに引続いて参加

者全員が上京して、日比谷公会堂で大演説会を開いた。そして、満堂に溢れる東京都民の前で、思想混迷の日本を直ちに建て直すべし、と強く訴へた。今は亡き文士の尾崎士郎先生は、その壇上において力強い激動演説をしてくださったのである。

また、菅平での合宿の実況をはじめとして、右の日比谷公会堂における大演説会の模様はすべて、三十五ミリのトーキーフィルム（藤原ラボラトリー製作、解説のアナウンサーは、NHKの竹脇昌作氏が担当してくださった）に収められ、『文化の戦士』と名づけられて、内務省の検閲を経て、文部省より「一般用映画」としての認可を受けてゐる。このフィルムは今日も保存されてゐるが、この遺稿集の文中にも、時をり『文化の戦士』といふ名前が出てゐるが、それは、一つには登場者たちが自らを「文化の戦士」と自負してゐたことを指し、あはせてこの映画の題名をも兼ねてゐるのである。

五

この遺稿集の原稿は、「日本学生協会」本部の出版物をはじめ、各大学、高専校のサークル活動の中から生れた、手書きの謄写印刷のさまざまなレポートから抽出されてゐるので、それらによつたものについては、各項の末尾にその出典を記した。それら一つ一つのレポートは、当時学生たちによつて心をこめて作られたものであつた。

（小田村寅二郎、香川亮二記）

凡例

一、本書には、三十四名の遺稿を収録いたしましたので、「前編」に収録した十二名と合せて、「前・後編」二冊で合計四十六名の方々の遺文遺歌を編したことになります。

一、副題の「戦中学徒」の「戦中」の意味については「はしがき」にも記しましたが、この「続編」に収録した遺稿の筆者は、昭和十六年から昭和二十一年秋ごろまでに死歿された方々であります。

一、本書に収録した遺稿は、大部分の方がかなり大量のものを残してをられる中から選んだものであり、その種類は、「和歌」「詩」「俳句」「書簡」「論文」などにわたつてみました。配列は、これらの種類別にするとはせず、執筆年月の順序に従ひました。また執筆年月が確認できなかつたものは、内容から推定した時期によつて配列しました。

一、登場人物の年齢は、当時の習慣にならつて、すべて「数へ年」にしました。

一、採択した「書簡」などにつけられてゐた宛名の氏名については、そのまま掲載しましたが、す

べて敬称を省略させていたとき、「○○宛」といふ形式に統一しました。なほ、それ／＼の末尾に、発信年月と発信地とが、判つてゐるものについては、記しておきました。

一、「仮名づかひ」はすべて「歴史的仮名づかひ」によりましたが、「ふりがな」は、和訓で読むものについては「歴史的仮名づかひ」を、漢字音で読むものについては「現代仮名づかひ」を用ひました。また、漢字の字体は、当用漢字によりましたが、一部については、字体から受ける感覚を考へて、正漢字を用ひたものもあります。

一、遺稿の文中に出てくる会名・地名その他固有名詞や、古い用語などについては、読者の便をはかつて、所々に編集委員によつて若干の「註記」を付しました。

一、採択した遺稿の中には、すでに同人たちによつて活版ならびに謄写印刷されてゐたものがあり、それから一部を引用してゐますので、それ／＼の末尾に、その印刷物の名称を『カッコで記しました。

一、『前・後二編の本書』に収録し得なかつた「戦歿学徒」で、この道統につらなつた方々のうち判つてゐる方々については、そのご芳名とご経歴の若干を、巻末に「補記」として記しました。

目次

— 表紙写真……「はにわ」武人 —

はしがき……………3

こゝに登場する学徒たちが、在学中に所属してゐた

グループとそのグループ活動について……………6

凡 例……………12

一 茶谷 武……(戦死・二十四歳) ……19

二 清水 重夫……(戦死・二十八歳) ……53

三 河崎 由雄……(戦死・二十三歳) ……73

四 手塚 顕一……(戦死・二十六歳) ……75

五 松浦 秀宏……(戦死・二十五歳) ……89

六 立元 洋……(戦病死・二十一歳) ……95

七 木野内為博……(戦死・三十歳) ……101

八 奥村 克郎……(戦死・二十四歳) ……111

九 斎藤 高明……(戦死・二十六歳) ……119

一〇 桜林 洋司……(戦死・二十六歳) ……127

二 秦 音次郎……(戦死・二十四歳) ……131

三 長内 良平……(戦死・二十二歳) ……135

三 一条 浩通……(戦死・二十七歳) ……141

一四 寺尾 尚之……(戦死・二十三歳) ……151

一五	吉野	圭一	…(戦死・二十五歳)	…155
一六	宮下	宗夫	…(戦死・二十三歳)	…161
一七	辻本	幸一	…(戦死・二十四歳)	…165
一八	松井	英也	…(戦死・二十四歳)	…171
一九	寺村	義季	…(戦死・二十五歳)	…181
二〇	高木	三郎	…(戦病死・二十四歳)	…187
二一	平塚	新	…(戦病死・二十五歳)	…193
二二	渡辺	二郎	…(戦病死・二十五歳)	…197
二三	高瀬	伸一	…(戦死・二十二歳)	…205
二四	松吉	正資	…(戦死・二十三歳)	…217

この冊子の遺歌・遺文にしばしば見られる「田所広泰さん！」

といふ先輩について……………亜細亜大学教授・夜久正雄……………397

二五	野中	孝夫	…(病歿・二十一歳)	…241
二六	百武	尚美	…(病歿・二十一歳)	…255
二七	工藤	昌男	…(病歿・二十四歳)	…263
二八	末安	悟郎	…(病歿・二十三歳)	…269
二九	近藤	正人	…(戦死・三十歳)	…283
三〇	吉田	昇	…(戦死・三十四歳)	…319
三一	安武	弘益	…(病歿・三十三歳)	…341
三二	戎	真男	…(戦死・三十四歳)	…357
三三	中山	幸	…(戦死・三十六歳)	…365
三四	若野	秀穂	…(戦病死・三十四歳)	…381

補記……………411

あとがき……………419

続
いのち
ささげて

— 戦中学徒・遺詠遺文抄 —

一、茶

谷

武



茶 谷 武

大正十一年四月三十日、神奈川県小田原市に生れる。昭和十七年三月、東京府立養正中学（東京府立一中の夜間部）卒業。この間、渋谷の知人宅に下宿して、鉄道省（註 運輸省の前身）に勤務する。同年四月頃、有隣生命に入社（十二月、明治生命に合併）。十八年四月、中央大学専門部経済学科（夜間部）入学、日本医療団に入る。十二月、学徒出陣、陸軍に入隊。朝鮮羅南の第八五〇二部隊を経て、フィリピンの戦闘に参加、昭和二十年四月二十三日、ルソン島タクボにおいて戦死。時に数へ年二十四歳。

1. 茶 谷 武
東京府立一中夜間部学生時代に嘱託講師・夜久正雄氏の教へを受け、同級の香川（旧姓秋野）亮二、後輩の副島昌二、伊藤真三郎、前園盈氏らと親交を結ぶ。その人柄については、伊藤真三郎氏が記

した次の「銘詩」に尽されてゐる。

「茶谷武大兄、大正十一年四月三十日に生れ、昭和二十年四月二十三日に死す、ふるさとにおいては、心やさしくすなほにして、町の少年たちの模範、東京においては、苦悩と悲哀の中に、清く、明るく、雄々しく生きし青年、明るい笑顔、大きな身体、あつきまごころ、愛と光を人々の上に！ 永遠の祖国への信を友らの胸につたへて、比島の激戦に散華せる名もなき一兵士、栄えあれ君が名に！」

昭和二十二年、その三周忌に、約二十首の遺詠を中心にして謄写版刷り小冊子の遺稿集が出たが、それから三十年を経て、五十二年、妹さんが宝として保存してをられた戦地からの「遺書」（本書五一ページ）が判明し、恩師・夜久正雄氏によつて、国民文化研究会主催の九州雲仙における第十二回全国青年学生「合宿教室」の講義の中で発表され、戦後生れの大学生が大多数を占めるその参加者に大きな感動を与へた。

昭和十四年～十五年——十八歳～十九歳——

「青少年学徒に下し賜はりたる勅語」奉誦

身にあまる尊きみこといただきて吾ら学徒の道は定まれり

吾等をばかく思ひたまふ大君の大御言葉に涙こぼるゝ

大君の大御言葉にこたへんとちかひまつりぬ宮城のみ前に

歌集『征矢』第一集なりて詠める

もろともに御国の征矢となりゆかむ学の庭を出でしのちにも

敷島の道に心を通して征矢ともなりて御国守らむ

たすけあひ進みゆくべき我が友の心々を歌にしるかな

こころこめつくれる『征矢』を手にとりて各々が知る友の心を

ますらをがひきしぼりたる幸弓さちゆみにつがへし征矢のまとはいづこに

(歌集『征矢』第二集から)

昭和十八年と十九年——二十二歳と二十三歳——

金槐集について（論文）

一 序

最近に到つて、特に大東亜戦の始つた前後、頗よに歌に対する関心が高まつたやうに感ぜられる。時局は益々其の重要性を加へ、上に神靈と御稜み威いをいたゞき、日本民族が世界に負へる責務を完遂せんと一億国民一丸となつて進む秋あきにあたつて「歌」といふことが重要視されて来たといふことは、私達が歌に関して、その本質が如何なるものなのか、如何にして重要なのか、さうなることが良いのか、良いとすれば、将来どのやうに發展するのか、等々の事を考へさせられ、又このやうに考へることが無駄ではないやうな気がする。勿論私は専門に歌を習つたものでもないし、又かくの如き事を論ずる学識も経験もないのであるから以下の事は賢明なる諸君には何も益しないと思ふが、我慢し

て貰ひたい。本質等といふと少しむづかしいことだが便宜上名付けて置く。一体人間には自分の思想とか感情とかを他人に知らせたいといふ欲求があるやうに思はれる。ここに言語とか文字とかが起り、更にそれが高度化して……例へば美しいと自分が感ずる時、一定の形式に表現して人に知らせる。そして共感の世界を現出する……といったこと、これが詩とか音楽とか所謂芸術といはれるものである。芸術と人生との関係は非常に密接なものであるといはれてゐるが、難しいことは兎も角として我々が日常生活する上にも多かれ少かれ、なるほどと感ずることである。又これが道徳とか宗教とかと共に集合すると一つの文化が形成される。日本民族は古事記等の神話によつても解し得られる如く非常に抒情的な又非常に簡潔を愛する民族である。……ヨーロッパ民族等はその神話が示す如く理智的で昔からの伝説等にも抒事詩的なものが多い。(勿論その中にも全体として相当調子の高いものを持つてゐるものもあるが)日本の伝説神話の如く感情の高潮した所をつかんでそれを強く表現するといったことが少い……。

であるからあらゆる形式の中三十一文字といふことが日本民族の心情に最も適してゐるやうに思はれる。自分の感情を歌に寄せて他人に伝へる。実に日本民族にふさはしい

形式ではないか。文化史的にみて古代から現代に至るまで種々の経過はあつたが、結局萬葉に代表される歌が日本文化を支へ、日本文化を進め高めて来たといつても過言ではないと思ふ。民族の重大危機に遭遇し、復古的精神の昂揚される秋とよに、日本文化といふものの威力が最高度に發揮される秋に、歌といふものが重要となつて来るのに何の不思議もない筈である。これは盟邦ドイツに於ける古代ゲルマン神話を復活せよと叫ばれ、それに大きな努力がはらはれてゐることを見てもうなづける。

故に歌といふことは益々重要になつて来る。今までいろいろの議論はあつたが、国民が皆歌によつて美しい感情と鋭い批判精神を養ふやうになつたら誠に良いと思ふのである。歌といふものについて一般の觀念は幾分歪曲されてゐるやうに思はれるが、その一つとして歌といふものはとかく女性的なものとして取扱はれるが、ここで、明治天皇の大御心にその御裁断を仰ぎまつらうと思ふ。

御製に「歌」との御題で

天地もうごかすばかり言の葉のまことの道をきはめてしがな(明治三十七年)

世の中にことあるときはみな人もまことの歌をよみいでにけり(同)

ことのはのまことのみちを月花のもてあそびとはおもはざらなむ（明治四十年）

と宣はせられてゐる。歌をして女性的、有閑的になさしめたのは平安時代、新古今以後の公卿達の罪であり、現実的な歌の威力を概念的空虚なものとしたその罪は重大である。まことの歌は、たけく雄々しく悲しくもやさしい大和武夫の、将亦強はたく美しくやさしい手弱女たをやめの、正しき伝統の姿を表すものである。

歌の将来についても、上天皇かみより、下名しももなき民に至る迄御国のあらん限り永遠に歌ひあげられ、毫もその重要性は時間の経過によつて失はれないのである。例へば本論以下に述べる源実朝がさうである。

金槐集は一に金槐和歌集、鎌倉右大臣家集といひ、鎌倉第三代將軍源実朝の家集である。実朝は建久三年八月九日に生れ兄の頼家の後を襲うて鎌倉第三代將軍になつた。建保六年実朝二十七歳にして右大臣に任ぜられ、翌承久元年正月二十七日鶴岡八幡に拝賀した時公暁のために殺された。即ち実朝は二十八歳の正月に没したのである。

1. 茶 谷 武
実朝は十四歳の時はじめて十二首の和歌を詠じた。その後古今新古今を愛読し十八歳の時、当代中央歌壇の巨匠藤原定家の教を受けるやうになり、定家が作歌法の大要を述

べた詠歌口伝一卷を贈つた。さらに定家は建保元年実朝二十二歳の時相伝の萬葉集を実朝に贈つた。その時の吾妻鏡の記事によると非常によるこんで重宝これに過ぎるものはないといったといふことが書いてある。これが大体実朝の歌人としての経歴であるが、これに加へるに彼の若い生涯に於ける悲痛の体験はとも定家の如きものの及ぶ所ではない。この体験、人生観によつてこそ金槐集の特色が充分に發揮されるのである。実朝の歌のすぐれたることは、愚秘抄（註 歌論書、伝藤原定家著）などにも「鎌倉右府はたけたる歌人と覚え侍る。古人の詠作にまじへたりとも劣るべからず、実にたぐひ無事なまとぞ思ひ侍る。」といつてゐる位である。新勅撰集を撰した時、定家は実朝の歌を二十五首採録してゐる。契沖、賀茂真淵、正岡子規によりて称揚せられたのは後にのべる通りである。

二本 論

金槐集中自分が読んで良いと感じたものを抜粋して左にのせ簡単な感想を加へる。又解釈は他にもあると思ふからこれを省く。御承知を乞ふ次第である。

I 卷 上

(イ) 春 部

実朝の歌を読むに春と夏には所謂名歌、うまいといふ歌は多いけれども、実朝の真生命は、誠の心の奥はよみあげられてゐないやうな気がする。切々と人の胸をうつ歌こそ良い歌といへるのではなからうか。古今集はまだしも、新古今以後の俊成定家等を頭とする所謂うまい歌、うまさを感じても人の胸をうたない歌、の影響によるのであらう。少し酷評かも知れぬがこのやうな歌を私はこのまない。

ながめつゝ思ふもかなし帰る雁行くらむ方の夕暮のそら

春部の中でこの歌が一番良いと思はれる。実朝のほんたうの気持がこもつてゐる。実権は既に北条氏の手に移り、身は將軍職に有りと雖も虚位にあるにすぎず、長じてその才と理想と誠忠のためにうとまれ、いつ果つるとも知れざる身の運命を予感しつつ日を送る若き彼の多感な心は飛び行く雁にわがみたされざる思を託し歌ふのも宜むかなる哉といふべきであらう。実朝の歌の中で最も好きなるものの一つである。

海辺春望

難波がた漕ぎいづる舟の目もはるに霞に消えてかへる雁がね

屏風に山中に桜のさきたる所

山風のさくら吹きまく音すなりよし野の瀧の岩もどろに

正月一日によめる

今朝みれば山も霞みて久方の天アマの原より春は来にけり

右の三首はおほらかな雄大ともいふべき点で好きなものである。春の歌としてもすぐれてゐるものではなからうか。二首目のは特に「大海の……」（註 大海の磯もどろに寄する波われてくだけてさけて散るかも）の歌をおもはせるをよしい歌と思はれる。

霞

み冬つき春し来ぬれば青柳の葛城山に霞たなびく

雨中柳

青柳のいとよりつたふしらつゆを玉と見るまで春雨ぞ降る

この二首も美しい歌である。神代以来伝統的の美しさを歌ふ彼は人間としても美しい心をもつたををしくもやさしき大和ますらをの一人である。簡單なる美しい歌ならば新古今以後沢山あるが形の美しさではなく心の美しさが反映しての美しさがあらはれてゐるのは萬葉の歌にも匹敵するものであると思ふ。

(口) 夏 部

夏は春にもまして良い歌が少い。

深夜郭公

さつきやみ神なび山の時鳥ほととぎすつまごひすらし鳴く音かなしも

さつきやみさ夜ふけぬらし時鳥神なびやまにおのがつまよぶ

血をはくやうな妻をよぶ郭公の声に夢やぶれた詩人彼がその心をおもひやつて歌つた歌。理窟をこねるよりも直感を重んずる大和言の葉は味はへば味はふほど、我々のまがれる心をなほしてくれるのである。神皇正統記にある「言語は君子の枢機なれば」とある如く言の葉は生きてゐるものである。そしてともすれば、あらぬ方に走りさる人心と同じくつかみ難いものである。これを慎まざる所より乱臣賊子も生ずるのである。歌こそ言葉を正し、心を正しくするに最もよいものであるとはいつても考へることであるが、さう思ひながらもなかなかできない私のたらかなさを今さらながら痛感するものである。

(ハ) 秋 部

1. 茶 谷 武

晩に庭の萩を見て

朝ぼらけ萩のうへ吹くあきかぜに下葉おしなみ露ぞこぼるゝ

夕の心をよめる

たそがれに物思ひをればわが宿のはぎの葉そよぎ秋風ぞ吹く

この歌をはじめ多くの彼の歌を見て、文弱な感傷的な感を生ずる人もあるかも知れない。しかし私には彼の生きし時代と環境を思ふ時、生死を越えて、悲しきが上に悲しきを乗りこえてひたすら生きんとする人間苦と、ををしさを思ひ出すのである。日本の歴史が悲劇であるが如く、真に生きんとするますらをの生涯も悲壯極りないものである。世に忠臣とよばれる人の生は敗北の生である。正しき人はいつの世にも苦しき思ひをつづけねばならない。この悲しみは感傷的と解すべきではない。先人のかなしきいのちをのりこえのりこえ前進するますらをの生の歓喜を予感するものである。実朝の歌をよむ時私はこのよろこびと悲しみを味はひ、己が心の糧とせんと努め、たらはざる我が身にむちうち正しく生きんと願ふのである。

野辺の露

ひさかたの空とぶ雁の涙かもおほあらし野の笹の上の露

海上雁

和田の原八重の潮路にとぶ雁のつばさのなみに秋風ぞふく（註 和田の原、わたのはら、海原）

雁をよめる

秋風にやま飛び越ゆる初雁の翅つばさにわくる峰の白雲

あしびきの山とびこゆる秋の雁いくへの霧をしのぎ来ぬらむ

鹿の歌に

雲のゐるこずゑはるかに霧こめてたかしの山に鹿ぞ鳴くなる

秋のすゑに詠める

雁なきてさむきあさけの露霜に矢野のかみ山いろづきにけり

武 これ等の雄大なること、ますら武夫の弓矢もて荒ぶる者等を打ち平げしにも似たる哉
と叫びたい。先の世の殿上人が桜かざし紅葉かざして、日ねもす月花のもてあそびと歌
をよんだのに較べて如何ばかりの差異であらうか。彼は単なる文人ではなかつたことは
茶 これ等の歌に見られるのである。彼は文化人である、正しき意味の……。正しき文化は、
1. 生き生きと活動し、創造し、永久に若く美しい。吾々は死滅より生々発展へ文化の意義

を奪回せねばならぬ。大東亜の天地にこの文化の生ずる時、その時こそ大東亜戦は真の意義を果すことができるのではなからうか。

鹿の歌に

朝な朝な露にをれふす秋萩の花ふみしだき鹿ぞ鳴くなる

蟲

庭くさの露の数そふ村さめに夜ふかき虫の声ぞかなしき

月の歌とて

思ひ出でて昔を忍ぶ袖の上にもありしにもあらぬ月ぞやどれる

海辺月

しほがまの浦ふく風に秋たけて籬が島に月かたぶきぬ

月夜菊花をたをとて

ぬれてをる袖の月かげふけにけりまがきの菊の花の上の露

独逸にても詩人と武人の両人格を兼ねそなへる事を理想的人格としてゐる。日本人にはこの例は数しれずあるが、我々が世に出づる時それが如何なる分野であらうともこれ

らの歌の芸術的表現によるうるはしさを知る心がなくてはならぬ。よし歌は詠まなくともこのやうな感情は我々が生きてゐる限り慕ふものである。日本民族の血の中にはこの芸術的の感情が多分に含まれてゐる。私はこれらを憧憬し、少しでもかうなれたらと思つてゐる。諸君はどうか。

(二) 冬 部

初冬の歌の中に

よしの川もみち葉ながる瀧の上のみふねの山に嵐ふくらし
初時雨ふりにし日より神なびの杜のこずゑぞ色まさり行く

霜

難波潟あしの葉白くおく霜のさえたる夜半にたづぞ鳴くなる

湖上冬月

比良のやま山風さむきからさきの鳩にほみづらみの湖つきぞこほれる(註 比良のやま、琵琶湖西岸にあり)

月前松風

あまの原そらを寒けみぬば玉の夜わたる月にまつ風ぞ吹く

氷の如く澄み渡る冬の空の月は理智的であり、しかも万人のおもひを我がおもひとして、万象をつつむ。満目荒涼、岸にくだける波頭、吹きよせる潮風は松に歌ふ。冬は四季のうち最も男性的、ををしさを持つ。私は冬をこのむ。彼の歌も秋と冬にこそ真生命があるのではなからうか。彼の満されざる心はかゝる自然の荒々しき様のあらはれる時、勃然と起り、声を限りに、あますなく歌ひあげられる。これらの歌のよさもこんな所にあるのであらうか。

山辺霰

雲ふかきみ山のあらしさえさえて伊駒いこまのたけに霰ふるらし

霰

もののふの矢なみつくろふ小手の上に霰たばしる那須の篠原

雪

山たかみあけはなれ行く横雲のたえまに見ゆるみねの白雪

これ等の歌に至つては誦するたび毎に我等の胸中にわだかまるものをふきはらひ、はねとばして男に生れたるの喜びを神に謝するが如き思ひに至るのである。第二首目の歌

等は私の愛誦おく能はざるものである。

次に恋部が来るのであるが、紙数の都合で略す。この部には詩人実朝の熱情たぎるが如き作品が多い。とても私ごとき者には読んで感ずることだけで精一ばいで、とてもペンの及ぶ所ではない。残念ではあるが仕方がない。お許しを乞ふ。

II 卷 下 雑 部

あさぼらけ八重のしほち霞み渡りて空もひとつに見え侍りしかば

空や海うみや空とも見えわかぬかすみも波もたちみちにつゝ

箱根の山をうち出でて見れば浪のよる小島あり、供の者に此のうらの名は知るやと尋ねし

かば、伊豆の海となむ申すと答へ侍りしを聞きて

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ

- 武
今十国峠航空灯台のそびゆる日金山ひがねやまの山頂にこの歌を刻んだ石碑がある。行つた人もあると思ふが、初島でも詠んだのであらうと思ふが有名な歌である。これらもおほらかで良い歌である。
- 茶 谷
1.

神祇の歌の中に

をとこやま神にぞぬさを手向けつる八百萬代も君がまにまに

河辺月

千はやぶるみたらし川の底きよみ長閑に月のかげはすみけり

社頭松風

古りにける朱の玉垣かみさびて破れたる御簾に松風ぞふく

祝の心を

田鶴のゐる長柄の浜のはま風に萬代かけて波ぞ寄すなる

寄松祝といふ事を

君が代はなほしも尽きじ住吉の松は百たび生ひかはるとも

太上天皇御書下預時歌

おほ君の勅をかしこみ父母に心はわくともひとにいはめやも

山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心われあらめやも

この外雑の部には歌はあまりよくないが君が代をたたへた歌が多くある。幕府の長にあるとも忠義の二字は忘れようとしても忘れられないものであつたのか、特に終の二首

等は歴史を通じての愛国歌——愛国歌といふ言ひ方も変なものであるが、世にいひならはしてあるからそのまゝにしておく——の中でもすぐれたものの一つであらう。この忠の字が彼の運命を悲劇的になさしめたのである。それでなくとも己が政權確立を念とする北条氏にとつては邪魔な存在であるのに、それにもまして彼の忠は北条氏にとつて危険であつた。彼も人の子である。恋にも思ひをさせ、悲しきこと、苦しきことも寂しくなることもあつたらう。しかし日の本の民と生れる限りやむにやまれぬ感情がある。凡そ我々が忠義を尽すといふも、年中、日がな一日忠のみを思つてゐることではない。

あらゆる感情のさなかに、時ある毎に勃然とおこり、おこるが故に自分の身のたらしさを思ひ、不断に内省し、苦しみ、その中に活路を見出し、波間に出没する舟の如く、苦闘の連続こそ生の真の姿ではなからうか。我々は聖人ではない。迷ふのが当然だ。迷ふが故に不断の進歩がある。人生は悲痛の連続であるとある詩人はいつた。さうなのだ。それでこそ人間なのだ。この苦痛を体験しない人は憐むべき人ではなからうか。ここに信を同じうするものの集り、友の価値がある。個人のなやみを全体に没入させてそこに解決を求める。そこに理想的社会が現出する。我々は縁あつて同じ学びやに共に励んで

ある。その人々が助けあはなくてどうしよう。願はくは養中（註 養正中学）の諸君よ、上級、下級の区別なく愛校の一筋道に進んでいただきたい。実朝には友は歌よりほかになかつた——当時にあつては——。しかし三千年の大きな歴史の流れの中には傑れたる多くの知己をもつた。今金槐集をよむ我々の心の中にも彼の息吹きを感じる。これなのだ。身は朽ちるとも歴史に知己を求め後世その価値を知る人が、その志をうけついでれるならば、男と生れてこれにこしたことはないと思ふ。男は名を惜しむべし、身を惜しむべからずである。

あら磯に浪のよるを見てよめる

大海の磯もとどろに寄する波われてくだけてさけて散るかも

この歌のもつ強さを思ふ時、私は太平洋の波をけたてて進む、大艦隊の威容に思ひを馳せる。何といふ大きく、ををしい歌だらう。これが春や秋に、下葉に宿る露の玉に、霞たなびく春のあけぼのに、あの美しく、やさしい歌をよんだのと同じの作者であらうとは……。

いや、それで良いのだ。ををしくもやさしい心こそ日本民族の伝統の心なのだ。日本

武尊にその代表的表現を拝する。これこそ世界にその名を輝かす日本文化の勝利の表徴なのだ。

三 結論として

金槐集の価値を真に認識した人は少くないであらうが、今この真価を最初に見出し、称揚して措かなかつた人、賀茂真淵の意見に参考のためにしばし耳をかたむけよう。

「古より移ろひ来にし世々の有様を見るべきものは歌なり。古の天皇事有る時は大御手に弓取りしばり、大御背オホミセに鞆たもとかき帯おびばして、敵しく雄々しき御稜威ミカサをもて、千早振る荒ぶる人を服まつろへ給ひ強ひず教へず見直し聞き直し給ひつつ、天地のまにまに治めましむかば、人草は天の如ごと天皇を尊み、地の如わが世を平らかに経れば、各々ををしく直き心をぞもたりける。然か有れば青によし奈良の宮までは、詠める歌も古の心を伝へて大丈夫は男さびして雄々しく猛く、手弱女たをやめはさすがに女さびするものから、猶直く強き心を失はずなんありける。」

1. 茶 谷 武
- この後は太平うちつづき男も女のやうになり、世も乱れ歌も形式のみこのめるものがよろこばれ真によい歌がでなかつた。といひ、

「此大まうち君の詠み出給へる歌こそ、奥山の谷の岩垣踏みはらゝかし出でて、大空に翔ける龍の如く勢ありて、大野らや草木も諸向け、八重立つ雲霧を払ふ風のごとく、ひたぶるにして、いかく雄々しく雅びたるいにしへの姿に返り給へりけれ。今この事を思へば、厳しく直からぬは古の神皇の道にあらず、ををしくみやびたらぬは大丈夫の歌ならぬ事を、さだかに知りにつける。」と口を極めてほめてほめたたへてゐる。

（鎌倉右大臣家集の始に記せる詞『岩波文庫』による抜粋）

次に明治の鬼才正岡子規についてきいて見よう。

「源実朝二十八歳にして没す。身將軍の職にありて一事を為す能はず、史家評して庸劣なす無きの人に非ざりしも年齒弱少にして威中外に加はらず其の漸く長ずるに及んで却て早く北条氏のために嫉まれ刺客の手に斃れしなり。縦令其抱負は四海を覆ひ其の材能く天下を経綸するに足るものありとするも、一事なす無きの迹に徴して、断じて庸劣となす、強ひて弁ずべからざる者あり。將軍にして且つしかり、政治の年齒と関するの大きなる、以て知るべし。只実朝は和歌に於て不朽の業をなすを得たり。政治家として如何に実朝を貶するとも、歌人として萬葉以後只一人たるの名誉は終に之を没すべからず。

將軍実朝は一事をなさずして、二十八歳の歌人は能く成功せり。」
とこれ又口を極めてほめて、数首の歌を作つてゐる。

はたちあまり八つの齡を過ぎざりし君を思へば愧ぢ死ぬわれは
誠に子規らしい歌である。

最後に宗良親王むねながの李花集との比較を行ひ——比較といふともつともらしいが——結論に代へようと思ふ。李花集は歴史上最も悲劇的な吉野朝時代によまれた宗良親王の歌集である。前にも忠臣の生涯は敗北の生涯であるといつたが、親王の御生涯は日本武尊を思はせるものがある。

戰場に出で侍りし道すがら、いさみあるべき事などつはものどもに仰せ
ふくめ侍りし次に、思ひつづけ侍りし

君がため世のため何か惜しからむすてゝかひある命なりせば

の御歌を拝する時、我等は五体を地になげ打つて親王の英靈に謝しまつらなければならぬおもひがする。実朝も親王も共に師としたのは中央歌壇の巨匠であつた。しかるに、はるかに師を足下において、日本文化の主流に富岳の如くそびゆるといふ事はいかなるわけであらうか。実朝は藤原定家に、宗良親王は二条為定にそれぞれ師事した。その前

に当時に於ける公卿の状態について考へて見よう。鎌倉幕府開設され、政權は武家の手に移された。天子の大権は臣下に移つた。そして歴代の天皇は御悲憤やるかたなく、日夜大御心をくだき給うてゐる。そのさなか、多くの公卿は世のわづらはしさに現実を遊離して生活せんとしてゐた。真淵がいへる如く、現実を苦闘のうちに乗り超える伝統のまますらをぶりは既に失はれ、俗界を超越するの美名のもとにこの苦痛を回避せんとする有様であつた。そしてしかも生産的、創造的なる日本文化を僭越にも護持する者は我等なりと誇つてゐたのである。このやうな生活に於てこそ当時の和歌の振はざりし所以が首肯される。わがおもひを歌に託してのべた萬葉歌人のををしさ美しさに較べて新古今以後の歌は単なる月花のもてあそびとしか解し得られない。かゝる中央歌壇の現状をよそに親王、実朝の歌は何といふ悲痛な叫びであらうか。実朝こそは戦の場にたゞなかつたけれど、両者等しく現実と苦闘し若くして戦ひ倒れたのであつた。内的體驗の相違は歌を較べる時明らかに看取され得る。又実朝の消極的なるおもひは吉野朝時代に至つて宗良親王をはじめ所謂吉野朝悲歌といはれる歌を詠んだ人等によつてはらされる。特に親王の御歌には金絲玉葉の御身をもつて遠・駿・信・越・甲・武と各地に転戦往来され

た悲痛なる御体験がその芸術的表現によりまざまざと感ぜられ、実朝の歌に見られない（見えても直接的ではない）生々しさを拝するが、それは実朝の心を積極化して歌ひあげたものといひ得るのである。以下李花集の歌を少しく載せて見よう。

名所川

今は世にありともいふな名取河その名もつらし瀬々の埋木うもれぎ

あすか川きのふの淵もけふの瀬も我が身ひとつにうき沈みつゝ

ことに深き山路にひきこもり侍りし頃よみ侍りし

世のうきにたへぬ心のまゝならば猶山里もすみやうかれむ

（詞書略）

山深くすむ人さへにいづるこそかしこき御代のしるしなりけれ

山の井も浅かりけりな明らけき御代には更にかくれがもなし

田家を

うき世には秋風たちぬおくてもる山田のかりねあはれいつまで

霧中百首よみ侍りし中に

その原や伏屋の床の露けさに木曾のあさぎぬほす隙もなし

東路やさやの中山こえくればかひのしらねぞ雲がくれ行く(註 さや・かひ、小夜・甲斐)

(詞書略)

夢だにも人にしられれば夜は行きひるは帰るとみえましものを
ひとり行く旅の空にもたらちねの遠きまもりを猶たのむかな

これらはほんの一部にすぎない。しかし親王の御気持は良くあらはれてゐる。金槐集の結論ともいふべきものとして李花集の歌をのせたが、一脈相通ずる心はこの両歌集に止らず、歴史を貫く精神に生きんとするものの共通性である。これらの歌中に含まるゝ悲しきおもひを私は身に実感せねばならぬ。それが我が日本歴史の大きな恩恵でもあるのだから。ヒットラーの肖像を見るとき私は一抹の淋しさを見る。それは永遠に朽ちざる生命の歴史を有せざる、又将来に不滅を予言できざる国の悲しさを物語つてゐる。永遠の生命こそ我々がその中に欣然生き、且つ死ぬることの出来るものである。金槐集、李花集を通じて、いささかでもこの生命にふれることができたならば幸である。さて、又再び私の抱いてゐる気持を吐露して結びたいと思ふ。非常に独断、このやうなことをいふには少し気がひけるが、自分の体験としてこのやうに思ふだけである。

何事によらず人が何かなさんとする時、その基をなすものはその人の人生観と意志であると思ふ。これなくしてたとへ何事をなしてもそれは価値なきものではなからうか。人生観といふものは色々の体験、研究、勉強によつて日増に進歩発展して行くものである——それに加へる努力が正しきものである限り——。我々にとつて勉強（普通の意味でない）は生きてゐる限りつづけられねばならぬ。師は宇宙森羅万象到る所にある。日常の生活も我々に何事かを教へる。如何なることも学び得る。故になるべく早く自己の人生観を確立してもらひたい。そこに生ずる強固なる意志をもつてその人生観を引揚げて前進してもらひたい。しかし猪突猛進はいけない。自分の人生観には厳格でなくてはならぬ。古今東西自分はその中の極めて不完全なものであることに思ひをいたし、内省し撰取しつゝ進まなければならぬ。さて親王と実朝とには悲痛なる体験による人生観があつた。それこそ師にまして秀れた理由である。私はさう信ずる。人間如何に苦しんでもそれが豊富なる体験となつて生きる時、これにすぎた幸はないと思ふ。歴史に生きる名もなき民の祖国防護の神靈を魂に感じつゝ先人の体験を我のそれとし、生きるも死ぬも我一人と思はず、三千年来の祖先と、永遠につきざる子孫の血を今我が胸に持つは

こりを思ひ、これから巢立つていつてもらひたい。私が金槐集を取り上げた所以も此処に大きな目的を有するのである。我が二十一年の生はその体験は誠につたないものではないが、少しでも諸君のために役立てば、私の幸これに過ぎるものはない。今陸に海に空に一分一秒の休みなく戦はつづけられてゐる。日本文化の世界的使命を実感して生を意義あらしむることこそ、南方諸地域の山を海を空を林を血で染めた幾多英霊のみたまに對する大きな感謝であり、今こそ大なる目的のため日夜奮闘努力することを諸君と共に誓ふものである。猶今後先輩諸先生の御叱正を乞ふ次第である。(『養正』昭和一八年三月一日号)

特に○○さんへ

思ひ出づるがまゝかきし故御笑納
よまざるも可なり捨つるも可なり

一、自己の内心に苦しみもだえ、その苦しみにさいなまれる自己を悲劇のヒロインとして甘きおもひにふけることなきや。

一、人の世の俗悪をせむる前に自己の非をかへりみるいとまなきや。又かへりみて自己

の足らなさを痛感すともあくまで自我に執着せるにあらずや。

一、真に自己の無力を痛感せば謙虚となり、人の非を百度かんがへてなほ自己の非ならずやとおもふに至らん。さすれば性格強くともみだりに人に衝突はせざらん。

一、君の排撃するものの中にいくらかでもよき物を見出さざるや。そのよきをとり、あしきをすつればそれだけ君の心は豊富にならん。

一、馬鹿にならんかといふ君の心は、自分高くして人低きが故に己が意をいはんとすれば人に妨げられるが故に己を下げる、とは自己を高きにおけるが故の言ならずや。

一、「彼是とするときは則ち我は非とす。我是とするときは則ち彼は非とす。我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚に非ず。共に是れ凡夫のみ。是非の理なんぞ能く定むべき。相共に賢愚なること、みみがね鑲の端無きが如し。」(聖徳太子『十七條憲法』)

この御言葉よくよくあちははれたし。君が是と思はれること必ずしも是にはあらず。君が非とする所必ずしも非にあらずと思ひ給へ。人の非をせむることも、等しく個我に執着せるがためなり。

一、君のいただける美しき夢と現実との相違もて苦しむはよけれど、その夢は現実に遊離

せる、我れ独り清しとする増上慢は悪し。理想と現実との矛盾に苦しめるは君一人に限らず。世の中はひろきものなり。異性に愛を求め得ずといふも、君の限界はなほせまきなり。

一、正しきものが苦しむことは洋の東西を問はず、時の古今を問はざる所なれど、自ら正しきか否かとはよくよく考へ、よくよく思ひて後なほたらはざるを思ふものなり。

一、君女性にして自己の如き性は不幸なりといふは未だ君一人よきものと見るが故にあらざるや。

一、異性一人を愛し得ずといふ君。君の曾つて会ひし異性の中に得ざるものか、或ひは君不明にして、かかる人に会ひても見のがしたるにはあらざるか。よくよく考ふべし。

一、よし今後君一人の理想の男性なしとするも、御両親のきめて下さる人、或は他の人がもたらしたる人に平凡に嫁し、夫君にとりやさしき良き妻、子にとりて、生死の関頭にたちて一言「母」の声を叫ばしめる良き母となることやさしと思ふや。君の全心を子を育つる一業にかくるともなほ子は正しくそだたざるやも知れず。女にとりて子をすこやかに日本武夫として、大和撫子として古今にはぢざる人、それ単に名を立て、

名を後世にあぐる謂にあらざ、名も知られぬ下葉の露が如き生涯にても立派なる人となすはこれに勝る功業やある。我が日の本にして、ますらをぶり、たをやめぶりを正しく發揮せし人の陰には必ず良き母あり。

一、ものを分析的に批判的に見るはよけれど、そして人によりてそれを率直にいふはよけれど（かかる人は互にかくする事によつて相互に高めることが出来る人なり）みだりにいふは不可なり。あるひは己不可なるやも知れず。

一、自分の過去の体験を恥ぢ、心苦しく物ぐるはしくなるとは一見謙虚に似て非なるものなり。恥ぢるのが当然にして、自己を正しき、高きものと思ひしがたまたまそのあやまれるを知り驚きあわてるはをかしきことなり。

以上のべしことは心の問題なるが故、最も内心にふりかへりて厳密なるを要す。普通の意にとればこの文は君への侮辱なり。然れども我が体験に徴して極々厳密に我が内心を見る時いささかのはづる所あるによりかくのべぬ。なければ甚だ幸なり。

1. 我、人の苦しみを解く力もとよりあらず。然れども共に苦しむことは出来ると確信するものである。

追記 先に小生女に真の友情あらずといひしもこの蔽密なる謂にして、共にをる時は、そして互に意志の通ずるうちは親しき友の間に友情も成立せん。幾年相離れ、音信不通、又他に心を用ふる（結婚に於ける夫、子、その他）にいたれば概ねうすらぎゆくものなり。こはたしかなり。（編註 原文は反古紙に鉛筆での走り書き）

君がくれし子等の歌をしよみくればあはうれしくて涙こぼるる（註 あ、私）

西のはて名も無き村に日の本の正しき姿見るぞうれしき

（註 友人伊藤真三郎氏が佐賀縣で小学校の教員をしてゐた。その子等の歌）

名も知らぬ子等にしあれどかくよめるみ歌は永久に朽ちずてありなむ

日の本の臣の正道たえせずて子等の心に伝はるうれしき

敷島の大和島根のみおやらがふみし道をぞ子等はふみゆく

子等の行く道は一筋神代よりつぎてたえせぬ臣の正道

子等の胸に描きしことぞそのまゝにうたひし歌のその調はも

幾山河身はさかれども子供等の心はかけりてわが胸ゆする

神州の不滅を子等のこの歌にしみじみ感じうれしかりけり

大君のまけのまにまにあはゆけどあがその後この子等のあり

この子等のあればうれしく大君のへにこそ死なめかへりみなくて

(歌集『しきしまのみち』第三集)

遺書

父上
母上 様へ

武
ルコトナク過シテ来タコトヲオワビ致シマス。今ノ私ノ氣持ハ吉田松陰先生ノ「親思フ
心ニ勝ル親心今日ノ訪レ何トキクラン」ト歌ハレタ氣持ソノママデアリマス。今思ヒマ
スニ人一倍子ボンノウノ父上ニトツテコレヲヨマレルノハドンナデアルカハ、ヨシ全部
谷
デナクテモオシハカルコトガ出来マス。デモ此ノ皇国危急ノ秋私達ノ涙ハカクサレネバ
茶
ナリマセン。私ノ肉体ハココデ朽ツルトモ私達ノ後ヲ私達ノ屍ヲノリコエテ私達ヲ礎ト
1.

シテ立チ上ツテクル第二ノ国民ノコトヲ思ヘバ又之等ノ人々ノ中ニ私達ノ赤キ血潮ガウケツガレテキルト思ヘバ決シテ私達ノ死モナゲクニハアタラナイト思ヒマス。

日本ニ生レタ者ノミニ許サレル永遠ノ生ニ生キルトイフコトガイヘルノデス。

之等ノ事ヲ思ヘバ私達ハ涙ヲ流ス前ニ故国ノ勝利ヲ、天壤無窮ヲ祈ラネバナリマセン。
ドウゾ私ノコトヲ笑ツテホメテ下サイ。武モ笑ツテ散リマス。デハ父上母上オ身体ヲ大切ニシテ下サイ

サヨウナラ

武ヨリ

ワガ生ハ下葉ノ露ト消ユルトモ何カ惜シマンコノ秋ニシアレバ

我ガ肉ハヨシ朽ツルトモアガ魂たまハミ空天カケ御国守ラン

征キ征キテ草ムス屍ト果ツルコソ我身ニツキヌ思ヒナリケレ

神州ノ不滅ヲ信ジ吾あハ唯ニマケノマニマニ進ミ行キナム

大君ノマケノマニマニ生キ死ナム時ゾ近ヅキ吾ガ胸ハルル

同胞はらからの之働キミテハ日ニ夜ニモダシシ心今ゾハルルモ

アガ家ノ名ヲケガスナトノタマヒシアガ父ノ言ことワスレカネツル

二、清し水みづ重しげ夫を



清 水 重 夫

大正七年九月二十五日、金沢市に生れる。横須賀市立豊島小学校を経て昭和十一年神奈川県立横須賀中学卒業。十二年第一高等学校理科乙類入学、十六年卒業。同年、東京帝国大学文学部独逸文学科に入学、十八年九月繰上げ卒業。

第一高等学校在学中「一高昭信会」に入会。中学・一高の同窓である吉岡一郎氏（元パングラディ

シ）駐在大使・現外務省研修所長）とは親交の間柄であつた。寡黙重厚な人柄で、入会以来その信を貫き通した。

当時、一高の理科乙類は、東大医学部への進学コースであつたが、あへて独逸文学科を選んだのは、切迫する時局に対応して、思想的方面で活動しようと志したからであらう。彼のドイツ語の語

学力は抜群であつたことが伝へられてゐる。彼は、多くの論文を遺してゐるが、中でも「漢字制限の問題」の一文（本書収録）は、漢字制限が国語の表現力と理解力とを衰弱させることを憂へた重厚な論文であつて、今日なほ傾聴すべきものと受けとられる。戦死した学徒が祖国に遺したこの一文は、奇しくも戦後の漢字制限の弊害を、三十数年前に予言したことになる。

昭和十八年東大卒業後、十月一日、海軍予備学生として入団、翌十九年二月、横須賀海軍通信学校配属となる。同僚の手記によれば、「彼はフアウストの原書の一語一句を念を押しながら暗誦してゐた」といふ。十九年五月、海軍少尉に任官。六月、第六三四海軍航空隊配属となり、フィリピンの戦線に参加。米軍リングエン湾上陸後の戦闘において、昭和二十年一月十七日、マニラ北方約四〇キロのカバナツアンにおいて戦死。時に数へ年二十八歳。海軍中尉。軍の通知には次の通りに記されてゐる。

「第六三四航空隊勤務中 敵機（B—24二十機グラマン戦闘機約六機）ノ銃爆撃ヲ受ケ 比島基地ニ於テ昭和二十年一月十七日 ○九一五（註 午前九時十五分）被弾壮烈ナル戦死ヲ遂グ」と。

昭和十四年——二十二歳——

「自然科学者の態度について」から「平時に於ては科学のための科学といふ態度も許されるかも知れぬが、現在の様な情勢に於ては、少数の極めて有能な学者を除き、大多数の研究者はなるべく早く効果を挙げ、直接国家の為になることを目標として学問に精進すべきである」と言ふ論については、論者によつてはその語法に於て憂国の至情を感じしめるものもあるのであるが、この様な論法はその無思想の故に世のインテリをして逆宣伝の好餌を得しむることに先づ注意せねばならぬ。既に述べた様に自然科学者をも含めて国民のつとめに平時戦時の区別はないのである。更に如何に「なるべく早く効果を挙げ、直接国家の為になること」を願つても、多年に亘る基礎的研究の結果が考慮せられてゐなければ其の効果の現実性は乏しいのである。

〔伊都之勇建（いつのをたけび）第九卷第一号 昭和一四・四・八〕

病める友より手紙をたまはりて

やうやくにやゝいえましゝか我が友の手づから書きし文たまはりぬ

病床に一人ふせりつ同信の友の力を更に知りしとふ

今ぞ我起たざらめやは病床に一人闘へる友さへあるを(同前 第九卷第四号 昭和一四・一一・二〇)

昭和十六年——二十四歳——

新しき友をしのびて

新しき友ら思へば何となくなつかしき思ひす未だは見ぬに
思ふだに楽しき心地す新しき友らとつどひ語らはん日は

〔伊都之勇建〕第一卷第一号 昭和一六・四・五

北白川宮殿下御戦死一周年に当りて

一年は早も過ぎしか宮殿下とつくにの野に逝きましゝより

(註 とつくに、外国。現・中国)

宮殿下御戦死とふしらせ聞きまつりしおどろきいまだ胸内むなうち去らぬに

みたみわれら今ぞこぞりたち大君の御ため戦はむみあとしたひて

東北巡遊より帰りて

(報告書簡)

かへりみて何といふあわただしい旅であつた事かと思ふ。仙台に二泊、他は福島、盛岡、青森、秋田、山形、米沢に一泊といふ忙しい日程の中で、各地に於ける心に残る事からを少し述べて置かうと思ふ。東北はその自然に享ける恵が薄い為か一般に快活といふ点に於て欠けて居るやうである。しかし乍らそれはむしろ各学校とも一年生がゐないといふ事の方が一層重要な原因なのであらう。各学校同信団体中に一年生の会員を有するものは一つもなかつたのである。まことに淋しい限りであつた。一年生がゐるといふ事はそれだけでも相当の希望を与へるのである。同信相統といふ事が最も大切な事で、これを如何にして深く、又広く行ふかであらう。それには後から来る人々すべてにつきそれらの人々の身になつて考へ、その人たちの短所欠陥をも本当に生かし得る力を養ふことが必要であらう。我々の運動が決して特殊な生活を要求するものではなく、真に世と苦

楽を同じうするものであることを思ひつゝ朗らかにやつてゆくべきものであらう。始めての人について行けないやうな感をいだかせることなく、さういふ人も自然に中に入り入れられるやうにしなければならぬ。要するに先に立つものが常に停滞なく活潑な精神生活を送ることが最も肝要であると思ふ。

九月十九日 朝寮生諸兄と「進めこの道」を唱つて寮を出発、十時上野発福島に向ふ。三時頃福島駅着、出迎へてくれた福島高商金井君の下宿に一先づ落着く。当日は三時よりユダヤ問題に関する講演が学校に於て行はれた由にて、平林、小島両兄はそれを聞き終へてから来る。ユダヤ問題などにつき話しつゝ外に出て護国神社に参拜、附近の公園を散歩する。丁度虫の音が殊に趣深く、明治天皇の虫につきお詠み遊ばされた数々の御製が自ら口に誦せられる夕べであつた。地方はさういふ点は都会にくらべてはるかに恵まれてゐることを思ひ、虫の音にも生きとし生けるもののおもひを知るといふゆたかな心をもつて進むべきことを話す。夕食後平林兄の下宿にて東京のやうす、国内国際情勢等話を話し、福島に於ける今後の運動につき相談する。三兄ともこの十二月卒業で、後継者なくどんな事があつても必ず次の人を見つけるべきことを約す。

試験直前のこととして思ふやうに話をする事が出来ずまことに心残りの事であつた。その晩は平林君の下宿にとめていただく。翌二十日午後一時三兄の見送りを受けて福島発仙台に向ふ。

二十日 午後東北正大寮着。ここは寮長斎藤高明兄、丸山兄は寮兄、あと加藤（信克）兄と森田兄の四名（長内兄は病氣のため青森へ帰郷中）であるが医学部、医専は同志の数多く、法学部、仙台高工は多からず、二高は未開拓、それ故未開拓の二高の生徒を入れなければ、今後若々しき活潑なる進展はなしがたいのではないかと思ふ。夕食後東北地方合宿に入る。最初の晩は座談会、皆自由に話し十分に思ひをのべあふことが出来たと思ふ。医学部、法学部、医専及び米沢高工の敦賀兄と全部で十三、四名であつた。医学部学生は試験前のためにこの座談会だけに参加、医専の人たち及び敦賀兄及び小生は寮にとまる。

二十一日 午前十一時、黒上正一郎先生ならびに諸先輩の慰霊祭を行ふ。仙台はこの日全くきれいに晴れその秋空の下で東北の友らと共に亡き師亡き先輩のみたまを慰めまつることのかしこさを思ひ、又全国に分れたゝかへる友らが皆一せいに慰霊祭をとり行

ふ時、全国民一塊石は既に我らの内心に豫示せられて居ることを深く深く感ぜざるを得なかつた。夕刻山形の伊藤兄来寮。

二十二日 朝、今後の日程など山形、米沢の両兄と相談の上盛岡に向ふ。午後四時過ぎ盛岡着、岩手医專菅原兄、盛岡高農平落兄の出迎へを受け、一先づ菅原兄の下宿に到着く。五時三人で大政翼賛会岩手県支部文化部長と会ふ。大變好い方で岩手県の新聞の主筆である故今後連絡を絶やさないといふことを話す。夕食を共にしつゝ、また菅原兄の下宿で大へんなごやかに話し合ふ。高農、医專ともに一人づつなので必ず後継者をつくらんことを約す。

午後三時頃青森着、中学生三人をつれ、一つ手前の駅より乗車の長内俊平兄に迎へられ、長内兄の家に入る。一家をあげてのあつい御もてなしはまことに有難いことであつた。夜長内兄の御一家と商業学校の教師樋口氏及び中等学生阿保、川村、三上、久保の諸兄と座談。中学生帰り長内兄、就寝の後（病気のためあまり夜更しは禁ぜられて居る故）御両親とおそくまで話す。長内兄の父上は相川氏らと共に革新会をつくり国民学校教育の改革につとめて居られる方でまことによい人々である。二十四日朝長内兄と共に

相川氏にあふ。一層の連絡を約して分る。朝十一時青森をはなる。

二十四日 午後四時秋田着。秋田鉦専高橋兄にむかへられ三浦屋に投宿、夕食を共にして安達兄を訪ひ安達兄と三人でいろいろ話す。安達兄病後につきしばらくにして宿屋にひきあげ、高橋兄と二人で話す。高橋兄は今二年生で此処でも後継者をつくる事が最重要のことである。話は非常に面白かつたのであるが、小生非常につかれて居たため早くきりあげて、御製拜誦をなし、十一時頃、高橋兄帰寮、まことにまことに心のこりであり申しわけのない事であつた。

二十五日 朝雨の中を山形に向ふ。東京をたつときはよく降つていたが、福島以来ずつと快晴に恵まれて居たのに秋田は二十四日夕刻からずつと相当の降りであつた。午後三時頃山形につき伊藤太郎兄につれられてその下宿にゆく。夜二年の加藤兄及び一年生二人と座談、一年生二人はまだ始めてで友となすにはまだ大分かゝるであらう。途中、米沢の三浦兄到着。

二十六日 昼、三浦兄と共に米沢にゆき有信寮（註 米沢高工同信団体の寮）に入る。まことゆつたりとしたよい環境にある。夕刻山形より伊藤兄来寮、三浦、敦賀両兄の他に

二年生一名、一年生三名と座談会を開く。これらの人を寮に入れることは学校の寮がなければ比較的すぐに行くのではないかと思ふ。但し有信寮には三浦、敦賀兄の他に二名在寮して居り、これらの人々とハツキリするところがなければ、他の新しい同志を得ることも出来ないであらう。我々の運動は決して特殊な生活を強ひるものではないのであつて、出来るだけにぎはしく愉快にやつてゆきたいと思ふ。そのためには先にたつものはほんたうに総合的にしかもヴァライアテイに富み学術的にも最も緻密なる事が要求されると思ふ。

二十七日 朝米沢発、巡遊を一通り終へた身には再び東京に於ける戦ひが待つてゐる。東京近郊に入つて急に汽車の速度が大きくなつたやうに思はれた。如何に人為的の技巧が多くとも東京はやはり思想戦の中心である。帰京後は直ちに次の戦いのぞまねばならぬ、全力をあげて。

上野着は午後五時十五分であつた。『たゝかひ』昭和一六・一〇・二

天佑と奇蹟 (論文・抄)

救ひを国民精神生活以外の外的威力に求めんとする無信の国は常に滅びざるを得ないのである。如何なる国と雖も之を逃れる事は出来ぬ。かくて古来数多の国は滅び、世界史は国家興亡史であつた。

この歴史の法則をその祖国滅亡の危機に際会して最も悲痛にして哀切に警告する者を我等はナザレのイエスの言に見出すのである。開ける眼を以て新約福音書を読む者は「天地は過ぎゆかん、されど我が言は過ぎ往くことなし」と宣説しつゝ全情意を吐露して絶叫せるイエスの言にその真精神を見誤る事はないであらう。しかも世にはマリヤの処女懐胎に、キリストの復活に、或は按手治病に、その特質を求めてキリスト教を盲信し或は之を斥ける者多きはそもそも如何なる事であらう。兩者共に、直接イエスにつき参究するところはないのである。何れの宗祖についても有りがちの讚美の故に非科学的臆説が附加せられようともイエスの真精神はかゝる粉飾に惑はさるゝ事なく求められぬ

ばならぬ。

かれら群衆の許に到りしとき或人、御許にきたり跪きていふ。

『主よ、わが子を憐みたまへ。癲癩にて難み、しばしば火の中に、しばしば水の中に倒るゝなり。之を御弟子たちに連れ来りしに、医すこと能はざりき』イエス答へて言ひ給ふ『ああ信なき曲れる代なるかな、我いつまで汝らと借にをらん、何時まで汝らを忍ばん。その子を我に連れきたれ』遂にイエスこれを禁め給へば、悪鬼いでてその子この時より癒えたり。(マタイ伝第十七章)

イエス復ガリラヤのカナに往き給ふ。ここは前に水を葡萄酒になし給ひし処なり。時に王の近臣あり、その子カペナウムにて病みあつたれば、イエスのユダヤよりガリラヤに來り給へるを聞き、御許にゆきてカペナウムに下り、その子を医し給はんことを請ふ。子は死ぬばかりなりしなり。爰にイエス言ひ給ふ『なんぢら徴と不思議とを見ずば、信ぜじ』(ヨハネ伝第四章)

復活や処女懐胎の伝説については今こゝに解明の要もないであらうが、イエスの按手治病はいたづきに悩みいたでに苦しむ群衆を見ては已むことを得ざりしイエスの真正の

ヒューマニティーの発露であつた。それは、今日では相当程度の医学的解明を与へ得るところである。しかしながらユダヤ国民は当時の知識によつて解明不能の故を以て奇蹟として神秘化せんよりはむしろそを行ふ人の内心の信をこそ問題とすべきであつた。イエス自身は明らかにかゝる外的功業に究極の価値を置かうとはしなかつた。彼の念願とせる所は、ただただ国民思想改革に基く国難打開の一事のみであつた。それ故に常に弟子たちの信を問題としたのである。しかるに多くの人らにとつてイエスの所行は遂にあらたかの靈驗と不可思議の奇蹟たる以上に出でなかつた。「徴と不思議とを見ずば信ぜじ」(ヨハネ伝第四章)といふ、それは元來逆である。かかる無信の故に奇蹟の力源、奇蹟を奇蹟たらしめざるイエスの内心の信は遂に顧みられなかつたのである。それ故イエスをしてかゝる奇蹟的所行以外多くを為さしめざりしこのユダヤ国民の無信こそはイエスを殺しユダヤを滅亡せしめし原因であつた。かくてイエスの真精神は理解せられず「あ信なき曲れる代なるかな」と彈呵せられし弟子たちの伝統のみ今になほ続いて居るのである。それこそはキリスト教であつた。「徴と不思議とを見ずば信ぜじ」(マタイ伝第十七章)といふ彼らの信は西欧の學術殊に自然科学の發達の前に殆ど一たまりも無かつた。

それは西歐近代個人主義を發生せしめた原因であつたのであるが、そのキリスト教徒の一部が近代的物理学の發達に救を求めんとしてをる事を見てはまことに再び三たび「あ信なき曲れる代なるかな」(マタイ伝第十七章)といつたイエスの歎きを繰返さざるを得ない。所謂不確定性原理に自由意志の問題を関聯せしめ神の存在を証明せしめたのであるが、不確定性原理の確立による因果律の崩壊と言ふ如きが物理学的に誤であることは今暫く措くとしても、何故人生そのものは遂に不可称不可説不可思議なることを覺らないのであるか。それは古典力学を採るにせよ量子力学を採るにせよ関する所ではないのだ。何故地動説や進化論と戦つて敗れ或は量子力学に自己の立論の依拠を求めて一喜一憂する如き無信の雜行を一擲して自らの信そのものに於て真偽を決せぬのであるか。外物崇拜の対象が何にてもあれ人生以外に依拠を求め思想は遂に永劫の流転に陥る外なき事を覺るべきである。(中略)

我らは今次大勝をただ全体として天佑と仰ぎたいと思ふ。何よりも宣戦の大詔を拝しまつりし事の有難さよ。殊には過ぐる三度の戦役の際に於ける御前例に倣はせ給ひつゝ

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ

と仰出されしことの畏さよ。かくて我らは天佑とは大御稜威に他ならぬ事を信じし、不可測の人生に自力のはからひ理知の計量を絶してただただ大君の命畏み大君のまけのまにまに一向直進すべしと念願するのである。そこに奇蹟を超えたる天佑は実現せられ国
家生活は一切の障碍を打破して開展せられるであらう事を信じつゝ。

(月刊『新指導者』昭和一七年三月号)

漢字制限の問題 (論文・抄)

漢字が一面相当厄介な物であることは言ふまでもないけれども、だからと言ってさう簡単に統制するといふわけにも行かないであらう。複雑なるにはそれだけの理由があるからである。元来「人生文字を知る、夫れ憂ひの始めか」といふやうな事も言はれるが、この「文字を知る」といふ事は、やはり人間にとつて憂ひの始めなのである。

西洋にも「人間は努力する限りは迷ふものだ」と言つた詩人があつたが結局いくら合理的に外的障碍を整理してもそれには自ら限度があり、人間に迷ひはつきものなのであ

る。この惑ひを正しく弁へて確実に人生に処して行くのが正しき生き方であつて、一挙にしてこの惑ひを棄て去らうとする時には道を求めて努力する主体、人間精神そのものが失はれてしまふのである。

最近の我が国内の思潮にはさういふ博大の精神は殆ど無く、徒らに外面的整理統合にたよつて万事解決しようとする狹隘な精神のみが横行して居るかに見えるのは何とも遺憾千万と言はねばならない。

漢字制限の問題もその一例としてまことに重大なものと思はれるのでここに取りあげた次第である。人間は元来先人の体験に教へられ自分の体験を考へあはせて常に新しい場面に直面しつゝ正しい道を求めて生きて来た。こゝに自他の体験を思ひあはせる事が出来たのは、全く人間が言葉を有して居つたからに他ならない。けれども若しこの言葉が文字を伴はなかつたとしたならば現在国字問題などに頭を悩まされる事は無かつた筈なのである。しかし人間は文字無くしては遂にその言葉を十分に伝達することは出来なかつた。時間的に又空間的に遠く隔つた人々に正確に自分の思ひを述べるには文字の他によるべはなかつたのである。

かうして文字は発達して来た。それ故に文字を論ずるにはその文字を用ひて書かれた言葉に表現せられた人々の思ひをしのぶといふ事が最も根本となつて来るのである。

我国の例について具体的に言ふならば日本語によつて表現せられた我らの祖先の苦闘をしのぶことであり、即ち日本文化の正しき伝統を憶念することが最も肝要なのである。若しこれをなさずに一時の便宜のみを図る時には一見非常に能率があがるかの如く却つて測り知れぬ混乱に陥る事を恐れなければならぬのである。

さて去る三月三日の国語審議会の総会席上「新標準漢字表」が決定された。所謂常用漢字の問題である。その常用漢字千百十一字、準常用漢字千三百四十六字、特別漢字七十一字の割当についても無論言ふべき事は沢山ある。

現在は種々の誤謬や一寸した思ひつきが容易に国家権力に結びつきやすい時代であり、殊に大東亜に国語を普及するには国語をやさしくしななければならぬといふやうな議論も行はれて居る時代であるので、今後はよほど警戒する必要があると言はなければならぬ。例へば帝国大学新聞本年三月九日号に石黒修氏は次の如く言つて居られる。

「常用漢字を決定したら、これを強制しても使はせる様にしなければ意味はない。こ

のことはむづかしさうでも簡単に出来る。字母をそれだけに整理して、不要なものは廃棄、以後作製しないことにすればよい。さうすれば活字は消耗品であるから、新聞社でも、印刷所でも半年か一年もたてば、制限内のものばかりになる。すなはち、漢字を規格化して配給制にするのである。(中略)他の配給制の様に、一時は多少の混乱、不便もあるかも知れないが、それは今後の国民の能率向上によつて十二分につぐなされる。」

悲しむべき極論である。しかしこれは外面的規制主義の当然の結論の一つに過ぎないのであらう。今更驚く方がむしろ迂濶だったのである。国民はすべて身命を捧げて国を護らうと決意して居る。戦時下方已むを得ぬとならば如何なる困苦をも忍ぼうと思つて居る。物資の欠乏など敢て問題としたくはないのである。しかし物資の問題に關しても誤れるイデオロギーによる統制には反撥せざるを得ないのだ。

まして精神の問題に於てをや。恣意のイデオロギーに対する生命的の反撥こそ能く生命を護るものだからである。常用漢字を制定しても一般にやさしい漢字の方が読み方が幾通りもあるからして漢字習得の労力は決して変らず、そこで当然漢字の使ひ方が制限

されるであらう。

更にグワウ沈とかセン滅とかいふ書き方をさける為にはさういふ漢語を廃止せよといふ事になるであらう。この方向に更に進めば当然漢字廃止といふ事になるわけであるが、そこまで行かずともこれだけで既に表意文字と音標文字と二つの系統の特色を最高度を生かして来た日本の漢字仮名交り文の妙味は相当失はれ語彙は激減し、日本文化の伝統とは著しく絶縁せられ国民の文化的水準は急激に低下せざるを得ないであらう。

元来漢字廃止などを言ふ人々の内にも、もともと国を憂ふるのあまりにさういふ意見を抱く人も相当にあることを決して否定しようとは思はない。けれどもこれらの人々に共通の欠陥は文化に対する無知であり、意識的無意識的の日本文化に対する蔑視である。国を憂ふるまごころも真に日本文化に対する確信を欠く時容易に所謂国家社会主義に転落し、マルキシズム魅力圏内にさまよふに至るのである。それはマルキシズム無批判の餘殃を示す現代日本思想史の悲しき事実なのである。石黒氏などもその最も代表的の一例と言はねばならない。

勿論我々としても難解の漢語はなるべく避けた方がよいと思つて居る。しかしそれは

如何にして平明の言葉を以て秀れた文章を書くかといふ事が問題なのであつて難解の漢語を使はないからと言つてそれだけですむ問題ではない。それは結局各人が努力し苦心して立派な文章を書くより他はないのであつて、法律で強制したりする事は出来ない問題であり、まして活字を配給制にするなど言語道断の事である。我々は国語国字の問題を論ぜられる人々が単に目前の利益にのみとらはれる事なく思想と言葉、言語と文字との関係について一層根本的に考へられん事を念願せざるを得ないのである。

(月刊『新指導者』昭和一七年四月号)

昭和十八年——二十六歳——

留守中たづね給ひし母に (岩国にて)

帰り来てただに恋しきはるばると我をたづねて来にしあが母

錦帯橋を眺めて

秋さればよものもみぢの色深みいよゝ美し岩国の橋

秋さればまさるこの橋一人して見るがさびしき訪ふ人もなく(昭和一八・一一頃)

3. 河崎由雄

三、河崎由雄



河崎由雄

大正十年二月、熊本県人吉市に生れる。旧制人吉中学校を経て、昭和十四年、熊本高等工業学校採鉱冶金科に入学。在字中は、同科の応援団副団長（団長は米重政行氏、本書前編『いのちささげて』に収録）としても活躍した。

米重氏とともに活動の中心的存在であった。その間、佐賀高校、山口高校、山口高商などの同系の「同信会」会員学生との交流を深めていった。大東亜戦争開戦に伴ひ、昭和十六年十二月繰上げ卒業。十七年二月、熊本の西部第十九部隊（軽戦車隊）に入隊。基礎教育終了後、南方第一線に出征。十八年三月十八日、ブーゲンビル島に於て戦死。時に数へ年二十三歳。陸軍上等兵。

昭和十六年～十七年——二十一歳～二十二歳——

友の病氣見舞状を受けて

まちにまちし友の御書を受けとりし今日の喜び何にたとへむ
手にもちし友の御書を読み行けば厚き情に涙こぼるゝ
かくまでも厚き情をよせ給ふ友とし思へば力わきくも

(昭和一六・一二)

出征に当りて

天地のつづく限りは大君の御楯となりて我は行くなり

(昭和一七・一・三二、入營の際の寄書から)

四、手塚 顕一



手塚 顕一

大正七年一月七日朝鮮に生れる。父、高二郎の二男。小学六年の時、母・夏と死別しその実家（宮崎宮司幡掛氏）に於て養育せられ、福岡県立東筑中学校を経て昭和十六年十二月、国学院大学道義学科哲学科卒業。宇都宮部隊に入り、次いで前橋陸軍予備士官学校を卒業して南方戦線に赴き、十八年七月十日、二十一時、ニューギニア島ナム

リングに於て戦死。

昭和十五年五月、日本学生協会発足と共に同会の学生幹事に指名され、在京学生による明治神宮月例参拝の指揮をとるなど、つねに学生の信望を集めてゐた。その举措は端正毅然、平常無口であつたが、一たび口を開くや熱血ほとばしり、深く聴衆の心をうつものがあつた。出征前の最後の演

説は、自ら主催者の一人となった昭和十六年暮の東京共立講堂における「出征学徒留魂大会」であった。コンパなどではよく白頭山節を愛唱したが、その結びの一節はいつも次の通りであった。

——泣くな歎くな 必ず帰る 桐の小箱に錦着て 会ひに来てくれ 九段坂——

令兄を以て第十四代といふ父祖累代の医家に生れながら、医師にならうとはしなかつた。大学卒業後は企画院に就職したが、これはひそかに国内政治の動向を憂へてのことであつたと思はれる。

戦地に在つては「上官に礼讓、部下に温情、原住民に対する宣撫工作に特殊なる手腕を有し、ラバウル当時、折衝は手塚君に非れば何事もなし得ざる状況」（註 中隊長報告の一節）であつたといふ。ニューギニヤの戦に於て、小隊長全員戦死といふ所屬大隊最後の関頭に立ち、見習士官でありながら第一決死隊長として四たび攻撃をくりかへし、爾後の方策を協議中「遽カニッ手塚ハ胸部ヲヤラレテキマス」ト語り、中隊長ノ背中ニ倒レツツ静カニ天皇陛下萬歳ノ一語ヲ残シテ絶命」（註 前記同文）。時に数へ年二十六歳。功五級陸軍少尉。

昭和十五年——二十三歳——

故北白川宮永久王殿下奉悼歌

蒙疆に神あがりましぬと聞きてより胸のさわぎをとどめかねつも

大君に仕ふる誠たらざるを目さめしめらる悲しきしらせに

はらからよいまひたすらにひれふして神のみむねをつゝしみまつらむ

(月刊『学生生活』昭和一五年九月号)

合宿報告

(註 昭和十五年七月、信州菅平において日本学生協会による全国学生合同合宿の後、全国七カ所で合宿が行はれた。これはその関東班—本人が長—の報告である)

菅平に於て青年の魂の大感激の裡に真に国家の運命を自ら担ひ、その改革を永遠に決意するに至つた三百の学徒は、国家の運命に関与する偉大なる精神の躍動の前に、従来
の如き暑中休暇の観念を排して全国七ヶ所にその方途を見出すべく再び集結した。

関東班四十名は長野県木崎湖畔に十七日より合宿を開始した。全国の空間に、視野を

越えた憶念の世界に展開せられる今回の合宿の重大意義を思ひ、われらの決意は背後の橋を焼き払ふ如き不退転のものであつたのである。目に見えざる世界に於ける協力の実現——それは人は自ら救ひ、自ら改革を意志することによつてのみ始めて開かれる世界である。

十七日午後五時、宣誓式に臨む友の眉宇には菅平とは更に異つて国難を身をもつて堪へゆかんとする苦しみへの決意が表れてゐたことは、今回の合宿が異常なる精神の戦ひとして青年の魂の歴史に永遠に記念さるべきものであることを物語つてゐる。

合宿の当初より友がひたすらに国家生命に没入せんことを求め、その容易に出来ざる自らの禍根に勇敢に戦ひを宣する涙ぐましくも雄々しき姿に、隊長始め指導の責にあるものは幾度かその無力を痛感せしめられ、戦ひを更に激化せしめる決意を促す力となつたのである。

二日目の感想文によれば、真に求めるにもかゝはらず永久生命の感激を味はふことが出来ないのは何故であらうかとの切々たる叫びに満ちてゐた。隊長以下の必死の努力に不拘、異常なる精神的体験の起らなかつたことは事実であつた。我らは人間能力の絶望

の極に打開の方途なきを苦しんだのである。本部から「新シキ方法ハ常ニ困難打開ノ方途タルヲ思ヒ戦闘激化ヲ要望ス」との檄電を受取つた時、最早われらは人力を超えてみた。夜半十二時、班長始め各同信会員を一斉に起床せしめて、今われらの直面せる精神的問題の重大性を告げ、この困難を明日中に打開せざれば学生運動は形骸化するのみならず、青年の精神的再建は永遠に不可能なることを説いて明日の死闘を要求したのである。遂に光明は青年の死を賭しての苦しみによつて点ぜられた。畏かれど 明治天皇の悲痛なる大御心を歌はれた大御言葉、祖先の偉大な力ある言葉が、全身心を傾ける青年の心と心に通ひ始めたのである。

廿日の夜は、村民との合同で戦死者の慰霊祭が勤皇のゆかり深き仁科城趾で厳かに行はれた。祝詞献進歌等われらの心をこめた奉仕の誠に御霊を現しく感じ、遺族七名を始め村長以下村民も非常な感激を味はつたのである。われらの合宿に於ては慰霊祭が最大の行事であり、われら学生は祖国防護の御霊を祀らんが為に集つて学ぶのであると告げたその言葉は、村民に非常なる感銘と驚異を与へたに相違ない。

廿一日、第六班は千野副隊長の指導によつて長野市に講演会のポスター貼りに出発、

その壮行式を行ふ。講演会はわれらが日本歴史の必然性に立脚して、明治以来の誤れる言論に対して行ふ反撃であることを思ひ、一枚のポスター貼りにも無限の敵を感じつつ貼ることを誓つたのである。

廿二日夜は、農村青年との座談会であつた。農会技師、巡査、新聞記者も加はり先づ農村の実状を聴くことから始まり、時局に対して青年は如何なる気持をもつてゐるかを尋ねた。併しそれはすべて希望を失つてなるに委せてゐるとの告白であつた。農村に於ても亦青年は魂を奪はれてゐるのであつた。そして何ものかの偉大な力に頼らうとしてゐる。われらは自ら立たねばならぬことを訴へ、学校に於てそれを実行するわれらの運動が農村に於けるそれにもまして如何に困難であるかを説き、然もわれらは死を賭して起つた旨を告げたのである。われらの赤誠は真に心から青年を動かした。支那事變、新体制に就て時の経過を忘れて心ゆくまで語り続けたのであるが、急所は急所として真の共鳴共感を得たことは我らの驚異であつた。終つて我らは青年に比して学校を動かすことの困難さを改めて痛感したのである。

廿三日の連絡会議で、各学校に於ける戦ひを誓ひ、改革の方途、地方青年との結合、

ジャーナリズム進出等を協議した。

廿四日、長野に進発、各々任務に就く、長野に於ける言論戦のスローガンは「失はれたる青年の魂を奪回せよ」である。明治以来われらの言葉を奪ひ魂を奪つた誤れる思想に対して無限の憤怒を感じて強い反撃の意欲に燃え続けた。

講演内容は

開会の辞

名川良三

合宿報告演説

学生代表

農村生活に希望を約束するもの

千野知長

新体制は如何にして齎されるか

手塚顯一

事変の世界史的意義と解決方途

桑原暁一

閉会の辞

太田次男

4. 手塚顯一
聴衆約三百名、終つて三十名の有志と座談会を行つた。論議の中心は理想を失つた職分奉公の誤りをわれらは徹底的に指摘したのである。これは地方民にとつて驚異であつたに相違ない。併しこの驚異の言葉に従来のありふれた運動と異つた特別の信頼と希望

とを繋ぐに至つたものが多数あつたことは見逃せない。かくて生命ある我らの言葉は地方民に生きる希望を与へ、地方民の心は我らの心に完全に結合せられた事実をかくも如実に体験したことはなかつた。

廿五日正午、護国神社の大前に次の言葉をもつて解散、来るべき戦ひを誓つたのである。

「我らがここに長野市民並びに木崎湖畔の農民の心を我らの心と結合した如く、全国七ヶ所に於て我らの同志は地方民の心を永遠に日本歴史の必然性に立脚せる青年の心に結合した。かくて我らの運動が明日より更に全国に展開せられ我らの明日からの戦ひによつて日本国民の魂を奪回するならば、新しき日本建設はここに約束せられるのである。その時こそ日本地図は形骸たることを止めて我らの内心に画かれるであらう。長野の地、長野の風光は、その魂と共に我らの内心に永遠に記憶せられるであらう如く、日本の国土、日本の山野がすべて我ら青年の内心に忘れえざる魂の記憶に留められる時、新しき日本は到来するのである。いざもろ共に戦はん哉！ 全国に散つて。」

昭和十六年——二十四歳——

夜久兄を送る

にしひがし休らふまなく戦ひし君征きますか花のさかりを
神つ代のすがたさながら太刀はきて征でます君の雄々しかりけり

(日刊『日本太郎』昭和一六・四・二四)

藤田恒男兄にかへし(註 一高昭信会の先輩・広島在住)

天さかる鄙よりみ歌はろぼろと送り給ひしみ心懐し

一語一語誦しまつりゆけば胸せまり奇しきいのちの通ひあふなり
分れてもつながらいのちのくしきえにしひたに偲びぬ君がみ歌に
君に会ひみ歌誦しまつりてうつし世に生くるいのちの貴さ知れり
えにしありて共に暮しよこよだくの思ひは失せじいのちのかぎり

(日刊『日本太郎』昭一六・四・二九)

「天皇御親政について」から しきしまのみちが「世の中のまことのみち」と云は

れるのは、その直接経験が動かすべからざる時間的空間的な唯一の眞実性を有するからであります。

(日刊『日本太郎』昭和一六・六・一五)

正大寮一周年記念に

大海の千重の八重波おし渡り進みしあとを思へば悲しも
友と呼び友と呼ばれつうつし世に戦ふことのかりそめならず
むらぎもの心のまゝに進むときし神のまもりありと我ら信ぜん

五月雨のあがりしのちの静けさに緑いやます杉のむら立ち
この朝けひとむら雨にさ庭べの小草も緑をきそひてぞ見ゆ

(日刊『日本太郎』昭一六・九・一八)

北白川宮殿下御戦死一周年に

み軍のさかりの時し蒙疆に神あがりましてゆ一とせ過ぎぬ
大君の勅みことかしこみ征で給ひし猛きみ心いま仰ぐかな
大君につくす誠のかたきかな空しく過ぐる年月思へば

(日刊『日本太郎』昭一六・九・一九)

藤原兄を偲びて (註 藤原邦夫氏、本書前編『いのちささげて』に収録)

淋しくも親しきあまひたゝへ給ふ君がおもわを忘れかねつも

「戦はむ」とわれはげませばニッコリとうなづき給ひしみ心なつかし
一言も述べ給はねどなつかしさおもにたゝへしみ姿恋しも

『霊戦』を讀みて (註 藤原邦夫遺稿集)

人の世の乱れと戦ふ若竹の友のいのちに涙流しぬ

「いつはりの世をまだしらぬ幼子」とふ大御歌を仰ぎまつりしみ心偲ぶも
しきしまのますらをのみち今の世に絶えむと思へやいまこゝにあり

(日刊『日本太郎』昭和一六・一〇・二)

“人の子は枕する所無し(バイブル)”とは、概念のとりこに成るな、と云ふことですよ。

いのちとは、つながりです。

先輩師友の御霊に捧げまつる

秋晴の澄みたる空のいや遠く思ひは果てなしみおや偲べば

吹きさそふ秋風さびし亡き友もみくにの行末なげくともへば

なき友のみ霊のまもりいやかたく思ひてやまず乱れゆく世に

(月刊「新指導者」昭和一六年二月号)

「大詔のまにまに」から 繰上げ卒業(註 昭和一六年二月)となつた我々は新春二月、晴れの入営をするのである。思へば永かりし学生生活、今や筆を剣にかへて詔のまにまに戦に赴かんとするに際して、胸中に湧くおさへ難き思ひは祖国に対する切なる祈りである。(中略)我々が幾年来祈りつづけて来た思ひを記した「留魂文」(註 本書の前編『いのちささげて』一三六ページ参照)は翌日(註 昭一六年二月一八日)靖国神社に奉納せられた。

我々はこの数週間(註 十二月八日十一時四十分、宣戦布告の御詔書を拝し奉つてから)の感激を永遠に忘れることが出来ない。そしてまたそれが永遠に子孫に伝へられ、故国に留められんことを祈るのである。(『週刊朝日』昭和一七年一月二日号「出征学徒の言葉」所収、本人の寄稿)

昭和十八年——二十六歳——

手塚 玄宛（註 実兄） 永らく御無沙汰しました。皆様お変りはありませんか。小生頑健につき大いに御安心下さい。毎月俸給の一部が補充隊より留守宅宛に送金されますから、御面倒乍ら父上の小遣として御転送下される様にお願ひします。又俸給の一部より書籍、雑誌（中央公論、改造、日本評論、公論）新聞を購入して送つて下さい。慰問袋には日用品は一切不用です。扇子と「わかもと」「エーデー」類の栄養剤をお願ひします。それから留守宅はそちらになってをりますから、若し移転した際は補充隊の方へ届ける様にして下さい。

戦争といふものは実に勉強になるものです。

内地も梅の季節ですね

皆様お体を大切に

（昭和十八年 南海派遣基第二八〇二部隊 松井部隊 田村隊）

五、松浦秀宏



松浦秀宏

大正八年七月六日、台湾台北市に生れる。台北

一中卒業後、昭和十三年四月、台北高等商業学校
に入学。入学後直ちに新聞部に入り、卒業まで詩
や評論に健筆をふるつた。同年九月、中西旭教授
指導の「神随会」に入会、同教授と、翌十四年に
着任された山鹿光世教授の指導のもとに、主とし
て『古事記』や吉田松陰の『留魂録』を研鑽した。

神随会は、中西教授が指導官を兼務されてゐた台湾總督府国民精神研修所で合宿を行つたが、自由
討論の際、彼はユーモアをまじへながらズバリ核心をつく発言をした。

三年生の時文化祭が催され、彼のクラスは学友・吉野圭一氏（本書収録）の監督演出により、真山
青果氏の戯曲をもとに「楠公父子桜井の別れ」を上演したが、演題を「望楠の譜」としたのは彼の

命名によるといふ。彼は正行まさつらの役を演じた。級友たちはしやがれ声の彼の出来ばえを案じたが、いざ本番となるや、まことに可憐な正行になりきつてゐた。楠公父子に対する敬慕と、幼くして失つた父君への慕情とを一体たらしめてのこのやうである。後に一観客から「我感動す」との投書があつたといふ。

昭和十六年三月、台北高商卒業後に、学友・吉野圭一氏とともに上京を念願してゐたが果さず、台北に留まり同年四月、台湾商工銀行に入社した。

同年十二月、岐阜の中部第三部隊に入營し、昭和十七年十二月、南京の幹部候補生学校を卒業。南方第一線に向ひ、昭和十八年七月十一日、ニュージョージヤ島ムンダにおいて、重機関銃小隊長として、来襲した米戦闘機と交戦中、頭部に弾丸を受けて戦死。時に数へ年二十五歳。

昭和十六年～昭和十七年——二十三歳～二十四歳——

福岡政夫 宛（註 台北高商生の友人） しきしまのみち拝見、大兄の絶えざる精進に頭が下り、小生の不勉強を悲しく思ひ居ります。先日中西先生より御芳書を忝うした。

八月、現在一、二年生全部当所（研修所）にそれぞれ三昼夜合宿し、会員諸兄（中野、花島両君総指揮廿余名）の指導下に実に見事に魂の奪還を齎しつゝ有之候、吉野は満洲興安北省ハイラル満洲第一九七部隊穂吉隊。

（昭和一六・一〇・七）

出陣の譜

一、父よ

母よ

はらからよ

師よ

友よ

いさかひし人よ

忘れじの人

忘るべき人

わが胸を過ぎし思ひ出の人々よ

今、吾、国を出づる。

二、げに思ほへば

父をなくし、兄に別れ

残る母に

はらからに

吾が誠至らざりけり

母上よ

ゆるしてよ

はらからよ

許し給へ

今、吾、国を出づる。

三、吾をめぐる人々の心美しきに

吾心悲しかりけり

吾心わがのきたなきまゝに

今死なむは悲しかりけり

されど、今

大君にさゝげたり

このいのち

ますらをがもてる悦びを

限りなく味はひつゝ

今、吾、国を出づる。

四、大君の

在がほします国

大君に

仕へまつる

すめらみ民の榮ゆる国

父、母、はらからを生みし国

桜咲く祖国よ

とこしへに榮あれ

大君のいやさかを壽ぎまつりて

今、吾、国を出づる。

祖国を離るゝ日（昭和一七・八・七）

六、立元洋



立元洋

確信が身につつき、所信を述べるその力強さと重厚さと熱烈さとは、以前の彼を知る者に目を見はらせるほどであった。

しかし、当時の跋しい情勢を憂慮しての緊張の連続のためか、疲労が重なり、健康を害し始めてゐた。昭和十八年後半頃から彼は、ひそかに苦しみに耐へてゐる様子が見られた。学友たちはその

大正十二年一月五日、宮崎県都城市中尾に生れる。昭和十五年旧制都城中学校を卒業、国学院大学高等師範部に入学。しばらくして「日本世界観大学講座」(日本学生協会の姉妹団体・精神科学研究所主催)を聴講し、深く感激して直ちに「日本学生協会」の「東京正大寮」に入寮。その後の精神的成長はめざましく、生来のやさしさに、堂々たる

恢復の一日も早からんことを願つてゐたが、そのまま昭和十八年十二月一日、都城の第二十三連隊への入隊が決つた。当時の彼の複雑沈痛な思ひは、入隊の当日姉夫妻にあてゝ書かれた書簡に自らを「不忠不孝の臣」と述べ「永久にまぬがれ難い罪」を負ふ者として、深く自らを責めてゐる言葉に窺ふことができる。しかし氣を取り直して近親の方々の心配と慈しみに応へて、「唯今は、ひたすら大みことがふり、何事もかへり見なくて出征しよう」と心に定め、勇躍入隊した。入隊後二十日にして発病（ジフテリア）間もなく呼吸困難となり、人工呼吸も甲斐なく、かけつけられた御両親の前で、つひに十二月二十一日不帰の客となつた。時に數へ年二十一歳。

昭和十七年——二十歳——

合宿を待つ地方の友を偲びて

御国今ただならぬ時はらからの集ひ来まさむ時近づきぬ

ひたひたとたゞへし琵琶湖の水の如思ごとひは尽きずその時思へば

かく友等を偲び待ちつゝ語らへばまだ見ぬ友の御姿偲ばゆ

かく友等集はん日をぞ語らへば琵琶湖の波もうつゝに聞ゆる

〔うたごゑ〕昭一七・七

み友等に刷文すりぶみ送ると一室にこもれば楽し話つきずして

真昼間の暑さもうせて夕風の吹き入る部屋に刷文いそぐも

さざめきの声絶えずして一室にインクの香満ち満ちて居り

すりぶみのインクにまみれ夕闇の迫るも知らでいそしむ友等よ『激流に抗して』昭一七・七

深大寺じんたいじに遊ぶ（註） 東京・調布（在り）

冬の日影ゆたかにみつれど強き風なほ吹き通るこの山路に

やはらかき黒土の中ゆ麦の芽のはつかに芽ぐむがなつかしきかな（註 はつか、わづか）
長き冬堪へつゝ生くるくしき力こもれるものかこの麦の芽に

深大寺萬葉植物園を巡る。園内の草木ことごとく萬葉の歌書きしるされたり

枯葉あまた散りしく道を木の間ぬひめぐりめぐりて眺めあかぬも
見上ぐれば桐の大木青空に繁枝のぼして雲ながる見ゆ

木の葉洩れうつる日影に清水湧き小鳥さへづりにぎはしきかな
なみ立てる木々のことごとつばらかに萬葉の歌書かれしこの山
物はよしとほしかれどもかくも深く自然をめでしゆたけき生命よ
一つ草一つ木々にもつきぬ思ひ歌ひ上げたる我等の祖先よ

深大寺は天平時代に建てられしもの、一老僧に案内を請ひて寺内見学

天平の御代に建てられしと云ふ高尨大寺内しめやかなるかな
しめやかに語り出でたる老僧の声にしはしは当時をしのびぬ
やはらかに両手をさゝへて仏像は統一されし緊張を示しぬ
生くるものゝ全ての悲しみ胸内に秘めたるごときこれのみ仏

昭和十八年——二十一歳——

河野正臣夫妻 宛（註 実姉夫妻）

兄上様、姉上様

私は今朝九時に入営致します。

今、四時十五分であります。先から目を覚まして、様々のことが胸中を去来致し、整理すべくもありません。

私はつひに「不忠不孝の臣」でありました。

永久にまぬがれ難い罪を思ひます。これは、如何なることを以てしても償ふべくもありません。

今日迄、御便りも差上げませんでした不信の洋を御ゆるし下さい。

私は今朝、門出致すにつきましても、はるかに、北満の地より、兄上様、姉上様のつきざる祈りを直接身に感じます。何時も、家の人と共に、御二人とも共にあることを信じてゆきます。

唯今は、ひたすら大みことかがふり、何事もかへり見なくて征きます。
最後に、兄上様、姉上様、通文チャンの御健康を祈り上げます。

久しくも尽きぬみめぐみたまはりしみこゝろ死すとも忘ると思へや

昭和十八年十二月一日午前四時五〇分

兄上様

姉上様

外の皆様にも宜しく御つたへ願ひます。

7. 木野内 為 博

七、木野内 為 博



木野内 為 博

二年四月、東京帝国大学法学部政治学科に入学するや、同期生の小田村寅二郎・今井善四郎両氏の呼びかけに馳せ参し「東大精神科学研究会」の創立に参加。同じく経済学部学生で山口高校出身の岩本重利氏とともに、東大風改革の運動を展開。昭和十三年秋「東大文化科学研究会」の学生寮が、本郷曙町に借家を借りて開設されるや、前記小田村・今井・岩本氏らとともに入寮。寮名

大正四年十月三十日、為次郎の長男として愛媛県に生れる。昭和十一年三月、旧制松山高等学校文科乙類を卒業するに際し、ドイツ語の成績が最優秀であつたことにつき、駐日ドイツ大使から「ドイツ賞」を受賞した。大学入試のため一年浪人の間、東京においてドイツ語講習会を主宰してゐた紅露文平氏と意気投合し、これを手伝ふ。十

「正大寮」は、本人の強い主張に依るもので、彼は藤田東湖の漢詩「正気歌」の中の「天地正大氣」の句をこよなく愛し、瀾達な寮風を念願して、この名を主張したのである。二年後この本郷正大寮は、都下三鷹の井の頭公園内にある六十室の「正大寮」に移転したが、その寮名は今日なほ各地の学生らの寮名として存続するに至つてゐる。また、「東大文化科学研究会」は昭和十五年五月に、發展的に解消して「日本学生協会」となつたが、この時の新会名についても、彼の平素の主張「明るく広やかな名称にすべし」〃〃余り思想的にうるさい名称では發展しない〃〃との意向が通り、田所広泰先輩もこれを容れて「日本学生協会」の名称が決定した、といふいきさつがあつた。多くの先輩・同輩に尊敬され、愛された好漢であつた。全国各地の高専大学への巡訪旅行（学風改革運動）にはいくたびとなく加はつて多くの同志を獲得した。後に高橋空山師について「直心影流」の剣を身につけたやうである。酒は好物であつた。

十六年三月東大卒業。同年十二月、松山の西部第六十二部隊に入隊。久留米の予備士官学校の課程を終へて南方に赴任。十九年五月八日、ニューギニア島グルメ河畔で戦死と認定。時に数へ年三十歳。陸軍中尉。戦死と認定されたのは、ニューギニア島ホーランドディアから転進中のこの日、片腕を三角布で吊り、軍刀を肩にもたせて同河畔の木の根元に腰を下してゐる姿を見た者はあるが、渡河の有無など其の後の消息一切不明、との報告に依る。

昭和十四年——二十五歳——

青年子規 (論文)

草花を画く日課や秋に入る (子規)

七年の明け暮れを病床に呻吟しつゝ然かも悠揚迫らざる境涯に生死を超脱して三十七年の短き生涯を思ふ存分生き尽した偉人子規の業績は、ただに明治文壇の華としてのみならずその抱懐せる思想は現代青年の指標とするに余りあるものがある。今こゝに偉人子規の青年時代を概観するに彼は平々凡々の生活をしつゝ然かもその中に不動の信念あり勃々たる気魄あり、又極めて無頓着な稚氣あり誠に愛すべき青年である。子規言行録の序に、子規の恩人として銘記すべき陸羯南くがくなんは次のやうに述べてゐる。

「明治十六年の夏のころと記憶するが友人加藤拓川 (今の白耳義国べくみぎ在勤全権公使恒忠

氏)が仏蘭西へ往かうといふので語学練習の為に築地の天主教会堂に寄宿してゐた。ある日子の寓居に来て色々話した中に、『このころ国元から甥のヤツが突然やつて来たが、まだホンの小僧で何の目当も無く、何しに来たのかと聞いたら、学問しに来たと云ふてゐる。僕も近々往くのだし世話も監督も出来るじやなし、いづれ同郷の人に頼んで往くのぢやが、君の処へ往けと云つて置いたが、来たらよろしく会つて呉れ玉へ』との話もあつた。二三日たつとやつて来たのは十五六の少年が、浴衣一枚に木綿の兵児帯、いかにも田舎から出たての書生ツコであつたが、何処かに無頓着な様子があつて、加藤の叔父が往けと云ひますから来ましたと云つて、外に何も云はぬ。……やがて段々話する(陸氏の甥と)様子を見ると言葉のはしはしに余程大人じみた所がある。相手になつてゐるものは同じ位の年齢でも傍から見ると丸で比較にならぬ。叔父の加藤といふ男も予よりは二つも若い、学校に居る頃から才学共に優れて予よりは大人であつた。流石に加藤の甥だと此の時はや感心した。云々と、田舎の松山中学を退学して憧れの都へ飛び出して来た愛すべき少年子規の一端が窺はれて面白いのである。

或は到る所に居候し、或は下宿し、下宿料が停滞し、大晦日が迫るや友人の下宿に逃

れ、平然と正月を迎へ、予備門（註 後の旧制一高）第一年の試験を受けては落第し全く往くとして可なるはなし。上京当初の田舎書生の面目躍如たるものがある。先づ一番に大政治家をほのかに夢みた子規は、次に分らずながら哲学をやらうと考へたり、全くぼやつとして何もわからなかつたのが青年子規である。菊池謙二郎（二高校長や水戸中学校長で鳴らし、後代議士にもなつた）が大学予備門時代の子規を追憶してゐる文章の中に、

「負け嫌ひの彼は、大抵の同窓生を見下してゐたが、ある朝顔を合せると突然『君、実に豪い男が我々の級に居るよ』と心から敬服したやうにいふのであつた。正岡が兜を脱いだのは珍しいことであると思つて、だんだん聞いて見ると『昨夜米山といふ男と始めて話をして見たが沢山本を読んでゐて色々なことを知つてゐるのに驚かされた。将来哲学を専攻するさうだが、あんな男がゐてはとても競争は出来ない』と嘆声さへ漏された。是が唯一の動機になつたのでは勿論あるまいが、子規は大学に入つてから国文学を専攻することになつた。この米山といふのは漱石の『猫』の中に出て来る天然居士のことである。居士は……明晰緻密な点では子規よりも優つてゐたが文才の方は子規が秀れ

てゐたやうに思へる。云々」と云つてゐるが、この事件は明治十九年秋のことである。然しかういふ理由で哲学志望を放棄したと云ふのは理由とするには甚だ薄弱で、むしろ全然問題にならないのであるが、子規自身の語るところによると、最初の哲学志望の頃は詩歌が趣味で哲学が目的であるといふやうに揚言してゐたが、内心この二者の關係があればよいと思つてゐた。所が、二十二年頃、審美学といふものがあつて詩歌書画の如き美術を、哲学的に論議することを知つて喜んだといつてゐる。何か審美学の書をと求めてやつたと見え、加藤叔父が送つて呉れたハルトマンの書物を、独逸語の出来る友の力をかりて少し読んで見たこともあるさうだが、面倒なので碌碌見なかつたやうである。後大学へ入つてからのことである、「明治二十四年の春哲学の試験があるので此の時も非常に脳を痛めた。ブッセ先生の哲学総論であつたが余には其哲学が少しも分らない。一例を云ふとサブスタンスのレアリティーは有るか無いかといふやうな事がいきなり書いてある。レアリティーが何のことだか分らぬに、有るか無いか分る筈がない。哲学といふものはこんなに分らぬ者なら哲学なんかやりたく無いと思ふた」(墨汁一滴)と云つてゐる。全く同感である。大学は昔も今も同じらしい、理窟の為の理窟などピンとこ

なかつたのが子規の本領である。

そして大学に於ける勉強が自ら欲するところに合はないと見たら断然行くことをやめ、下宿に居て勝手に次から次へと読書、研究に余念なく、遂に落第して大学は出られなかつたけれども自ら持するところ強く、生活の為に新聞記者となつたが、如何に生活の爲とはいへ徒らに金銭を求めず、平然として僅か十五円の月給に甘んじたのである。こゝにこそ革新者子規の姿があるではないか。自ら信ずるものゝ為には如何なることをも省みず犠牲にして而も悔いず、一步々と踏み出す彼の足どりこそ、正に大丈夫の歩みと云ふべく、その足どりによつてこそ明治の和歌の改革も俳句の革新も成し遂げられたのである。

実に正しきを正しきまゝにまつすぐ生き抜くものに刃向ひ得るものはない。是は万事に通ずる真理である。日本民族は神代の古よりこの大道を歩みつづけて来た。そしてそれは常に理論としてではなく、信念として持ちつづけて来た。その故にそれは日常茶飯事にまで浸透してゐるのである。高きは大御心として現はれ、低きは文武の道として伝へられたのである。故に子規の明治文壇に残した業績は偶然ではないのである。日本人

が自己を偽らず飾らずあるがまゝの姿としてその事に当るとき、そこには必ず大道が拓けるのである。子規は彼の信ずるまゝに素直に生きて生き抜いて明治文壇に大改革の炬火を点じた。我等も亦、素直に信ずるまゝに堂々と生き抜かねばならない。

かくしてこそ始めて大御心にそひ奉ることが出来るのである。私は人間的環境的に極めて恵まれざりし青年子規を見て、そのあはれにも雄々しき生き方の中に少しも不自然さのなきことを見出して驚いたのである。苦しきの中に、平然と生き抜いて往く天晴れさに感服したのである。之は決して子規自身の持つてゐる力ではない、子規はただ思ふまゝに生きてただけである。子規自身のもつた力の故に成し得たのではなくただ平然と生き抜いて行つたことが大道にかなつたが故に強かつたのである。神代より伝承されたる日本民族の本性に合致したが故に強かつたのである。子規の強さは要するに日本民族の強さ偉大さに他ならない。私はこゝに子規の偉大を称する代りに日本民族の偉大さ優秀さを叫んで青年子規の論を終る。子規は必ず地下にあつて「然り、然り」と感歎するであらうことを確信して。

(月刊『学生生活』昭和一四年五月号)

神前にて

大きつとめはたす君よとはげまされ我酔^キひ泣きぬともしき酒に

(註 昭和十四年六月、東大文化科学研究会は全国遊説を舉行した。この歌は本人が東日本班に属して出発の時のもの)

山夜行

同信の友をたづぬるわれなれば清く明るき月を頼りぬ

行く先はさだかならねど同信の友らいませば心やすかり

やすらかに神ををろがみふみいりし谷間の月はさやけかりけり

谷つたひ山坂のぼりまたくだりめぐりあひし友のありがたきかな

友らいます小屋にたどりつき思ひけりげに人生は不可測なりと

(註 昭和十四年八・九月の交、東北・関東・近畿・中国・四国・北九州・南九州に於て東大文化科学研究会主催の地方別合宿が行はれた。本人は四国班の合宿を終つて東京に帰る途中の四日間を近畿班に立寄つて指導に當つた。近畿班の会場は県境の山中に在る和歌山県師範の山林実修寮であり、本人は地元民の案内に依り始めての山中の夜道を踏破すること一時間半、夜中の十一時半漸く会場に到着した。この歌はその折即ち昭和一九・一の経験を三日夜の歌会で発表したものである)

弟は敢斗せしや椰子嵐

(註 十九年初頭、パラオから実家に送られた葉書に記された句。此の頃、ケゼリン島で激戦があり、令弟が同島で従軍中であつた)

八、奥村克郎



奥村克郎

大正十年一月十日、岐阜県多治見市に生れる。

昭和十三年三月、岐阜県立東濃中学校を卒業、同年四月旧制浜松高等工業機械科に入学。昭和十五年の「菅平全国学生合同合宿」（日本学生協会主催）に参加する等、全国の友らと共にわが日本の精神的道統を学び続けた。彼はまた、ゲートに私淑するところがあり、高い理想を常に胸にいだき、折

8. 奥村克郎
- にふれて三井甲之先生の長詩を朗読してゐたといふ。昭和十六年三月、浜松高工卒業後、大同製鋼に入社したが、翌十七年四月、関東軍遼陽第二一〇三部隊に入隊。後、グアム島に転進し、昭和十九年九月三十日同島に於て玉碎。時に数へ年二十四歳。陸軍中尉。母上宛の最後の便りに次の歌が書き添へられてゐた。『大砲の音聞き安らぐものゝふのなすべき道は明らかにして』と。

全身全霊を傾けて

(菅平合宿感想文)

合宿に来て六日間、僕は以前の偽瞞と意志なき魂とから脱する事が出来ず、常に傍観的な態度のもとに、観念的な討論を行つて来た。そして全体に没入し得ぬいらだたしさは遂にこの合宿をも批難した。

六日目、遂にこの偽瞞に耐へられなかつた。

班員のまへに怒気と憤懣とを告白した。

その時班長の第一声がか心臓を震撼させた。

「何故、悪いと知りつゝ自分でやらないのか」

苦悶は胸をつぶした。しかし猶他力本願からは脱し得なくて「なぐつてくれ」との言葉が僕の口から出た。

「まだなぐらわれないと思ふのか」

この班長の第二声は、遂に僕をして

「これからはなぐつて行きます」

と絶叫せしめた。

全体に没入するとは、自己を無にする事ではない。空虚には生命がない。全身全霊をなげ出し、全身全霊を槍とし肉弾として、対象、全体にぶつかって行く事なのである。

くたくたにつかれはてたる心にも強き力ぞつらぬきてあり

たてもなくほこもなくともおのがみのまことのいのち投げうち行かむ

この心うたひあげむと苦しめどつづることばに力うつらず

ことのはに力うつらざるはおのが身の力足らざらむくやしかれども（昭和一五・七）

昭和十六年——二十一歳——

友
に

ますらをが木枯身にかみ旅をゆく姿画くもこの宵にしも

みたびよたび歌かきとどめ送ります君をしのべは心は強し

あへぎあへぎ進む我をもますらをと君よびませば心めざめし

〔連絡部報〕第一輯第三号 昭和一
六・二二

友に

僕達の同志にして、科学の勉強をする者らに「科学的知識に躑躅するな」とか「精神が自然科学をつかさどる」とか説いて見たところで、一時的ななぐさめとして日頃のなやみが薄らぐのみであり、一つもその悩みが消え失せ、無限の意志として活動の地盤を與へるものでもないと思ひます。

「国体の無窮なる限り我らの戦ひに終始なし」といふことを「理科系とか何かの差別は絶えて」「具体的に」感じて居られる、その心理の動きを今一度『日本太郎』（註 当時、山口県萩市に於て発行されてゐた日刊誌）紙上に発表して下さるやうお願い申し上げます。そしてその統一ある無限の戦闘意志をして、日常の職業及び学生生活を如何に統御せしめるかについて、タタカヒか職業かの問題を各自は如何にすべをさめるべきかについて。

赤化的傾向の拡大されつつある事実を、その評論の言語魔術以外に、その魔術にひつきかりやすき一般の心理的動機についても、研究考察されむ事を願ひ上げる次第です。

淋しとは一字もなければ君が文よみつゝ行けば心しのぼる〔連絡部報〕昭和二六・二二・二五

昭和十六年十二月二十八日 今日には会社を休み、机、棚類の整理をする。来る日も去る日も何度も何度も思ひ出され、なつかしまれ、気遣はれる人の手紙も二通を残して、後は全部破き捨てた。(写真は三葉を残せり)

我去りし後、母の見給ひてなげき給ふらむと思へばなり。

書物を始め仕事に手がつかぬといふは、まことに恥づべき事にこそ。死を寸前にひかへて尚且つ平常のまゝなりし武人にこそ許しをこふべき。

用意萬全。人知れずとゝのへ、心おだやかに入隊の日を待たむ。直ちに死するにあらず。心、空に迷ふはあさましき限りなり。今後、心にをさめ注意すべし。

十二月三十一日 抽象化された「時」に価値があるのではなく、国家生活の生成過程

がたどる「時」——その現実の「時」、或る時はかぼそく或るときはふくらむその不可思議な「時」——直線運動とは実感され得ざる「時」——その「時」こそ我々の心理生活と関係ある「時」である。

我々にとつてはしかるが故に、「時」があるから生あるのではなく、我々の民族生活ある故に「時」があるのである。

昭和十八年～十九年——二十三歳～二十四歳——

母宛 新聞を見れば、どの面にも、あの神武天皇の御製の御句がかゝげられ、どの記事も、戦争だの大東亜だのと戦争づくめで、其の窮屈さにうんざりさせられます。御製が標語化せられるこの不可解な時代は、戦争に依つて文化が萎縮し芸術が軍門に降り、総力といふ言葉のもとに理解し難き世相を呈して参りました。

婦人方が銃剣術をしてをられる写真、兵隊の母さんの話が、馬鹿げてクローズアップされ、つゝましかるべき日本の、ゆるぎなき姿が軽々にとりあつかはれ形式化され行くのを、たまらなく淋しく思つてゐます。我々のお母さんや妹は我々の安らかな眠り所で

あつて、其所でも、味もそつけない理より出た国家概念が氾濫してゐては、一体どこで我々の魂は休まるといふのでせうか。

この事は自分のここでの苦い体験からでた、み国への憂ひです。日本は今、決してよき方向へ進んではゐませぬ。純精神的には、国家そのものから国民の一人一人が離れ行きつゝあるのではないかとさへ考へさせられます。

この戦争は理では勝てませぬ。ゆたかなる心、ゆたかなる生活、そのみです。常会や空訓（註 防空演習）の折、理に走つた事を人様に云はぬやうにして下さい。つつましい忠誠心、かくされたる、押しつゝまれたる忠誠心、そのみが第二の国民の忠誠心をはぐくむ地盤であります。

いとけなき子供の心に、人知れずはぐくまれる忠の情は、つゝしみなき標語に依つて、かへつてけがれた、いかものとな化して行くのではないでせうか。我々幹部候補生は現在、決して国家の危急を救ふ熱意などといふ大げさなものに依つては生活してゐませぬ。演習や学課には熱心です。それは、戦に征つて不覚をとつてはならぬといふ切迫した気持ち（表はれざる）に支配せられてをるからです。

お母さん!!しみじみとした気持、心のすべてをこめて、かう呼びかけます。答へて下さい、お母さん!!心の全幅をかたむけて信じて下さる人は、この世にあなたの他にありません。僕はそれをつくづく感じます。

この唯一の安心のもとに戦場に征き、勇ましい働きも出来ます。天皇陛下のお為に命をなげ出す事が出来ます。(昭和一八年春)

グアムに戦ふ前に

血はたぎり心はをどる戦線にいよいよでたつきしに越えて

益良雄の喜び今ぞ大らかに船は故国をいでたゝんとす

海面うなも這ふ雲かと見えて島かげの近づく眺め想ひ果てなし

骨うづむあれが島よと白波のほの見ゆる島部下とながむる

果てしなき大空夕焼け赤雲が紫色に変わりゆく見ゆ

椰子の樹の浮きたちゆらぎ夕焼のみ空大きく動きつゝあり

広大なみ空の動きに之は亦朝蜘蛛巣あみを急ぎ居るかも

島守る飛行機み空に音あれど姿は見えず日は暮れにけり

九、齋藤高明



齋藤高明

大正八年四月十四日、父浩、母たけの次男として千葉県に生れる。旧制県立千葉中学校から旧制水戸高校理科乙類に進み、昭和十五年三月同校卒業、直ちに東北帝国大学医学部に進む。

大学一年の折、高校時代から柔道を通じての知友であつた加藤信克氏（本書前編『いのちささげて』に収録）と共に「日本学生協会」の道統に連なる

「東北正大寮」（仙台）を訪ねて深い感銘を受け、間もなく入寮、昭和十六年第二代寮長となる。

体軀は必ずしも大きくなかつたが、旧制水戸高校の柔道部の主将としてその寝技には定評があつた。その生活態度は、随所に己を生かすといふ、東北正大寮の伝統を創りあげた。寮生のなかに長内俊平氏（当時、旧制仙台高等工業在学中）がゐた。長内氏は腕力に殊のほか自信をもつてゐたが、あ

る夏寮生一同が海岸に遊んだ折、小軀の齋藤氏を甘くみて相撲を挑んだところ、目にもとまらぬ早技で背身投げを食ひ、脳震蕩を起してしばし起き上れなかつたといふ。

昭和十八年九月学業を終へ、海軍軍医学校（築地ならびに青島）に入校、終つて直ちに潜水艦の乗員となる。戦況重大の局面を迎へ乗艦はレイテ作戦に参加。わが艦隊は獅子奮迅の戦闘を展開したが、つひに乗艦は撃沈され、乗員全員戦死、細部の状況つかみ得ずと。時に昭和十九年十一月二十一日、数へ年二十六歳。海軍軍医大尉。

昭和十六年——二十三歳——

明治天皇御製拝誦

夜木枯

大空の星のはやしも動くかと思ふばかりにこがらしの吹く(明治四十四年)

この大御歌を拝誦し大自然をも総撰さるゝ大御心を拝し奉るのである。冷く輝く星座のもとに吹き荒るゝ木枯、聞ゆるは只吹きすさぶ木枯の、木の葉を飛ばし地を吹き払ふ声のみである。

「大空の星のはやしも動くか」とよませ給ひ、大空の星と地上を吹く木枯とを一瞬に大御心にすべをさめられ、渾然と一つに、自然になだらかに、よみ出だされ給ふのである。かゝる広大なる大御心にふれ参らす事により、我等の狭き心、局部的にのみ動かんとする心、木枯に対すれば只樹木の揺れ動くに心止り、大空の星などには思ひも及ばざる

がごとき狭小なる心も、広くおほらかに開展せしめらるゝを覚ゆるのである。「星のはやしも動くか」との大御言葉によつて木枯の吹く様が更に強く感ぜられるのである。

蟲声非一

さまざまの蟲のこゑにもしられけりいきとしいける物のおもひは（明治四十四年）

かく、様々の虫の声に迄も大御心を止めさせ給ひ、「いきとし生ける物のおもひ」をしぬばせ給ふ大御心は、まことに自然と人生とをすべをさめ給ふのであり「一切衆生悉有佛性」の義はこゝにいのちを得しめらるゝを拝するのである。

かく、いたらぬくまもなく、一切衆生の上にそゝがせ給ふ、廣大無辺の大御心を今更のごとく痛感せしめられるのであり、この痛感なきは臣道感覚の欠落なりと思はるゝのである。我等は不断に臣道感覚に目ざめしめられつゝ、直ちに祖国防護の戦に没入すべしと決意するのである。（『地熱』第二卷第二号 昭和一六・三・一二）

「黒上先生著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』序説を中心として」から
人間性を無視し実人生より遊離するが故に概念の遊戯に終止し、いたづらに観念冥想

を事とする學術思想、或は空漠たる人類平和を夢想し、或は世界最終戦論をとなへ天を崇拜する思想に迎合し祖国を破局に進ましめる行動理論に終始せる現状をまのあたり見しめらるゝ今、「群生と苦楽を共にす」（維摩經義疏・文殊問疾品）と宣はせられし平等大悲の教化精神に、國民思想を統一し大陸文化を批判摂取せさせ給ひし太子の御人格を憶念しまつると共に、思想混乱のさ中にありて、現代思想學術を匡すべく聖徳太子の研究に一向専念されし黒上先生の御人格をあふぎ、我等が行くべき道を照示し給ふみ霊ををろがみつゝ闘ひ進み行かねばならぬと決意せしめらるゝのである。〔地熱〕第二卷第三号 昭和一
六

故藤原邦夫兄を偲びて

御国思ふ心一つに結び合ひし君逝きまして四月は過ぎぬよつぎ

起ち得ざる病の床に御国憂へをたけびし君の悲し心よ

うつそみに会ひ得ざりしも君しぬぶ心は御靈にただに通はむ

御靈よばひ御靈祭りて進みゆく我等のいとなみ見そなはし給へ

〔日刊「日本太郎」昭和
一六・一〇・二二〕

昭和十七年～十九年——二十四歳～二十六歳——

空曇りゆけど彼方の山の端なほ明りたり

大空はいまはくもりて白雪をいただく山に雲低くたる

されど尚行手の方の山ぎはは雨雲うすれ天つ日のさす

群山は濃紫にと変りゆきみ雪は白く尚残りたり

山ぎはにあかねのこして日の沈み大空青く澄み渡りたり

『おたけび』第三号
昭和一七・五・三〇

み便りいたゞきて

なつかしき君がみ便りうれしくもみ出しにけり今朝の便りに

みづくきのあともなつかし表見つ裏返しつゝいただきまつる

かずかずのみ歌にこもるみ心は永久に刻まむ我が胸内に

おろかなる我をもたのみて征きませる君がみ心ひたいたゞきつゝ

君を送りて（註 長内俊平氏入営）

ものゝふのみち一筋にわけて行く君が行手の幸さきくありませ

大君のまけのまにまに行く君と思へど今日の別れ悲しも

「御製拜誦ニ友アルヲ思へ」とふ御言葉ことに有難きかな

別れては悲しかれども大御言葉共にをろがむことのかしこさ

君征けど友等集ひてしきしまのみち分けゆくよ心あはせて

大君のまけの政まつりごととげまつり返り来まさむ日を祈るかな (昭和一七・九・二九)

夜久正雄宛 御無沙汰お許し下さい。お身体の具合よろしからずとのこと如何と案じ居ります。小生らもいよいよ九月にて卒業、直ちに軍に入ることとなりました。昨日海軍軍医見習尉官採用通知あり。九月二十五日東京集合、三十日講習地出発の予定になつて居ります。出発までの東京滞在中、或はお尋ねすることもできるかとも思つて居ります。

一人出家すれば魔宮皆動ず
——維摩経義疏——

と大兄の書き残されし御言葉、日々拝し居り一人出家を念じて参り度しと思ひ居ります。

草々

倉前義男宛 (註 熊本高工生の友人)

小生も近く本校の教育も終り、いよいよ第一線に出掛ける日も遠くないことと思ふ。只全力を尽して御奉公の誠を尽さんと思ふ。いづこ迄行くも心のつながり更に強く致し度し。充分便りもなし得ぬことと思ふ。あせることなく(註 倉前氏は当時病床にあり)御健闘を祈つてゐる。(昭和一九・五・一三 広島県大竹海軍潜水学校)

十、桜^{さくら}林^{ばやし}洋^{よう}司^じ



桜 林 洋 司

大正八年九月十八日、父哲三、母美津江の長男として神奈川県に生れる。旧制神奈川県立湘南中学校から、昭和十四年旧制松江高校に進む。同年冬、「日本学生協会」中国地方巡訪班と接触をもつたことが契機となり、「松江高校同信会」の一員となる。昭和十五年秋「日本学生協会」主催の「関東地区合宿」に参加、昭和十六年夏に比叡山で開催された大合宿には、本部付学生幹部として活躍した。

雄偉な体軀に恵まれたスポーツマンで、昭和十五年のインターハイに槍投で入賞、体力検定（註当時全国的に行はれた基礎体力の検定）では、全校で数へる程しかなかつた上級賞を悠々獲得した。その天性の真摯誠実な人柄に加へて、スポーツマンらしい闘志と豪快さをもつて、日本学生協会と、

「松高同信会」への学校当局側の弾圧に対しても、終始変らない毅然たる姿勢を堅持し、いつも学友たちの兄貴分として同信の仲間の心の支へとなつてゐた。

昭和十七年松江高校を卒業、東北帝国大学工学部に学ぶことになつたが、同年十月、海軍予備学生として佐世保に入団した。当初、軍艦塔乗員に予定されてゐたが、少年の頃から抱いてゐた願ひ止め難く航空隊を志願、土浦航空隊で教育を受く。土浦に在隊中、松江高校時代の同信の友、川井修治氏が面会に行つた際、丁度、雷撃の訓練を受けてゐる最中であつたが、「今俺の生き甲斐は唯一つ。魚雷一本を積んで、敵のデカイ奴と刺し違へることなんだ」と、右手を握り、操縦桿を前にグツと倒す恰好をしながら、淡々と語つたといふ。

昭和十九年十月十四日、レイテ海戦の前哨戦となつた台湾沖海戦に、九州築城ついきから出撃、機上から「敵機動部隊発見」の通信をし、最後にト連送（トト……突入の意）を發しつゝ、やがて連絡が絶えたといふ。時に数へ年二十六歳。海軍中尉。母堂のお話では、おそらく軍刀を引つ提げて出撃したであらうと。昭和二十年一月、彼の遺品が御遺族のもとに届けられた時、その中に軍刀はなかつたのである。

昭和十六年～十七年——二十三歳～二十四歳——

学期始の合宿に於て

集ひたる友の言葉を聞く時ぞ誠の心開かれにける
友来り共に集ひて学びする誠の道は唯一つのみ

友を待ちて

足音に耳澄ましてぞ友を待つ独り居る身の心淋しき

『天皇親政論』を讀みて（註 三井甲之著）

けふよりは御民の道を進まなむ皇國護りし人にならひて
たとひわがはかなきいのち消ゆるとも御國のいのち保ちてありなむ

十五夜の月をみてよめる

秋の夜の澄みわたりたる月みればいのち捧げし人ぞしのばる
國の為いのち捧げし人々の心しのばる秋の夜の月
此の國に民と生れし人は皆一つ心に月をみるらむ

聖徳太子御遺著、読合せを行ひて後詠める

かしこくも信に生きよとのたまひし聖の君の尊くもあるかな
いかならむ事起るともひたぶるに己が誠を貫き果てむ

旧師より御手紙を拝して

怠らず学びの途に励めとの師の御言葉の有難きかな

幕末勤王歌人集を読みて

愚かにも身のつたなきを嘆きつゝ尊き日数過しけるかも

いき死にの境ふみこえひたぶるにまことの道を進み行かなむ

秋の夕暮にうたへる

遠山は霞のこめて暗けれど昇りて澄める夕暮の月（『櫻の木集』昭和一七・四）

十一、秦はた
音次郎おとじろう



秦 音次郎

大正十年、山口市郊外大歳村に生れる。県立山口中学校卒業後、昭和十四年旧制山口高商に入学。一條浩通氏（本書収録）加藤敏治氏らと同級であった。「斯道会」（註 日本学生協会の道統に連なる山口高商の同信団体）発足と同時に入会。昭和十五年「菅平全国学生合同合宿」に参加。「斯道会」では、毎朝学校の始業前に校舎の裏山で「明治天皇御製 拜誦」を行つてゐたが、彼は欠かすことなく参加した。昭和十六年十二月、学業成績最優秀の表彰を受けて卒業。昭和十七年陸軍に入隊。昭和十九年一月二十七日、陸軍特別攻撃隊靖国隊の一員として出撃したが、攻撃の機会を失して帰還。翌々二十九日、再び生き残つた隊員とともにレイテ湾のアメリカ艦隊を攻撃、壮烈な戦死を遂ぐ。時に数へ年二十四歳。陸軍大尉。

昭和十五年——二十歳——

西洋音楽を聞きて

しきしまの大和の国にもありと聞く彼にもまさる古きしらは

かけまくもかしこかれども宮中のしらべ耳にせし昔をし思ふ（昭和一五・四・二二）

幼な子の遊びたはむるゝ姿見て幼きころを思ひ出しけり

幼な子よ親の恩より萬づ代に宏き御恩を忘るなよゆめ

かしこくも陛下のもとに生れ来しわれまた同じ大和男子ぞ（昭和一五・五・三）

かすかなる冬の日浴びて梅の花小さきながら咲きそめにけり

同信の友（菅平合宿感想文）

私がこの一週間の合宿で強く感激した事は、同信生活の真の統一ある生の実感であり

ました。特に私の胸を強く打つもの、永遠に忘れ得ぬもの、そして永遠に続けて行かねばならぬ丈夫の悲しき生の約束するもの、それは感情を超越した同信生活、同信の友の自我を超越したまことの言葉でありました。

恰も第四隊（註 菅平合同合宿では参加者を四つの隊に区分した。一つの隊は五個班から成る）の最後のフリートーキングの際でありました。南波隊長を中心に、心からなる若き青年の和やかな光景が展開された時、遠き山口の地で共に同信生活を味はひ来つた私の崇敬する加藤君が立たれて寮の問題を出されました。その時わが班長古賀兄が立たれて「寮生が真の統一ある生の実感を感じぬのは、外に向つて働きかけぬからだ。もつと積極的に活動しなくて、どうして融合が求められるか」といつた意味の言葉が叫ばれました。

私はそれを坐つて聞いて居て、文句なしに泣けて泣けて仕方がありませんでした。

加藤君の叫んだ言葉、否私達同信の等しく叫んだ言葉——「今の兄の御言葉は死んでも忘れません。」——そこには厳然たる実行意志の力が、もりもりと感ぜられました。

廊下に出て、加藤君と抱きあひ、ふるふる手を握り合つて、咽むせんだのでありました。そして、後の具体策を考へました。それは絶えず通信する事、亀山の上に於ける毎朝の

御製拜誦は今少しく時間を早める事、一年生の積極的導き、毎週一回の例会を今少し多くする事、毎月パンフレットを発行する事等々でありましたが、私達の求めてゐて、求められぬのは、適当な指導者であります。

然し又一面思ひ回らすならば

明治天皇御製

道

しるべする人をたよりにわけいらばいかなる道かふみ迷ふべき（明治三十八年）

とおほせられてゐる様に、私達は同信生活により、真にしるべする人を見つけました。それはまさしく人でありませんが、個人を超越した人即ち同信の友、これを得ました。私達の戦ひ進む時常にその背後にあつて力づけはげましてくるものは、この同信の友である事。

今も現実に力強さを感じつゝあるこの力。而もその力は放散する事なき、真の統一ある生命の繋りである事をまざまざと実感させられたのであります。（昭和一五・八）

十二、長内良平



長内良平

を受けた後、館山砲術学校に学ぶ。彼は剽軽ひょうけいでよく人を笑はせたが、出陣に当り、南方の地に日本の花を咲かせ、また野菜を稔とれたいとの願ひから、父母兄弟に集めさせた種子を背囊せいのうにぎつしり詰めて携行したといふ。昭和十九年十二月二十八日、フィリピンに出陣の途次、台湾沖に於て塔乗の輸送機が撃墜され戦死。時に数へ年二十二歳。海軍少尉。

大正十二年、父健喜、母いしの次男として北海道厚田郡厚田村に生れる。長内俊平氏の令弟。昭和十一年旧制県立青森中学校に入学、四年生の折に選ばれて上海の東亜同文書院に進んだが、学風に馴染めず帰国。昭和十七年旧制盛岡高等農林農学科に進む。昭和十八年十二月学徒動員、海軍予備学生として武山海兵团に入団。旅順に於て教育

昭和十八年～十九年——二十一歳～二十二歳——

青森駅頭にて

駅頭にあまた見送る人ごみの中に父母の姿もありき（昭和一八・二二）

昭和十九年五月十五日 母より荷物来る。修繕したる靴も入りをり有難し。

植竹（註 同期生）と話す。愚人と付合はんとすれば愚人となる。人誤解するも愚人なれば構はず、自ら持する事高かれ。

五月三十一日

郭公の声とともに垂れそめし宿^{やど}の藤なみうつろひにけり

夜映画あり。題名「轟沈」。乗組員の心労と人の和を映画より直接に感ず。苦しきなかの楽しみとは斯かる事を言ふなるべし。

六月六日 満月ならむ。近頃自然を愛づる心全くなかりし。

六月十日 必勝を期したる銃剣術、当初に於て敗る。鬱々として楽しまず。

昨夜河鹿の鳴く声をきく。薬研ヤげん（註 青森県下北郡大畑にある温泉）を頻りに思ひ出す。

家族らと薬研のいで湯に一夏を過ししことのひたに思ほゆ

古里のいで湯にきし河鹿の音こよひは遠き旅順にてきく

六月二十日 通信止となる。父母に通信止を通知。父母を慕ふ思ひ切なり。（以上旅順）

七月十七日 当分の間自己なんて考へる勿れ。

七月十九日 自己を考へざる事に徹底し、それを己の性格となすのが目下の自分の為す仕事なり。

一、散れと我らに行くべき道を

身もて示せし大楠公の
教へ仰いで進みなむ

一、皇居拜して涙を流す

義人高山の心を仰ぎ（註 高山彦九郎）
すめら御国を守らなむ

七月二十日

あの娘一人にくよくよするな

祖国日本が我が恋人よ

朝な夕なに抱いて寝る

散れよにつこり最後の時は

船は傾き灯は消える

陛下萬歳あちこちに

姉宛 もう七月ですからおばあさんが来られる頃と思はれますが、あの小さい家ではなかなか賑かな事と偲んでをります。

次にお願ひを一つ。

いづれ自分も戦地に赴く身のことなれば、野菜の種子を戦地に持つて行きたいと考へてゐます。これは補給の困難なる今日、何かの足しになればと思ふかた廉かたもありませんが、またつれづれなる（果してつれづれかどうか分りませんが）武人の嗜たしなとして、と思ふからです。次の野菜の種子、今より少しづつでもよろしいですから、使ひ古しの封筒に入れ、湿りのつかない様に、ブリキ罐に入れて置いて下さい。必要な時はいづれお知らせします。

南瓜。西瓜。マクワ瓜。トマト。茄子。胡瓜。小豆（百粒位）。大豆（百粒位）。豌豆えんどう（百粒）。ササゲ豆。紫蘇。夕顔。人蔘。大根。葱。唐黍（百粒〜二百粒）。唐辛子。今年の稲刈りが終る頃迄必ず貯蔵して置くこと。南瓜は粉のかゝるものを選ぶこと。南瓜の種は、必ず食べてみて良く粉の出たものを、種を採つて、良く水で洗ひ、雨に当てない様に、箆に入れて、充分乾燥させてしまふこと。この時乾燥が足らないと貯蔵中、黴

が生えます。マクワ瓜、西瓜も同様です。トマト、胡瓜、茄子は町で買ったものでも良いが、若し自家で採種するならば、十分に熟させて、南瓜と同様にする。トマトは真赤に茄子は紫色が消えかゝる迄。胡瓜は褐色になれば熟したのです。勿論マクワ瓜もなるべく充分熟したものが良い。豌豆、ササゲは充分実つたのを乾燥すれば良い。紫蘇はあのまま放つて置けば、自然に実がなりますから、実つたものを株のまま乾燥し、後で種を採る事。夕顔、人蔘、大根、葱は、町で買はなければ自分では作れません。唐黍はよく実つたのを一本そのまま乾燥（歯の揃つたもの）し、後で抜きとる事。唐辛子は、八百屋で買つて来て、なかの種子を採れば良い。では稲刈りが終る頃迄御願ひします。

要用のみ。

鹿児島よりフィリピンに向はんとして

戦場に今発たむとす故郷の父母さらばさきくあれかし

天かける機上の人と今なりて一路フィリピンに向はんとす

（昭和一九・一二・二八、鹿児島からフィリピンに飛行機で向ふ折発信せるもの。そのあと数時間を出でず台湾沖で戦死）

（昭和一九・七・一 旅順海軍予備学生教育部）

十三、一條浩通



一條浩通

大正八年三月三十日、盛岡市に生れる。甲斐武田氏の末裔である。昭和十一年旧制盛岡商業を卒業、満洲電業(株)に奉職。昭和十四年、同社派遣学生として旧制山口高商に入学。同年九月、山口高商「斯道会」を林正男氏、加藤敏治氏らとともに結成。この両氏も同じく同社からの派遣学生であつた。その後「日本学生協会」の「菅平全国学生合同合宿」、「武州御嶽合宿」に参加、全国の同信の友との広い精神交流に入つた。昭和十六年一月、同じく「日本学生協会」につらなる旧制山口高校「由道会」と「中国正大寮」を創設、宝辺正久氏、加藤敏治氏らとともに後輩の指導に當つた。昭和十六年十二月繰上げ卒業。

十七年二月盛岡北部第六二部隊に入隊。甲種幹部候補生から陸軍少尉に任官。十九年比島転属。

盟兵団迫撃砲小隊長として、ルソン島リンガエン湾アンムラ地区で米軍の上陸を迎撃、苦戦のため転進せんと単身敵情偵察中、下半身に艦砲射撃の直撃弾を受け戦死。上半身が残り、軍刀の柄を握りしめ、安らかな死顔であつたといふ。時に昭和二十年一月十八日午前十時。数へ年二十七歳。陸軍中尉。

彼は友情に厚く、後輩に対しても細かい心遣ひをし、他人を楽しませ喜ばすことを自らの喜びとした。寡黙であつたが、接してゐるだけでその人たちの心は安らいだ。彼は部隊にあつても決して部下を撲らなかつた。部下が寝静まつた後、一人起き出して、昼間できなかつた土木作業に黙々と取り組む姿を見たといふ。満洲時代も寮の便所掃除を行ふ等、人の嫌がること、辛いこと、苦しいことを進んで実行してゐた。これらの行動の根柢となつたものは、彼の内に湛へた深い宗教的情操であり、抱き続けた強い宗教的求道心であつた。「斯道会」入会後は、三井甲之先生、黒上正一郎先生の文章に信順して、祖国への帰依随順へと信仰を深化させ、終生変らぬ篤信の人であつた。

昭和十四年——二十一歳——

合宿にて

知らぬ間に思ひ上れる心かなあらぬ知識を得たりと思ひて

かへりみよただかへりみよ大君に仕ふるまことくもりなきかと（昭和一四・二一・四）

相共に渡りし友は北滿のハルハ河畔にねむれりと聞く

同窓の友北滿に戦死せり故郷に老いたる父を残して

亡き友の故郷の父いかがあらん手足しびるゝ病と聞くに

除隊期は近づきたりと告げ来る友の手紙を繰返しみつ

亡き友と共に登りし龍首山よ永久に留めよ友の御霊を（註 龍首山、滿洲鉄嶺にある山）

亡き友よがては行かむ我もまたはかなき生命大君に捧げて（昭和一四・二一・二）

昭和十五年——二十二歳——

博多湾にて

たたかひしつはもののもとも偲ばれて去りがたきかな博多浜辺は（昭和一五・一・八）

故郷の母より菓子送り来る

楽しいきは母の賜ひし小包をためつつすがめつひもとくとき

わが好むくさぐさの菓子を故郷の母はえらびて送り給ひぬ

母よりの送り来ませる包には餅もまじりぬ正月なれば（昭和一五・一・一四）

書翰から 昨日（六日） 斯道寮（註 斯道会、山口高商の同信会の寮）の者のみ六名全国の

同胞に想ひを通はせつゝ故黒上正一郎先生の御霊を御祭りしました。我々が今日生命ある生活をし、天皇陛下に仕へまつる感激に生きる事に目ざめしめられたのも、故黒上正一郎先生の御蔭である事を省みまする時、先生を日々に憶念する事が我々の精神の根本的原動力となる事を深く痛感させられたのであります。合宿の前日、先生の御霊を祭る事は既に合宿は成功であると確信するのであります。我々はかゝる自信をもつて今合宿に臨みつゝあります。（『たゝかひ』昭和一五・一〇）

語らひつ十二時過ぎぬわかれがたきまごころこめし友の言葉に

もろともに語りあひては涙ぐみ且つは笑ひき友の言葉に

友の迷ひとおのが迷ひと同じきと今知りにけりこの時にして

もろともにたすけかはしてすゝまんと誓ひし夜は心おどるも(昭和一五・一一・二五)

深夜の月

読む文につかれしまゝに外に出づれば大空高く月は冴えたり

天そゝる杉の枝高く月影の光さやかに夜は更け渡る

さえ渡る月影ふみてたゝずめばせゝらぎの音いよゝさやけし

天さかる南の国に君も又同じき月を眺めいますか

信州に集ひて語りしそのかみの君がみ姿うつしく偲ぶ

秋の夜も静けき夜半となりぬれば吾が父母はいねますらんか(『ますらを』昭和一五・二・二七)

昭和十六年 — 二十三歳 —

書翰から 前略 昨日、貴兄のお手紙戴き、今日、田所大兄(註 日本学生協合理事長田所

廣泰氏)の御手紙拝受、寮員一同勇躍してゐます。部分に踟躕し全体を見失ふとき戦ひは敗れると思ひます。田所大兄のことばに「僕らの苦しみが僕らの生命の性質であること、を、実、感、す、る、と、き、に、祖国の生命民族の運命をおもはずにゐられなくなりませう。民の運命が僕らの内心に於てうつりおし流れつゝあることを痛感せしめられます。ゆ、ら、ぐ、こ、ろ、と、は、か、く、の、如、き、も、の、で、せ、う、か、」と仰せられてゐるのを讀みまして、今まで小さな失敗の苦しみに閉ぢこめられ、固定化せんとしてゐた自分の心が全日本民族の上に同感としてくり展げられ、身の苦しみも消え失せて全く解脱せしめられる思ひがしました。友を思ふといふ事は日本を思ふ事であり、同胞の苦しみを思ふ事であり、我らの小さな生命に祖国の運命がのしかゝつてゐるのを実感せしめられました。独米の開戦によつて当然日米戦が開始されるべく、この危機の急迫に全く相反して学内の平穩は気がいら立つばかりに思はれ、運動のむつかしさを慨嘆するばかりです。併しいたづらな慨嘆は思想を粗雑にするものであり、御製拜誦の敲修と古典の研究に主力を注ぎ、着実な一歩一歩を前進せんとしてゐます。

〔たゝかひ〕昭和一六・五・三〇

友のたより

今日もまた友のみ便りとどきたりあたゝかきかな我らが住居は
学び舎やゆつかかれてかへれど友どちのみたより見れば力わき出づ
うつし世の乱れを見れば生命の反撥を感じてふ友のみことばよ

(目刊「日本太郎」昭和一六
・六・二四)

黒上先生のみうたをよみて

日かげさす学びやのまどにより立ちてよき師のみうたよみまつるかも
雲さりてたださす日かげあたゝかくとはのいのちの身にしむおぼゆ

昭和十八年——二十五歳——

元旦、天照皇大神を祀る朝鮮神宮に参拜

南山のみ空ゆしらみあらたまの年あけわたるおごそかなるかな
み空はれ四方の山々朝がすみひくゝたれこめ夜は明けわたる
参り路は白き衣をまとひたる高麗人もまじり人みちみてり
きざはしを半ばのぼりてかへりみれば「皇国民誓詞之柱」いかめしくそびゆ

こま人もしらぎの人も皇国のみ民と誓ひたてたるかこの柱
内鮮の差別も失せてあらたまの年をいのりて人々参りく（註 参りく、参り来）
銃並めて立つつはものゝらつばのね山々つたひなりひびくかな
天照す神のみ光あふぎつゝみ国のさかえひたにいのりぬ

このとき明治天皇御製を拝し奉る

新年

神風の伊勢の宮居の事をまづ今年も物の始にぞきく（明治三十七年）

あらたまの年の初めに天照す皇大神すめみかみををろがみたまふ

大神ををろがみたまふ明治天皇の神代ながらのみことば尊し

大君のみことかしこみ萬民心よろづたみ一つに仕へまつらむ

かへり路にかへりみすればみあらかは松の木の間ゆかがやきて見ゆ

（山口高商練上げ卒業後、帰社予定の満洲電業株式会社に、出征挨拶のため渡満する途中の作）

書翰から 最近の最大の歓びは中隊の兵全員に『進め斯の道』（註 日本学生協会行進曲）を教へ、共に大声で練兵場を叫び進軍した事であります。明日も亦唱ひ元氣を出さむと心楽しく思はれてなりません。（昭和一八・七・二）

書翰から 諸君等の、入營を目前に控へ死を決して合宿してゐる有様、心情を、今現実を感じられます。「生死を分たず」といはるゝ強き言葉が想起せしめられる事と思ひます。親鸞によれば、死こそ生の全き進行と仰せられて居ります。実に不倦怠無畏怖意志を振起せしめられる言葉です。生を現実化せしめんと戦ひ居る諸兄よ、信疑を決すべし。死を決せよ。そは生の全き進行である。最後まで、此の世に一語にても多き生ある言葉を遺し給へ。（昭和一八・七・二）

書翰から 山口の正大寮の二階の一室は永劫に忘れられぬ記念の生活なれば、之を相統せむとする諸兄に限りなき懐しさを感ずる。諸兄の活躍を思ふ時に、たくまじき闘魂と会心の笑がわき上るのを禁じ得ない。（昭和一八・九・一八、〇〇部隊）

書翰から 加藤先輩が時々訪れる由よく教へを受けて精進されむことを祈ります。
やつぱり黒上先生のみ教へが基礎となると思ひます。よく先生の御文を拝し本当の意味
の同信生活を体験される様、諸兄の健闘を祈ります。〔神洲不滅〕第三卷第二号 昭和一八・一〇・五

十四、寺尾尚之



寺尾尚之

大正十二年五月七日、父市松、母ナミの次男として京都市に生れる。昭和十六年四月、早稲田第二高等学院に入学。縁あつて「早大精神科学研究会」、「同高等学院同信会」の会員となり、同十七年「日本学生協会」主催の「滋賀県西教寺全国合同合宿」に参加、同年十月早稲田大学商学部に進学、同大「精神科学研究会」会員として引続き活躍した。彼は寺尾博之氏（本書前編『いのちささげて』に収録）の実弟である。寡黙よく人の話を静かに聴いてゐた。その母を思ひ、兄を思ふ情きはめて厚いものがあつた。

昭和十八年十二月、兄と踵を接して学徒動員となり、陸軍航空隊を志願。昭和二十年三月二十九日午前零時すぎ、沖縄海面の敵艦艇群に突入して戦死。時に数へ年二十三歳。陸軍見習士官。

昭和十六年——十九歳——

上京して

進むべき道を求めて只一人母を残して都にぞ来ぬ

皇居遙拝

今日も又大君の為つかへんと東を拝みちかひまつりぬ

折にふれて

心中に神を念じつゝいただけば如何なる食も有難かりけり

朝夕に故郷の母を思ひ出でゆるむ心にむちうち進まん

秋の夜に井戸の水くむ音聞けば故郷の母ぞ思はれにける

身はたとひ名も無き民と終るとも君の御楯となるぞ嬉しき

大君に限りある身をさゝぐるがみ民我等の進み行くみち(日刊『日本太郎』昭和一六・九・一七)

北白川宮殿下を偲びまつるラヂオ放送を聞きて

朔北の蒙疆の地に宮君が神さりましゝゆ一年過ぎぬ

宮殿下神さりましゝゆ御民らは無為に過しぬこの一年を
蒙疆に神さりましゝ宮君は尚留りて御国守らさむ

大君の御楯となりて御生命みいのちを御民とともにさゝげ給ひき

九重このへの尊き御身もて宮君は事変の意義を示し給ひき

靖国の神とならしゝ宮君を偲びまつれば涙あふるゝ

我国は亡びずといふ確信を守りとほさむ生命死ぬまで

大君のまけのまにまに御民らは悲しき生命さゝげ仕へん

乱れゆく世を救はずば唐国に散りし御霊に何と答へん（日刊『日本太郎』昭和一六・一〇・二二）

十五、吉野圭一



吉野圭一

大正十年一月二十九日、台湾台北市に生れる。

昭和十三年、旧制台北高商に入学、入学早々の校内弁論大会で一年生の代表としてヒューマニズムの欠陥を鋭く指摘して校内を驚かせた。翌年、松浦秀宏氏（本書収録）の勧めにより、中西旭、山鹿光世両教授の指導する「神随会」に同級生十数名とともに入会、やがて同会の幹事として活躍し、

後に「全校生合宿」実現の基礎を確立した。「東大文化科学研究会」（日本学生協会の前身）の機関誌『学生生活』に投稿したのは、この頃である。彼はテニス部にも属し、三年生の時は主将であつたが、主将としてその重責を果しながら、「神随会」幹事としての任務をも遂行した。

昭和十六年三月同校卒業、東京芝浦電気に入社し、東京井の頭の「正大寮」（日本学生協会学生会寮）

に入寮した。勤務先は、鶴見から川崎に変わったものの吉祥寺からの通勤のため五時頃起床し出勤、夜遅く帰寮といふ日々が続いたが、強靱な意志力と運動で鍛へた体力で、これに耐へた。その間、早朝薄暗い裸電球の下で、木刀の素振りを怠らなかつた。一方、激務の中にあつて武州御嶽での合宿への参加、台湾の「神随会」会誌への投稿、後輩会員への通信を継続し、同信相統に努めた。

昭和十七年二月、熊本師団の工兵聯隊に入営し、間もなく満洲に転じ、北支を経て南方に転戦。昭和二十年四月二日、南西ニューギニアに於て戦病死。時に数へ年二十五歳。最後の詳報は御遺族にも達してゐない。

昭和十六年～十七年——二十一歳～二十二歳——

父母を思ふ

いねがてに物思ひ居れば雨だれのしたゝるなかに虫すだくなり
こほろぎのすだくをきけばしくしくにふるさとの家しのぼるゝかな
お召まつ汝なれにあしければいたはりて健すくやかなれと云ひし母はも
老いましていやはげみますたらちねのみおやの姿はかしこきろかも
はらからが心つくして父母につかふる姿しぬびてやまずも
父母よをさなきどちよさきくあれといのりて居れば涙ながるゝ

(註) をさなきどち、幼き童、ここでは弟妹を指す) (日刊『日本太郎』昭和一六・一一・一一)

徴兵検査の爲故郷に帰りて

「甲種合格」と宣する司令官の顔あふぎ胸のとどろきおさへかねつも
かゝる日にあふまで我をはぐくみし我がたらちねは尊かりけり
大君にさゝげんなが身すこやかにそだてといのりしちゝはゝをおもふ

今よりはお召まつ身となりたれどひたすらみがかん我と我が身を（昭和一七・六・二六）

昭和十八年——二十三歳——

年のはじめに

あらたまの 年の初を ことほぎて つはものどもが つるぎ佩き 銃^つとりもちて
ひむがしの 方はるかにも 大宮を をろがみまつると 並び立ち 捧ぐる銃^つ剣^{けん}に き
らめきて 出づる初日の あかくきよき こゝろにいのる ねぎごとは 行手にまてる
さやりはも こそし高嶺 凍る河 さはにありとも よしゑやし 弾は盡くとも よし
ゑやし 飯^{いひ}はなくとも 一筋の 道ふみすゝみ かへりみず いゆき守らひ 戦ひて醜
の仇ども うち碎き 仇の弾 身にもうけなば 今生の この世の名ごり かしこしや

わが大君の 萬歳よろこびを いはひまつりて いのちすぎなむ いのちはも すぐとも みい
くさに つかへまつりて みにまもらむ かくとぞいのる 大宮ををろがみまつりて

(註 ねぎごと 願ひごと。よしあやし まよよ、たとひ) (月刊『新指導者』昭和一八・六・中支)

アツツ島の悲報をきよて

傷兵は自決しつはものごとく敵を襲ひて散りはてたまひぬ

荒浪の寄する小島に日の御旗死して守ると散りたまひけり

天がけるみ魂しぬびていねがてにひたいのりつゝ一夜明かしぬ

ますらをが傷つき倒れ息絶えむ今はの思ひしぬびかねつも

ますらをがかなしき願ひ偲びをればあふるゝ涙とどめかねつる

えびすらの弾にたふれしつはものが叫びし言を忘れてもへや

我も亦北の守りとちはやぶる神のまにまにいでこしものを(註 ちはやぶる、神の枕詞)

事しあらば我こそ征かめみおやらが悲しきみたましづまる野べを

銃並ついなめていざ砕きてむまつろはぬ奴やつこことごといざ砕きてむ(月刊『思想界』昭和一八・八)

十六、宮下宗夫



宮下宗夫

大正十二年長野県下伊那郡に生れる。昭和十六年四月、早稲田第二高等学院に入学。在学中縁あつて「早大精神科学研究会」、同学院の「同信会」会員となり、同十七年、滋賀県西教寺での日本学生協会主催の「全国学生大合宿」に参加。同年十月早稲田大学政経学部に入學、引続き同大「精神科学研究会」で活躍した。彼は強い近視の眼鏡をかけてゐたが、その眼鏡ごしにやさしい眼差をむけ、一語一語噛みしめるやうに語る謙虚な人柄であつた。内には終始地熱の如き情熱をひめ、至誠終始変るところがなかつた。昭和十八年十二月、学徒出陣。陸軍船舶工兵聯隊に所属し各地を転戦、昭和二十年四月九日、中国大陸の山東半島東方洋上に於て戦死。時に数へ年二十三歳、陸軍少尉。

昭和十七年——二十歳——

高木先生を御送りして（註 高木尚一氏）

ふり返りふり返り行きますみ姿を見送りまつるに胸のせまり来
はらからと師を見送るに秋空に高くかゝりし月のさやけき

松陰先生のみ霊の前に誓ひまつりて

はらからのみこゑはりあげ告げ給ふのりとをきけば身ぬちたぎるも
いたらざる我が身なれどもこの身をば捨つるより他に道なき今の世

大君のみこと仰がぬ国民の罪かさなりて今に至るか

なりゆきにまかせ行かむと公言する教師の多き我が母校はも
意志もなく盲者の如く過しこし学舎を如何によみがへらせむ

生命を動かす者は生命と西欧の学者だに言ひしものなるを

如何にせむ力もあらずすべもなく神のみまへにただ祈るなり

失題

高き名をあげよと文に寄せ給ふ父の切なる御心悲し

たらちねの我が身をおぼす御心は身ぬちさくとも我忘れめや

さはあれど功なり名とげよとたらちねの我が身をおぼす夢やめ給へ

まことなる悲しき願ひまことなる父子の間になど通ぜざる

十七、辻本幸一



一 幸 本 辻

大正十一年十月九日、熊本県天草郡に生れる。

昭和十年四月、旧制天草中学校に入学。十六年四

月、熊本市の東洋語学専門学校露語科（現在の熊

本商科大学の前身）に入学。翌十七年中学の同窓生

を通じて「日本学生協会」の道統につながり、熊

本高工、熊本薬専、熊本医専の信友とともに、真

剣な思想研修の生活に入った。九州（熊本のほか佐

賀高校、長崎高商、宮崎高農）、山口（山口高校、山口高商）の同志とともに、九州各地において行はれた合宿に常に率先参加した。

昭和十八年十二月、佐世保海兵団に入団。愛知県の第二河和海軍航空隊での教育終了後、比島マニラに転属。二十年四月二十四日、フィリピンにおいて戦死。時に数へ年二十四歳。海軍中尉。

昭和十七年～十九年 — 二十一歳～二十三歳 —

山口多聞、加来止男両提督戦死の報を聞き

波吼ゆる東太平洋のわたなかに敵をもとめて御艦は進みぬ（註 わたなか、海上）
○隻の航母よりなる敵見ゆと索敵機より無線来りつ

見敵の無線をうけてほゝゑめる君の心の偲ばるゝかな

またたくまに敵艦空母甲巡を海中深くはふむりさりつ

あゝされど巨弾をいだける百の敵機は我に群がりおそひ来りつ

群がれる敵機のもとに数十時間飯はむまなく戦ひつづけぬ

されどあゝ敵機のはなてる弾丸は我が甲板に命中したり

兵員の防火もかひなく艦ははや燃ゆるほのほにつゝまれにけり

もえくるふ火中ほなかに立ちて二人して月をながめてほゝゑみしといふ

将兵を駆逐艦に移し自らは艦にのこりし君の心よ

玉の緒の命のまさにたえんとき七生報国ちかひし君はも

みいくさのさきがけなさんと歌ひあげ雄叫びなしてゆきし君はも

和多山儀平兄へ（註 本書前編『いのちささげて』に集録）

不知火の海をへだてゝ白煙のぼれる方をはるかながめぬ

（註 不知火、しらぬひ、筑紫の枕詞、ここでは有明海を指す）

白煙上れる方は我が恋ふる君いますらんとあかずながめぬ

（註 います、坐す、居るの尊敬語）（昭和一八・八）

阿蘇登山

あらがねの地のそこひゆふきあぐる煙くしけき大阿蘇の山（註 そこひ、底）

白雪にとざされつゝも火のもゆる阿蘇の高嶺の力し思ほゆ（昭和一八・二一・二三）

村人に送られて出征

白波のよする浜辺に村人の萬歳の声今も聞ゆる

村人のあまたことほぎ送れるに何をもちてか我はこたへん

身はたとひわたつみ深く沈むとも鬼ともなりてみ旗まもらむ（註 わたつみ、海）

（昭和一八・二二・八）

海軍入隊に当りて

来し方を顧みすれば良き友を数多^{あまた}得たるは嬉しかりけり

大君の詔^{みこと}かしこみえみし等を討ちてしやまむいのち死すとも（昭和一八・二二）

ふるさとに帰る日近し

母父のまちこひいままさんふるさとに帰る日近くなりけるかも

ふるさとに帰る時

たらちねのみ親のいますふるさとに帰る舟路の長くもあるかな

たらちねのみ親のみもとに不知火の海原渡り今帰りゆく

ふるさとにて

たまもかる海辺の里の白波の磯うつ音は聞けどあかぬかも

（註 たまもかる、玉藻刈る、「海」の枕詞）

友偲^{まさごと}び真砂路^{まご}ゆけどよる波の音のみ聞え会ふ人もなし

春の野

あづさゆみ春の麦生^{むぎふ}の朝風にひばりの聲もすみて聞ゆる

夢さめし寝さめの床にひばりなく音のきこゆる春來るらし

行軍の折米重兄（註 本書前編『いのちささげて』収録）の故郷をよぎりて

日の本の防人なれば心なくすぎ行くかもよ君のみ故郷を

いまだ見ぬ君の兄弟しぬばれて会ひたしともへどすべなし我は

君が家はこゝとし聞くもすべをなみすぎゆくかもよ君しぬびつゝ

（註 すべをなみ、術が無いので）（昭和一九・三）

夕 立

大空をふりさけ見れば雲黒く夕立つ風に木の葉さやぎぬ
東に雨雲いでて雷のとどろ／＼になり渡るなり

米重兄のみたまの前に

しこ草を七度生きてはらはむと男叫び征きし君の偲ばる

やつかひげ胸先立てて笑ひます君のおもわの眼先さらず

（註 やつかひげ、八束髯、長くて立派なあごひげ）

我等皆君のみたまをしたひつゝ戦ひ征かむ命のかぎり

戦ひて戦ひたふるゝ道のみが君のみたまにこたふる道か

肥後路ひごちなるいちよの町の下宿屋で共にあかしゝあの日思ほゆ

新兵時代

五十に近き隊長を先頭に広き練兵場をひたに駆けにき

今年こそは我が大君の旗のもと笑ひて我は死にてむものを

(昭和一九・一 佐世保第二海兵团)

佐世保より

大君のみことかしこみ父母に古里遠く別れ来にけり

敷島の大和の国の海原にひさきもりの新防人と我はなりにき (『まほろば』第三号 昭和一九・三)

十八、松^{まつ}井^み英^{ひで}也^や



松井英也

郎氏以下の弁士が戦勝を謳歌し、戦意を昂揚しようとするものであつた——たまたま横断幕に「前線は生命奉還、銃後は財産奉還」のスローガンが掲げられてゐるのを見て、講演会終了後主催者のところへでかけ、「財産奉還の語は変形したマルキシズムではないか、右翼団体のイデオロギーは左翼勢力によつて染めあげられつゝあることに気づいてほしい」と舌鋒鋭く詰めよるなど、身を挺

大正十一年出生。朝鮮の釜山中学校を経て、昭和十六年旧制山口高等学校文科乙類に入学。九月、「中国正大寮」に入寮し、以後各地の同信諸友と交流しながら学風改革に挺身。当時流行の「西田弁証法」は、彼が批判攻撃してやまなかつた対象であつた。昭和十七年春、山口公会堂で大日本赤誠会の講演会が行はれた折——それは、橋本欣五

して正しき道の擁護に奮迅した。彼はまた、柔道が強く、喧嘩も強かつた。

昭和十八年、東京帝国大学文学部倫理学科に入学。十九年、学徒動員によつて浜田聯隊に入隊。浜松航空隊を経て、フィリピン派遣軍第二十二航空通信隊に属したが、米軍の攻撃熾烈となるや、小部隊に分散するの余儀なきに至り、昭和二十年六月十日、勇戦奮斗遂にクラークに於て戦死。時に数へ年二十四歳。陸軍軍曹。

昭和十六年～十七年 — 二十歳～二十一歳 —

慰霊祭の夜

亡き師をば偲びて集ふこよひはも虫の声さへ悲しかりけり

幽明をへだつと言へど言の葉の調べはなどか通はざらめや

(日刊『日本太郎』昭和一六
・一〇・一四)

友よ、いざ共に蹶起せむ

全国に別れ鬨つて居る友等の上に思ひをはせつゝ、私は此のペンを走らせて居る。

三年生を送り出し、或は送り出さむとして居る今、運動は全く我等一・二年に委ねられたのである。運動全体の興敗が全く我等の双肩にかゝつて来たのである。今迄兎角三年生諸兄にもたれ勝ちであり且亦受動的であつた我等は、斯くも大きな責務を背負つてハタと当惑してしまつた。恐るべき停滞、沈滞が隙を窺ひ始めたのだ。このまゝであれば其処には自滅以外の何物も存しない。此の停顿の状態が若し全国同志の傾向となつたらどうであらう。茨の道を血のにじむ様な努力を以て拓開して来た先輩諸兄の成果は空

しく瓦解し、激しい思想の戦ひの中に遂に傷き、また倒れし先輩僚友の犠牲は忽ちに
して水泡に帰せざるを得ぬのである。そののみか祖国日本の将来は將に暗澹たるもの
のである。

考ふるだになんと悲しくも怖るべき予感ではないか。

友よ！ 我等の責務は実に重い。今や我々はより強烈なる決意と血盟を以て蹶起せね
ばならない！ 機は既に到来して居る。

我々は常に全体の動向を敏感に洞察せねばならぬ。友よ、連絡を密にしよう。さうし
て今直ちに全国的精神交流の大世界を現出せむ——そは我等の苦闘の客証なるが故に。
友よ、友等よ、共に心をつなぎ、全生命全情意を傾倒して、敢然と戦ひ行かうではな
いか。最後に再び「停滞は死滅」なる事を——

徳重兄に

〔神州不滅〕昭和一七・一・一七 中国正大寮は三年卒業後、松吉正資、松井
英也氏を中心となり、その後山口高商名越二荒之助、細田勳次氏等が相繼いだ

淋しさに夜もいねがてにと書きたまひし君がかなしき心をぞ偲ぶ
共にをればともに泣かむを君ひとり置きてきぬれば居たゝまれずも

荒波のよする渚なみさに君恋ひて君がみ名よぶ荒海に向ひて
〔神洲不滅〕第二巻第四号 昭和一七・四

加藤兄を山口駅に見送る

暫くの別れををしみ語り合ふ汽車の出る間のその一刻ときよ

別れをば惜しむいとまもあらなくて出発のベル早なりひびく（註 あらなく、あらず）

我が顔をまばたきもせで見つめたまふ君が瞳のかなしきろかも

声を限り『進めこの道』歌ひつゝ涙ながらに君を見送る

ゆるやかに出で行く汽車のタラップに立ちて手をふる君がみ姿

汽車の後追ひかけながら学帽をちぎれとばかりうちふるふかも

くら闇に小さくなりゆく汽車の灯の消えゆくまでも帽子うちふる

〔神洲不滅〕号外 昭和
一七・四

親鸞に就いて（論文・抄）

「親鸞にをきては、ただ念仏して、彌陀にたすけられまゐらすべしと、よきひとのおはせをかうぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり、念仏はまことに浄土にむまるゝた

ねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり。たとへ法然上人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ」(歎異抄)

「よきひと」の言葉に我等は親鸞の法然に対する全一的帰命を感知するのである。法然と一緒ならば、たとひそれが地獄の底であらうとも行かうと言ふ親鸞の燃えあがる様な熱情に、我等は彼の全一的生命のひたぶるな帰命心を感じずる。

此処に親鸞の心は永遠の真実に目覚めたのである。我等の魂の深奥に内在せる信はかく共感の世界にこそ目覚めしめらるゝのである。この時内心に味ははるゝ信樂しんぎょうこそ解脱の歡喜にあらずしてなんであらうか。「不断煩惱得涅槃」とはかゝる心理的転機に味ははるゝ全情意的統一を云ふのではなからうか。苦惱をたへしのぶところに求道への道がある。然し苦惱を個我的天地に閉塞せしむる時には、我等の生命は遂に死滅せざるを得ないのである。我を忘れ、身を現実動亂の人生に投ずる時にこそ、苦惱は自ら転じて歡喜の光明となるのである。

『『おのづから』といふは、自然じねんといふ。自然といふは、しからしむといふ。』しからしむ』

といふは、行者はじめてともかくもはからざるに、過去、今生、未来の一切のつみを善に転じかへなすといふなり。『転ず』といふは、つみをけしうしなはずして、善になすなり」(唯信鈔文意)

苦惱は断たうとしても断ちきれぬものではない。この断ち切られざると云ふ痛感、どうにもならぬといふセツパつまつた気持、自力の杖の投げすてられた時、此処に湧き来る不可思議の生命力こそ極促の一念である。「彌陀仏は自然のやうをしらせんれうなり」とはかかる転機を云ふのではなからうか。我を忘れる滅の世界に、個体有限生命は生々無息の真実永久生命に通ひ、極促の一念に永久のいのちに触れるのである。

シラーが奇しくもかく歌つて居る。

「まことの友を友とし得たる

運命に恵まるゝ者よ、

やさしき女性を得たる者よ、

歓呼の声を共にせよ!

げに——この世にて、それを外にして

誰か一つの魂を己がものと呼び得るや！

そを得ざりし者あらば

嘆きつゝこの団結より去り行かざらめや！

世界の大環を住家とする者は

心の共感に奉仕せよ！

それこそは、神の君臨せる

星の世界に道しるべする。」（歡喜に寄する）

魂と魂の相触るゝ世界、この世界にこそ我等は永遠を実感する。かゝる魂と魂の遭遇の中に展開される不可思議の世界に我等は宿縁を痛感する。

遭遇の機縁、それは確かに偶然であらう。然し偶然ではわりきれぬ何物かがある。魂と魂のふれ合ふ瞬間の慶嘆、「いまあふことを得たり」の「いま」の痛感、それはこの遭遇の偶然性を宿縁感へと導いて来るのである。いまはなり来つたものであり、またなりつゝあるものである。それ故に「いま」の時の究盡は全歴史的開展を我々の内心に味識せしめるのである。この遭遇の「いま」の痛嘆は更にこの宿縁感を歴史的問題へと具体

化するのである。(昭和一七年)

昭和十八年～十九年——二十二歳～二十三歳——

雲低くたれしと思ふつかの間に俄かに雨のはげしくなりぬ

遠山も見えずなりにき天地をとよもしながら雨ふりそゝぐ

降れよ降れよ降りてこの世のちりあくたあますかたなく流してしがな

はげしき雨にかりの宿さへ追はれしかちり乱れつゝ群雀とぶ〔神洲不滅〕第二卷第六号 昭和一八

七の
横野川にて

くろみゆく川面かはもに水泡立つ見えて夕風寒く野を渡るかな

山の背を吹きあぐる風の高鳴りに仰げば春の月輝けり〔橋蕨集〕昭和一八

昭和十八年十月十日 要は最善をつくしてやる事だ。やるだけやつた。さう思ふ時に心の安らぎがある。そして何等かの形で、君達の生の記念をこの地上に残したまへ。大きくおほらかに生き給へ。小さい事にくよくよするな。わからん事はわからん。唯僕達

の道が戦死の道なる事だけはわかる。

十月十三日 二十七日午後一時より高商武道場で身体検査がとり行はれる事となつた。宝辺(註 宝辺正久氏)は卅日、その前後に松吉(註 松吉正資氏)も集る。皆で膝をつきあはし、永遠の道のことについて語り合へるだらう。宗教も芸術も学問も人生を外にしてはない。人生の中に生れ、人生の為に生れ、人生をつゝむものとしてのみある事をこの頃つくづくと思はしめらる。人生とは外的区別によつて規定さるべくもない。男の人生と女の人生、軍人の人生と学者の人生とがちがふものだとしたらどうだらう。「老若男女」を選ばずと親鸞も云つた。この自明の理は決して徒あたおろそかにすべきではない。人間生活の開展はつねに不平等である。そこには尊卑貧富の差別が厳存する。然しこれはあくまで仮の区画であり、人生の区画ではない。人生とは普遍であり絶対である。校門を出て銃をとるのも、其処に外的区画は存するが、その人生はあくまで一つである。僕等が念ずるのは人生の信であり、人生の道なのだ。「戦の庭に立つもたゞぬも」と御歌よましゝ大御心をいま有難く頂きまつるのである。友よ、強く、胸に、この事実を思ひ玉へ。

十九、寺^{てら}村^{むら}義^{よし}季^{すゑ}



寺村義季

大正十年、熊本県阿蘇郡に生れる。熊本県立中学済々黌を経て、昭和十六年九月、熊本薬学専門学校に進む。十七年同級生藤好淳之輔氏とともに「日本学生協会」に連なる。「熊本同信会」に所属し、同会主催の「九州・中国地方学生合同合宿」に参加、また同年十二月、八代市日奈久町で行はれた「九州・四国・中国地方学生合同合宿」にも

率先参加した。

十八年十月一日、陸軍特別操縦幹部候補生として仙台陸軍飛行学校に入隊。千葉県横芝、比島りの飛行場で教育を受け、二十年四月、栃木県壬生飛行場において対潜警戒の任務についた。二十一年七月六日夜、新潟県境の山林に墜落戦死。時に数へ年二十五歳。陸軍中尉。

昭和十八年——二十三歳——

和多山儀平宛（註 当時熊本高等工業在学、本書前編『いのちささげて』に収録）

相見ざりし君にはあれど亡き姉を偲びたまふみうたのありがたきかな

君のうた夜ふけし室にただ一人よまんとすれど涙止らず

かくばかり姉をしたひて泣き叫び我が行く姿のあはれなるかな

天地の神に生命を託さずば此の悲しみはとけぬとぞ思ふ

君のたよりをもらひ、人生の悲しみにひたつて居た自分が情なく恥づかしい想ひがしました。然しこんな小さい悲しみまでも憶つて呉れる友が居るとは何たる幸福ぞと今一杯である。（昭和一八・六・三〇）

書翰から 吾々が本当に、しきしまの道を実行して行く時、吾々の生命は永久に死滅せぬことを確信するものである。

親に甘えることが親孝行になるらしいとも近頃は考へる。(昭和一八・八・六)

おろかなる我が身にさへも友しらは温かきむちを与へ給ふか

友よと云ひてうたやりし友のみ心のこもりしたよりに涙湧き来も

おろかなる我が身なれども共々に御国の礎石たらんとぞ希ふ(昭和一八・八・七)

クラス・アルバムに記した別れの言葉

碩よ！(註 友人の名) 俺は敢へて斯く云ひたい。それが一番主(註 熊本弁、君、貴様)

もよろこぶんだらうし、又俺もうれしいからだ。碩との交友は単に 25 / 23 (註 いままでも割切れないの意か) の一エポックに止まるもの……そんな簡単なもんじゃないんだな。然^さらだらう。

サウダ、サウダと碩が声を大にして賛同することを確信する。

想へば碩と濟々鬻(註 熊本県立中学)時代の交渉はなかつたな。だが共にどこかで濟々

費の雰囲気はひたり又濟々費氣質、濟々費魂（註 同校からは軍人に成る者が多い）はちゃんと培はれて来た。

やがて俺はコペルニクス的大転換により薬専（註 熊本薬学専門学校）に入つて来た。入學式の日だった。上通の甲玉堂で私服の碩に会つたのは、その時碩は何と云つた。「こぎやん、ノート買ひぐりやいるか（註 こんなに沢山、ノートを買ふ必要があるのか）」と。俺はむつとした。其所に永遠の契がむすばれんとは、それは実に宿命的な生命の永遠なるを感ぜしめられた一瞬であつた。俺は直感的に「此の男」と内的に覚醒せしめられた。

それから薬専の生活は「碩にあって碩に暮れ」と、悪^わの文句じやないけれど、幾度往復せし明午橋（註 学生街の入口の橋）かな。

三年になつた。メ（註 隠語で「女の子」）あらはる。そこでも又碩は利害をこえた歓待を受けた。俺も勿論である。案外その小娘に愛を感じたのかも知れぬ。それはほんとうにうれしいことだ。そして又美しいことでさへある。

然し此等は皆、学校以外のことである。校内に於いては一として吾々の憤怒を買はざるものはなかつた。無節操な教授、陰險な教授が生徒の生命を抹殺し、何もかも自己の

範疇に入れ、それを以て教育と云ふ。それが機械的な人間を養成するのは必然である。自己に阿諛するものは善良な生徒と云ひ、吾をなじり吾を攻撃する生徒を不真面目と云ひ、師弟道の本質何所にありや。そのグループが藤好を加へた濟々覺なりと云ふ。碩がにらまれたのは服装、態度以外に此の如きものがあつたためである。吾々は幾度校長の思想を問ひしぞ。それをめぐる教授の顔ぶれを見よ。××あり、××あり、××あり。然し碩よ。俺達はもはや新しい天地に向つて羽撃はばたかねばならぬ。

過去はもう忘るべきだ。問題は現在だ。俺達にはもう耳もとできこえさうな銃声が待つてゐる。俺達の血は燃える。大いなる生に向つて飛躍しようぢやないか。豚子が、ドンプリが、万十が、碩さんしつかりと叫ぶ。房が頑張つてくださいと云ふ。

みんな美しい想ひ出だ。再会の日が来た時、二人で又廻らう。俺達二人には默契がある。我等ますらをなれば顔には見せじ、口には出さじ。では左に歌をかかげて擱筆せん。ますらをの悲しきのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を（註 三井甲之作）

心友 碩におくる。

昭和十八年九月卒業に際して

寺村義季

二十、高木三郎



高木三郎

大正十一年十月六日、父尚右、母つねの三男として東京に生れる。成城中学校を経て、早稲田大学政経学部に入學。高木尚一氏の令弟。

「日本学生協会」につらなる「早稲田大学精神科学研究會」を大庭匡氏らと共に結成、都内の下宿の一室を借りて「寮」となし、思想活動を行つた。

重隊（自動車隊）に入隊。昭和二十年八月十九日、腸チフスのため世田谷陸軍病院に於て戦病死。時に数へ年二十四歳。陸軍軍曹。彼の歌や文章は、ほとんど戦災で失はれ、残つたものは少いが、自宅の仏壇の傍に掲げられた「大君のみこと畏みひた進む男の子の願ひよろづよまでに」の一首は、一すぢの志を示してあまりあるものがある。

昭和十六年～十七年——二十歳～二十一歳——

風

窓鳴らす音をし聞けば吹く風の強き思ほゆ日暮れ近きに
久方のみ空仰げば黒々と雲ひろごりてうづまく如し

靈 戦

此の日頃なき友の姿夢の間にあらはれ出づと友は告げたり
久方の空吹く風にも国守る友等のをたけび聞く思ひして
時の間に散り行く桜とゆきましゝ友等のみ霊も我等と共に
天がける友等のみ霊よ比叡ひえが嶺ねに集ふ我等をみちびき給へ（日刊『日本太郎』昭和一六・七・一一）

桑原大兄を送りて（註 桑原暁一氏）

手をふりてはまたうたひつゝ遠ざかる君のみ姿ともに見入るも
時々立ちどまりつゝ答へたまふ真白きみ姿とほぞきゆきぬ（日刊『日本太郎』昭和一六・八・三〇）

合宿の地にて

友と共に縁に並びてさやかなる月を仰げばたのしかりけり

一語々々のちをこむるみ友らのその言の葉の雄々しくあるかな

まことなる生を貫く苦しさを現しく感じぬ語り合ひつゝ

朝日さす山の上に立ちて大御歌唱へまつりぬひらかるゝ思ひに

月

浮雲のうつり行く空に月影の光さやけくみちわたりたり

はろばろと波影なくて浮く雲を照して月はみ空すべたり

はろかなる田畠しらしら見えわたり秋の月照れりすがし思ひよ

時の間にうつり行く雲にかくるゝと見るやあたりは小暗くなれり

道の辺に生ふる小草に虫の音のいや高まりぬ何の虫かも

一人の友より真心溢るゝ返事を戴きて詠める

日の本の男子のねがひうつしよに共に分つはうれしくあるかな

此のよろこび友に告げむと病みこやす君はみ文を我にたまひぬ

迷ひつゝ苦しみ来ましゝ友どちの苦痛の叫びに心うたれぬ
共々にしのびあひつゝうつし世につきぬ力を得つゝゆかなむ
くりかへしみ文しよめば心知る友得しよるこび胸内湧き来も

近頃の思ひ

大君のみことをろがみみ民等の進み行く道いやかたきかな
一つ家に友と集ひて大御歌となへまつりて行かむとせしに
身はたとひさかり居るとも国守る心に生きん雄建寮は（註 早大精神科学研究会の寮）
いかならむさやりありともきりそけて進まむ道ぞ我等の道は

道

これこそはまことのみちとのたまひし大すめろぎのみことばかしこし

宣戦の大詔を拝しまつりて

国民の心一つにすばまして大詔おほみことのり下し給ひぬ

すめらみこと我が大君の神ながらのらし給ひし大御言はも

常夜とこよ行く思ひに生くるみ民等は天つ日仰ぐ思ひのありき

道^{ちはやぶら}早振神のみいつをえみしらに仰がしめなむ民われらは
み国乱すしれ者今ぞすめろぎの大御言葉のまにまうつべし

勝ちいくさ神のみ前に大君の祈り給ひし事のかしこさ

神まつる昔の手ぶりをさめつゝ行くこの道のおほろかならず

いかならむさやりありとももるともにみことのまにま戦ひ行かん

(月刊『新指導者』昭和
一七・二)

青空

かきくらし曇れるみ空うち晴れてすがし青空見えそめにけり

青空につらなり見ゆる白雲をふきはらふらむかしき吹く風は(註 しき、頻りに)

並み立てる銀杏の木々をゆるがせて風吹くなべに木の葉散る見ゆ(註 なべ、につれて)

み病ひに臥^{こや}せる友等こもり居の心ひらけむ此の青空に

をちこちにしき鳴く雀のもろ声にあはせて我も歌うたはなむ

藤原邦夫遺稿集『靈戦』をよみて

み民らのかなしき願ひうつしよに残せるみ文よみまつるかな

次々に君の御言葉よみ行けば共に語らふ心地するかな

嵐吹く世にも動かず高らかに歌ひ上げつゝ君は進みぬ

友思ひ休らふ間なく戦ひし君のいのちのはげしさしぬばゆ

苦しとふ御言葉もらさず乱れ行くみ国ひた思ひ倒れましゝか

これのみ文にこもる命の雄叫びは永久に朽ちせじ大和島根に

これのみ文くりかへし読み君しぬび身内ふるひて戦ひ行かむ

〔『樗の木集』昭和一七・四〕

二十一、平塚

新



平塚新

大正十一年、東京に生れる。父君は版画家として名高い平塚運一氏である。昭和十四年、東京府立九中の四年修了とともに旧制松江高校文科乙類に入学。一年生の三学期に、「日本学生協会」巡訪隊（西日本班）と接触を持ち、祖国防護と學術改革を目ざす思想生活に入った。昭和十五年夏「学徒報国隊」の一員として見学と奉仕活動のため支那に渡る。その後、級友松尾陽吉氏、川井修治氏らとともに「日本学生協会」に連なる「松高同信会」を結成、主要メンバーとして活躍した。天性の明朗な性格と無類の人なつこさの持主で、「同信会」の同僚後輩はもとより、一般の級友の間でも等しく敬愛された。

「学徒報国隊」体制の施行に伴ひ、すべての学内サークルはこの体制に一元化されることになつて、

学外との繋りを持つ「同信会」は生徒主事から解散を強要された。彼は同志と共に学校当局に、思想文化の会は「学徒報国隊」のやうな画一的な系列の中に同化解消できぬ旨の衷情を訴えて、存続を歎願したがつひに容れられず、解散を余儀なくされてしまった。しかし、祖国への信に生きようとする同信の繋りは絶えることなく、この苦斗のさ中にも、彼は「関西学生合宿」(神戸)に参加するなど、一貫して変ることがなかつた。昭和十七年三月、松高卒業後、九州帝国大学経済学部に入學、福岡の地で九大の同志達と同信生活を継続した。

昭和十八年十二月、学徒出陣により、浜田歩兵聯隊に入隊したが、不幸肺結核に冒され、小串陸軍療養所に於て長期療養生活を送る。終戦後、郷里松江に復員したが、病状悪化し、昭和二十一年初頭病歿した。時に数へ年二十五歳。

昭和十五年（十七年）—十九歳—二十一歳—

合宿記録から 忠の内容は具体的であるから、忠を尽す為には自己修養法が絶対に忠に即した方法でなければならぬ。即ち全体没我による修養である。

故に倫理学の根本問題は如何にして他と協力すべきかといふことにある。倫理学は個人的問題ではなく歴史と社会とに存す。カント倫理学はこの意味に於て古い。人は善そのものゝために行動せよといふが、その善の内容に至つては彼自身何も言つてゐない。つまり実践と結びつかぬのである。

二十歳前後に於て考へた事やつた事は、その人の一生を支配するものであるから、この時代に自分の進むべき方向をきめなければ生涯決定する事が出来ないのである。故にこの時代は非常に大切な時である。丁度この年頃は高等学校時代にあたるのであつて此処に於て人生観を打立てねばならない。

学術が基礎をおくこの人生観といふものは国民的信念の上に作られなければならない

が、之は一人では出来ず、日本国民として根本的的人生觀を確立する為には是非とも同信生活が必要なのであり、毎日々々の高校生活を同信生活としなければならぬ。

何事も形式だけではいけないが、形式を離れた實質はない。形式にとらはれる事はつまらぬ事だが、大ていのは形式がなくなれば實質もなくなつてしまふ。真に神を敬ひ大君に仕へまつらんといふ気持があるならば必ず外部に表れるものである。この気持があれば礼拝は極めて自然に行はれるのである。(昭和一五・一・一一)

黒上正一郎先生を偲び奉る

身をもだえ心くだきてみまかりしみたま偲べば生けるともなし

とこしへにみたま安かれと祈るかな御心つぎて戦ふ我らは

師の君の悲しきねがひうけつぎて国を守らむいのちの限り『学生生活』昭和一五・一一

をりにふれて

もみぢせる四面の山脈音もなくふる秋雨にかすみけるかな

たれこむるむらくもわけてみ光のかがやき渡る時ぞまたるゝ

流れゆく雲の行方を眺めつゝ戦ふ友らの上を偲ぶも『樫の木集』昭和一七・四

二
十二、
渡 わた
辺 なべ
二 じ
郎 ろう



渡 辺 二 郎

大正十一年八月十三日、父周一の次男として福岡県若松市（現在の北九州市若松区）に生れる。県立若松中学校を経て、昭和十六年四月、旧制佐賀高校文科乙類に入学。先輩江頭俊一氏、百武礼之氏（いづれも本書前編『いのちささげて』に収録）の言説に触れ、十七年初めから「日本学生協会」に連なる「佐高同信会」に入つた。そして、短歌の修練、古典の輪読の経験をつむ一方、同年三月、福岡県八女郡木屋村の光善寺における合宿に参加した。この間、最も大きな影響を与へられたのは、同学年文乙クラスの高瀬伸一氏（本書収録）であつた。昭和十八年六月の九大病院における江頭俊一氏の壮烈な死に方に触れて、痛恨の涙をこぼす。

同年十月、東京帝国大学文学部英文学科に入学、十月八日から十一日まで、入隊前の最後の合宿

に参加。参加者には、先の百武礼之、寺尾博之（ともに本書前編『いのちささげて』に収録）の各氏をはじめ、松吉正資（本書収録）川井修治、加藤敏治、小柳陽太郎などの諸氏の名が見られる。その直後の十月十八日に、彼は同信の友ら四人とともに、甲府に三井甲之先生を訪ねてゐる。（この四人の中には、佐賀から上京した高瀬伸一氏が入つてゐた）同年十二月、学徒出陣により久留米の戦車部隊に入隊。後、部隊は満洲に渡り、戦後シベリヤに抑留。終戦翌年の昭和二十一年九月十日、栄養失調のためシベリヤに於て戦病死。時に数へ年二十五歳。陸軍中尉。

昭和十七年～十八年——二十一歳～二十二歳——

昭和十七年一月廿三日 六時限終了後、始めて佐高同信寮を訪ねた。佐高入学以来、今日程感激し、心からやらうと思つた事はない。江頭さんと云ひ、百武さんと云ひ、実にいい人だ。皆いい人だ。のびのびした、真面目な、明朗な、そして潑刺たる感じを受けた。若々しい、いかにも青年らしいところは、自分として学ぶべきだ。今日は実に意義があつた。今日は新しき日の第一歩なり。人が何と云はうと、自分は正しい道を進まんとしてゐるのだ。今迄の、青年らしさの失はれた過去は、今日から振捨てるのだ。今迄の弱い気分を捨てねばならぬ。力強く雄々しく進まん。

四月四日 一日より三日迄合宿、得る所多し。

ますらをの遺せし歌をとなふれば力満ち充つ我が胸内に
岩がねも砕かんばかりとよましておしよせ流る矢部のたぎつ瀬

九月七日 国木田独歩の「牛肉と馬鈴薯」を読んで感あり。彼は「吃驚びつくりしたいといふのが僕の願なんです」と云ひ「宇宙の不思議を知りたいといふ願ではない。不思議なる宇宙に驚きたいといふ願です」と云つてゐる。人生の真理をきはめんとするより、不可測、変転の人生に驚きたい、悲しみたい、喜びたいといふ心持ならん。今日の学生には、此の生命の躍動より発する願がなく、人生の真理を論理的に究めんとして、「曰く不可解」なる事を悟り顔に、若々しさを失ひて生命力の萎縮を生じてゐるのだ。

「武蔵野」は美しい。自然に没入する心。すなほに没入し得る心こそ、また青年の特権である。今の青年はすなほさが無い。ないといふより、すなほなる事を恥ぢてゐる。冷淡な面をして、悲しみ、喜びを表はさず、悟り顔にて暮して行く。少くとも、之で青年と云へようか。萬葉のひたぶるな精神の失はれんとしてゐる時代である。ここに於て考へるのは教育の欠陥である。重要な真の教育者のなきことである。

九月卅日 明治天皇御製

民

ほど／＼にこゝろをつくす国民のちからぞやがてわが力なる（明治三十七年）

我々が如何なる困難に向つてもひるむ事なく進み得るのは、「ちからぞやがてわが力なる」とのたまひし、大御心の有難さによるのではないか。国民の微忠を攝取遊ばされる大御心の何と広きことよ。

君のため何か惜まん若桜散つて甲斐ある命なりせば

と歌つた軍神の精神もまた、「わが力なる」とのたまはせられし大御心に、絶大なる歓喜を感じたのであらう。（註 大東亜開戦劈頭、ハワイに突入した特潜艇長軍神・古野繁実少佐の遺歌）
「止むを得ざる、之を誠と言ふ。」

十月十七日

阿蘇に登る

頂におほひかゝれる乱れ雲の走るがごとく過ぎゆくが見ゆ

友と一緒に撮りし写真を眺めて

おのがじし笑みたる友の顔見れば笑ふみ声の聞ゆる心地す

もろともに一つ心に結ばれしよろこび自づと笑にあらはる

十月廿八日 夜、寮で「しきしまのみち」会を行ふ。小林、村上、小田、小柳、執行、小生六人で行ふ。感じた事であるが、歌は一瞬の思を述べる事が必要なり。後より反省等をつけ加へて、歌らしくしたのは、調低く駄目だ。一瞬感じた思ひを、そのまま素直に述べる歌が、自分自身としても、歌ひはらしたといふ気もするし、他の人の感動共感をも得るものである。「ことのはのみち」の実に複雑微妙なることを痛感す。

昭和十八年十月一日 東大入学式十時よりあり。

近時米英との戦争以来、国内に英語排斥の声あれど、尤もの点も感ぜらるれど、過激に過ぎたる点なきにしもあらず。真の米英思想を研究批判するには、英語によるの外なし。今までの英文学者には、真の米英研究者殆どなし。英国に経験哲学行はれ、更にマルキシズムが何故流行せざりしか等の問題、大いに価値ある研究なりと思ふ。

とことばにつきぬ思ひを味はひし出湯いでゆの里も今宵限りか
縁ありて又何時の日かこの里につどはん時を思はぬにあらず
身はたとひ何処の野辺に果つるとも魂となりてぞこの地尋ねん
もろともにつくす心は国の為生くるも死ぬも神のまにまに

十二月二十八日 弟三郎、甲種飛行予科練習生となり、今日奈良に向け出発す。

征け、弟よ、強く雄々しく

生くるも死ぬもそは神意のまゝぞ

只ひたすら己の努むる道を

真すぐにひたすら進み行くべし

我も後より征かんほどに

国の為征きしほまれの若桜散るべき時にいさぎよく散れ

二十三、高たか瀬せ伸しん一いち



高瀬 伸 一

大正十三年出生。父親の任地、北支那の天津で
 両親、弟妹（伸二、美代子氏）と共に生活してゐた
 が、小学生の時両親を失ひ、ために弟妹と別れて
 長崎の伯父の家にひきとられた。昭和十一年四月、
 長崎県立瓊浦中学校に入学。精神的、物質的な困
 苦に耐へながら勉学に励み、昭和十六年四月、旧
 制佐賀高校文科乙類に入学。

入学後まもなく、中学の先輩で「佐高同信会」員であつた大津留温氏らのすゝめもあつて、同友
 小林国男氏とともに校内の柔道場で当時三年生の百武礼之、江頭俊一氏（ともに、本書前編『いのち
 ささげて』に収録）らを中心とする黒上正一郎氏著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の輪説会
 （月に一、二回開かれてゐた）に参加、はじめて真摯な宗教的雰囲気を伴ふ古典讃仰研究に接した。

十六年八月「比叡山全国大合宿」(日本学生協会主催)に参加。この合宿の体験は、以後の精神生活に画期的な転機をもたらし、同信相統の信を確立することとなつた。十七年三月、「佐高同信会」の「福岡県八女郡木屋村合宿」、同年八月の「滋賀県西教寺全国合宿」に参加、思想を深化せしめ、強靱な人格を形成していった。彼はその頃既に肋膜炎にかゝつてゐて、三井甲之先生の「手のひら療法」を友人らから受けてゐたが、十七年十二月から翌十八年三月まで休学、新潟県西蒲原郡弥彦山麓の伯母(小林みゆき氏)のもとで療養生活を送つた。その間、松吉正資氏(本書収録)などこのまやかな友情交流の世界の中で、求道生活を深めていった。

十八年四月復学早々、佐高の同信の友らとともに山口の「中国正大寮」を訪ね、「大道合宿」に参加。六月に到来した畏友江頭俊一氏の病死は彼の精神的奮起を促し、一、二年生の中に祖国への信に生きんとする同信の友を求める運動を強力に展開していった。同年十二月、多くの先輩同友の学徒出陣を見送つた後、ひとり学校に残り後輩学友との交流を続けながら同信相統の努力を続けた。十九年六月、学業のかたはら末安悟郎氏(本書収録)とともに、佐賀市日新小学校の代用教員を勤めた。十九年十月東京帝国大学文学部入学、直後在籍のまゝ横須賀海軍砲術学校に入隊。翌二十年七月二十八日、呉軍港内に於て乗艦「伊勢」の沈没とともに運命を共にした。時に数へ年二十二歳。

昭和十七年 — 十九歳 —

佐賀を発つ日に

明日こそは都に国内の友どちと会ふと思へば心躍りき

文の上に名のみ聞きこし友どちとおもわ会はする時近づきぬ（註 おもわ、顔）

東京正大寮よりの帰途

思はずも足どり軽く歩くかな今日友どちと会ひし嬉しさ

帰り路は一人自づと歌のでて足音高く合せ行くかな

書翰から とにかく私の今の痛感「激闘に身を」といふ事です。友も黒板に鮮やかに「苦難を、そして歓喜を」と書き残してゆきました。「信」を人の腹中に置いて我々はもつともつと激しく戦つてゆきませう。この「戦」といふ言葉に生命をあらしめねばなりません。我々はキリストの言葉に次の様ながあるのを知つてをります。「心の悲しむ者は幸ひなるかな。その人は慰められん」と。友よ一年は早い。来年の今頃は卒

業であります。今より留魂の激闘を！

押しせまる夕やみの中に今日も又暮れて行くかな夢のごとくに
渡りゆく雲のうごきにゆくものゝ又かへらざるさだめをぞ思ふ

〔神州不滅〕第二卷第五号
昭和一七・五

昭和十八年——二十歳——

御製拜誦

ああ

おそれ多くも又かしこきかな

農村新年

ゆたかなるみのりつづけと田人らもかみにいのらむ年をむかへて（昭和十八年）

はろかにもつづく広野をみそなはし給ひ

そこに働く田人らたびとに

親しくも

大御歌下させ給ふ

誠にいふ方なき清浄の限りなき大御心

かしこくもかしこしとこそをろがみいただきまつる

野には風たち

雪の広野を風は過ぎゆく

しょうしやう こし
蕭々と越の広野を(註 本人は此の頃、新潟県で療養中)

それにつけても

天皇陛下

農村の新年に

かくは大御歌下させ給ふ

まことにまづしき臣の心も

ひろやかにかるやかに
身もたなしらに

心消えゆくやすらぎを得しめ給ふ

あゝかくもみ民の上をしぬばせ給ふ

天皇陛下

国内の風

ふきたちて

答へまつるべし

天皇陛下のあつき大御心に

天皇陛下のあつき大御心に

ゆたかなるみのりつづきてこの秋も豊とよことほがむときぞまたるゝ(註 豊、豊作)
弥彦山やひここゝのふもととはとこしへのわれのふるさと父のふるさと

やむ身をば心ゆくまで天地と共に養ひし弥彦の半年

半年といへどもこゝの子らは皆われのはらからわれになつける

ゆく春と共に近づくこの弥彦麓の村を去りてゆく日の (昭和一八・二・二一)

書翰から 僕達にはもう戦死が迫つてゐるのだ。あと十年も君は生きると思ふか。

(昭和一八・二・二八)

撰取とは共感である (昭和一八・六・六)

イモホリホーイ クハモツテサ

エンヤラエンヤラ ホルノダヨ

大キナオイモガ ドツコイホーイ

小サナオイモガ コロコロホーイ

(昭和一八・七・五)

言の葉の力をしてわが病ひを去らしめよ。(昭和一八・七・二七)

あきつ (註 あきづ、と同じ。秋津、蜻蛉と書く。トンボの古名)

くまもなき

みそらにとべる

ながよそほひ

ながたはむれ

何ぞたぬしき

かぎりなき

天つみそらよ

ながために

ひらけたるか

こころゆくまで

とびてあそべや (昭和一八・八・二二)

言葉に感情を伴はせてはならぬ。感情に言葉を伴はせるのだ。それが詩だ。 (昭和一八・八・七)

しづかなるいとまある日のほしきかな心ひかるゝふみもよむべく (昭和一八・八・八)

和とは静かなものである。 (昭和一八・八・一八)

よろしくよき人のおほせにしたがひまつり

ただひたすらに一筋のみち、このみちを進みゆくべし。 (昭和一八・一一・一九)

風の音をきゝつゝ

北風の寒く吹きすぐこの宵はなきわが友のしぬばるゝかな

ひきまはしを肩にひっかけ首こごめていでゆきたまひし風寒き道に

茶店にてあたたかきうどんの湯気ふきつゝ語らせ給ひしゑみ給ひつゝ

おもかげはとはに消えねどうつそみの君いまさぬがかなしかりけり(昭和一八・二二・三三)

もののふの別れは簡単なものだ。「ぢやさようなら」で一切はすむのだ。男は単純なれ。泣くときは泣き、笑ふときは笑ふ。これが男だ。殊更にせぬといふのが日本人の日本人たる所だ。(昭和一八・二二・二二)

ひとり部屋にゐて

友らみな征きはてたまひわれひとり残りしあとのさびしきろかも

訪れてかたらふ友もなしともへば心うつろにせむすべもなし

残りゐるわれらにあとを頼むぞとことを託してゆきしみ友ら(昭和一八・二二・二二)

弥彦の伯母に(註 新潟県弥彦)

朝夕に寒さまさればこのごろは弥彦のことの偲ばるゝかな

たな曇り低くおほへる黒雲の弥彦山脈やまなわすれせなくに(註 せなくに、しないのだなあ)

わがどちのゆくをたのしみひたまちにまちます伯母の偲ばるゝかな(昭和一八・二二・二二)

昭和十九年～二十年——二十一歳～二十二歳——

小柳兄に（註 小柳陽太郎氏、佐賀高校生の友人）

とこわかの泉の流れ君がみ歌よみつゝあれば流るゝごとし

み友らのおもひこもれるこの旗をかたくいだきてわれはいでゆく

限りなき皆様方の御心はとほにわが胸いくさのにはも（昭和一九・九・二四 新潟県弥彦山麓から）

荒れ狂ふ海のはたてはますらをのいのちのすてどいさぎよくゆけ（時所不明）

皇祖皇宗神靈上に 絶対に日本は亡びず 神州不滅

（昭和二〇年 横須賀海軍砲術学校学生隊第一区隊第三班）

二十四、松^{まつ}吉^{よし}正^{まさ}資^し



松 吉 正 資

大正十二年、山口県大島郡安下庄町^{あげのしょう}に生れる。

昭和十五年、県立安下庄中学校四年から旧制山口高等学校文科乙類に進む。水泳部に入り、宝辺正久氏らの学内文化団体「由道会」(日本学生協会系列)に参加。十六年、由道会員二名と共に、同系統の山口高等商業学校「斯道会」の共同生活に合流「中国正大寮」を創り、日本学生協会の道統

につらなつて研鑽につとめた。比叡山、萩、大道など各地の「合宿」や集会を通じて、特に佐賀、松江、熊本の同信諸友との交流繁く、闊達な行動力を發揮する一方、清新な歌を詠みつづけた。十七年九月、繰上げ卒業と同時に、東京帝国大学法学部に入學、「東京正大寮」に入る。

昭和十八年十二月、学徒出陣、大竹海兵団に入団。二十年三月、北浦航空隊に於て零式水偵偵察

員として、琴平飛行隊駐隊（特攻隊）に参加。五月十一日未明、鹿児島県指宿いぶすきを發進して沖縄に向ふ。七時すぎ、突然松吉機は故障、速力を減し着水の姿勢をとつて四度波上に跳躍、その瞬間転覆し轟音と共に爆碎。横当島北方五マイルの地点であつた。時に数へ年二十三歳。海軍少尉。

特攻出撃の際の同僚の書簡に次の一節がある。「私たちは出撃前夜、酒を飲みわいわい騒いでばかりゐたのですが、松吉君はその仲間には入らず、ベッドに仰臥し静かに天井を凝視してゐました。あの若さで悟りの心境に達してゐたのではないでせうか。松吉君のあの姿は今でも忘れることができません。」

令弟・松吉基順氏の思ひ出——「兄は中学三年生の時、教員室の一隅に机を与へられ、下級生に植物の名前を教へてやつてゐました。植物の名称を先生よりも数多く知つてゐましたので、先生の代役をしてゐたのです。私も兄に連れられて植物採集にはよく出かけたものですが、兄は植物採集がとても楽しさうでした。兄は図書館の植物図鑑を頼りにして、いつの間にか一千種類に近い植物の名称を知つてゐたやうです」と。

昭和十六年——十九歳——

出征兵士を送りて

静かなる又ほゝゑめる顔も見ゆ出で征く心いかにあるらむ
力強くふみしめて行くつはものを急ぎて追ひし家族の人はも
大君のみことかしくみ聖戦みいくさに出で征く見れば心ふるふも

松江に來りて

湖うみあをく岸べに家のつらなりて友います地はうるはしきかな
わづらひをふりすてゝわれはろぼろと此の湖のへに來りけるかも
うれしくもなつかしきかなみ便りにしのび來りし友にまみえて

(日刊『日本太郎』昭和一六
・四・一四)

風

蟬の声しばらくたえてさはやかに梢をわたるあきの風かな
大御歌をろがみまつるひとときを天地にみつる松風の音

(日刊『日本太郎』昭和一六・九・二二)

故北白川宮永久王殿下御一周忌を迎へまつりて

大君のみこと畏みこそこの秋もろこしの野にかむあがりませす

顧みずすゝみたゝかひかくれましゝたふとき御身かしこからずや

松江の友に

力なき身とは知れどもますらをの心はすでにさだまりてあり

たまきはるいのちたゆまでかの浜の一日のえにしうたひつがなむ

直ちき入にゅう廻ゐ心しん対たい
(論文)

歴史は必然的に変るといふ唯物史観の公式論が真実の意味に於ける歴史の否定であり、過現未を一貫する史的生命を抹殺せんとすることはいふまでもない。従つてかゝる史観を摧破するものは人生の正しい発想であり、まことの学問の威力でなければならぬ。

ところでたとへば次の如く言はれる時、それはいかなる発想を地盤としてゐるのであらうか。

「主体が環境を環境が主体を限定する。一つの世界が成立するには、それぞれの環境に応じて主体的なものがなければならない。併し世界は矛盾的自己同一として何処までも作られたものから作るものへと動いて行くのである。蘇我氏藤原氏以来我国歴史に於て主体的なものはそれぞれの時代に於てそれぞれの時代の担ひ手の役目を演じたのであらう。併し作られて作るものとして、如何なる主体ももはや環境に適せない、即ち社会形態が行詰まる時が来なければならない。歴史が生きたものであるかぎり、然らざるを得ない。支那ではかゝる場合が易世革命となつた。我国ではそれがいつも皇室に返ると云ふことであつた、復古と云ふことであつた。」(三木清『日本文化の問題』七五―六頁)

「作られて作るものとして、如何なる主体ももはや環境に適せなくなる、即ち社会形態が行詰まる時がやつて来て、そこで主体の交代が行はれる」といふのであらう。そしてそれが、「世界が矛盾的自己同一として何処までも作られたものから作るものへと動いて行く」ところの歴史の発展なのであらう。「蘇我氏藤原氏が我国歴史に於て主体的なるものとして、それぞれの時代の担ひ手であつた」とは如何なる意味であらうか。また

「歴史が生きたものであるかぎり」といふが、「歴史が生きてゐる」とは如何なる事か。歴史の生命を「作られて作るものと」いふやうな表現をもつてしては、到底尽すべくもあらぬことはいふまでもあるまい。

「主体的なるものの交代は歴史が生きたものであるかぎり然らざるを得ない」といふ。そして「支那ではかかる場合が易世革命となり、我国ではそれが皇室に返ると云ふことであつた」といふ。易世革命といふことにしても、復古といふことにしても、畢竟それは歴史の發展上然らざるを得ない社会形態の行詰まりから来る主体の交代だと言ふわけだが、かかる表現、かかる発想が果してはじめに言つた唯物史観に対してどれだけの威力を有するであらうか。「世界は矛盾的自己同一として何処までも作られたものから作るものへと動いて行く」といふ如き形而上学的冥想的表現にとどまる限り、唯物史観を崩壊せしむる学問の威力をあらはして、日本の史的生命を護ることは到底不可能であらう。矛盾的自己同一の心理的地盤は、まさに自分の言はんとする発想とはちがふのである。

日本歴史の研究に於て、氏族社会、封建社会、資本主義社会といふやうな時代区劃は、国史を貫く精神を無視して真実の歴史とは全くべつなものを作り上げてしまふ。代々に

相續されて来た御祖たちの悲願は少しもかへりみられないのである。唯物史観の公式的必然論は科学的歴史の名の下に、真に歴史を回想し学び究めんとする意志を奪ひ去る。国民の回想としての、決意の根元としての歴史は失はれるのである。そこでは、歴史の必然に従ふといふのであつて、「民族の決意を貫いてゆく」といふのではないのである。それははじめにも言つたやうに歴史の否定であり、人生そのものの否定である。歴史はどこまでも回想としての歴史でなければならぬ。国史の回想をはなれて時代の決意といふものはあり得ない。国史の回想に於て民族は決意を共にするのである。そこに自分は人生の真実の発想といふものを考へる。それは決して弁証法の論理を必要としない。如何なる歴史の学もかかる発想にもとづかないものは真の歴史ではないであらう。否、すべての学問はこれを地盤としなければならぬであらう。まちがつた発想は人生そのものに反するからである。

弁証法の論理は歴史人生事実の一部分をとらへることは出来よう。しかしたえず波うちながれうごいてやまぬ人間精神のゆたかな情意を盛るには、それは生命なき三角形に過ぎぬ。強ひて人間精神を、歴史人生事実を、三角形の中にきちつと入れようとするか

らこそ、一ばん大事なものを無視するやうになり、まちがひが起る。しかし問題は弁証法の論理といふことではなくて、さういふ風に何もかも三角形の中に入れてしまつてそれで安心してゐる図式的思想法なのである。かかる思想法では「やむにやまれぬ」気持ちといふことはどうしてもわからない。「やむにやまれぬ」といふのが人生である。弁証法の論理を借用し、それに安んじてゐるのは、自らの情意の涸渇であり、精神の事実上の死に外ならぬ。かゝる心理、かゝる思想法こそ自分のいふ「まちがひつた発想」なのである。かういふ発想からいかにして正しい歴史が究められ得ようか。いかにして祖国防護の情意が湧き出でようか。弁証法の灰色の理論にたへがたい苦痛を味ひ、それをはねのけてあらはれ出づるものがまことの発想である。(註 三角形、正・反・合といふ弁証法理論を図化した形のことか)

同じ『日本文化の問題』中に

「親鸞の自然法爾と云ふ如きことは、西洋思想に於て考へられる自然といふことではない。それは衝動のままに勝手に振舞ふと云ふことではない。それは所謂自然主義ではない。それには事に當つて己を尽すと云ふことが含まれてゐなければならぬ。

そこには無限の努力が包まれてゐなければならぬ。唯なるがまゝと云ふことではない。併し自己の努力そのものが自己のものではないと知ることである。自ら然らしめるものがあると云ふことである。」(二一七〜八頁)

と言ふのは、さまざまの觀念媒介の迂路を経て到達したものにせよ、かういつたことは「往生には、かしこきおもひを具せずして、ただほればれと弥陀の御恩の深重なること、つねにおもひいだしまひらすべし。しかれば念仏もまうされさふらふ。これ自然なり。わがはからはざるを、自然とまうすなり。」といふ親鸞のことばに直接することによつて、精神の徒勞なしに感得せられることだと思ふ。それは弁証法の論理をも撰取することばの威力である。人生は胸奥よりまことのことばを生み出し生み出しゆく悲喜動乱であつて、矛盾を止揚することでは断じてない。上の一文の如きは矛盾的自己同一といふやうな迂論の脱落を自ら示唆するものに外ならぬ。

親鸞の愚禿鈔に「直入廻心対」といふ言葉がある。「直入」とは実人生の威力あるものに直ちに没入しゆく強烈の生であり、「廻心」とは否定をつみかさねてゆく際限のない過程そのものをたのしむ生である。「直入」こそまことの発想であり、それは人生隨

順のこゝろであらう。やむにやまれぬ気持をつらぬくことである。それはまた御祖たちみおやの深刻悲痛の生を憶念するといふこととべつではない。歴史に於ける偉大な精神は一つの悲劇であつた。かくの如くわれらの生にまことの威力あるものは、魂の底から揺り動かされる実人生そのものゝ体験である。それはことばの威力である。何よりもことばの微妙な内容が味識されねばならぬ。神話を現代の直接経験につながらしめねばならぬ。ことばの威力にめさめる時、日本の史的生命はあきらかにあらはれ出づるであらう。

昭和十七年——二十歳——

冬

いく日もはれぬ

くもり空

めぐる山々

はやくれゆくに

家むらゆ

けぶりながれて

さびし夕ぐれ

川ぞひのこみちをゆけば

音たてて水はながれ

橋の上を車ひきて

馬のゆく見ゆ

野ずゑのいへ、見もしらねど

あゝ、このふるさと

わがふるさと。

(昭和一七・一・二八)

さやさやとつばさならして一羽二羽とびすぎ行きぬ海にすむ鳥

海原ゆ風ふくなべに空わたる鳥かげ高くかつひくゝして（註 なべに、につれて）

旦の浦風さや吹きて潮ざゐの音もたえせず神さびてきこゆ

西風（^ル）ふけば雲もうごくか砂浜に日かげかくろひまたあらはるも（昭和一七・二・七）

なつかしき花のした道よる更けてうち歩きけり思ふどちむれて（註 どち、仲間）

天地のめぐみゆたけくうちつれてわが行く道に花咲きにけり（『神洲不滅』号外 昭和一七・四）

弟に

いく日かもみ空はれねどさ庭べのみどりを見つゝ心なぐさむ

あらがねの土をやぶりてもえいづるいのちをおもふ春の来ぬれば

もえいでし草のみどりの荒野なす国内にみちむ日を思ひて生く

新潟の友に（註 高瀬伸一氏か）

春とへど雪のつら山ふく風をつめたかるらむ越の国辺は（註 とへど、と云へど）

雪氷とざしゝ野辺に春たちて花咲くおもひ偲ぶすらだに

み雪ふる越路の友も初春のよろこびつぐるきけばうれしも
吹く風のそよぎ聞くだに国々の春のたよりの待たれぬるかな

わかれにのぞみて友に

わかきゆゑにもだゆるおもひたふとみて忍びてゆけやますらをの友
つゝめどもあらはるゝまで胸底ゆもゆる時あらばたのしからずや
ゆたかなるいのちのまにまもるともにためらふことなくすゝみ給へや
はる秋のめぐりもくしきこの里に魂とどめなむ友らとともに

一条兄に（註 一条浩通氏、本書収録）

新京ゆかへりこむ君まちわびつこゝだの日かずへし心地する
かへり来てあしたを待たずわかれゆく君がすがたのつきずかなしも
宵のみちをおくりてゆけば大空にちりしく星の何ぞ美しき
またあふはいつの日ならむいつまでもおろかなる吾をわすれたまふな

〔神洲不滅〕昭一七・一・一九

映画「マレー戦記」をみて

ブキテマの会見をはり敵つひに降れる時し涙あふれつ

大みことかがふりてゆくみいくさにえみしらいかにせむすべもなし

大君のみよさしのまにま敵将のことばしりぞけかちを全うしぬ(註 みよさし、御委任)

ものゝふの道こゝにうつしくマレー戦つひにかちたりかたであるべき

たゝかひやみてなほ燃えさかるくろけむりの戦場の空にたちのぼる見ゆ

火砲ほづつのひびきたえたるあとにはらからのみたまに告げぬいくさのかちを

入場式の戦車の上に戦友と共にすゝむよあまたのみたまは

マレー戦かなしきいのちつみかさねしますらをのたまは永久に生くべし

入隊の後はじめ寮に訪ねこられし先輩を迎へて

おだやかにゑみうかべつゝかたります君がことばの力強きかな

一すぢをふみてかはらぬ丈夫のをゝしきすがたにみなぎる力よ

たくましき身ぬちにひそむ確信をみじかきことばにかたりたまひぬ

友どちをこふる思ひのひたむきに心をどりて来ましゝといふ

むな底ゆ湧きくる力に友みなの眼はかがやきて君をみつめり

十一月二十九日出征さるゝ二人の先輩を上野駅に送る（註 吉田房雄・手塚顕一の両氏）

をととひ夜いでゆきませるその折のをゝしきすがたわすらえぬかな

駅のホームに二人ならびて敬礼されし舞姿いまもまなかひさらず（註 まなかひ、眼の前）
改札口の柵にとりつき手をふりて声をかぎりに別れつけしか

その時し友とうたひしうたごゑのなほ胸ぬちにひびきてやまず

（昭一七・二二 正大寮第五
回しきしまのみち会）

十一月三日、明治神宮外苑国民錬成大会に行幸を拝し奉りて

やすみしゝわが大君のいでましのけふのみ空は雲もわたらず

あふれいづる涙ながらに現つ神わが大君ををろがみまつりぬ

国のはて島のさきざきありとあるみ民らこそぞりて御代ことほがむ

（月刊『新指導者』昭和
一七年一二月号）

昭和十八年——二十一歳——

旅の思ひ出（紀行）

この正月宝辺、加藤両兄（註 宝辺正久・加藤敏治の両氏、山口高校生・山口高商生の友人）と中国正大寮に一週間ばかり居つた時のことである。一日雪が降り一寸五分ばかり積つた。山口としてはこれでも相当降つた方である。三人で一つ何処かへ雪見に行かうぢやないかといふことになつた。自分がかねがね冬一度長門峽（註 山口県中部の名勝）へ行つて見たいと思つてをつたので長門峽行を提議した。そこで汽車の時間を見るともう一寸しか時間がない。大急ぎで仕度して駅にかけつけ丁度間に合つた。長門峽に着いて見ると優に一尺は積つてをる。自分としては生れて始めての大雪であつた。

雪の中を一条の道がついてをる。それを辿つて長門峽の入口の丁字川のへりまで来た。此処から先は道がつけてないから勿論人の足跡もない。数歩あるいて見たが自分は和服に袴をつけ下駄ばきといふいでたちであるし、宝辺、加藤両兄とて仕度をしてをらぬからとても先へ行けるものではない。それで探勝はあきらめて川べりの宿屋に上つた。丁

字川に面した二階の部屋に通され障子を明けはなつたまゝ雪見酒を傾けようといふ趣向である。

他に客はないらしくひつそりとしてをる。炬燵を頼んだが先づ火鉢を持つて来た。暫く待つてをる中に炬燵を持つて来る。やがて酒が来る。料理がすばらしい。田舎のこととて素朴な材料を用ひたところが何ともいへぬ。鯉の刺身これは自分には始めてであつた。鮎の乾したのを焼いたもの。鮎は長門峽の名物であるが冬は生きてをらぬから乾したのしかないわけだ。それから卵のタツブリ入つた茶碗蒸し。酒は冬のこと客が少いからいくらでもある。次第に銚子の数を重ねるにしたがつて歌が出る。

女がまだ何かおとりになりますか、といふから何か持つて来いといふと今度は牛肉やら玉葱のきざんだのやらを持つて来た。火鉢に鍋をかけてすき焼をやらうといふのである。昨日は寮ですき焼をやつてくれて鱈腹食たろくつたが二晩つづけてすき焼が食へようとは思はなかつた。これは有難いと汁まで残さず食つた。最後に鯉の吸物。

一人平均六七合は飲んだらうか。相当酔つて来て萬葉の歌をうたつてをると女が萬葉はいゝですなといふ。うん萬葉はいゝ金槐集もいゝと言つてをると金槐集を持つて来ま

せうかといつて立つて行つたが萬葉集、金槐集、古今集を持つて来た。女の名は静子さんといふ。いい本があつたら送つて下さい金は送りますからなどといふ。名刺をやつたり加藤兄は本の裏に自作の相聞歌を書きつけたりしてをつた。静子さんには東京へ帰つてから『新指導者』を二部送つてやつたが、つい先日そのお礼のつもりだらう小包で餅を送つてくれた。

さて相当以上に酩酊して二人が泊らうといふのを自分は是非とも帰ると言ひはつて、ちや一しよに帰らうといふので三人宿を出たが駅へ行く途中、宝辺兄はわざと雪の上へ転がるのでそれを加藤兄と二人でひきおこしてやつと駅まで辿りついた。やはり一番酔つてゐたのは宝辺兄だつたらしい。山口に着いてからも街路で刑事につかまつたり、寮へ帰つて皆の前でクダをまいたりした。

ところで寮の連中であるが三人が雲隠れして夜おそくいい気持で帰つて来たので無念やる方なかつたらしい。おそらく次の日曜あたり出かけたことであらう。

北 陸 行 (紀行)

広瀬兄御一家にお別れして(註 廣瀬誠氏、富山中学出身の友人)

いとまつげ出でむとすれどことばなくふかきなさけに涙ぐまるゝ
門の辺に立ちて名残りを惜しまるゝみ姿をがみ去りがてぬかも
ふりしきる吹雪の中に立ちわかれ去りゆく時し涙おちんとす
見ず知らぬ我をかくまでいたはりし人のこゝろを忘れて思へや

床にありて雨をきく

ふりしきる軒の雨音とうとうと鼓^{つづみ}うちならすひびきかときこゆ
ふりつみし雪もとくるか川なしてながるゝごとき水のひびきは
いねながら語ることばもうちたえてひとり目ざめて雨音をきく
やがて来む春のきざしと雪どけの水のながるゝ音なるらしも

二月一日 雑煮餅を食ふ。餅を水で煮たのを小豆の煮たのや汁につけて食ふ。朝食後高瀬兄酒井兄（註 高瀬伸一氏、本書収録。酒井秀郎氏、新潟高校生の友人）と三人で近所の寺からスキーを借りて寺の前の坂ですべる。自分はスキーをやるのはこれが生れて始めてだ。尻餅をつくこと数知れずすべりに来てゐる子供等大いに笑ふ。昼食は食はず。これがこの辺では正月（註 旧正月）の習慣ださうな。スキーをやめて国民学校へオルガンをひきに行く。「荒城の月」「天然の美」「富士は日本一の山」等をひく。帰ればをばさんの心づくしでお神酒若干あり。

二月五日 午頃起床。昨夜の高瀬兄の話忘れず兄弟と題して八首作る。夕方スキー。明日は去らんと思ひたれば暗くなるまですべる。夜諸国の友らに寄書す。二人とも暫くうたたねして覚めて後床に就く。寝ながら高瀬兄

君と二人語る夕もはやつひに今宵一夜となりにけるかも

と口ずさむに自分もこたへてうたふ。口から出づるに任せて互ひに作ることに何十首と知れず。思ひ出づるまゝ記せば

いつまでもとどまりたしと思へども別るゝ時の近づきにけり
こゝに来て久しくなれど君とをれば夢の如くに思ほゆるかも
先急ぐ旅路なれども君が深きみなさけ思へばさがてにする
昼はスキー夜はこたつに語りつゝすぐせし日々のたのしかりしよ
くめどつきぬ君がみなさけ思はれて去らむとすれどせむすべもなし
別れとは思ひたまふなこの世にてあひし我らのちぎりは深し
いつまでもつきぬ名残りを惜しみつゝ別れゆくのもますらをなれば
あふれいづる思ひはあまりに多くしてうたはむとすれどうたとはならず
就眠五時近し。

アッツ島（註 千島列島の小島。昭和十八年五月三十日、守備部隊長山崎保代大佐以下、全員玉碎）
十倍の敵とたゝかひ北の海に花と散りけりますらをことごと
傷つきし兵は自決し残る者あげて夜襲に玉碎せりとぞ
部下ら皆莞爾と笑みてわれと俱に死に赴くとふ隊長の報告よ

それを限り通信絶えて北の海の小島は霧にとざされにけり

一兵のたすけもこはずたゝかひしますらをつひに呼べどもこたはず

アツツ島雪に埋れしますらをがふかきうらみをわするべしやは

樺太の友へ

吹雪する海をわたりてこの便りはるばるつきぬ南の国に

見ゆるかぎり雪ふりうづむる樺太の豊原の町を思ひやるかな

木々にさす明るき日ざし見つめつゝ友にうたかくか南の国に（昭和一八・一一・二二）

手記から 人生に於て真に協力すべき友を見出したのであるが、その友らとの交流
接触到於て感じたのは、しかしなほ人の心と心のいかに相和し難いかといふ痛感であつ
た。この痛感は聖徳太子のみことばをいただくことによつて人生の信の深化へとみちび
かれたのである。

共に是れ凡夫のみとは、共に是れ臣民であるといふ痛感である。この痛感が全国民融

和協力の心理的基底である。(昭和一八・一一・二七)

友
に

なつかしきふるさとの浦船出してみ楯とゆく日近づきにけり
たづね来る友もなければひとり居てその日を待たむさびしけれども
また会ふと知られぬ友のみなさけをしみじみおもふこの時にして
数ならぬわれをばげます友どちのなさけにこたへいさみてゆかむ
大君の大みめぐみと友の恩おもへばこの身惜しからめやも

故郷雑詠(註 瀬戸内海の大島)

みんなみに向きてひらくる入海の波たひらかに風あたまかし
いりうみの岸べにならぶ家並のうしろにつづき山そびえたり
秋晴れのみ空にうかぶ白雲のかげをおとせりその山はだに
海かこむ山のふもとの密柑畑みかん熟れたり遠目にしるく

北京なる旧師より電報にてみうただきければかへし

はろばろと北京の空ゆ師の君のみうたつたへしこの電報よ

三十一字の電文のあとにカワマタと四字をしるせるみ名なつかしも
わがしらぬとづくにの街のいづくにて君はこの文字しるされにけむ
一ひらのこの紙見ればはるかなる君も近くに居たまふごとし
かのくにははや大地も凍るらむすこやかにませ君の御身こそ
君がみうたしかと身につけ我はいまふるさとの浦いで立たむとす
み心のかよふしるしとこれの紙はなさずゆかむ海のはてまで

述 懐

ゆく身にはひとしほしむるふるさとの人のなさけのあたゝかきかな
数ならぬ身にはあれども吾を送る人のおもひにこたへざらめや
うつそみはよし砕くともはらからのなさけ忘れじ常世とこよゆくまで

二十五、野の中なか孝たか夫を



野中孝夫

大正十年十月十九日、山梨県中巨摩郡小笠原村に生れる。昭和九年四月、甲府中学校入学。十四年三月卒業。同年四月旧制水戸高等学校文科甲類に入学、寄宿舎晚鐘寮に入り、音楽部員として活躍。同年八月、「日本学生協会関東地方別合宿」(三井甲之先生指導。山梨県青松院、先生の菩提寺で、先生のお墓がある)に参加。祖国への信を求めて同信生活に入る。同年十一月三日、明治節の日に、「水高共信会」を設立。十五年四月、「共信会合宿」、七月、「日本学生協会」主催の「信州菅平全国学生合同合宿」に参加。九月二十一日黒上正一郎先生の御命日を卜し、水戸市内に「共信寮」を設立。十六年一月、「日本学生協会水戸支部」設立の計画準備を行ふ。

同年二月、支部発会式を兼ねて水戸に日本学生協会の講演会を開く準備遂行中、読売新聞茨城版に「新しき学生の翼賛道」と題して「共信会」の記事が掲げられた。その中の学生生活に対する批判記事が高校当局によつて問題とされ、会員五名が無期停学処分を受けた。これに対する処分撤回運動が、「日本学生協会」指導のもとに展開された。いはゆる「水戸高問題」である。彼は周囲の白眼視と当局の切りくづしの策謀の中で、最後まで奮闘した。この問題は、当時開会中の国会に於てとりあげられ、文部大臣は処分の不当を認め、月末復校することになったが、学校当局の白眼視と圧迫に堪へるのは容易なことではなかつた。その中で、四月、先輩を京大に送り、残る二名の会員で「共信寮」を守り、水戸郊外へ移転、死を賭しての求道生活を続けた。

同年七月、「武州御嶽全国学生合同大合宿」には副班長として活躍したが、八月、北海道に旅す。九月十日、夜おそく「共信寮」に帰り、翌十一日朝七時、突如身体に変調を起して逝去。時に數へ年二十一歳。文研院大安良孝居士と戒名す。一周忌の昭和十七年九月十日に『野中孝夫遺稿』(A5版二二三ページ)が、多くの人々の哀惜のうちに発行された。

昭和十五年～十六年——二十歳～二十一歳——

菅平合宿にて

わが友と思ひ思ひに心より語るうれしさ何にたとへん

新なる力湧き来もすめくにを背負ひて進むつとめ思へば（昭和一五・七）

明治天皇御製拝誦（論文）

風

久方のむなしき空にふく風も物にふれてぞ聲はたてける（明治三十六年）

此の御製は久方の空吹く風を、その地上の物にふれてさやかなる音をたてるありのまゝの情景を高大なる大御しらべのまゝに歌はせ給うた大御歌と拝察しまつるのである。

然しながらありのまゝの人生の姿を不断に痛感せさせ給へる大御心は、空吹く風の音を聞き召されてもその情景に人生法則を大御心に直観し給ふのである。

即ち人の心も、それが自己以外の他人の心と融合し流通し合ふ時に於て始めて「声をたつ」る、即ち生命を実感し、内心に於て目覚むるのである。げに、「生命は伝はる時に目覚むるのである」と歌ひし詩人の言葉のまことなるを思ふのである。生命の真相はつながりにあるのである。それは各人にとつて云へば憶念の情意である。我々は我々の日々の喜びの源泉を、友を憶ひ、友と活きる活動の中に汲まねばならぬ。然しながらその友を憶念せんとする情意を確固不動に永久化せしむべき地盤は超個人的永久生命につらなる事によつてのみ得らるゝ。それは我等日本臣民にとつてはまがふべくもなく、祖国の永久生命である。

母宛 拜復 御便り有難うございました。私一身に就いては今回の出来事（註 昭和十六年二月、同志西名と共に無期停学処分を受けたこと）は誠に親不孝の極みと思ひ之も私の平常の精進の足りない為と慚愧致してゐます。然し呉々も申し上げて置きたい一事は此の事件は全く如何とも仕様のない、つまり私の心が間違つてゐたからと云ふ様な理由を附ける事の出来ない様な事件であると云ふ事でありませぬ。私は先生の云ふ事を聞かなかつた

ではありません。却つて私は外の人よりも一生懸命に先生の云ふ事をも聞き又自分で勉強もしてゐました。然しよく聞いたと云ふのは決して赤子が大人の云ふ事を丸呑みにしてゐたと云ふのではなく、先生の云ふ事の中で間違つてゐる事迄も聞いてゐたのであります。高等学校の先生が間違つた事など云ふものかと云ふ人があるかも知れませんが、実際さうだから仕方がありません。

私は官立高等学校に学びつゝある間も皇国学生の一人として学校の中に始終此の様な授業が行はれてゐると云ふ事を、自分一人で知つて黙つてゐるのは他人の悪い所をはつきり知り乍らわざと忠告もしないであると同じ様に、学校に対しても又国に対しても甚だ相済まぬ事と思ひまして、我慢に我慢を重ねてゐましたが、たうとう破れて友達と一緒にそれを校長先生や其他の先生を訪問して申し上げたのです。それから一方には私のような心を持った友達が数人集つて共信会と云ふ会が自然に出来たのです。所が次第にその事が知れわたつて、たうとう先月二十五日に新聞記者が私達の下宿を訪れてその話を詳しく聞き、私達が待つてくれと云つたのも聞かずデカデカと新聞に出してしまつたのです。先生方がどんなにあわてゝ居たかは、処分してしまふ迄一度も父兄を呼んで相

談もありませんでしたし、私達にも一度も注意がありませんでした事を以てしてもはつきり分るのです。私としましては何処迄も学校に私達の考へが分つてもらへる迄やるつもりです。而も幸福な事には今の所それは段々成功しかけてゐます。どうか安心して見てゐて下さい。決して心配なさる必要はありません。(後略)

二月五日

孝夫より

母 上 様

父宛 私はやはり水戸に帰ります。たとへ御母ちゃんが出来てくれた所で私は家に帰らないでせう。

水戸を離れる事は死ぬよりもつらいことです。

然し私は御父さんの気持も御母ちゃんさんの気持もよく分つてゐます。

然し分つてゐるから尚更やらなくてはならないのです。私の為に起る悲しい事もよく分りますそれは私の罪です。しかしその罪をあがなふ為には水戸に戦ふ以外に道はありません。

御高恩に心より感謝致します。

いつか此の事件の納まり次第きつと帰りますから、其の時迄どうか待つてゐて下さる様お願ひ致します。

私は水戸に帰ります。

(註 水戸事件の最中父君に伴はれて帰郷の途中、常磐線の夜汽車の車中にて父君の眠りたまへる時、紙片に此の言葉を記して、水戸に帰つたものである。)

我が言の過ぎたればにやもだしつゝうつむく友の心かなしも
全体に身を入るゝこそ同信のもとゐなるとぞ知れよわが友

憶念は反省の地盤なり。反省する暇に憶念せよ。(昭和一六・四・二五)

会ふことのなしと知りつゝも君がますますみやこに入れば胸とどろきぬ

(註 ますます、ゐる、住む)

いとまなき君がみ姿偲ばれぬ急ぎし筆の跡をし見れば

はからずも今日帰り来て室の中に君がみふみを見るぞうれしき（昭和一六・五）

六月十六日

（註 北海道への旅の途次、福島県原釜—中村から一里—）

夕食後北へ向つて海岸づたひに堤防の上を歩く。長い堂々とした堤防である。此んな淋しい漁村でも其処に住む人達の生命を直接に守らねばならぬ堤防だけは実に完全なものである。

二三町堤防を進むと家がなくなつて堤防も切れた。そこで砂浜へ下りる。砂浜つづきの遠い岬の方を見ると波のしぶきでけぶつた松並木が夕日を受けてゐる。柔らかい砂の上をはだしになつて歩く。実に気持がよい。夕日が西の阿武隈山脈に沈まうとして赤い最後の光を雲の上から空の中程迄延ばしてゐる。波の何事か叫ぶ様なざわめく様な音。千鳥が砂上を砂の精の如くかすめては消える。神話的創造の動乱が此の雾開気の中に満ちてゐる。僕は立止つて海上に向け、海行かばのあの力強いしらべを歌つた。

六月十八日 外に出る、海上からの烈風雨を顔に吹き付け、目も開けられず、しばしにして顔面びしよぬれとなる。漁船の帰りを待つ村人の群、たき火、太鼓の音、叫ぶ声、やがて波に見えがくれしつゝ帰り来る舟数艘、岸より百米ばかりの処に近づくと見るや忽ち後から襲ひかゝつた波にのまれて転覆。其の次に来た舟も波をかぶつて危く沈みかける。だが岸が近いので最早心配は薄い。子供の群が沈みかゝつた舟に向つてくもの子を散らした様に泳いで行く。危機に現はれる真の親愛の発露、僕は寒い雨の中に立つて此れ程あたゝかい情景を見た事はなかつた。

六月二十日 今日私は聖徳太子の御言葉を拝しつゝ畏くも太子の御心を拝し奉つたのである。

即ち『維摩経義疏』の中に、

「国家の事業を煩となす但大悲息むことなく志益物を存す」とある御言葉である。更にその前には、

「事は無事を以て事となす。相は無相を以て相となす。何ぞ名相として称すべきことあ

らん」と仰せられてゐる。現実には空であり煩である。然し乍ら此の現実にのみ執する時人は之を疲厭しそしてそれから離脱せんとして死を求むる。然し乍ら無為を以て事となし、無想を以て相となすと仰せらるゝ如く、此の空がそのまゝ有である事を思はねばならぬ。それは理想であり私が永久生命につらならんと志した、否、志さざるを得なかつた理想である。其処に始めて太子の告白し給へる、「ただ大悲息む事なく志益物を存す」の意義が現成するのである。大悲、益物、何といふ衆と共なる人生を思はしむる御心であらうか。私は此の心を持たねばならない。大悲、益物それは私にとつては同信協力と云ふ事ではないか。私が永久生命に生きたいと念願した内心は同信協力によつて唯一の形が与へらるゝのではないか。

「国家の事業を煩となす、但大悲息むことなく志益物を存す」

此の御言葉を拝誦して感ずる事は、人生に於ては生ある限り迷ひより解放される事は不可能であると云ふ事ではないであらうか。そしてその迷ひの中にありつゝも而も人間を死より助けて世に交はりつゝ永久の生命につらならしめ得るものは、迷ひにありてそれに執せざる大悲であり益物ではないであらうか。

悲と仰せらるゝ、それは迷ひを解決すべくもあらぬ故にこそ悲と仰せらるゝのではないからうか。而も益物と云ふ、それは悲に拘泥せざる所の積極的な生活意志即ち衆と共に大道に帰入せんとせらるゝ意志ではないであらうか。それは自己一身の修業意志ではなくして協同意志である。私もただ現世を煩と思ひそれは畢竟解決せられぬものである事のみを知つたのでは駄目だ。私に最も要求せられるのは此の協同意志だ。それこそは無意味なる死より私を逃れしめ、国家永久の生命につらならしむべく私の生命を誘引するものではなからうか。

以上私の反省は不完全である事を自身ながら感ずる。私はただ太子の御言葉、

「国家の事業を煩となす。但だ大悲息むことなく志益物を存す」

の一句を推し戴きつゝ、心に留めて帰らう。此の御言葉の内容は私が友らと協力生活を通しつゝある間に更に更に明確に完全に私の心に体感せらるゝであらう。

附記

解決と云ふ事程恐しい事はない。無解決の確信は永久に人間を生きしむるものである

のに、解決と感ずる瞬間に襲ひ来るものは、一切が固定された死であるからだ。

御嶽合宿にて詠める

あゝ友よ心かくさず語らなむ心結びて進まむ日近きに

至らざる我が心をもくみたまふ友をし見ればうれしさあふるも

我がまこと足らざる故に我が友の心思はずふるまひたりしか

我がまこと足らざる故にかよはざる心のまゝに離れし友はも（昭和一六・七）

昨日

別るゝに沈める心知らざるか木々に鳴き立つ夕暮の蟬

蟬がなく万力の野に君と二人語りし時を忘れて思へや（昭和一六・九）

友人への書翰から 数日前、僕は夕方家の窓からさほど遠からぬ処を巡礼が一人通るのを見かけた。僕の家は町からかなり距つてゐる麦畑の中にあつたが、その巡礼は町とは反対の松の茂つた丘の方へ歩いてゐた。晴間のない雲が夜の来るのを益々早めてゐた。

友よ、

今我巡礼の行くを見ぬ

曇りつゝ暮れる御空のもとに

冷たき鉄路を

漕てしなき鉄路の上を

薄衣なびかせつ

独り行く巡礼の姿を。

その姿見つゝ

我は思ひき

人の世の悲しき道を

行方もわかぬこのうつし世を

見よ

巡礼の過ぎ行く姿を。

夕暗せまるに

漕てしなき野路ゆくその足どりを

ゆるがぬ足どりを

淋しともなき。

あゝ

——祖国のいのち。

僕は知る。そして確信する。僕等の短くはかなき生命を托すべきは、永遠の宇宙に一つありて二つなき、祖国日本、祖国日本の永久生命であつたと。

二十六、百武尚美



百 武 尚 美

大正十年六月三日出生。旧制長崎県立瓊浦中学校卒業後、昭和十五年四月、旧制佐賀高等学校理科乙類入学。

同年九月、佐賀高等学校「同信会」の合宿に参加。友らとの思想研修の生活に入る。同年十月、熊本高工同信会結成式に参加。翌十六年二月、山口県萩で開かれた「中国九州合同連絡会議」に参加。次いで同年三月、福岡県八女郡木屋村光善寺に於ける「全九州合同合宿」に参加するなど、全国の友らとの同信協力につとめる一方、学内では一般学生、学校当局の冷淡な対応をも顧みず、学校教育の現状打開に全身を献げた。

昭和十六年七月、夏季休暇に青島チンタウの両親の許に帰省し、八月下旬帰佐の後、病を得たが高熱を冒

して勤勞作業に従事。折しも佐賀歩兵聯隊に軍旗を迎ふる式が挙行された。彼はその式に参列せんとして、友らのひきとめるも聞かず出校したが、高熱に耐へ得ず病床に伏し、間もなく急性肺炎を併発し、昭和十六年九月二十日逝去。時に数へ年二十一歳。昭和十七年九月『百武尚美遺稿』(A5版、五十ページ)が同信の友らの悲しみのうちに出版された。

昭和十五年～十六年——二十歳～二十一歳——

君が代

あふれくる涙につまり一時は歌はずありき君が代の歌

靖国神社臨時大祭

幾山河踏み越え進みしみ民らの御霊静かにしづまり給へ

安らかにしづまりませませ我友とみあとしたひて国守り行かむ

熊本合宿に来るに際して

友達の来りてすゝむるまごころにただうれしくてためらひうせつ

朝露をふみて宮道につく吾は此の国にしもよく生れ来し

身に浅き学問こそは不忠ぞと聞きしその時身の毛よだちぬ(昭和一五・九・三)

黒上先生の慰霊祭に連なりて

師の君のみたまのみ前に正座すれば微笑ほほえみみたまふ御姿浮び来

見ぬ人の御姿前に出でくるはこれぞ心の通ふなるらむ

小包を受けとりて

はろばると黄^{コウカイ}海越えて来し靴に親の慈愛のこもれるぞうれし（註 両親は青島で生活中）

十月十二日 晴 午後一時同信会「しきしまの道会」に行く。二時過ぎまで読^{よみあはせ}合をす

る。僕は歌をよむ事が非常に下手だ。もつと馴れなければ駄目だ。後、歌の会、田中君の歌力強し。五時本日は終了。我々は勉強しなければならぬ、猛烈に努力しなければならぬ。先輩に頼らうとする気持の有る間は未だ我々の力の足りなさを示すと稲垣兄（註 稲垣武一氏、佐賀高校生の先輩）云はる。

十一月二十六日 晴 本日学校で北村（註 北村維朗氏、佐賀高校生の友人）より『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』及び『黒上正一郎先生遺歌集』を受け取る。嬉しさ胸に溢る。

十一月二十八日 晴 一日と目に見えぬ寒さは迫り来る。明治天皇の御製に深く打たる。

鬼神もなからずるものは世の中の人のこゝろの誠なりけり（明治四十三年）

××教授、独逸の童話を讀め我が国のをけなす。「我が国の童話は殺伐復讐の氣大いに溢る、大人をして心の糧とならしむる如き童話なし」と。桃太郎の童話を彼は單なる侵略征服の精神のみ有りとした。「赤穂義士の話は最近は、忠臣と云ふ意味に於て説いて居るさうです」と。彼の斯くの如き見解態度甚だ遺憾。放課後北村・志津田・村上と四人で高橋先生（註 高橋鴻助氏、当時、旧制佐賀高校教授）宅へ『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の読合に行く。青島に手紙認む。

昭和十六年元旦 晴 午前七時起床直ちに諏訪神社に参拝す。人多し。此れ神国日本の一表徴か。行交ふ人々の面には新年を寿ぐ相と云はんよりは嚴然たる相貌が表れてゐた。朝の新鮮な空気を満喫しながら静かに社頭の前に僕は立つてゐた。二拝二拍手「民我等もろともにまめやかに我が大君につかへまつらむと誓ひまつらむ」と二誦一拝。

昭和十六年歌会始御製「漁村曙」

あけがたの寒きはまべに年おいしあまも運べりあみのえものを

今上天皇御製拝誦

年おいししづのあまびとみそなはず大御心に涙流るゝ

二月一日 午後我等一行三名は車中の人となり、佐賀の友に一時の暇を告げた。『留

魂文鈔』(註 日本学生協会編纂の書、日本精神史文獻抄)を中心に話題を進め乍ら一途目的地へ。

九時半萩駅頭におり立ち一條・松吉両君の出迎を受け氷結した路上を幕末の殉国の志士を偲びつゝ今地様方(註 今地延二氏)へ急いだ。今地様御夫妻及既着の友に絶大の歡迎を受け云ひ知れぬ深い感銘を受け、此の瞬間同信の友に尽きせぬ信賴の情を懐き、過去の自己反省の過誤を打開する力強い信念を得た。今こそ日本人本然の姿に弛緩せる心を打破して立ちかへる事が出来た。此の日は座談の形式にて二時に及ぶ。加藤・松尾両兄の過去千五百年の日本の歴史に起因する現状を披瀝「誠の心」を強調し、我等が眞の日本臣民としての精神維持の為に御製拝誦が最も基底となるものであるとの熱烈なる言葉に打たれ、猛烈な反省と決心を促された。彼等の熱烈な求道心と一座の間に流れる精神

融和一体の感情を佐高の友の間に伝へんと決意す。宝辺君の御製拝誦。

二月二日 午前九時半松陰神社に赴く。ありし日の先生を彼の松下村塾に求め萩市を俯瞰する嵐吹き上ぐる松林の中に立てる簡素な墓石、殉国の志士の墓石の前に、号叫するをたけびを現しく感じ一同殉国の誓を新たにしたのであつた。午後は昼食時も引続き連絡会議を続行。此の際毎朝不得已やむをえざるの外御製拝誦断行、例会の具体案作製の下にその実修を断行、我等の祖先より受け継げる忠誠の念で我等の心情を吐露し友の獲得につとめん事を意志す。御製拝誦に相まちて學術研究に務む可し。和氣藹々の裡に我等一同はしきしまの道を作り久野兄の御製拝誦『神洲不滅』の合唱に決意の調高く閉会。此の間、初日加藤兄が「此の機会に我々はお互に充分に知り合はう」と言はれた言葉は完全に果されたものと信ず。此の機会に私は、我等の最後によるべき原理は唯御製拝誦より生ずると云ふ事、我々は友を憶念して互に勉勵する事に依り維持されて行く事を体験する事を得ました。信念は体験に依つて絶対性を帯びる。四時三十八分松江・鳥取の友を送る。去り行く友の姿は尊く美し。五時二十八分我等は尽きせぬ名残を留めつゝ堅き決意を懷

きつゝ思を佐賀の友に馳せるのでした。

三月十六日

午後小高き山にのぼりて防人、幕末愛国歌を読みつゝ

木屋村の岡にのぼりて見渡せば風ふきまさり水の音たかし

声もかぎり空にむかひて歌読めば我防人と心勇むも(光善寺台宿、しきしまのみち会にて)

友
に

此の言葉友の心に通へかしとまごころこめて筆を運べり

三月十七日

午後『明治天皇御集研究』(註 三井甲之著)序説輪読。甚だむづかしく思

はれます。日本帝国の不滅の不可思議の信を我等は意志し続けねばならぬ。四時過ぎ北

村来る。雨降りて暗し。夕食時竜野兄来る。食後江頭兄来る。夜『国家と個人』の輪読。

戦線に出征した一人息子の生還をひた祈る老母の事を陛下への忠誠心如何といふことよ

り伊東兄非難す。母子の情を忘却すれば萬葉集の防人の歌は何処に価値ありや、感を去

るに非ず感をよく弁へて惑はざるのみ。今村兄宗教の意義を問はる。我等は、大君への

随順、臣道実践しきしまの道にのみ宗教を見出すものだ。概念で規定するものに非ず。

二十七、工藤昌男



工藤昌男

大正十年六月十九日、福岡県行橋市に生れる。

旧制県立豊津中学校を経て、昭和十三年四月旧制第五高等学校入学。昭和十六年四月東京帝国大学文学部国史学科に入学。

五高入学後、学内思想団体として歴史を持つてゐた「東光会」に所属した。同級生の言によれば「彼は弓道部に属し、いつも着物を着て颯爽と歩

いてゐた。よくさわやかに話をしてゐた」と。

東大入学後、五高時代からのつながりで、「東大精神科学研究会」に属し「正大寮」に入り、全
国の大学、高等専門学校の学風の改革のために闘ひ続けるうち、不幸にして胸を患ふこととなつた。
弓道で鍛へた彼にしては考へられぬことであつた。後小康を得て、昭和十八年九月卒業、郷里行橋

に帰つて療養に専念したが、翌昭和十九年七月九日、遂に不帰の人となつた。彼は病死ではあつたが、まさに祖国日本の教学刷新の思想戦の戦士であつた、といへよう。時に数へ年二十四歳。その墓は郷里を一望の下に見下す小山の山ふところ、大きな池の上の松林の中にある。

昭和十七年～十九年——二十二歳～二十四歳——

有感

しるしなき物思ひして徒らにこゝだくの日を過しつるかな
病癒えて後にと思ひ怠りし劣弱精神打ちてしやまむ

友どちの心につらなり我もまた病の床にたゝかひ行かむ

このごろはみ友らひたに恋しくてすりぶみのうた繰返しよむ

すりぶみのうたよむまゝにみ友らの戦のさま偲ばるゝかな

国内に分れたゝかふはらからの歌の調の高くもあるかな

われもまた歌を歌ひてはらからの戦列に入らむ只今直ちに（『櫻の木集』昭和一七・四）

デュルクハイム著『生活と文化』を読み（論文・抄）

デュルクハイム氏の近著『生活と文化』を通読して氏の生き生きした言葉と総合的な

見識とに種々示唆を受けた。

六篇の論文中「ナチスの文化観及び文化政策観」及び「科学と国家」「美と民族」の三篇を特に興味深く読んだ。以下氏の言葉を引用しつゝ感想を述べて見たい。

我々の文化創造は我々の生の地盤たる祖国の永久生命に随順帰依する時、真に偉大なものになるのであるが、氏もこの点を強調して「文化とは民族の本質が持続的な形をとつて表はれたものであり、従つて民族固有の創造力の最高の表現である。」(傍点筆者以下同じ)と言ひ、又「ナチスの、反自由主義的文化観に於て文化的現実の枢軸をなすものは、個人と普遍者(人類一般・普遍的人間性、普遍的方則など)との対立ではなく、成員と全一体との稔り豊けき生きた緊張関係なのである。」(十七頁)と云つてをる。氏は民族、民族性、民族の同一性といふことを繰返し力説してゐるのであるが、僕は「祖国の永久生命」といふことばの方が体験的であり而も総合的、生命感覺的である様に思ふ。これはデュルクハイム氏を含めてドイツ人が永久統一国家生活の歴史を有しないこと、換言すれば一貫せる国体をもたない為であらうと思ふのであるが、デュルクハイム氏が

「民族の全一性のために個々の成員が生命を捧げる」と言つてゐることは、我々にあつては「わが大君にまめやかに仕へまつる」「天皇陛下萬歳」といふ最も具体的なことばに最も強く表現せられてゐるのである。

合理主義文化観に於ては、真理の価値、意味、目的はそれ自体の中に存すると見られ、それ故科学者は実際の現実を遙かに超越して専ら真理といふ独自の価値に奉仕すべきものとされてゐた。芸術に於ては、如何にして作り出されたか、如何にして演ぜられ、如何にして表現せられたかといふことのみが問題となり、ここに表現せられるものは何か、ここに形態となつて表はれた実質内容は何か、この形態に充足を見出した本質は何者の生み出した子であるか、といふことは全然問題とならなかつた。

ここには価値秩序の顛倒と問題の本質についての見方の誤謬がある。

(日刊『日本太郎』昭和二六・二二・一八)

病床の梅明るさや紀元節(昭和一九・二)

二十八、末安悟郎



末安悟郎

たちの慕ふところとなつた。同年十月、九州帝国大学医学部に入學。翌二十年、たまたま福岡、九州軍需管理部に赴任してきた寺尾博之氏に接し、その導きを得るに及び、氏を文字どほり兄と慕ひ、稀に見る深い交りを結んだ。この寺尾博之氏（本書前編『いのちささげて』に収録）は終戦直後、福岡市郊外の油山で自刃するが、そのあとの彼の生涯は、寺尾氏をはじめささきの戦ひで戦死していつた

大正十三年六月、愛媛県宇和島市に生れる。七歳の時佐賀に転居。旧制佐賀中学校を経て、昭和十七年、旧制佐賀高等学校理科乙類に入學。昭和十九年三月、山口県大道での「合宿」にはじめて参加。同年六月から八月にかけて高瀬伸一氏（本書収録）とともに、佐賀市日新小学校において代用教員となつた。短期間ではあつたが、特に子供

多くの同信の先輩、学友らとの、靈的な交流の中にその若き生命を燃焼し続けてみたといつても過言ではあるまい。昭和二十一年八月七日、佐賀市本願院で行はれた、故田所広泰、百武礼之、高瀬伸一、三氏の合同慰靈祭の夜病にたふれ、わづか一ヶ月後の九月五日、清純極りないその短い生涯を閉じた。時に数へ年二十三歳。

その日は朝方から病状が俄かに悪化した。夕刻「戦ヒツカレテ風ニナビクガゴトク、江頭サマ（註）江頭俊一氏の令妹、富美子さんのことならん——富美子さんは前年十月、寺尾博之氏のあとを追ふやうに逝去）ノトコロニナビテユキマス」との言葉を残して瞑目、九時四十分ごろ再び目を開き、病床に馳せつけた佐賀の友らに乞うて『神洲不滅』（註「日本学生協会」の「式典歌」、三井甲之作、信時潔作曲）を合唱、とぎれがちながら第二節まで高らかに歌ひ、その後、「何か言ひ残すことはないか」といふ友の言葉に、「別ニ何モノイガ、日本一ノエクスパートニナツテクレ、ソレダケダ」といつてふたたび意識不明に陥つたが、十時五十分ごろ意識を回復、最後に力強く「天皇陛下萬歳」を三唱、そのまま昏睡、遂に十一時四十分永眠した。逝去一時間前に次の二首を残した。

アマガケルトリニモナリテハルカナルトモラノモトヲトハマシモノヲ
ケフモマタヒトヒヲソラニウチアフギトモラヲコヘドモタヨリキマサズ

昭和二十年——二十二歳——

特攻隊に征きし松本兄を送りし夜よめる

砂浜に寄せてくださるしほざゐの音きこゆなりしぼし黙せば

特攻隊に征く益良夫と語らひてすぐせし今宵永久に忘れじ(昭和二〇・四・二九)

志賀島に渡る途次に

彼方なる沖辺のしまわわたつみの潮けぶりてさだかならずも(昭和二〇・六・七)

八代に向ふ車中にて 田中兄に(註 田中秀男氏)

み空ゆく雲ながめつゝ遙けくも離りし友をただに偲ぶも

過ぎし日のおもひはこもる筑紫路を吾は旅行く友なしにして

現身は会はむすべなし今はただ友偲びつゝ生きなむ我は(昭和二〇・六・一七)

同信会とは

つくるはぬことまだしらぬ

うなる子のもとの心に

友と呼び友と呼ばれて

むらぎものこゝろさながら

振舞ひて

胸内のおもひことごと告げあひて

苦しきは共に苦しみ

かなしきはともになしみ

よろこびはともによろこぶ

男の子の集ひ

終戦の折に

天皇の御代ほろびしに月読つぐよみの光は照れる何ぞ悲しき

すめろぎの萬代祈りみいくさに散りし友らに何とこたへむ

現身は消ゆとも魂は友どちとかへさざらめやすめらの御代に

明日知れぬいのちと仰ぐ月かげにみ世のゆくてをただいのるなり

終戦後はじめて川上を訪ひぬ（註 佐賀市郊外）

岩群の隙ゆあふれて激つ瀬のたけいきほひともしむ吾は
夏草の茂れるなかをさらさらに流るゝ清水よ永久に絶えそね

黒上正一郎先生、百武尚美兄のみたままつりにつらなりて

かゝる世に生きながらへて友しらと霊まつりすることの悲しき（昭和二〇・九・二二）

寺尾大兄『留魂』第三号をいただきて

（註 寺尾博之氏、昭和二〇年八月二〇日、福岡市郊外油山において自刃、本書前編に収録）

うつしゑの君が眼はやさしくも吾を見守らすよありし日のごと
兄のごとやさしかりしに現し世に再び会へぬことの悲しさ
なつかしき君許ゆきてここだくの思ひ語らむときはいつぞも

寺尾大兄の夢を見て

現し世に会ふすべもなみ夢路にて語りし君の何と恋しき

江頭大兄のおくつきに詣でて（註 江頭俊一、本書前編『いのちささげて』に収録）

語るべき友もなくして秋空のもとに立ちます君がおくつき

おくつきのまへにかがみて生ふる草を一本一本取り除けゆきぬ

江頭富美子様を見舞ひて

とこしへを契りし人は先立ちて病みます君のみ心いかに
一日一日やつれゆきます姉君のみ心偲べば胸裂く思ひす

相聞

人さわにむれゐるなかにわぎもこの姿みえしはたまゆらにして
日の本のをみなのみちなたがへそと祈るこゝろのかよへよいもに

北満綏稜梟端穗村開拓団全団員、一千余名自決の報を新聞紙上にみて

思ひきや思ひかけきや国敗れ醜^{しじばら}輩村をおそひ来むとは

自決すと思ひ定めてはらからは集ひましゝか神祭る日に

晴着きて親子手をととり自決すと集ひしはらから目にみゆるがに

帰りえぬ祖国の空を仰ぎつゝ失せにし人らのおもひは如何に

一千余名集ひてともに宮城のかたをろがみてむせび泣きしか

たまのをの絶えなむきははらからの胸内偲べば涙あふれく

はるかにも祖国の空をのぞみつゝ刃に伏しゝはらからあはれ
北満に無限のうらみのみつゝも失せにしはらから忘らふべしや

長門峽にあそびて

岩がねにゆきなやみつゝ名にし負ふ長門峽の奥深くゆく
岩群にせかれて激たぎちほとばしる水の流れは見るに美としき

旅行に出てから寺尾さんはじめ先輩友らの夢ばかりみます。

高瀬大兄を偲おもひまつりて

発つしだに吾が手をしかとにぎりしめ笑ましゝおもわ眼まなこ交ま去からず（註 した、時の意）
うらゝかに照る陽光ひかりをあびて花園に友と語りし日のなつかしき

小柳陽太郎宛（註 佐賀高校生の友人）おたより有難うございました。一人で生活して
あるとき来た大兄のみたより、うれしさ御想像下さい。

「人に語れぬことも語り得る友が現世にあつた」といふことが入信の大きな動機であ

ります。友らの友情の世界こそ入信の動機でありました。友をおもふ世界に我を忘れることこそ唯一の生への途だと痛感して帰佐致します。いろいろ書きたいことがあります。余白なく、今度は佐賀でお話致しませう。インキがきれて鉛筆ではしり書きして失礼致します。うれしさの余り鉛筆をとつて……草々

昭和二十年十一月十九日 山口県吉敷郡大道村新館 松光館内にて

復員記事をよみて

出でむかふ人もあらなくはらからは再び祖国に帰り来ましぬ

霜月もはや末なるに夏衣うすきまとひて帰り来ましぬ

をりにふれて

ことごとく木の葉は落ちてとのぐもるみ空に聳ゆ柿の一本

大空をとさせる雲のやゝに動きかすかにさせり天つ日のかげ

冬枯の庭はさぶしも木の葉落ちて訪ひ来る鳥のかげもあらなく

御製「社頭寒梅」を拝しまつりて（註 昭和二十年御歌会始の御製）

風寒き霜夜の月にすめぐにの行末祈らす大御心はも

ひとり立ちて国の行末祈ります大御心にただになかゆも

賤しづの身は何惜しからむ大君の悩ます御心偲びまつれば

大君の大御心に末つひに開けざらめや常夜とこよなす世も

今上天皇御製 社頭寒梅（昭和二十年）

風さむき霜夜の月に世をいのるひろまへきよく梅かをるなり

昭和二十一年——二十三歳——

昭和二十一年元旦

あらたまの年のはじめにみ友らと立てし誓の消ゆと思へや

小柳大兄御宅にての宴に

心知る友らまさずば今の世に生くる力もたえはてなむを

相聞

ゆるされて永久の契りをむすばなむ時まちたまへはしきわぎもこ

もろもろのさやりのなくば下思ひ今告げまつり契らむものを

君恋ふるこゝろごとく告げまつり永久を契らむその術もかも

病み床にひとり臥しては幻に君をゑがきて恋ひわたるかも

寺尾大兄詠「現し世に再び会はむすべなくも今はなげかずやがて会ふ身は」を
和多山僊平大兄の遺稿集中に見出して

討死とこゝろ定めて益良夫の道一筋をふみゆきましゝか

偲油山詠（註 福岡市南郊、寺尾博之氏自叙之地）

をやみなく雪降るなかに油山君がおくつきひとり立たすか

木枯よさけてこそ吹けみ国憂ひてゆきにし人のその奥津城を

姉の死に逢ひて（註 姉とは江頭富美子のこと、前年一〇月二三日歿）

花びらの一枚ごとに散るやうにやさしき姉はこの世去りけり

につこりとほゝえみながらこの世をば去りにし姉のひたにこひしき

映画「次郎物語」をみて

青空を仰ぎて

たえがてに

一言

「母さん」!

「母さん」と呼べど

いらへもあらず

せきあぐる涙

あゝ

「母さん」はもう此の世の人でない

いま一度

来ませたらちね

いま一度

吾を抱きたまへ

亡き母の幻追ひて

たへがてに

母が名呼ばふ

あはれ幼な子！

母いますときは

母の心にたがひ

母が心をなやまし

母よりうとまるゝこと多かりし子！

而も

母がみ病あつしとききて

可憐

あるは枕辺のみとりに

あるは使ひ走りに一心こめぬ

そのこゝろ母に通ひて

重き病の床ゆ母のたばりし守札

ひしと胸にいだきて

益々みとりに心くだきぬ

ちさき手をあはせ

「母さん」のみ病いやしたまへと

氏神に祈念をこむるいちらしさよ！

されど

母はつひにみまかりましぬ。

野末の土手に

か青なるみ空仰ぎて
亡き母が名呼びつゝ
泣く子あはれ！

人の世に生くるは悲し

父母の心にたがひ

み友らの心にそむくことのみ多かる日々！

あゝ

この子のまこと

我にあらしめよ！

春の夜

友あまた大御軍に散りにしをなどてや我はひとり残れる

死すべきにいのち長らへ再びの春のめぐりに会ふがかなしき（年月不詳 二十一年春か）

みいくさにいのちささげしつはものゝねがひとぐべきわれらならずや

二十九、近藤正人



近藤正人

大正四年四月十日、群馬県吾妻郡原町に生れる。昭和七年四月、東京府立四中から四年修了で第一高等学校文科甲類に入学。「一高昭信会」に入会し、讃仰研究と後輩の勧誘とに没頭する。昭和十年、一高卒業、東京帝国大学文学部支那哲学科に入学。十三年三月卒業。十四年三月から九月末まで「明光塾」塾頭、「日本学研究所」所員、「日本学生協会」幹事、「精神科学研究所」所員となり、「日本学生協会」の全国大学高専校の学風改革の運動に専念し、支那問題を中心とする論文を多数発表。昭和十四年「全国学生夏季合同合宿」(日本学生協会主催、神奈川県麻溝村無量光寺)に運営本部の役員として、また翌十五年「信州菅平全国学生合同合宿」には、第三隊長として獅子奮迅の活躍をした。この菅平合宿終了後、四百名全員が上

京、日比谷公会堂で行つた大講演会に於いて担当した「閉会の辞」は、正に圧巻そのものであつたといふ。これについては、小田村寅二郎著『昭和史に刻むわれらが道統』の中に、「一高時代から天下にその猛気こもる熱血の弁舌で有名であつた東大文学部卒の、近藤正人氏（後に戦死）の絶叫的な改革意志の表示を以て、この大講演会が閉ぢられたのである」と記されてゐる。

昭和十六年、水戸高校生徒処分をめぐる事件においても、その捨身の熱弁が聴衆に多大の感銘を与へて、事態收拾に大きな役割を果した。十七年夏、教育召集で高崎聯隊に入隊、除隊に際し初年兵を代表して聯隊長に答辞を述べた。その格調高く堂々たる答辞に聯隊長以下深く感銘、聯隊長はとくに本人に対し幹部候補生として志願することを勧めたがこれを辞し、後に一兵卒として応召した。同十七年九月、聖和学園勤務。

昭和十八年一月応召、春頃ニューギニアから便りがあつたが、その後連絡がとだえた。戦死の状況については、御遺族の書かれたものによると、次の通りである。

「昭和十九年六月、ニューギニアにてマラリヤに罹り後方輸送となり、パラオを経てマニラの病院に退避『米軍上陸近し』の葉書が最後のものとして十二月落手、従つてマニラ攻防戦で戦列に入つて戦死した（昭和十九年十二月十日前後）ものと思はれます。」と。時に数へ年三十歳。

昭和十三年——二十四歳——

小田村寅二郎宛 昨日午前高田教授より召状をいただき御宅へ伺ひまして総長会見の件につき穏当な注意をうけました。

高田教授は「小田村といふ者が退学を覚悟で活動してをるといふ話ですが、君も卒業間近故、学生としての範囲を外さぬ様に願ひます」といふので、小生も課長との会見願末、学生課長の無責任振り、河合教授等の講義内容、黒上先生の教育精神等を強調しましたが一々頷かれてをりました。法学部については「東洋政治学」が闕如してをるといふ御詞でした。(中略)

小生としては、大学の革新に際し旧套恋々の現状から処罰される事は、殊に青年としての小生等の情意の発露もあり、覚悟済であります。しかし大学の革新を学内に於て純粹に熱望し、これを実践化せしめつゝあるものは僕等を措いて一つの力としては存在せぬのであり、殊に大学の革新は文相私案の公選制や、教授の罷免によつて実現せられ保持さるゝものではなく、学内に正しき伝統が蔽存する事にまつ事重大でありますから、

小生等は学生としての立場より絶叫して参る事が忠誠であると信じます。それは『学生生活』を機関とする教授学生の思想言論との不断の交渉にまつ事であります。

神社問題に於てもさうであつたが、今回もよく学生としての吾々周囲の現実相を洞察し、運動化の前提に思想宣布が是非着実に要求されます。先輩の意志を現に我々の運動に生かす為には吾々の周到の識見が必要です。

かくして内外呼応して実力をもつて大学を改革する事は神意に随順する真実の行動であります。

活動の中心として日夜辛苦される貴兄の御苦心をしのび、事は一日の計に成らざる国家の根本事故に我等種をたやさぬ事が実に最も大切な事と存じます。

然し乍ら、凡そ事を為さんとするにあたつては消極性は絶対に永久の生命をつたふる所以ではないと信じます。要は大学の思想伝統の打破革新一本槍であります。(昭和一三・九・七)

(註) 小田村寅二郎氏が、東大法学部の学風を批判したるかどをもつて退学処分につせられた、いはゆる「小田村事件」の折のもの。高田真治教授は当時「東大精神科学研究会」の指導教授であつた。

昭和十四年——二十五歳——

支那古典の現代的意義（論文）

最近の新聞紙上に佛教界の泰斗高楠順次郎博士が小野玄妙博士と協力して四庫全書（註経・史・子・集四類の叢書、清の乾隆帝の蒐集にかかるもの）普及出版の事業に敢然着手したといふ記事が見えた。

その意図が興亜国策に対する内面的貢献に在る事は、学者の本分をつくすものであるが、支那に関する斯る^か学術的重大事業が、漢学界の先覚者達によつて挺身実行せられずして、却て専門外の佛教界が然も大藏経出版の経験を以て当らるゝ両博士の手に取上げられたといふ事は、我が学界の現状の混沌を示す一現象であるといひ得る。時勢とは迎合乃至^{がんり}厭離し得る如き二義的の他者ではなくして、学術も亦其の中にのみ生存消長する所の人間生活の総合的生成態たる事、言を俟たぬ。時勢に超越せる文化財とは存在意義

なき存在といふ如き架空の幻影であるのみならず、人生の嚴肅性を蠱毒し人間協力の必須性を遺忘せしむる、謂はば人生を散漫化せしむる禍因である。

吉田松陰先生は、

夫天下以_レ經学文章_ニ為_レ教。蓋亦久矣。經学益明文章益美。国威日_レ細。外夷日_レ熾。斯道之所_ニ以_レ為_レ道者。果何在乎（『講孟割記跋』）

と痛嘆せらる。凡そ人生に影響をもつものにして、始めて存在せるものと謂ひ得る。松陰先生の実学精神は人生に影響なき物を撥無し、むしろ事事物物を現実にて死活せしめたのである。この実学精神は、また即ち所謂史学精神であつたと云ひ得べく、先生が、志学の意欲勃々たる廿余歳の頃、遊学の地江戸より家兄に記せる書簡にも見ゆる如く、經学に敢て傾倒せずして史学を以て学の真髓とせられた。此の史学的精神とは、過去の文化を他者とし観念の廓中に止まらしめずして、その一切を生成開展しつゝある現実の内呼びもどす威神力である。

生ける者にあつて最も尊きは生きんとする意欲である。この力によつてこそ、事事物物の本末は正され、人生は根本義に則つて真実の体系を附賦されるのである。然してこ

の意欲は強烈なればなる程、他なる一切をわが中に燃焼せしめてその方向を無窮に貫かうとする。かゝる燃焼せる所謂生命の交錯共存が人生の生成である。

山鹿素行先生が『武教小学』に於て、

士ノ恆ニ語ルベキ者ハ、一義不義ノ論、古戰場ノ事、古今勇義ノ行、時代武義ノ盛衰、皆議論シテ今日ノ非ヲ戒ムベシ。(言語応対篇)

と示す。その「議論シテ今日ノ非ヲ戒ムベシ」といふ詞に松陰先生の心絃は共鳴して、

此ノ類ノ事ヲ懸空ニ論ズルハ古今史論家ノ常事ニシテ、武士道ニ於テ毫モ裨益ナキコトナリ。故ニ先師ノ教ハ議論シテ今日ノ非ヲ戒ムベシトアリ。(『武教講録』)

と実学の精神を鮮やかに闡明されてをる。

この実学精神は松陰先生の「やむにやまれぬ大和魂」と歌へる嚴肅緊迫の精神の具現活動であつて、鋭敏なる威力の極致である。陽光に浴して偃したる草木が蘇り、滋雨に沾されて早ける禾穀が息づく如く、枯渴せる命題も隔絶せる文物も、この威神力によつて史的活物として蘇生するのである。例へば孟子が、

尽ニ其心ニ者知ニ其性ニ也。知ニ其性ニ則知レ天矣。

と、抽象的命題を配置し後世の儒家をして、その語感より遊離せる觀念の摸索に迷行せしめた詞に対し、松陰先生は、

尽ス其ノ心ヲ一トハ心一杯ノ事ヲ行ハク尽スコトナリ。

と日本語化され、尽心なる名字を更に親切に体験化して

力ヲ尽スト云へバ十五貫目持ツカアル者ハ十五貫目ヲ持チ、二十貫目ヲ持ツカアル者ハ二十貫目ヲ持ツコトナリ。是ヲ以テ考フベシ。今人未ダ嘗テ心ヲ尽サズ、故ニ其一杯ノ所ヲ知ルコト能ハズ。若シ是ヲ尽ス時ハ、堯ノ民ヲ治メ、舜ノ父ニ事ツカヘ、孔子ノ道ヲ明ニスル、皆心ノ外ニ非ズ、唯心ノ一杯ヲ尽スノミ。若シ少シク行ヲ修メ、少シク事ヲ勤メ、少シク忠シ、少シク孝シテ、自ラ我善ク吾心ヲ尽スト云ハ、大ニ吾心ニ負オヒリト云ベシ。

と。又格物致知といふ大学八條目（註 四書のうち「大学」に示す修養の八項目。格物・致知・誠意・正心・修身・齊家・治國・平天下）の根本着手の処に關し、宋子が兩程子（註 北宋の學者で兄は程純公、弟は程伊川）の意を継承補足して

蓋シ人心ノ靈知ルアラザルナクシテ、天下ノ物理アラザルナシ。タゞ理ニオイテ未

ダ窮メザルアリ。故ニソノ知ルコト尽サザルアルナリ。コ、ヲ以テ大学始メテ教フルニ、必ズ学ブ者ヲシテ、凡ソ天下ノ物ニツイテ、其ノ已ニ知ルノ理ニ因ツテ益々之ヲ窮メテ以テソノ極ニ至ルヲ求メザルナカラシム。カヲ用フルノ久シクシテ、一旦豁然貫通スルニ至ラバ、則チ衆物ノ表裏精粗到ラザルナクシテ、心ノ全体大用、明ラカナラザルナシ。此レヲ物格いト謂フ。此レヲ知ルコト至レリト謂フナリ。

と、抽象的、それ故に却つて個人の勝心を挾める、非普遍的解明を下し、其の信よりしては持敬の二字を生じ（静坐）の工夫を産んだのであるが、之を躬を以て修めた素行先生は、「人品沈黙ニ罷り成り候様ニ覚エ候」と陥弱の弊を嘆ぜらるゝのである。松陰先生の格物致知に対する見解は、武教講録中の左の体験的の詞によつてそれを前記宋子の解明と較察すれば、先生の學術の威力と躍動性を如実に窺ふを得る。

格物致知ハ大学ニ見ユ、其ノ詳説ノ如キハ山鹿語類卷三十三聖学一ニ具ス、就キテ見ルヘシ、又上文ニ究理ト云ヘルモ此ノ事也、漢土ニテ外国ヲ抑ヘテ其ノ国ヲ尊ミ自ラ中国ト尊フヲ見テハ内ヲ尊ミテ外ヲ賤ムノ理ヲ悟リ、我邦中朝ト尊ムヘキヲ知り、漢土ニテ先王ヲ尊ミ宗廟社稷ヲ重スルヲ見テハ本ニ報むかイ祖ヲ敬スル理ヲ悟リ、我カ天

七地五（註 天神七代、地神五世）ヨリ代々ノ聖帝ヲ尊フヘキヲ知ル類是レ究理ノ学也、若シ乃漢籍ヲ讀ミ漢土ヲ羨ミテ我国ヲ遺シ漢土ノ先王ヲ尊ミテ我国ノ神聖ヲ疎カニ心得ル類是レ皆不究理ノ弊ナリ、何事ニ依ラス形跡ニ拘泥セスシテ神聖ヲ會得スルコト緊要ニテ、礼儀作法ハ総テ君臣ノ義、父子ノ親、夫婦ノ別、長幼ノ序、朋友ノ信ニ落着スルコトナルニ、其ノ所々ハ反テ心附カスシテ威儀容止ノ節宮室衣服ノ制等心現事ニ拘ハルコト是レ大ニ誤ナリ、且西蕃粘砲ノ術ノ如キ原皆是レヲ以テ国益ヲ開キ寇害ヲ防ク器械ナレハ其ノ理茲ニアリ、其ノ理ヲ知ラスシテ是レヲ学フ者ハ夷狄ノ陋俗ヲ羨ミテ我カ国体ヲ忘ル、ニ至ル、其ノ理ヲ知ラスシテ是レヲ惡ム者ハ是レヲ以テ妖教邪術ニ比スルニ至ル是レ皆一偏ノ見ニシテ並ニ非ナリ、神州ノ大体ヲ存シ万国ノ器械ヲ採用スルト漢土聖賢ノ書ヲ講究シテ我国忠孝ノ行ヲ資ラント事ノ大小ハ異ナレトモ畢竟同様究理ノ学ナリ

幕末の時勢に比し駸々乎として開展し来れる現代的情勢の、極めて顯著なる特徴二つあり、一は国家意識の墮落、二は不可避なる興亜使命の負担である。松陰先生をして今日あらしめばと憶ふ時、吾々は、先生の遺志を今日の時勢の渦中に再現せねばならぬ。

神理を会得し一偏の見を排せんと志すならば、また先生の遺魂を永留せしむるに庶幾いであらうか。

經書ヲ読ムノ第一義ハ聖賢ニ阿ラヌコト要ナリ若シ少シニテモアル所アレバ道明ナラズ学ブトモ益ナクシテ害アリ

と學術の原理を自主性に抛擲し、我が日本民族の精神伝統の崇嚴性を峻擧して、

道ヲ明カニシテ功ヲ計ラズ義ヲ正シテ利ヲ計ラズ

の言を以て孔孟生國を去るの志、果して奈辺にありしかを深疑し、「我レ孔孟ヲ起シテ與ニ此義ヲ論ゼント欲ス」と肉薄せる精神の威力こそ、偶像と迷妄とを打破して生に躍動する真個の日本精神の具現である。自主的精神こそ神理を会得し一偏の見におち入らざる威力ある生命の発現である。此処に、東亜共同体の理念といふ如きものが、學術の原理を遺却し抽象一偏の見に陥り、神理に隔離せる事は自明である。

畏くも、今上の御詔勅には「提携協力」とのたまふのであつて、共同といふ如き算術の加法に類する並列的理念によつては日漢両民族の隔意なき精神融合樹策の合謀は期し得べくもない。

一体、共同体論者の欠陥は史的生成の現実に全く空疎なる点に在る。日支の全面的交渉が、恰かも今次事変によつて始めて行はれた如く吃驚狼狽し惚惚として、寄木細工的論理を組織せる所にその所論の空虚脆弱性がある。

されば万全なる日支提携の実現は、徹底せる日支両文化素質の史的究明を前提とする。其処に、汗牛充棟の經史子集も現実の史的生命をさゝふる素材となる。然してその研究は、両民族の徹底全面的理解を目的とする故に、飽迄史的究明を要するので、史書の扱ひ方は特に自主的精神を以て着実に実行されねばならぬ。支那歴朝の史書は、各々その治期の基本と沿革とを文飾弁護する任務を帯びてをる為に、民族の真相と遊離せる史論が滔々たる傳統的傾向をなしてをる。特に周代以前の上古に於ける日本民族の支那に与へたる壓倒的影響の如きは、刷新せる史眼を以て再研究するのを必須とする。支那において、よし良心ある学者であつても、多く一家一曲のみに拘はれ、儒家は儒教研究の隆衰を以て第一関心事とし、為政者は権力の消長を以て喫緊事とし、全民族生活の隆類と遊離した部分的文化の俘虜と墮した道統の史的消長を明確に説き出せる朱子すら、

天運循環無_シ往_レ不_レ復_ハ。宗徳隆盛。治教休明。於_レ是河南程氏両夫子。出而有_ニ以_テ接_ニ

乎孟子之伝一(大学章句序)

と、儒教精神の伝統が、民族精神の伝統より遊離せる事実の如何に遠く如何に久しきかを氣附かぬ楽天的思想を露呈してをる。されば、綱目といひ、道統といふ詞も忠義といふ詞に比すべくもなき空虚の響をもつにすぎぬ。儒教の真精神は、治国平天下であり、全民族の協同生活が隆昌渙発するを以てその極致とする故、先王之道としての政道原理が礼樂制度として民衆の生活に浸潤せる先秦時代以後は、漢民族の自己欺瞞が愈々深刻となつて行くのみであつた訳である。朱子が治教休明をよくこ歆んだ時代もその真相は決してその様の樂觀を許さるべきものではなかつたので、學術の俘虜となる時、それが悠久の歴史と乖離ぐわいりせる独善的悲喜劇に陥る事を憶ふべきである。

君子ノ任トスル処ハ天下後世ニアリ(中略)天下ハ活物ナレバ、今治リタレバトテ、後必ズ乱ルルコトアリ。今衰ヘタレバトテ、後必ズ盛ナルコトアリ。夫治乱盛衰ノ際会ハ英雄豪傑ノ力ヲ致スベキ所

とは松陰先生の啓示せる第一義にして、悠久を貫く聖業に志を傾け、世界史を指導しつつある神意の発揚に参すべきが、全国民の喫緊唯一なる実践原理である。

車中故郷をすぎゆく

つらなれる山のおきふしたゝなはりつばらに見えぬ秩父山群

あまたたび通ひ見つれど榛名山仰ぎ育ちし姿あかなく

故里の秋はれわたり山河のつばらに見えて行きすぎがてに

秋空はたゞに晴れわたりおほらかの赤城の山は面映ゆるがに

をさなき日のいのち通へと生ひ立ちしその山河に手をかざすなり

刻々にうつりゆけども榛名山は昔ながらに仰ぎあかぬも

わが生ひし国にはあれど名も知らぬ山あらはれて汽車はわけゆく（昭和一四・一一）

上海より南京へ

み軍が敵のみやこへましぐらに攻めのぼりたる鉄路かなぢゆくなり

外はただ真闇こめゐて灯も見えぬ大野原のみひろごりてあり

停車場に人影もなく銃をとるりゝしつはものひとりゆききす

この闇の大野に銃火ひらめかしたゝかひつらむ日支の軍は

四億の民といへるに真闇なす大野のいづくにすまひをるらむ
鉄路をばあゆみてまもるとふつはものゝ姿みえねど心にしぬばゆ

昭和十五年——二十六歳——

辯証法發生の心理的地盤 (論文・抄)

二

岩波の手になるヘーゲル百年祭記念論文集にヘーゲルの弁証法に就いて西田幾多郎博士が述べてをる冒頭に、ヘーゲルの弁証法は、彼が精神生活に於ける内的矛盾に氣附いた処から生まれたものだといふ様に書いてをつたが、これはヘーゲルの弁証法をその發生的心理的地盤から見ようとするものでその点は正しい見解であると思ふ。然し乍ら、我々はその「内的矛盾」そのものを具さに検討して行かうと思ふので、然もそれは思弁の対象として取扱ふのでなく、人生に於ける人間の内的生活事実に基づいて、原理を矛

盾に指定する精神生活の価値を究明しようとするのである。

三

それに先立つて、マルクシズムに於ける弁証法の地盤をヘーゲルのそれと関聯せしめて一瞥する。

カール・マルクスが資本論の序文に、「予の弁証法はその根本に於いてヘーゲルのそれと異なるのみならず、その正反対である」又「弁証法は彼にあつては逆立ちしてゐる。吾々は神秘の外皮中に合理の核心を発見するために、それを転倒しなければならぬ」と云ふ。実はその「逆立ちしてゐる」と簡単に云ひ放つて自己の思想生活を客観的に反省せぬ精神を以てマルクスはヘーゲルの弁証法を無造作に借用した。この他人の根本原理を方便に借用するといふのが唯物主義者の本質と密接に関係した悪弊である。マルクシズムの弁証法の心理的地盤は、「内的矛盾」といふ所にはなくてむしろ「弁証法を借用した」といふ点にありこの「借用」といふ行為が実は唯物論そのものの思想的本質から出てをるのであるから究極の地盤たる唯物論を衝いて、其処の機微を明らかにしよう。

嘗てマルクシズムの最良入門書杯なと喧伝されマルクシズム全盛の昭和四年から五年に

かけて僅か一年に、実に三十五版を重ねた白楊社（この社の出版にかゝる月刊雑誌『歴史科学』の極悪は徹底してをり、「人物再検」と題して正成、親鸞、日蓮等の精神の威力を全く抹殺したものであつた）出版のブハーリン『唯物史観』には物質と精神との問題に關して、直截にマルクシズムを代弁して次の様にいふ。

「一つは延長を有し、空間に場所を占めてゐて吾々の感覚で知覚される——吾々はそれを見たり聞いたり感じたり味つたりすることが出来る。これを吾々は物質的（実有的）現象と呼ぶ。他は空間に場所を占めてをらず、それは触れられもしなければ見られもしない。例へば人間の思想とか意識とか感情とかは、こんな風のものである。」

これが、然もこれだけが、マルクシズムの物質及精神それ自身の内容的究明の全部なのである。かくして、マルクシズムは「物質」及「精神」といふ二つの概念、一つは感覚の対象であり、他は感覚の対象でないといふ簡單極まる規定に止まるこの二つの概念をそれ以上には内容的にその性質を何等究明しようとはせずに、この兩概念の關係の規定に直ちに出發して了ふ。

「人間は他の動物から生まれ出たものであること、そして『生物』といふものは結局

歳月を経るうちに初めて地上に發生したものであることを吾々は知つてゐる。地球がまだ冷却した遊星でなく、いくらか今日の太陽のやうに灼熱した球だつた頃には、地球上には生命もなければ考へる動物も居なかつた。『死せる』自然から生きたものが發達してきた。そして生きたものから考へることのできるやうな動物が發達してきた。(中略) 果してさうだとすれば(そして、さうであることは、自然科学が証明してゐる)物質が精神の母であつて、『精神』が物質の父でないことは明かである。」

物質と精神との実内容を極むる事を怠るのみか、この兩概念の關係を規定するに當つては、それは当時、自然科学の最新原理として開花したばかりの進化論(マルクスの『経済学批判』が世に公にされた一八五九年にチャールズ・ダーウインの『種の起源』が出版されたといふ)に一任して了ふといふ徹底した常識に終止してをる。史観は弁証法を転用し、存在論は進化論といふ一次元的直線的思想を借用して了つた。

「『精神』は一定の方法に組織された物質が出現する時にあらはれる。人間の脳髓が、人間の器官の一部が思惟するのである。そして人間の器官は非常に複雑に組織された物質である」

「故に精神は物質がなしには存在し得ないが物質は精神がなくても平然として存在し得る」

この、物質は精神を規定する、又存在は意識を規定する、といふその『物質』又『存在』の内容的究明は何等行はれぬまゝに、精神の自立性を抹殺して、この未知未詳なる『物質』といふ『概念』を主体とする社会観乃至史観に進展して行くのであるが、何故にしかく『唯物論』といひ乍ら物質そのものの究明をすらも怠つてをるのであらうか。此処にこそマルクシズムの重大致命の欠陥が伏在し、これがマルクシズムの非眞理性の脆弱を裏づけるのである。といふのは『物質』といふものは人間がその精神活動に投射された対象を把握せる表象そのものであるから、この物質といふ表象の内容が剋明にされぬといふのは、それを産み出した精神活動そのものに探求的即ち創造的要素が欠落せる事を示すものである。一体吾々人間の生存とは、動物ですらもが新鮮の食物と空気との不断の摂取によつて生存する如く、吾々は更に不断に新しき意識の体験をかさねてはじめて其処に生甲斐を感じるのである。この意識の体験とは、即ちその対象が自然たると人生たると、又自分そのものたると外存者たるとを問はず、すべてそれらが対象とし

て意識される事であるが、重要な点は意識の成立は必ず表象即ち『コトバ』となつてはじめて吾々の意識体験と云ひうるといふことである。故に意識の体験とはコトバの体験である。斯くして我々はコトバの体験によつてはじめて人間生活の圈内に入りうるのである。人間生活が本質的に精神生活といはれる点は、不断にコトバの新しい体験をかさねると共に自ら新しきコトバを生んで行く点にある。故に人間生活とは不断に生成する表現の生活である。この精神生活の不断の生成を欠落してをるといふこの点に、先にあげたマルクシズム唯物論が、物質といふ表象を更に具体的豊富な表象でみたす事を怠る無探究の態度の災禍が存するのである。それは測らずも弁証法や進化論の借用といふ行為に聯関する。人間生活の本質は精神生活、精神生活の本質は表象作用の不断の開展であるといふ見地が正しい見地なので、それ故マルクシズムの心理的地盤たる唯物思想は、生成するコトバの生活としての人間生活の抛棄そのものである。自らの詞を表現しえぬものは動物である。

因みに岩波新書最近版に三木清氏の『哲学入門』が出たが、それには「人間と環境とは、人間は環境から働きかけられ、逆に人間が環境に働きかけるといふ關係に立つてゐる」とある。

る」といふ様に、『人間』及『環境』の二概念に佇立して、その関係を形式的に操るのみで、本質的には、その何れの内容をも究明してをらぬ点、これは精神生活の欠落といふ点に於て些かも唯物史観から転向してをらぬ。氏がマルクシズムと異なる点は「環境が人間を支配する」と断言出来ずに此の兩概念を相互関係に糊塗し、却つて所旨を曖昧ならしめて了つてをるから、マルキストからさへも嗤はれるのである。この「あゝでもない、かうでもない」といふ觀念作用の反覆こそ亜流弁証法の思弁哲学の無間地獄である。これは対象なき意識とも云はるべき、幻影を追つて果てざる迷路の模索で、自分には一歩はより一歩正道に近づく様に感じ乍ら、事實は一歩毎に客観的史的現実生命より遠ざかるのである。これ三木氏の文筆には、言語のニュアンスが人を魅し乍ら事實は一人をも現実の歴史的情意に覚醒せしめ得ぬ所以である。

四

偕さて、ヘーゲルは物質と精神とについていふ。「我々は精神を物質に対立させてある。今物質の本質は重力であるとすれば、精神の本質は自由であるといはねばならない」（以下ヘーゲルの歴史哲学講義訳文より引用）

これは精神と物質とを単に常識より一步もふみ込まぬ概念としてのみ取扱つてその内容に立ち入らぬマルクシズムに対し物質と精神との内容的本質を究明すべく歩を進めた態度である。

その「自由」についてつづけていふ。

「精神が有つてゐる諸々の属性の中には自由もあるといふことならば、それは直ちに何人にも首肯される。だが哲学は精神の凡ゆる属性が自由に依つてのみ存在し、自由のための単なる手段となり、自由をのみ求め、自由をのみ産み出してゐるといふ事を我々に教へる。自由が精神の唯一の真実なものであるといふことは思弁的哲学の認識である。」

精神の本質は自由であるといふ事を飽く迄強調するヘーゲルには、一切の事物は精神生活に於いてのみ実在し成就する、精神生活は一切事物をしてあらしめ、且つあらしむる無限の力であるといふ信に燃えてをつたのであらう。それは次の詞にもうかがはれる。

「精神は活動的のものである。活動は精神の本質である。精神は精神の所産である。従つて精神は精神の端緒であると同時にその終極である。」

此処には唯物論に対し「逆立してをる」所の觀念論といふ通念を越えて、精神生活へ

の意欲にもゆるるものとして、唯物論マルクシズムの精神生活拋棄に比しては正しき人間生活への方向を具へたものと謂ふべきである。マルクスがヘーゲルの弁証法を自らのその「逆立」なりと云つた裏には、マルクスには精神生活の意慾なく、ヘーゲルには熾烈なるそれがもえてをつたといふ事実が蔽存するのであるが、この心理的事実には無精神のマルクスは氣附かなかつたのである。

然し乍ら精神の無限の自由を翹望したヘーゲルは、その「自由」を飽迄実人生開展の裡に歴史的に実現せらるべきものとして、追究し明示したであらうか。彼は精神が自由を獲得せんとして努力する内的経過を述べていふ。

「精神は活動的なものである。活動は精神の本質である。(中略)精神の自由は静止的存在に存するものではなく、自由を止揚せんと脅かしてゐるものの不断の否定に存するのである」

この自由の獲得を脅かすものの不断の否定について更にその機微をいふ。

「自分は自分を欠陥あるもの、否定的のものと感じて自分の内部に自分を解体させようと脅かしてゐる一つの矛盾を発見する。だが私は存在してゐる。私は私が存在してゐる

るといふことを知つてゐる。そして私は之をその否定、その欠陥に対立させる。私は私を保存してその欠陥を止揚しようとする。と。此処に十九世紀以来の世界思潮を風靡せるヘーゲル弁証法の心理的地盤が露呈される。今自分は親鸞の、実人生裡に展開する人間心理の統御的法則を示した詞を味はひつゝこのヘーゲルの心理の実人生的価値を究明しよう。

ヘーゲルの詞に味はゝるゝ彼の思想は一言にして云へば、帰趨の対象たる「自由」の実内容を表現するよりも、それに至る過程に拘束されて了つてをるのである。それは何故かなれば彼には「内的矛盾」といふ心理的経験はあつても、「自由」の事実体験が欠けてをつたが故である。事実体験なき帰向の対象を表す為には単にそれに至る可能性ありと思はれる個人的経験を積み重ねた彼方に、それを髣髴させるより術はない。然しそれは飽く迄我等の生命を包摂する生きたる威力の実感ではない。これをヘーゲルが至上の幸福について左の様にいふ思弁の苦渋を聞け。

「意志が自己を意志に取つて同時に虚無性なる特殊性に於て実現するといふ矛盾、特殊性の中に於て満足を見出し同時にその満足を超出するといふ矛盾……恣意（筆者註）

反省的意志の意)としての意志はかかる矛盾であつて差し当り、一つの傾向性又は享樂を他の傾向性によつて破壊し廃棄するといふ際限のない過程、満足であると同様に満足でない満足を他の満足によつて破壊し廃棄するといふ際限のない過程である。」(岩波『ヘーゲル全集』精神哲学)

この「一つの傾向性又は享樂」といみじくも自ら云つた所の「満足であると同様に満足でない満足」を「他の満足によつて破壊し廃棄するといふ際限のない過程」が、ヘーゲルの求むる精神の自由至上の幸福の規定である。此処には人生は常に破壊し廃棄される着想の累積であつて、末とほりたる生の威力にひたつては出づる人生の脈々たる悲喜交替の情意はない。眞の人生の過程が芸術的でなくてはならぬといはるゝ所以は、人生の眞の体験は着想をひろつてはすてる浮氣の累積に非ずして、胸奥よりのまことの詞をうみ出しうみ出し行くべき悲喜動乱のそれである故である。一波は万波にひろがる、それが我らの生である。

親鸞は愚禿抄に、求道の人生の心理経過の内容を峻別して

信疑対。(中略)直入廻心対。明闇対。

と判釈したが、この「直入」^{ぢきりゆう}とは我らを生きしむる威力に直ちに素朴没入する強烈の生たるに對し、「廻心」^{ましん}とは、いはば精神の徒勞ともいはるべき、迂路曲折の経過そのものをたのしむ生であつて、それを「疑」と「闇」とに符合せしめて示したのであるがこれが弁証法の地盤そのものである。我々は威力ある生命に直面し、帰依の対象をつぶさにならざる進路をえらぶ。ヴントが晩年の回想にその長き学術生活を支配せる強き関心を強ひてあげれば、それは政治的関心であつたと述懐した詞は、天地の中に生くるわれらにまことの威力あるものは現実の歴史を打開する、実人生そのものの云ひつくせぬ体験である事に目醒めしむるのである。我が内なる矛盾と苦悩とを以て人生の内容を表現せんとする精神は、熾烈なる命に通ふ感激を語る事を忘れし死骸であつて、実に此処から廿世紀の感傷と墮落との一切が萌芽した。その根因を一言にしていへば実人生に於ける帰依の喪失であつた。

(月刊『学生生活』昭和一五年六月号)

同信旬報『たたかひ』から

明治四十一年 御製 をりにふれて

世の中にしられていよゝみがゝなむわが敷島のやまとだましひ

と仰せられし大御歌は、かりそめの教訓ではなく、現実人間生活に直面する精神に触発せらるゝ、人生防護の決定的意志なりと感ぜしめられます。みだれゆくこそ人の心のありのまゝの現実であり、これを統一せむとの強烈全心的の意志ありてこそ、人の世の正しき様が現成するのであり、それ故意なき生活とは何の意味もない散漫の世界であります。人の偉大なるか劣等なるかは、その人の詞にあふるゝ統一的意志力によつて決定せらるゝを感じます。

まごころとは意志力である事、創造力である事を共感せしめられます。
(昭和一五・一一・一一)

昭和十六年 — 二十七歳 —

書翰から 多くの新聞に手を出すより、公平なものを一つしつかりつかんでおくがよかるべし。(註 昭和一六・二・二二 水戸高校における学生処分問題発生の際)

大阪から（報告書翰）

三月十二日夕刻大阪駅頭にて阪本、出張（註 出張太郎氏）両兄が「今度は必ず素晴らし
い時にあひます」と云つて別れた、涙に堪ふる顔と、大きく打ちふりつづける帽子とに
こめられた友の恋しき心を胸に刻して、東京に還る。去る八月下旬高知合宿を終へて徳
島にて共に黒上先生の墓前に額づき、駅頭にて分れし青砥兄（註 青砥宏一氏、徳島高工生）
の決死の目ざしは、今も僕の胸に刻みつけられてをるが、兄がその目ざしにあふれし死
闘の決意を巖をもきり通す力たらしめて、学内改革に直進し来れる歴史を思ふ時、大阪
の友らよ、兄らも必ず一切に堪ふる力を今日より発現してくれる事を確信し祈念する。

全国同志三百の魂よ。我らの魂は、勝ちほこる魂ではなくて、人生の深痛の事実を目
さめしめられ、痛傷いたでにふるひ立ちては、重大の決意もて人生の現実に没入してゆく、痛
苦の連続をきりとほしつゝゆく魂である。それが生きるといふことのまことの姿である。
支部といふ名にとらはれて運動が、デモ化し、ことそぎて力ある寮生活を学内思想戦

に展開すべき素朴の努力をなし得ざるに至らしめ、為に、いざ学校より恐喝あるや、生徒主事に対する思想戦はくり返されたるも、それは、呼出される度に行つて激論するといふ受動的のものにて、殊に予科長には一度も面談してをらぬ為に、予科長は成績不良、欠席日数過多により、四名を単に劣等生徒視するにすぎざる等、学内における寮生の威信は扶植するに至つてをらなかつたのである。

今更に小生は思想戦といふことばの深義を痛嘆せしめられるのみである。

いかにただけしく猛進するも、生きた魂と遊離して内に虚仮こけの兆あらば、それは思想戦の本質を欠き、必ずや悲惨の結果を受くるに至る。

「信ハ義ノ本ナリ。事ゴトニ信アルベシ……群臣共ニ信アラバ何事カ成ラザラム。群臣信ナキトキハ万事コトゴトク敗ル」と太子は成敗の岐点を、かくも明らかに示したまうたのである。それ故、思想戦に敗るゝは、根本的敗北であり、ゆるすべからざる決定的不忠である。思想戦とは歴史的生命による人生の根本的改革であるから、人生の複雑無尽の事実より遊離すれば必ず人生そのものより痛烈の反撃を与へらるゝといふ事を、我等は心に沁刻せしめられねばならぬ。同志にとつて歴史的生命とは同信寮生活であり、

人生とは学校である。寮生活に於いて歴史的的生命に没入する努力をおこたりたるは死である。学校生活の根本改革を怠らば、生き乍らの死である。根本的不忠である。寮生活の献身的求道生活と、学校内運動といふ、ただその事に我々の忠義の実行はかゝつてをる。そこに実人生の複雑無尽を体験せずば、われらのたゞかひは人生のたゞかひにあらざして意義なき盲動、世をさわがし、国を乱るゝ不忠となる。信をやしなふ、その信を学内に貫徹すべく、そこに学生運動の協力活動を集中されねばならぬ。人生の根本的改革とは、魂の根本的改革であり、国家の根本的改革も此処にあるを深思せしめらるゝのである。

明治四十年 御製 行

やすくしてなし得がたきは世の中の人のひとたるおこなひにして

大御歌をろがみまつり、大御心にたがふべからず、ゆめたがふべからず、と地にふして不忠を慚愧せしめらるゝのみ。〔たたかひ〕第六号 昭一六・三・一四〕

營利心とは生きようとする心である、それが共に生きようと決意した時まごころが発

動する。このまごころが營利心を統一して全体協力世界を実現するのである。

(六月十四日 「詩と哲学の運動大講演会」において「營利心と欲望との関係」を質問した一聴衆に対し、
会場の隅から立上って発言した言葉)

松陰神社参拝

八衢やぐらのいらかのかなたに松むらのけだかきすがたあらはれにけり

参り路ちをひとりすゝめばかたへより地虫の声のかそけく聞ゆ

「身はたとへ武藏の野辺に朽ちぬともとどめおかまし大和魂」

ひろまへに御召みめしをつげてこのうたをくりかへしくりかへし誦よしまつるかも

みともらのあつき心を身にうけてわれも征くなり御召のにはに

御軍みいくさは遠き南に進めりと知らずをよめば心振ふも

すめらぎのみめしにあひてひとすぢのますらをのみちゆくがうれしさ

この後はいかなるあたのしこわざのおしかゝるらむ友らがうへに

のこしゆく友らの心おもほへばいたましくして心に泣かゆ

いや更に試練はおそひきたるともくぬちのはらからたじろがじこそ

かたき中にかたきまさ道貫くと日々たゝかへる友ら守らせ(月刊『新指導者』昭和一六年一〇月号)

上野兄にかへし(註 一高以来の友人・上野唯雄氏)

小包のつゝみの紙にしたゝめし君がことのはいただきまつる

つたなかるわれの武運をちはやぶる神に祈りてみ札たまへり

あられふり鹿島の神のみ札をば文箱よばこの奥にをさめまつりぬ

朝な夕なはげしきつとめかさなりて息たゆるまでやまざる如し

出雲よりまつろはぬ神追ひ追ひて東の国までいたりましゝか

(註 国譲りの神話。まつろはぬ神・建御名方神は後に諏訪国一の宮・諏訪大社の祭神)

おほみいつかしこまぬものおひおひておひつくさしゝ神を仰ぐも(註 武甕槌神)

(月刊『日本太郎』昭和一六・一〇・二五)

高崎にて

赤城ねよ榛名の山よ晴れわたるその姿をぞ今さかりゆく(註 ね、嶺)

この山を朝け夕けに仰ぎつゝかたき道をぞふみさくみ来し

その山は動かぬきはみますらをのひとすぢごころ我わすれめや
(月刊「新指導者」昭和一六年一二月号)

書翰から 僕らがやる事の成、不成はすべて神意との冥合にありと存じます。

(昭和一六・二二・一九)

昭和十七年——二十八歳——

「世界皇化戦」から 夜な夜なつづく灯火管制の闇黒にあつて、「光は闇を照らせりき」の詞を実感する。同胞よ、殊に指導者達よ、まことにわれらの精神の内奥よりの確信が、この闇の裡に生れ出づるのである。星もほのかなる夜空には、夜の心をそよる文明の慈光は消えはて、国民の切実なる生の営みを示す僅かの灯火のみ洩れつゝ、今国土は国家興亡の緊迫感に明けては暮れてゆく時、つづく此の闇夜こそ、国民が内奥より覚醒する稀有の機会である。

人類の歴史とは永久に消えざる価値を実現せむとする死闘の歴史であり、然して価値とは個人の生死を撰取する悠久の生命感であり、それは個人の所産ではなく、団体的協

力、個人と個人との生命がはげしき交渉の中に実現する超個人生命、すなはち団体的協力の所産としての共感の世界であり、その共感世界の確乎不動の現実態は国家生活である。されば国家生活とは価値を共感する感激の世界であり、国家興亡戦とは相異なる価値の世界がその優劣を決定する死闘である。

明治天皇が、「河」と題したまひて

岩がねをきりとほしても川水は思ふところに流れゆくらむ（明治四十四年）

と川水の心をよませたまひし大御歌をくり返し拝誦しまつる時、心の内奥より歴史を貫く神力を確信せしめられるのである。川水も、ただに高きより低きに流れ行くのではなく『思ふところに』『岩がねをきりとほしても』流れゆくのであると歌はせたまふ大御心にこそ日本国家の精神は仰がるゝを覚ゆるのである。（月刊『新指導者』昭和一七年一月号）

小田村寅二郎ほか正大寮あて 諸兄すつかり御無沙汰いたしました。

食事も入浴もすべて戦闘精神に一貫され、生を味はふといふ様の心のゆとりは少しも

ありません。消灯後、便所にゆきてかへり、月のかぎろふ雲をみやつては心とけゆく心地であります。あつばれ武人のほまれたるべく全身の力をつくしてをります。

知らぬ他中隊の上官から井戸ばたで「おめえは本当によくやるな。感心な奴だ」とはめられました。歩兵操典にいふ「戦闘惨烈ノ極所」を全身没入のうちに感ぜしめられてをります。(東部第三十八部隊 教育召集の折)

昭和十八年——二十九歳——

母宛 母上は私達の、日本一の母上です。母上よ何卒父上の在天の靈に常に念仏申し、私共の母上として、心安らかに御生活下されよ。万一生きて還れたら、どんなにもして御慰めし御楽にいたします。小松先生、小田村君、戸田君、宮川の家によろしく。貯金通帳番号(戦はへ、老参八八五)(昭和十八・十・四預金残高二〇九円)お知らせします。屑いさぎよく屍いさぎよをさらしたる時は、半分を母上の御小遣に、半分を正二(註 令弟)の高師の教育にやつて下さい。彼の好きな本を買はせてやつて下さい。毎晩父や母、正二の夢をみます。何分御老体大切にこれのみが願です。

三十、吉田よし田だ昇のぼる



吉田昇

明治四十五年五月十三日生。昭和十年第一高等学校文科甲類卒業。「一高昭信会」会員。同時期の会員に近藤正人氏（前出）、上田克郎、奥宮正典、川井一男の諸氏ならびに古田忠家氏（病死）らがえられた。一高文科端艇部の選手。昭和十四年三月、東京帝国大学法学部を卒業したが、三学年生の時、「東大精神科学研究会」会員として「小田村問題」（小田村寅二郎氏が、当時の法学部の学風を徹底的に批判したかどをもって退学処分となった事件）に際して、彼は、法学部の大教室の使用許可を大学当局から取り、大ぜい集った学生に対して、ほとんど独りで、全経過を説明するといふ、何者をも恐れぬ毅然たる活動を展開した。「日本学生協会」「精神科学研究所」の創立に参画。昭和十四年の「神奈川県無量光寺全国学生大合宿」での指揮ぶり、とく

に、相模川の流れに立つての「みそぎ」指導のすさまじさは、今に語りつがれてゐる所である。

昭和十四年卒業と同時に、「日本文化協会」の研究員として勤め、後に旭川市北部第三部隊に入営。一たん除隊して、「日本光学株式会社」に勤務したが、再び入営。この頃、若野秀穂氏（本書収録）の妹さんと結婚。昭和二十年八月十四日、比島ルソン島において戦死。時に数へ年三十四歳。陸軍中尉。

学生時代は、芝巴町の市内電車の停留所前に住んでゐた。厳父はすでになく、母堂が小さな薬屋を営んでをられた。彼はよく東大の学生服を着たまま「掛取り」の集金をして家業を手伝つてゐたが、頓着もなく明るく生き続けた闊達の子であつた。

（なほ、本書三二四ページ以降の「明治天皇御製拝誦・研究」中に引用されてある「水辺罹麦」「水辺梅」「暁千鳥」の三首の御製は、現在公刊されてゐる明治天皇御製集には見当たらないが、大正十五年十二月一日淳風書院発行の『明治天皇御製集』に収められてゐます）。

生命を蝕むもの（論文）

我等現代日本青年の内的生命のおのづからなる躍動を阻害するものは現代学校教育である、と悲しくも告白せねばならぬ。イキリ立つてかう言ふのではない。憂鬱にさう言つてゐるのである。その現実的具体的確証は随処に之を見得る。例へばかの芸術的大生命の一生を貫徹した正岡子規は、一蓑一笠りゅうの行脚に『不ふ尽じの高嶺のいただきをいかづちなして踏み鳴らす』やうな奔放の生活をつづけつゝ、果然大学国文科を二年まで行つて落第、退学して了つた。『大学』は当時まに於いて既に子規居士の生命を抱擁しきれなかつたのである。又日本人としての生命ある英語研究にユニクにして偉大な足跡を遺した齋藤秀三郎氏が、所謂官学校派の人々と妥協し得る性質の人でなかつたことは、氏の二高在職中、ポウプの『エッセイ・オン・マン』を教科書に用ひ、主任教授の米人の反

対に對して『米人は分らずとも日本人には分る』と言ひ放つて二高を去り、又岐阜中学在職中、校長から中等教員檢定試験を受けよとの言に『誰を試験するのですか』と放言して辭職をした逸話に依つても充分推察し得る。固よりこのやうな個々の『逸話』に痛快味を感じつゝ直ちに学校教育を罵倒してをるのではないのは前述の通り。事は今少し重大なのである。その顯著特異な例を述べればかうだと言ふのである。今やこの逸話的事實の下に沈潜してゐる根元を究明すべく要求せられるのである。それが言はれる処の万惡の根元である。現代の学校教育が完全無缺であるといま天下に公言し得る人があらうか。先頃この肯定を天下に広言した九州帝大総長及早稲田大学総長に謹んで問うてもよいのである。今茲で僕の嘸々を要せず日本新聞主筆若宮卯之助氏も屢々指摘せられてゐるやうに、日本の教育悪化は実に教育家の蒙昧に発源してゐるのである。しかしこの教育界の狂瀾を既倒に回すべき義務を有するものは当事者たる教育家を除いて外にならぬのである。教育革新の叫ばれる所以は之である。

之を教育を受ける学生の側より見ても同じ事が言へるのであつて、自己の尊き内的生命の威力を發揚せんとするものは、意識するとせざるとに不拘、子規居士の如くその生

命の開展を停頓阻害せんとする環境から脱出せざるを得ぬのである。この強烈の生命意志を持たぬものは自己の生命が支へられてをらぬと言ふ悲しむべき客観的具体的事実に氣附かずに碌々その日を送つてゐる訳である。更に悲歎すべき実例はこの教育の禍殃に全人格的に壓倒されて潑刺たるべき生命本然の姿を傷いたましくも萎縮させられてゐるものである。告白する！ 筆者もその一人であることを。しかし徒らに悲観して泣言を言つてをるのではない。傷つき挫かれたる後よりも鬱勃として起ち上り洋々たる生活力無限の躍進を欣求するのが青年の本質である。

今より七十六年前、懦夫をしも起たしめる痛切なる悲劇的一生を閉ぢた吉田松陰先生を偲びては、求哀懺悔せしめられるのである。『全集』第二卷『野山獄文稿』中に於いて、あの蹈海の企を共にした金子重輔の病氣見舞の書簡中に先生は曰く――

……僕坐レ獄無レ事、或患二寇賊之害一、或憂二足下之病一、不三暫忘二于懷一、因謂、人之有二疾病一、猶三國之有二寇賊一、國善退レ寇、則民蘇、身善除レ病、則体安、民蘇則勢振、体安則氣旺、勢振而天下無二強敵一、氣旺而天下無二難事一、足下亦患二寇賊一者、宜下以二其身之病一、知二天下之務一、以二天下之務一、治其身之病上、時維大寒、千万自愛

人間の人生観は片々たる言葉の中にも現れ得るのである。『片言隻句を以て学匪と呼ばれては口惜しい』とやらの怪言を吐いた問題の某博士のことも思ひ合はされる。それは悪い意味の方であるが以上の文意には親鸞上人の『不断煩惱得涅槃』の言葉がヒタリと心の琴線に於いて触れ合ふのを感じるのである。〔伊都之勇建〕第四卷第三号 昭和一〇・五・二五

あつまればいのち生るとふ友の言葉にわれは息づくこのひとときを

たふれ傷つきつかれし底ひゆ湧き出づる力信じて吾は生きなむ（昭和一〇・六・一六）

明治天皇御製 拜誦・研究（論文）

百合

傾きてさけるを見れば照す日のかげやまばゆき姫百合の花（明治三十九年）

この御製ををろがみよみまつれば今年の春、伊豆白浜の合宿に於て若野兄（註 若野秀穂氏、本書収録）よりおしめしを受けしことを思ひ出づるのである。『傾きてさける』百合の

花に向はせ給ひては『てらす日のかげやまばゆき』と心なき植物の一つにもこれを恰も心ある如くみそなはせ給ふ。『てらす日のかげやまばゆき』との御叙述が単なる機智のそれに非ずして、『傾きてさけるを見れば』と仰せられ『てらす日のかげやまばゆき』と結ばせ給ふことに依りて、百合の花とてらす日との不可分の関聯を表現せさせ給ひ、かしこくも 大君の大御稜威にひれ伏しまつらふべきわれら民草のいのちをしぬばしめらるゝのである。

水辺瞿麦

よる波にうちあげられて伏しながら花咲にけり河原なでしこ（明治三十七年）

われらの胸にうかばしめらるゝ情趣は初の大御歌の場合と同じのである。『よる波』と、それが為に『うちあげられて伏しながら花咲く』河原なでしこの関係が単なる因果関係に非ずして対照強化の法則に依りて、なでしこの花がよる波にもめげずに伏しながらも花咲く姿を強く印象づけらるゝのである。苦悩の障碍に依りて却つて促進せしめらるべき人生の意義をしぬばしめらるゝ大御歌と拝誦しまつるのである。

若 草

若くさも浦のなぎさにおひにけり波のうちあげしのにまじりて（明治四十三年）

なぎさの白砂の上に生ふる若草は之をまひろき海原と対照せしめらるゝのは『波のうちあげしのにまじりて』の大御言葉に依りてである。春の若葉はそれのみにも成長発展する生命の躍動を感ぜしむるのであるが、それが海辺の白浜の上に、波のうちあげられた海苔などにまじりて生えて居ると云ふことによつて現実具体的実景を心中に描くことを得しめらるゝ。

水辺 梅

あさ氷とけてながるゝ川岸にさぶなみよせて梅さきにけり（明治四十二年）

『さぶなみよせて』の一句に依りて静かに花咲ける梅の木に生命の跳躍流動を感ぜしめらるゝ。しかし物理的にこの大御歌を観察しまつりても、『さぶなみ』がよせるのは『あさ氷とけてながるゝ』ためであることを悟らしめらるゝ。『とけ』、『ながれ』、『よせ』、『さく』の四個の動詞の中、初めの三個が先づ川氷のとけそめながれ、そのために川岸の梅の木の根にさぶなみのよする動的の有様を描写し、次に梅の花がさくと言ふき

はめて静的の叙述によつて結ばしめられてをるのである。一首全体に一瞬の凝滞も在さぬ大御歌と拜しまつるのである。

暁千鳥

磯崎のなみまに月のかげ落ちてあかつき寒く千鳥なくなり（年代不詳）

この大御歌ををろがみよみまつれば一種悽愴の感に身のひきしまるを覚ゆるのは、『月のかげ落ち』し磯崎の晨にうらがなくなきわたる千鳥に一首の中心がきはめしめらるゝためと拜しまつるのである。自然の中に生くる生物の、殊に人のおもひは、この暁の海辺に寒々しく鳴きわたる千鳥にその悲痛の表現を見出すであらう。磯岩にくたくる怒濤のひゞきは淋しき千鳥の音に好個の対照を見せて居るのである。（『伊都之男建』昭和一〇年第七号）

昭和十一年～十二年 — 二十五歳～二十六歳 —

みそぎ

ま白なる齋いはひの衣ころもぬぎはなち潜をさして霜ふみて走る

あかとぎの空にむかひ立ちすべらぎのよろづよとなへ海に入るかも

海原ゆ涌くうすけぶり立つが中に朝日さがみの山出でむとす
水けぶりたちたつ海にみそぎつゝ山の端いづる朝日をろがむ
あかとき片瀬の海のはまかぜに魂振り雄叫ぶ身滌のともは
うつそみにこゝだをかしゝつみけがれはらひうしなふ神代のごとく
祓戸はらへどの大神のみ名をことたまにとなへまつりつゝ身滌ぎするかも
さねさしさがむの海にみそぎすれば神代ぞうつゝにおもほへにける

（『伊都之勇健』昭和
一二年一月二七日）

“Nationalsozialistische Monatshefte”

1937 Januar

Winter

Das ist es, was uns Trost gibt in der Nacht,
wenn tiefste Dunkelheit das Land unshüllt:
Ein erstes, fernes Licht ermacht,
das unser Sein mit neuem Glauben füllt.

Wenn Winterstasse alles Leben zwingt
und Todesahnung alles Leben streift,
schon neues Leben aus der Tiefe dringt,
und tief verborgen neuer Frühling reit.

Heinz Hartmann

冬

恰も、そは夜のわれらの望にも似たるか、
いと深き暗闇の大地を蔽へるのとき、
微かそけく、遙はろけき光燃えいで、
われらが在ありを新たな信もて充みたすこと。

冬の互ご寒なべての生命いのちを枯らし、

死の予感なべての生命を襲ふのとき、

既に新たな生、深奥じんぷより迸り、

深く埋れし新たな春の熟しつゝあるは。

ハインツ・ハルトマン作
吉田昇訳（昭和二二・二）

昭和十四年——二十八歳——

道元（論文）

人間の思想はその時代と離れて成立し得ぬのである。道元の名著『正法眼蔵』に就いてその思想を研究しようとするに際しても、道元が如何なる歴史的時代に、その宗教を建設したか、といふことがまづ明らかにせられねばならぬ。それは即ち日本精神史の系統につながる一人としての道元の遺した文献を文化的に研究することであつて、この文献文化史的研究のみが、道元の宗教をして現代に生きしむる唯一の研究方法である。

御製にある如く「天地もうごかす」ものが「言の葉のまことの道」である。時空を超越したる言葉の威力を道元の遺著に見出さうとするのが小論の目的である。

道元の在世した平安末期より鎌倉初期にかかる時代は国内騷擾、ために恐れ多きことながら朝廷も式微せさせ給うた、日本歴史上悲しむべき時代であつた。明治天皇が畏くも「軍人勅諭」に「中世以降の失體」と嘆かせ給うた「失體」の時代の初期に當つて世に生きた道元は、思想家としてその時代の悲運を身を以て担はねばならなかつたのである。現行中等学校の国史の教科書などには鎌倉時代の文化の項目に、道元によつて創められた新興仏教たる禅宗の簡素強健の教義が質朴素剛の武士の趣味に叶つて、それが以後盛んになつた、といふ如く、さもさもこと無げに書いてあるが、その道元自らが、「悲しむべし辺鄙の小邦、仏法未だ弘通せず、正師未だ出世せず、ただ文言を伝へ名字を誦せしむ。もし無上の仏道を学ばんと欲せば遙かに宋土の知識を訪ふべし。正師を得ざれば学ばざるに如かず」(学道用心集五)といひ、又「予かさねて大宋国におもむき、知識を兩浙(註 所の名)にとぶらひ、家風を五門(註 支那禅宗の五家の系統。臨濟宗・潯仰宗・曹洞宗・雲門宗・法眼宗をいふ)にきく。つひに大白峰の淨禅師(しん)に参じて、一生参学の大事こゝに

をはりぬ。それよりのちに大宋紹定のはじめ本郷にかへりし。すなはち弘法救生をおもひとせり。なほ重担をかたにおけるがごとし、しかあるに弘通のころを放下せん、激揚のときをまつゆえに。しばらく雲遊萍寄して、まさに先哲の風をきこえんとす」〔正法眼藏弁道語〕といふ言葉を読めば、如何に道元が時代の子として求道の痛苦をその精神生活に体験したかが分るのである。和辻哲郎氏が、その著『日本精神史研究』中の「沙門道元」の項に於いて、道元の入宋求法が単に外国崇拜として排斥せらるべきでないことを、それが当時の墮落せる人間精神生活に対する彼の正しい反撥と観て論ずる点に於いては正しいが、それにつづけて、道元の世界は国土の限界を超越した意味価値の世界であつて、そこには最高の権威として仏菩薩が君臨する、向上の一路はただこゝに向ふのみである、と言つて道元の思想的遍歴を真理王国の建設といふごとき言葉を用ひて全的に礼讃する態度には自分は反対である。道元は今少し哲学的解釈を離れて、日本歴史上の乱世に道を求めんと苦闘しつゝ生きた人物として人間的に考察せられねばならぬと思ふ。

和辻氏の道元研究に於けるより更に著しく、西洋哲学の範疇を以て道元を分析

したものに岩波書店発行の秋山範二氏の道元の研究がある。現代人に道元の思想を理解せしむるためには、この如き西洋哲学的見地よりする研究も必要であるとの見解もあらうが、迂遠の論議は散漫に生命を消失せしめ易い。「広学博覧はかなふべからざることなり。一向に思ひ切て止むべし。唯一事について用心故実をも習ひ、先達の行履をも尋ねて、一行を専らはげみて、人師先達の気色すまじきなり」（正法眼蔵隨聞記第二）と言ひ、只管打坐しかんたざを求道の方法とした道元の教義は却つて概念の遊戯を排する直観の宗教であつた。仏子たるものは、粟散の小国の主よりも尊いことを説いたところに道元の思想の時代性を観るべく、「我もそのかみ入宋の時、船中にて痢病せしに、悪風出来て船中さはぎける時やまふ忘れて止まりぬ。是を以て思ふに、学道勤勞ごんろうして他事を忘るれば、病も起るまじきかと覺おぼるなり」（隨聞記第五）といふ如き言葉にその思想の現実性を見るべきである。

右の道元の思想の現実性を誤り伝ふるものに「行の哲学」といふことを唱ふるのがある。道元の思想祖述者として世俗的に有名な橋田邦彦氏がその一例である。自然科学者としての氏が西洋の自然科学的學術を研究した結果、その研究に全人生的解脱を求め得

なかつたのは当然である。かくて漠然たる東洋への思想的回帰——萩原朔太郎氏の近著の標題の言葉——に偶然氏の眼に止まつたのが道元の思想であつた。「生死事大、無常迅速」といふ如き気の利いた言葉は確かにドイツ語で書かれた医学書には無かつたに違ひない。

道元が悲痛なる時代的苦悩の痕跡を遺した道をその如き時代的苦悩を知らざる、又知るべくもなき氏が態々辿つて、思想的深刻を徒らに装ふのである。それは決して道元の文化史的研究ではない。その如き思ひ附きの教養趣味的の道元研究は断じて道元を現代に価値あらしむるものではない。同氏が一高校長に就任以来、道元の思想を倫理の時間に講じつゝあると聞くが、生徒は依然として自由主義の伝統を忠実に守り本年度寄宿寮記念祭飾物に於いて浅薄なるインテリの本性を暴露し、世の識者の非難を浴びたことも宜^ヒなるかなである。生死事大、無常迅速と観じて自由主義、民主主義を遵奉実践することも「行」は「行」である。単なる「行」は無原理である。「しるべし仏家には教の殊劣を対論することなく、法の深淺をえらばず。ただし修行の真偽をしるべし」(弁道話)。「飛去は時の能とのみは学すべからず、時もし飛去に一任せば間隙ありぬべし、有時の

道を経聞せざるは、すぎぬるとのみ学するにありてなり。要をとりていはば、尽界にあらゆる尽有はつらなりながら時時なり、有時なるによりて吾有時なり」(有時)等の言葉を讀めば道元が生を重んじ、更にこの生を局分することなかるべきを説いたのであつて、言ふべくば、それは全体主義的哲学である。

道元の教義の中心をなす、「參師問法」「工夫坐禪」を現代に於いてはその文字通りには受け容るべきでないことを説く橋田氏の論は、その限りにおいて正しいが、その結論として無原理の「行」を説くのみであつてその根本をなす個人主義が誤謬である。嘗て自分は有名の神道研究家、米国人メーソン氏に神道研究の動機を尋ねたところ、言下に「To save my soul」と答へられたので、その著作を讀まずして、その全価値が推定され、興味索然たるを覚えたことがあつたが、橋田氏の道元も亦、個人の靈魂救済を目的とする愚人愚婦の信奉する邪教の一種に墮落してをるものである。

道元をして今日の聖代に生れしめたらんと仮定し、その時にもなほ彼が「悲しむべし辺鄙の小邦、仏法未だ弘通せず、正師未だ出世せず云々」といふ前記の言葉を述べんに、彼は遂に度し難き山師であつて、今日の諸々の俗悪低級なる宗教諸宗派の管長らと

何ら扱ふところなき思想的生臭坊主と断定して差支へない。現代のわれらは「參師問法」「工夫坐禪」をその文字の形式的意義に於いてのみ受け容るべきに非ざると同時に、生の全体を重んじた道元を現代の意義に於いて、生々躍動せしめねばならぬ。かくしてこそ道元の嘗めた時代的苦惱を価値あるものとして生かし得るのである。道元の言葉に於ける生命力の緊張を味はふことは、即ち彼の宗教生活に於ける思想的体験を撰取することであり、その信仰の情操と求道の苦行とを言葉の芸術的表現に偲ぶことである。道元の文章に「支ふる力」をあらしむべきは、現代に生くるわれらの文化史に負へる学術的任務である。

以上は道元研究の緒論の一端である。その主著『正法眼藏』は叙上の思想的見地より更に詳細に研究せらるべきである。それは今こゝになさるべき余裕をもたぬのである。ただこゝでは従来の道元研究者——その中やゝ古い時代の人々を眼藏家といひ、天桂（註 天桂伝尊 徳川中期の禪僧、宗風の復興につとめ、『正法眼藏弁註』等の著あり。享保二十年寂）等の優れた人々もあるが——の中、現代の人の二三について、その言説の誤謬と信ずるところを述べたに過ぎぬ。（月刊『学生生活』昭和十四年五月号）

劍道（高橋空山師の歌を讀みて）

大君のまけのまにまに劍太刀とりて振れとふことばよろしも

しきしまのやまとごゝろのとごゝろを振ひて太刀はとるべかりけり

大君にまつろふこゝろ振ひおこしとるべき太刀はかしこくもあるかな

つるぎたちとりてふりつゝうつそみのいのちをおもへいまのうつゝに

（月刊『学生生活』
昭和十四年六月号）

「対支文化工作の拠点」から 日露戦役の歌集山桜集（註 岩崎英重編、日露戦争に関する漢詩、俳句、和歌を収める）の多くの歌は戦争をおもふ歌である。戦争をおもふとは戦争の文化的意義を憶念することであつて、それは聖戦の本質を示すものである。

現実的な砲弾のひびき、戦死者の屍を詠む歌は何れの国の戦争にでもあてはまらう。真に皇謨を翼賛し奉らうとの捨身奉公の決意ある戦士の歌は、自らそれらと類を異にするべきである。そしてそのやうな真に現事変を支へつゝある生命をうたひこめた歌はかく、敵然と存在することが信ぜられるのである。それは神意のまにまにかくの如きまごころをうたひ上げた歌が現代流行有名歌人の選にかゝる事変歌集にあらはれ出でざるま

のでことであつて、そのことはむしろ真の歌にとつての榮譽である。（月刊『学生生活』昭和十四年六月号）

昭和十五年～十六年——二十九歳～三十歳——

「支那より帰りて」から 今次事變の意義として諸人の借りる言葉に「八紘一字」がある。而して八紘をして一字ならしむべき事業の主体は論者自らなるかの如き論調をなす者がその殆ど凡てである。かくしては国体は依然不明徴と云ふの外はない。——齋藤隆夫氏の最近の議会の問題となつた演説はこの点を部分的に衝いてをる点で意義を有し、筆者の以下述べる所を知らざる氏の思想法にむしろその根本的欠陥を有する。——

「八紘一字」は言ふ迄もなく 神武天皇橿原に帝都を經營せさせ給うた時の詔勅中の大御言葉である。而してそれが空漠の觀念より演繹せられたものでないことは、それを記載する文献日本書紀の 神武天皇紀を読みまつることによつて明らかとならう。「八紘一字」の肇国の大理想を中今の現に継承実現せさせ給ふ 陛下の大御業を翼賛し奉るべきわれら臣民が、今次事變を聖戦と信順することの客観的根拠は實に此に存する。神武天皇御東征より橿原奠都に至る間の歲月は決して平穩無事ではなかつたのである。その間、

教ふるに天人てんじんの際あひだを以てすべからざる長髓彦ながすねひこの如きを討たせ給ひ、勁敵の征討に当らせ給うては親しく天神地祇を齋いっき祭らせ給ひ、又御親ら軍歌を御製あらせられては皇軍の士氣を彌が上にも鼓舞せさせ給ひ、その必勝を期せさせ給うたのである。而して後に、我れ東を征うちしより茲こゝに六年になりぬ。皇天あまつかみの威を頼かうりて、凶徒就戮こうとされぬ。辺土未だ清まらず、余妖尚梗よあやしと雖も、中洲うちづくにの地に復た風塵無し。誠に宜しく皇都を恢廓ひらきひろめ大壮おほはたらを規摹ほかりつくるべし。而して今運屯蒙うん屯蒙に属あひ、民心朴素ひんしんなり。巢棲穴住、習俗惟常。夫れ大人おほじりの制を立つ、義必ず時に随ふ。苟くも民に利有らば何ぞ聖ひじりのわざ造つくりに妨はむ。且た当に山林を披ひひ宮室を經營りて、恭たかみみて宝位たかみくらに臨み、以て元おほみ元みを鎮おさむべし。上は則ち乾靈あまつかみの国を授けたまふ徳に答へ、下は則ち皇孫正すまみを養ひたまふ心を弘めむ。然して後に六合を兼ねて以て都を開き、八紘あめしたを掩おほひて宇いへと為むこと、亦可よからずや。夫の畝傍山の東南樞原の地を觀れば、蓋し国の塊區もなかか。治みるべし。

の大詔を下し賜うたことを偲おもひ奉れば、八紘一字をおろそかに僭称することの不穩なることは直ちに徹鑿し得よう。我國の神典記紀は御祖等の悲痛なる苦闘の生を記録に遺し

たものに外ならぬ。万邦無比の我国家は決して偶然に生成されたものではなく、かくの如き古昔より戦はれ来つた国家防護戦に努力奮迅戦死を遂げた忠霊によつて護られたのである。支那事変も亦国家防護戦である。何となれば日本には古来国家を防護するため以外に戦はれた戦争は絶無であるからである。

支那を無論知らねばならぬ。然し乍ら真に支那を知るといふことは、われら日本人にとつて正しくは、己れ自らを知るといふことである。日本文化史は千数百年の昔より支那を知り、その文化の批判摂取の大事業をなし遂げ来つた偉大なる精神を伝へてゐる。これを忘れてゐる日本の現状が問題なのである。現状に関する結論は結局内地に戻るのである。曰く、国内的全般の改革をなさずして、事変処理とは畢竟空言に過ぎぬと。

(月刊『学生生活』昭和十五年三月号)

人里をとほくはなれし山の辺にい寄りつどひしまとゐたぬしも

神まつる昔のでぶりをさめつゝ友とかさぬる日かずたぬしも

(月刊『学生生活』昭和十六年一〇月号)

三十一、安武弘益
（昇を本人の意向にて改名）



安武昇

大正二年十二月三日生。旧制東京府立一中を経て、昭和六年第一高等学校理科に入学。極貧の家庭にあつて苦学力行を続けた。「一高昭信会」に入会、人一倍の研鑽にはげんでゐたが、昭和八年遂に結核にかゝり、東京江古田療養所に入所のやむなきに至る。爾来、各地の療養所を転々として療養生活を送るうちに、昭和二十年七月十九日、

小平療養所においてつひに逝去。死期近く、療養に当り一方ならぬお世話になつた医師隈部英雄博士の恩誼に深く謝することを言ひ残した。時に数へ年三十三歳。

彼は、明治天皇御集、聖徳太子の御著、黒上正一郎先生の御遺著の外に、明治初期の人、副島蒼海の遺文遺歌に深く私淑し、日常の会話の中にも蒼海の言行が出てくるのが常であつた。彼は剛毅さ

とやさしさをあはせ持ち、長い療養生活の中にもその求道の志を忘れず、小康をえてはよく「正大寮」を訪れて後輩の指導にあたった。そのかたはら、古典の研究、時事評論を展開し、その一端は本書に収録した、夜久正雄氏著の『梨のかたえとその研究』（註 三條実美歌集）に対する懇切な批評論文にもうかがふことができる。「道統」生成のプロセスにおける尊い足跡を残した人であった。

昭和十年（十四年）—二十三歳—二十七歳—

明治天皇御製拝誦（論文）

車中見雪

嶺たかくつらなる山に雪見えて車のうちもさゆる今日かな（明治三十四年）

「雪積る」等々の言葉にあらざして「雪見えて」と仰せらるゝ大御言葉に大御身のあらせられる一地方即ち天地と、その下さゆる寒冷とを総撰せさせ給ひ、その故に「車のうちも」と大御身を直接寄せらるゝ車中の寒冷を正しく感受せさせたまひ、「今日かな」に時間的統括を与へさせ給ふ

今仮りに

嶺高くつらなる山も、雪見えて車のうちのさゆる今日かな

とせむか歌境は車中に局限せられて、嶺も雪も将亦天地の寒冷も従的背景に没し去りて

威力なかるべし。(昭和一〇・二・七)

亡父一年忌

ちゝのみのちゝのみことのゆきましてはや一年となりにけるかな
むらぎもの心よるべふるさとを遠く離れて父はゆきまじき

世にましゝうちにまめやかにつかへざりしつみの重ければ生くる苦しき
のこりたる一つのみちぞちゝのみの御心つがむと誓ひてあるなり
天翔りみそなはずとはおもへどもみ姿仰がぬことのかなしさ(昭和一〇・二)

おろかなるはからひすてゝはらからと共なる生にわれ生きゆかむ

伊豆合宿に於ける出版奉告祭

師の君のみ書なれりし奉告の祭いとなむこれのみ寺に

(昭和一二・七・二〇、しきしまのみち会
於伊豆正壽寺合宿)

七舎の看護婦が赤十字社に応召されたれば祝送のはり紙しある由をきゝて(註 七舎、第七号病舎の

略か)

すゝみゆくわが御いくさにしたがひて少女らもいまいでたつといふ

いたでおふみいくさびとのみとりすと出で立つ人のこゝろをおもふ
み祖らのみたまのまもり看護する君のうへにもあれといのらむ（昭和二二・九・二五）

人

ひとりあれば苦しき思ひに塞がるゝ胸もひろごる友の集ひに

（昭和一二・九・一〇、しきしま
のみち会 上野公園・鶯団子）

高尾山旅行

友と旅せむとする日を新聞は雨と報ぜりあな口惜しき

ズブ濡れにならばなるべく覚悟して古き洋服とり出しけり

予備校に通ひし頃の思ひ出の残る鳥打をかむり行かむとす

かく浅ましきはからひをするわれをしもあざけられなば心はぢむに

高校の古洋服に鳥打の姿をはたして友は笑へり

大正の青年こゝに見るべしと若野兄は笑ひたまへり

尾根道をもだしいゆけば木の葉うつかそけき雨の音ぞきこゆる

小仏の峠の茶屋に人氣なく雨気おびし風ふき荒すまぶなり

底沢の名はうべなれや尾根道ゆる道はもいとけはしかり

日も暮れて着きし與瀬にて汽車待つ間に喰べし支那蕎麦味うまかりき

伊豆を偲ぶ

みちにあひし少女おもへばうちよする波のひびきのわすれかねつも

(昭和一二・一〇、
しきしまのみち念)

謹啓 時下熾熱の候に拘らせられず、尊候益々御清麗之段奉慶賀候。

陳者小生久しく療院にて宿痾の加療に従ふを得しめられ候処、略々所期の目的を達し

今般帰家且く之が仕上に相就き申候。願れば八年前黒上先生の教下に相参じ候も間もな

く江東の地に又向陵(註 旧制一高の別名)の一室に相たふれ申候処、誠に拙劣教にも入ら

ぬを痛深鉅大かしこき御友情に撰護せられ被_レ使_レ得_レ有_ニ今日_一候事肝に銘じ奉深謝候。当

時會勢峻峻の秋実(註)に弱者の障害と相成り惜しからぬ命を相懸け苦しき思にて御優情を頂

戴仕候は先生の御教に参到せん切願に依りしが為にて候。不断激志励意の御情に今日深

く同胞同信の生に感悟せしめられ歎喜に不堪候と雖も省みて忸怩慚死その分にて御座候。

庶幾は更に懸命加養切磋琢磨以て御誘掖の下報公の誠を尽すべく祈念致居候。茲に深く

礼意を披摺し今後永く不敏を厭はせられず賜_ニ御懇情_一事を伏して御願申上候。 敬具

昭和十四年七月

東京市城東区亀戸町七丁目二一八番地

安 武 昇

(後、改名弘益)

昭和十八年——三十一歳——

夜久正雄著、三條実美公歌集

『梨のかたえとその研究』随評

○

『梨のかたえ』下巻冒頭第一首『大君はいかにいますとあふぎみればたかまの原ぞ霞こめたる』の歌。「霞が隔てる」とは整理されずに直ちに叙景を心的経験の順序に従つて詠まれたのだ。即ち大君の御心労と御安否とを憂ふる至情が自然にしらずしらずの間に感情移入せられてゐる。それは整理に堪へないまゝに表現されてゐて読む者に直ち

に感応せしめられる。これが実に人生の人生たる所以であり、所謂『中』であり衷情である。心理的事実に於ては感応相称であつて、回顧的に連絡せりと思ふものと思ふ。支那的には天地人と云ひ、正気が天地に磅礴せりと云ふのであるが、直接経験の反省的考察整理が、最も大事な（分析にたへない）主体の全体性を失ふに至つてゐる。「天地のはじめのときになりませる神のみ名は天ノ御中主ノ神」といふ語感は出て来ない。（此は人生肯定第一主義或ひは情世界の確認であり勝利である。）川田氏（註順、歌人）の「莊重無比」は形式的考察、「至誠が天地に磅礴してゐる」は分析的考察、一首の調べでは至誠といふより至情を直ちに感ずる。天地が感情にとけこんでゐるのが實際である。端的に云へば、この歌をよめば何よりも君臣水魚の情に感激せしめられる。勿論「莊重無比」「至誠磅礴」なることは事実であつて、他の作家のものに比ぶれば重要な観点となることもあらうが、此の歌の真髓はかういふ処からは覗はれない。なほ、『回天実記』（註 土方久元著—高知藩郷土、後秘密顧問官『明治天皇紀』編修局総裁）の「いかにいますか」に従ひ「いかにいますか」としても、如何にも卑近の現実であるが、『いかにいますか』は憶念であり内心の世界であり従つて総合的である。従つて「霞こめたる」が漂渺たる

趣を帯ぶるが、若し前者に続くれば甚だ理智的のものとなる。「正しく直されてゐる」といふことの内容は斯くの如きものか。

○

かしこしと神もくむらむいはしみづ今日の行幸みゆきの大御心を

の『くむ』はそれ程不適確に思はれない。「くむ」とは「汲んで飲む」ことで「飲む」と露骨に言はないで、そこに至るべき勤勞所作を以て表現するのは思慮を加へて承引する思想的意義があると思ふ。此の時の孝明天皇の御告文おつげごみは当時の政治情勢を委曲を尽して述べさせたまひ、国家興亡戦攘夷決行の御覚悟を告げさせたまひ神護を仰ぎ願はせたまうた御由に記憶してゐる。従つて『くむ』とは寧ろ妥当であり、而も「かしこし」といふ綜合感覚を表はす言葉をもつてしてゐるのは同時に作者が自己の認識を以て大御心を理解せんとするのではなく、その認識を通じて不可思議の全体意志を仰ぎ謹みまつらうとする態度を示す。従つて素直にして柔軟の歌なるに拘らず縁語の技巧が夾雜の感を起さしめると云ふべきかと思ふ。

次の段で、詩作の体験を通ずる公註 三条実美のシキシマノミチ履践に対する心理的

研究は本研究の中心であつて、吾人の欣快とするところ。「憂悶の思ひもそのまゝに歌ひはらすときに解脱のよろこびが味はゞれるのであつて、（とは経験内容の直叙ですが、心理的若しくは哲学的省察が加へられることを希望します）その詩作は生、の、力、源、である。」（とは誠に、月花のもてあそびではなく、貴兄（註 著者、夜久正雄氏）の云はるゝ実人生随順宗教的礼拝の事実）かくて、「実人生の苦闘と詩作の歡喜とは表裏する」（とは実に詩と政治とは相昇降するといふことの心理的解明で要語である）「憂悶の思をもつくろは、ず、に、う、た、ひ、あ、げ、う、た、ひ、晴、ら、す、精、神、が、実、人、生、の、苦、闘、を、回、避、せ、ぬ、を、し、き、精、神、で、あ、る。」（神ながらの道に通すべき所以・真にをゝしき道なるが故に大臣作歌の要ある所以の體驗的心理的表現と思ふ）

○ 「蓮如のもち味」とでも云ひませうか蓮如（註 蓮如上人）の歌は屈曲に富んで人情的である。実美のは誠に「よどみない音楽的節奏」で清冽の感がする。蓮如の歌は終句の寛恕たる調べに、親鸞が仏は熱氣ほとけと云つたものを感じ、繰返してよむ内にしみ込んで来るものを感じる。

実朝の歌にもかゝる調べを感ずるが、彼のはやがてそれが政治的意志決定に連なるべき調べである。

この寛恕の調べは、読むと先づ生理的に血行がととのひ、ヴァイタル・レイ（註 意識生命線・いのち溢れるひらめき）の順行を、全身に、殊に皮膚面に、感じます。実美公の歌には、調べが高すぎるといふのか、決然としてゐて、出陣の決意に似た緊張を要求せられるけれども、かゝることは余りない。当時の思想生活国家的動乱の生がいかに峻峻なりしかを偲ばしめられます。（然るにかゝはらず御製には、孝明天皇の御製に於いても、をさめとらるゝ寛恕の大みしらべを拝しますが——）

○

いかさまに思ひわきてもかこちても涙のみこそ降増りけれ

今はとて思ひきれども黒髪の乱れてすぢもわかれざりけり

といふ岩公（註 岩倉具視）の歌に対する研究は賛成です。

岩公の歌は非常にリキンだよみぶりに拘らず、條公（註 三条実美）の歌の程緊張を要求せられない。然し、用語のひどい誤りや理窟に墮さむとする傾向はあつても、どこかま

だ緊張した意志としての調べを感じる。

第一首の「涙のみこそ降増りけれ」は事実ポロポロと降増つたのでせうが、作歌は反省の余裕に於てなされるのですから、過去をうけ、将来に相続さるべき痛刻の経験のみが扱ばれ言葉にをさめらるべきである。言葉とは主観的であると同時に客観的であつて、その表現さるゝ精神が、同時に客観的であることを意味する。即ち歴史的社会的関聯に於いてであることはまぬかれぬ心理的事実であるから、これが「あるがまゝ」の表現であると思ひます。従つて「あるがまゝ」に表現することが最も難しいので、表現しえた時の解脱感は自然法爾の解脱感であり個体の全体没入の歓喜である。だから経験内容を何でもかでも写すといふことは、「あるがまゝ」ではなくそこに自ら主客がわかれたれ取捨がなさるべきである。況や智的加工がなさるべくもない。

で、岩公の歌は、「涙のみこそ降増りけれ」といふ実感が誇張と評さるゝの悲喜劇を生じ、歌ひあげても解脱はせず、益々困惑する結果となつてゐる。

○

そのかみを思へばかなし山ふかくいりけむこゝろ人などがめそ

藤房（註 万里小路藤房）をよんだ公の歌に關し、「痛切の同情」との評は同感ですが、此は解説を要するでせう。嘗て先輩が藤房卿の直諫がいれられず遁世したことを賢人の行と讚嘆する史学界（明治の頃の三上参次氏等の説の再燃せるもの）に対する批判をされて、人徳等といふものが行動の規範ではなく、臣道随順こそがそれであると、論ぜられたことを記憶してをります。公の歌は、徳川時代の史学に対する幕末志士の批判の一とも思はれるのですが、此の間のことは尚研究を要します。例へば『蒼海閑話』に、古賀精里の子の穀堂の『題藤房遁世図』といふ詩があります。

嘉遁伝千古。堂々一納言。浮雲纏ニ帝闕。孤杖向ニ僧門。

南北天時異。行藏世運存。遙隣芳野上。回首恋ニ中原。

免に角之は一例ですが、「嘉遁伝千古」といふ態度があるわけですが、條公のは、「そのかみをおもへばかなし」と云ふので、勅勘を蒙られし時の体験から、藤房卿の、卿の場合は御不興でせうが、御不興を蒙りし時の悲観の心理を推察・同情されたものと信ぜられる。菅公（註 菅原道真）は、「槎柁タリ精靈ヲ失フモノ」といふ様に『菅家後集』に歌つてをられますが、公の歌は、藤房卿の遁世に対しては内的批判を加へられつつも、

亦、道義觀の潔癖論には一概に従はないで、心理的に歴史的事情を汲まれたものであり、公の教化的人格を偲ぶのである。宗教の本質は愛と云はれるのであるが、迷へる者の悩みを汲み、無常を觀する振幅広き歌は、寧ろ実朝の歌に見られ、此は條公の歌とは比較を絶する高き又深き調べであると思ふ。條公の歌は忠。宗教確立の峻峻の時勢に対処する絶叫であつて、迷惑者の心を汲む様な歌は、貴兄の研究に引用せられたものの中では此が初めての歌と思ひますが、僕は実は初めてはつとした様な感じでした。実朝と実美との歌はともに永久の歌であると思ひますがその作風は対蹠的であると思ひますが、どうでせうか。此の歌の性格を研究することは重要なことと思はれますが将来にゆづりませう。

○
行く水に風のふきいるゝ桜花ながれて消えぬ泡かとも見ゆ（源実朝）

「ながれて消えぬ」と、無限の無常感が陰にこもつて余韻をたゞないのに対し、

わがやどのまがきは野らとなりなめどのこるやいかに白菊の花（三條実美）

では、「のこる白菊」の意志を強調される。「なりぬらし」といふ様に概括せず、「なり

なめど」と実境探索的に云ふのは強烈な響を与へる。「虚実」又「実虚」の構成ではなく、「実実」とも云ふべき歌が多いのは、動乱の只中にあつた緊張をしのばしめるものと思ひます。

○

一筋におもひいる矢の誠こそ子にも孫にもつらぬきにけれ（真木和泉守）

は、子も孫も自主自立の意志を持つて行動するのですから、哲学的概括は心理的概括と違つて歌では無理である。此が強権的思想の暗翳を感じしめるのです。條公の、『またなびきつゝ』は心理的体験的であると思ひます。（昭和十八年七月三日記）

三十二、戎 あびす

真 まさ
男 を



戎 真 男

明治四十四年五月二十八日生。大阪商大商学科卒業。「精神科学研究所」所員として、「日本学生協会」「精神科学研究所」の思想活動に参加。昭和十七年、同会主催の大阪における「日本世界観大学講座」の宣伝担当責任者として、映画界にも通曉してゐた経験を縦横に生かして目覚ましい活躍をした。応召後満洲国にあり、黒河省孫呉の野戦病院に於いて流行性出血熱のため、昭和十九年一月十一日戦病死。時に数へ年三十四歳。陸軍歩兵上等兵。彼は思想活動の中心を、人心への影響が大きい映画の評論に向け、数多くの論文を残した。本書収録のものはその一端であるが、彼の祖国防護意志と緻密な思想生活の一端を、うかがひ知ることができる。

昭和十七年——三十二歳——

映画時評（論文）

『緑の大地』と『父ありき』の教へるもの

映画新体制の第一週は紅系、東宝島津保次郎作品『緑の大地』、白系、松竹小津安二郎作品『父ありき』を以て開かれたが、この二者の投げかける問題は、今後の日本映画の方向について、偶然にも相当に重大なるものがある様に考へられる。『緑の大地』はその大陸映画としての——ひいては大東亜映画としての性格に、『父ありき』は、国民映画としてその日本的な性格に。勿論この二つは決して別個の問題ではない。

不破祐俊氏は、雑誌『宣伝』四月号において、『上海の月』『蘇州の夜』を把り上げ、「その題材は大陸を背景にしてゐるが、総ての考へ方、見方、感じ方が一方的に片寄つ

てゐる点に首肯し得ないものがある。」と言はれ、それは「日、本、人、的、解、釈、で、一、貫、し、て、ゐ、る、点、」であり、「支那の大衆がこの映画を如何に感じたか、その報告を見るまでもなく判断がつく」と嘆かれてゐるのであるが、氏は『緑の大地』を見て何と言はれるであらうか？『緑の大地』は、私には、「一、方、的、に、片、寄、る」事を極力避けんとし、「日、本、人、的、解、釈、で、一、貫、」せぬ様に努力してゐる様に思へる。然し、だからと言つて、この映画が大陸映画として、良い方向を指示してゐると言ふのではない、むしろその反対なのである。

この映画には、支那人の目から見た日本人も描かれ、支那的な物の考へ方も取り入れられてゐる。更に言へば、支那の大衆の気持ちに合せて、作らうとしてゐる意図も看取出るのであるが、然し支那の大衆はこの映画を如何に感ずるであらうか？。そしてこの映画はそのテーマの如く、日支の親善協力に役立ち得るであらうか？ 答はむしろ否定的である。何故に否定的であるか？それはこの映画の楊大人が言ふ如く支那が日本と協力をするのは、日本の科学技術が優れてゐるからでありそれと協力することによつて、支那を再建する為であり、更に言へば、さうする事によつて日本に追いつき追ひ越し、日本に打ち勝たんとする為なのである。成程楊大人はそこまで言はない。然し、その

息子である抗日青年が驟然と改悟して、日本に協力の手を差しよべる動機が、この映画では実に安易に片付けられ、この映画に致命傷を与へてゐる点に、若し誰かが右の言葉を入れたとすれば、その抗日青年の転向動機は明確に浮び上るばかりでなく、又この映画は立派な抗日映画とさへ成り果てるのである。即ち、この映画はそのテーマである日支協力といふ事さへもが唯単に概念的に把へられただけであり、その本質を衝いてゐないのである。支那の大衆が心から日本を指導者と仰ぎまつろひ随順せんとするものが描かれてないのである。それなくしては、今後如何に多くの大陸映画、大東亜映画が製作されようとも、その意義を根本的に喪失するであらう。

勿論、それを描くことは、困難な仕事である。然し、根本的には、製作者自身の物の考へ方に欠陥がある。島津保次郎氏には日本世界観が確立されてゐないのである。それは、不破氏の言はれる如く、「総ての考へ方、見方、感じ方が一方的に片寄つてゐる」とか「日本人的解釈で一貫してゐる」とかいふ問題ではなくして、むしろ本当の日本の、物の見方といふものが確立され一貫してゐないからなのである。強調されるべきことは、この日本の物の見方を確立し一貫すべき事であり、それは、製作者一般の問題であり、

又大陸映画とか、大東亜映画等にのみ要求されるべきものではなくして、先づ日本映画そのものに要求されるべきものである。

島津氏のその欠陥は、そのテーマを具象化して行く過程のシネマツルギーに、演出手法にまで現れ、この映画をいはば無国籍映画とする。成程それは、或は支那の大衆に喜ばれるかもしれない、然しそれは日本映画としての（牧野満男氏の言葉を借りれば）普遍性ではなくして、無国籍映画としてのそれである。

私は、この映画におけるアメリカ映画の影響、その模倣を見るにつけても、日本映画の日本的な内容に対しては、やはり日本的なシネマツルギーが、早急に樹立されねばならない事を痛感する。アメリカ映画から学ばねばならないことは勿論であるが、然し何を取り何を捨てるべきかは重要な問題であり、アメリカ映画でもない、ドイツ映画でもない、ましてソヴェート映画に非ざる、日本映画のシネマツルギーが、確立されねばならぬのである。

その意味で、『父ありき』は、又異つた問題を提供する。小津安二郎氏のシネマツルギーが日本のか否かはしばらくおくが、氏が日本映画界にあつて独自の境地と見解を持

つてをられる事、及びそれが日本映画としての性格を研究する上に重要な課題たる事は事実である。勿論、形式は内容と不可分離のものであるが、この『父ありき』に於いては非常に日本的なものを感じる。それは、特にその内容とか形式以前のもの、即ち対象の把へ方、小津氏の物の見方、考へ方にある。

氏はかつて、小市民の救はれざる苦悩と、淋しい諦めを描いて一世を風靡した。然し、『父ありき』に登場する父、中学教員は、同じくあはれなる小市民に違ひないが、然し彼は、救はれざる小市民、淋しい諦めに生きる小市民では既になかった。彼は急病の為に卒然として死んで行かねばならなくなつた瞬間にも何一つ思ひ残すことなき人間であつた。それは大きな悟りを開いた、人間の姿であつた。彼は立派に救はれたる小市民であつた。

しかし、人は彼のこの悟り切つた姿を、人間的ならざるものと言ふかもしれない。しかしそれは人間的といふ言葉を履きちがへた言葉である。彼は、平常にあつては、息子の成長をたのしみに孜孜營々として働く良き父である。

然し、すべて一切を、(その息子—徴兵検査に甲種合格—をも)捧げつくさねばなら

ない時が来たとき、何の心残りなく捧げつくす事の出来る人間であつた。その悟り！それは所謂個人的な解脱であらうか、さうではない。それは、民族永遠の生命に触れるものである。

この映画は充分には描き足りなかつた。けれども、少く共、小津氏は、この父の中にわれ々日本人が何千年の昔から精神の伝統を形造つて来た所の、臣道感覚を見出さうとしてゐる。この父の悟り（もしさういふ言葉が妥当なら）はこの臣道感覚の中にある。それは真珠湾九軍神の精神に連なるものである。この映画には、卒伍の精神が底流をなして涇々と流れてゐる。この映画は、見方によれば、何故日本軍人は強いかといふことをおぼろげ乍らも暗示してゐる。私は、この映画をみつゝそれをひしひしと感じた。

『父ありき』は、日本的な日本映画である。それは真の意味における国民映画であり、世界的に拡大して行く日本映画の道である。これを支那へ持つて行つても判らないであらうとか、南洋では誤解されるかもしれないといふ事を恐れる人は、では我が日本人自身にはどうだと反省してみる必要があらう。

この映画の精神が全日本人に真に理解されたかどうか？ 勿論、映画自身が描き足り

ないといふ欠陥もあらう。然し問題はもう一つ他にもある。それはこの映画を受け入れる様な地盤を、日本は勿論全東亞に於いて、アメリカ映画の地盤から奪回し築き上げて行く事であり、先づ映画の正しい見方を指導啓発して行くことである。

(月刊『新指導者』昭和一七年四月号)

三十三、中山 幸



中山 幸

可された（右指導科主任は、後の経済学博士山本勝市氏であつた）。修了後、嘱託となる。

十三年八月、臨時召集により朝鮮羅南歩兵第七十六聯隊入営、十四年北支派遣軍水野部隊菊池隊に所属、大陸の戦野を駆けめぐり、十五年七月召集解除、現職に復帰。十六年二月、創立間もない「精神科学研究所」に、山本勝市先生の御推輓により（「国民精神文化研究所」嘱託兼任のまゝ）、

明治四十二年三月三十日、父常次郎、母志ゆん

の二男として横須賀市に生れる。大正十五年三月、

神奈川県立横須賀中学校卒業、四月第一高等学校

文科に入学したが、卒業を目前にして退校を命ぜ

られた。当時猖獗を極めた共産主義運動と関係が

あつたものと思はれる。昭和十一年七月、「文部

省国民精神文化研究所」の研究指導科聴講生を許

所員として迎へられ、マルクシズム批判の眼力を示す幾多の論文を雑誌『新指導者』や『思想国策叢書』(いづれも「精神科学研究所」発行)に発表。

十八年二月「精神科学研究所」は「反戦自由主義団体」の烙印を押されて、田所広泰理事長以下の所員が東京憲兵隊に検挙されたが、彼もまたその一人であつた。最近発見された書翰によれば、彼は憲兵隊から研究所辞職を強ひられたものの如くである。

十九年二月、再び応召、東部第六十三部隊(在甲府)に入営、同年七月、第十四軍司令部に編入されマニラに向ふ途中、バシー海峡(註 台湾とフィリピンとの間)で乗船「シャトル丸」は撃沈され、船と運命を共にした。時に数へ年三十六歳。

經濟倫理と生産力の増進 (論文)

經濟学者が經濟学の対象として取扱ふ「經濟生活」は、正確には「經濟的現象」「經濟的生活」であつて、政治家或は街頭經濟学者（彼等は多分に實際的政策論者であるから）が対象とする現実の經濟生活（國民生活）とは異なるものである。經濟学者と雖も經濟政策を論ずる場合は後者と同様となることは勿論である。学者が經濟理論を抽出する經濟的生活は現実の經濟生活を一定の観点より抽象したる世界、國民生活の一抽象面に外ならない。従つて經濟理論は当然抽象世界の抽象理論である。

理論が抽象的なるの故を以て理論の存在価値を否定するものもないではないが、人間の思考の順序手段として理論の存在は没却出来ない。理論の存在を否定するものと雖も實際には暗々裡に何等かの、却つて素朴幼稚なる理論を脳中に蔵しこれに依つてゐるの

である。理論をかゝるものとして、いはばその所を得しめて、その価値の限界を明確に劃して取扱ふ場合には、それは経済政策を通じて正当なる効用を發揮して国民生活に貢獻する。

経済理論をこれ以上に評価することも、これ以下に軽視或は無視することも、同様に国民生活を攪乱するの基とならざるを得ぬ。

自然現象は独立に存在するに反して経済的現象は、自主的なる人間の国民生活としてその中ののみ存在する一抽象世界に過ぎぬといふことの中に、自然科学理論と経済理論との根本的相違があると考へられる。

×

×

斯くて国民生活に於て、経済理論は爾余の心理学理論、政治理論、倫理学理論（倫理にも理念と理論が存在する）自然科学理論等と、勿論夫々にウエイトの差はあれ、対等の地位に於て考量せられ、皇国の宗教的信仰につらなる皇運扶翼の道德理念に統攝せられて国民生活を指導するのである。

この道德理念と諸論理（これは理論と正しくは云ふべきであるが今は一般の用例に従

つて置く」とを対等と視るのも誤りであるが、理論を以て優位のもの第一義的のものとして見て、倫理は論理（理論を指す）の中にあるべく論理に従はねばならぬと云ふが如きも亦謬りである。唯物史観はその代表的のものであつて、禍害の最も甚しいものである。

最近経済の論理と倫理に関して頻りに論議され、従来倫理は説教的に経済の論理とは別箇に無関係に、上から外から制限的に桎梏として与へられて来たが、今や経済の倫理は論理の内に論理に従ふことが要請せられてゐる、古き時代の倫理は最早経済発展の桎梏と化し新しき「逞しき倫理」を必要とする云々と主張されてゐる。そしてアダム・スマスの経済学説をも恣意に曲解して勝手に援用してゐるものさへある。

最小の犠牲を以て最大の効用を得んといふ経済原則の変形に過ぎない「生産力の増進」を以て、経済の論理なりとし、これを至上命令となし、経済の再編成、経済機構の根本的変革によつて生産力を解き放つことなくしては百の経済倫理も口頭禪に終るのみならず、経済発展の桎梏たるに過ぎぬと論ずるのである。

此処では従来^{ふい}の経済倫理は、舊き倫理とせられ束縛桎梏と考へられ、各時代毎に別箇の倫理が存在する、今や新しき倫理は経済の論理の中に見出されねばならぬと事もなげ

に言ひ放つ。それは倫理道德の否認であり、その正体は唯物史観である。

経済倫理は経済の理論の発展により内容を豊富に緻密にされることは当然である。彼等が我が道徳理念を桎梏束縛と受け取るのは、彼等が国体を理解せずしてこれを離れ忘れ、自己の研究する経済理論を金科玉條としてその放恣なる貫徹を一方的に意欲するが為に外ならぬ。豈圖らんや彼等の論ずる理論の如きも皇国の生成発展の過程に消化摂取せられたし又咀嚼同化せられてゆくのである。彼等は外国模倣の翻訳理論の牙城に拠つて、国体を忘れ忠孝、勤儉等々の従来^レの倫理を非議するものである。

×

×

明治天皇の御詔勅には

「興国ノ本ハ勤儉ニアリ祖宗実ニ勤儉ヲ以テ国ヲ建ツ今富強ノ実未タ举ラスシテ遽ニ奢侈ノ弊ヲ踏ムアラハ責メ朕カ躬ニアリ」

「勤儉ヲ本トシテ経済ノ方法ヲ定メ」

「忠実業ニ服シ勤儉産ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ実ニ就キ荒怠相誠メ自彊息マサルヘシ」

大正天皇の御詔勅には

「浮華放縱ヲ斥ケテ質実剛健ニ趨キ」

今上陛下の御詔勅には

「浮華ヲ斥ケテ質実ヲ尚ヒ」

と御示し遊ばされてある。

「勤儉」「質実」「浮華ヲ斥ク」等々は経済倫理として又同時に国民道德として戴くことが出来る。明治初年以來普く唱導せられた「富国強兵」も亦同じである。「勤勞」により人力・技術・資源・機械設備等々を最大限に発揚し、節儉により浮華を斥けて天与の資源人工財貨をいとほしみ用ひ、残余を貯蓄することこそ、生産力の増進であり、資本の蓄積であり拡大再生産の基礎に外ならぬ。而もそれが皇運扶翼の太行として皇国を富まし皇軍を強からしめんが為にと遂行せられたのである。

二宮尊徳の勤儉推讓の教も、根柢に天物を暴殄ぼうてんせずとの敬虔なる理念の下に道德として説かれ、併せて生産力の増進蓄積拡大生産の理論を包括して剩さぬのである。

かかる倫理は経済の上から外から与へられて理論を統撰しながら同時に経済の理論と

一体となりその中に溶け入つてゐる。それは単に経済倫理であるばかりでなく国民生活の實踐道德となつてゐるのである。今後益々経済理論が多岐複雑精緻となる時、これを統攝した経済倫理否国民道德はいよいよ強調せられねばならぬ。

二宮尊徳が一家復興の経験と自信を以て桜町再興の仕法に懸命必死の努力をしたが成功しなかつた。彼の理論と経験も村民及役人の心を動かし得なかつた時、成田山（註 千葉県にある新勝寺の山号）に参籠して神明の佑助により悟り得て、後漸く成功したのであつた。如何に精巧緻密なりと雖、理論のみを以てして一国の経済運営の不可能なるは明瞭である。ソ聯計画経済の混乱の跡に徴しても明かである。

二宮尊徳は「古道につもる木の葉をかきわけて天照す神のあしあとをみむ」と歌つたが、此処では田畑を耕す一畝々々の農業生活がそのまま宗教生活となつてゐる。まことに我国では国家の祭祀に於ても、豊穰を神仏に祈り初穂を神仏に献げ、一文不知の農民と雖も祖先伝来の山林田畑を神仏の加護の下に耕耘してゐるのである。如何に農村が電化機械化化学化せられようとも、従来の経済倫理の正当なることに変りはないのみならず、益々これを強調する必要がある。

今日支那事変下と雖も「勤儉貯蓄」の徹底を見れば、今日より遙かに戦争経済の運営も円滑となるべき筈である。それにしても国民生活の安定、標準労働時間制等々の言葉が社会政策の名の下に兎もすれば過当の要請を以て、消費を助長し勤勞を抑止する結果を将来し勤儉貯蓄に相反するが如き傾向があることは聖戦貫徹上嚴重に警戒せねばならない。

翻訳的な「公益優先」「生産力増進」等の、余りにも物質的、経済的にして、且異物を包蔵する言葉は、「勤儉」「富国強兵」等の国民感情に親和せる伝統を持つ言葉に遙かに及ばぬ。

X

X

近時聖戦完遂の爲め、「国防国家建設の爲め生産力の増進」といふ言葉が、合言葉として一般軍官民の心を把握してゐるが、国防国家建設の爲めには、満さるべき要件が多々存するのであつて、生産力増進は経済原則の代名詞としてその中の重要な一要件なることに謬りはないが、断じてその全部ではない。

生産力増進のみを捉へて之を一方的に不具的に主張し、その爲めに一國生産関係即経

濟構造の根本的変革を主張するのは、共産党の革命理論である。最近知つてか知らずしてかこれと類似の主張をするものが多いことは注意せねばならぬ。

生産力増進を至上命令とし、その中に倫理を求めよと呼び従来倫理道徳を以て上からの外からの束縛桎梏と見て排斥して行く時、倫理道徳は破壊蹂躪せられ全く無倫理の世界が現出するであらう。その趨く所国体を所謂「歴史の齒車」により破壊し去るの恐れなしとせぬ。

其処迄至らぬとしても經濟論理の唯我独尊的主張は、そしてその実施は今日既に國民生活の各部門に種々の混乱を惹起しつゝある。「生産力の増進のため」の企業統合の犠牲となつて軋業を余儀なくせられたものが、某省の官僚に相談に行つた処、「日給×円で満洲へ行つて百姓をせよ」と云はれたと云ふことは、人口に膾炙した話であるが、これらは正に經濟の論理の中に倫理を求めたものであらう。これは当人の家庭の事情すら考慮に入れぬのであつて其処には全然倫理道徳は見る事が出来ない。(昭和一六・六・三)

「現代思想批判のために」から 変るものと変らざるものと、変ふべからざるものと変ふべきものとの区別をなしえざる革新論者は、一切を相対的真理と理解して、各時代毎に新しい根本原理組織制度を主張し、一切を根本的に革新することを主張する革命論者となつて了ふのである。万邦無比の国体を恵まれ、この根本的な点に於て絶対的真理の把握を信ずるわれわれは、時代と共に日に新に改革せらるべきものを認めつゝも、革命論者に合流追隨する革新論者を匡さねばならぬ。(昭和一七・五・二五)

「新経営形式『営団法』の思想背景について」から 「営団法」といふが如き法律的技術的に疑問百出の新観念を認める必要が果してあつたであらうか。経済的に見た営団法の価値に多大の疑問の存すること勿論なるが、今はこれを暫く措き、法律的觀察に止むる立場に於て考ふるに、この「営団」なるものは全く鶴的存在である。新時代は、新観念を生むことは勿論よく諒解してゐるが、然し如何に新時代とはいへ、鶴的新観念の陳列があつてよい筈は断じてない。新時代と雖も時間を超越して来るものではないから出来るだけ既存の一般に習熟せる制度を利用すべきである。この見地に於ては敢て

「営団」なるものを認めずとも、国策会社乃至は株式会社或は特殊組合で十分ではないかと謂はねばならない。(中略)かの新体制の理論をめぐつて争はれた資本と経営との分離の思想が未だ争はれてゐるかに思はれることである。(註——それは共産主義的事実

歪曲論なることは既に証明したところである。中山)

私は立法府に要望する。将来かかる不鮮明な術語(註 営団)を持つ法案を通過せしむるなかれと。出来得べくんば既成の営団法をも修正されたい、と。この種の法案が官僚統制の行過ぎを訂正したと称さるゝ第七十六議會を易々と通過したことを私は一つのミラクルといひたい。もし将来統々と「営団法」が登場することになつたら、我国の産業界はどうなることであらうか。日本発送電営団も可能であらう。北支開発営団もあり得よう。又、全日本交通営団も存し得よう。斯うなつては産業界の士氣に關することを我々は恐るのである。大河の奔流が存するとするものこのみは必ずしも恐るゝに足らない。ただ憂ふべきはその治水をはかるべき堤防に蟻の一穴ありて水の洩るゝことなきやである。敢て識者の再考を望む。(昭和一七・七・一六)

「私有財産制度の危機」から弁証法的思惟構想は古今東西の歴史に取材して一応雄大明解であるとしても、現実はあらゆる人智の構想の限界を遙かに超絶する更に雄大複雑難思議な存在なのである。死せる灰色の理論を以つて一刻も止むことなく生々流動する現実社会を規制せんとしてもそれは所詮無力である。

未来の歴史が共産主義社会、公有制社会の実現を以て革命が後を絶つといふのも、彼等の常に振りまはす弁証法の正反合によつて世界歴史が永遠に生成変革を続くといふ、彼等自身の理論とも矛盾するではないか。

生長変化はあつても松は永久に松、肉体と精神に発達進歩はあつても人は永遠に人、瓜の蔓には茄子はならぬ。社会の一切の経済活動、社会生活が営まらるべき根本の制度が、変化するなどといふことは凡そ物理、生理、自然科学、社会科学等一切の領域に於て許されない理論である。

一切の自然物は申すに及ばず、人そのものも実在するものなること疑ふ余地はない。

山鹿素行は中朝事實の中に万物は天地の精氣の凝りしものといつてゐる。古来陰陽和合して万物生ずともいふ。我國の神ながらの信仰においては、伊邪那岐・伊邪那美二神天神のみこともちて、ただよへる国を修理固成し給ひ、次いで国土山川草木を産みましましたと伝へてゐる。

人は万物の靈長として、實在する爾余のものにはたらしきかけて、創造するのであるが、自然物は又人の組織を構成する。人は物をして物たらしめ、物は又人をして人たらしめ、相依り相俟つて所謂天神の「むすび」の御活動に参与するのである。即ち古語に云ふ天地の化育に参ずる所以である。物は「むすび」の所動的方面を受け持ち創造作用の客観的方面を負担し、人は能動的主観的方面を分担する。換言すれば物と人との間には本来主客の秩序があつて、相依り相扶けて「むすび」の働に参ずるものである。

政府が国民の自由なる經濟活動に信頼出来ずして、根本大綱のみならず、枝葉末節に亘りて計画統制干渉するは、自らの指導的使命を忘れ、自らの政治能力の無能を暴露して、經濟活動に没入して干与するものであつて、正に政治の經濟に対する優位といふよ

りは、政治の経済への屈服、墮落といはねばならぬ。国民は神と皇きみの容ゆるし給ひ政府の認むる所により広汎なる財産の私有、運営を委ねらるゝものであるから、飽く迄、神と皇との御意志を奉じ、国家の使命隆昌を念願し、臣民相共に協力して自己の才能、財貨の真意義を正しく充分に発揚する様に努力すべきである。かかる根本態度にして誤りなき限り縦横にその創意を發揮し生成発展して止むことなく経営活動に挺身することが、国家の興隆のため望ましいのである。

国家の運命を決定するものは経済に非ず政治である。政治は高貴なる精神・惟神道をもととし、国民一人もその所をえざるものなきやうにし、その懿徳良能いとくりようのうを自由に發揮せしむることを根本義とすべきである。私有財産制度（民有民営原則）を確認し、相互の正当なる競争を容認してこそ国民の才能は充分に発揚せられ、物質の生産増加の如きはこれに伴つて必然に解決出来る。人が主で物は従である。政治は事実において物を主とし人をその生産の手段と化すごとき政策を排斥して、「庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ」しむるやうに一般国民及び企業家を正しく指導すべきである。

比叡に登る

いはねふみみ山ちゆけばときじくに鳴く鶯の声のともしさ

いくそたびすめらみことのいでましてみ山に仇をふせぎましけむ

そのかみのひじりがのりをひらきたるみ山にくればなつかしきかな

(月刊『新指導者』昭和一七年一月号)

三十四、若^{わか}野^の秀^{ひで}穂^ほ



若野秀穂

明治四十五年一月生。昭和五年四月、第一高等
学校文科甲類に入学。黒上正一郎先生によつて創
立された「一高昭信会」の会員となる。同学年の
会員に桑原暁一氏(昭和四十八年逝去)、加納祐五氏、
藤田恒男氏がをられる。

彼は、黒上先生が昭和五年に亡くなられたあと
「一高昭信会」の中心メンバーとして、明治天皇、
聖徳太子の教典を仰ぎ、同信相統の願行に身を捧げた。昭和九年一高を卒業し、東京帝国大学法学
部政治学科に入学したが、入学後も若い後継者の育成を一時も忘れなかつた。昭和十二年大学卒業。
後軍隊に召集され、比島方面作戦に従事するも、病を得て除隊、陸軍歩兵軍曹。斗病につとめたが
昭和二十年九月十三日逝去。時に数へ年三十四歳。

彼は同信生活をつづけるかたはら「一高昭信会」の機関誌『伊都之男建』に数多くの論文、詩歌を発表したが、よい友にめぐり合へば全身的に喜び、友が離れてゆけば、夜も眠れぬほどに悲しんだ。さういふ仁であつた。また、黒上先生はじめ諸先輩が次々に結核にたふれた事を深く憂慮し、自ら坐禅に、礼拝に、また皇漢医学その他、食養法、健康法を実修し、人にもすすめ、病む友をも導き、悩む友ははげまし、若い後継者を導くことにつとめ、彼との日常の会話はこれ以外には全くないといつてよいくらいであつた。

昭和九年～十年——二十三歳～二十四歳——

我 家

わが家に春はたちきぬたらちねの母のみやまひおこたりゆくに（註 おこたる、よくなる）
父母の心やすらぐさまみるに越ゆるよろこびこの世にあれや（昭和九・四・一五）

みちのくのうた

くれかゝる吾妻信夫の山々の色のよろしき忘れがてぬかも
阿武隈の川の流のさやさやに我はわすれじみちのくの旅を
くれはてし阿武隈川に照る月をまたもたのしむときはいつの日（昭和九・五・一〇）

白浜雑詠（註 伊豆半島南端に在り）

夕ぐれのみ空あふげば淡雲のかすめるひまに星とほじろし
山寺をいでであげみち一人ゆけば稲田に虫の声きこゆなり
しぶきかゝる磯におりたち釣すればそびらの山にひぐらしの啼く（註 そびら、背）
押しよする波うちくだけ立ちのぼるしぶきにはゆる夕日の色かも（昭和九・九）

走れ電車

友を救ひにゆかむとす。(昭和二〇・五・一一)

たまさかにとく起きて見し暁の東の空の色のよろしさ

朝日さす代々木の杜の木つゆの末をさしてとびゆく鳥のかけかな(昭和二〇・二・二五)

昭和十一年——二十五歳——

小寒 暎

躍りをどりくだけで騒ぐ波がしらにむかひてゆきぬをたけびしつゝ

さねさし相模の海の波かづき暎をしつゝ神代をぞ思ふ

あかつきの空なきわたる鳥の声に大海原はあけそめにけり

さしいづる朝日の方をさして飛ぶ鳥の姿をあふぎみるかな

をどりいづる朝日をろがみ手をあはせ拍手かしたでうちぬ波間にありて(昭和二一・一・二七)

われらには影のかたちこそふが如祖先みおやのみたま守りいませり

一切をかくすことなく拙きもうまきも歌にしるしてゆかむ（昭和一一・九・二五）

三人の男の子を海にうしなひてより信に入りしとふ老婆ありけり

三人のむすこには死なれむすめにはそむかれしとふ老婆よあはれ

朝夕に間なくおきなく南無大師遍照金剛とたのみて生くると顔かがやかし我にかたり

ぬ（昭和一一・九・二五）

高野山にて

秋雨のふる夜しづけくもろともにかたらふことのうれしかりけり

秋雨はいたくなふきそ外にいでし友らいづくにやどりてをらむ

夕ぐれのまやみの中にかくれゆきし君の面おもては今胸むねにあり（吉田昇兄を送る）

（昭和一一・九・二五）

昭和十一年九月二十七日

しみゝ降る秋の朝に呉竹の代々木の宮に詣でまつりぬ

小雨ふる秋の朝のまゐり路は人まばらにてしづかなるかな

まゐり路をひとりゆきつゝ師の君のみたままつりを告げまつらむとす

たゝかひてたふれたまひし師の君のみたままつりのけふとはなりぬ

師の君のいまなほわれら目守りますみ前にありて打ちかたらはむ

述懐

さかしらのことあげしつゝおのづから仰ぐところを忘れぬたりき（昭和二・一〇・二五）

書翰 一高の会（註 一高昭信念）の相続といふことは、諸兄身を捨ててやつて貰はね

ば困ります。僕らのときは、とにかく、一致団結して、相続といふ点では、生死をかけた、後の人を養成しました。そして会を守りました。外面の華々しさは如何にすばらしくとも、覚むれば槿花一朝の夢、トーキーの幻影に等しきもの。三世を貫く真の同志養成が最も緊要であります。この事については、諸兄に言ひ度い事は山程あります。

大学に入つて、バラバラになるなら、初めから同信などと言つてやらないがよい。いつそ会を解散したらドウダ！（ソウどきまぎすることはない）どうせやるなら一致団結して、緊密の、充実した、確固とした、絶対の信の上に立つて、本当の意味の勉強をして貰ひ度い。

小^ちつぼけな自己にとらはれて、宇宙から見れば、微粒子にも充たぬ小我の苦悲などは、どぶの中にたゞき込んで、眞実の信に生き給へ。天地は常にかがやいて居る。太陽の出ぬ前に起きて東天を望んで見給へ、雀を見給へ。宇宙、自然には、大道がある。宇宙意志に合致する瞬間、没我の大歓喜は湧きくる。

明治天皇御集を拝誦して、朗らかに突進しよう。

不 一

一 高昭信会諸兄

若 野 秀 穂 拜

僕はもう忙しいから、手紙も出さない、会ひもしない。しかし、心のうちでは常に思つてゐる。つねに生命は諸兄の心につながつて居る。諸兄！ つまらんど、浮

雲の如くただよふて日を暮すのは、外面に心奪はれて過すのは。(昭和二・一〇・三一)

書翰 久しぶりに晴れ渡つた秋空をあふぎ、さんさんと日のさす縁側で日光浴をしつゝ、いま吉田昇兄に手紙を書いた所です。

行軍ももうすぐですね。僕も二年のとき、沼津にゆき、今の、桑原兄、加納兄、中村兄、藤田兄等と、一緒に、沼津の小さなソバヤの二階で酒をのんでしまつて、千本松原の、月影が降る様にくまなく照して居た砂原で乱舞したときのうれしかつた事など思ひ出します。僕らはいまでもさうですが、心の底からの友達といへば会の人の外はなかつたのでした。酒をのんで泣いたこともあり、一寸でも言ひ合ひすると、一週間も二週間も互に心では慕ひながら、言葉もかはし難く、天地もくらく感ずる様な間柄でした。

どうか、諸兄身体を大切にして下さい。否、それよりも、千歳をかけての友となつて下さい。僕は友には何もかくしません。何でもしやべります。又それで益々同信の契は

深く強固になつてゆきます。「復古すべし、肉体も精神も思想も感情も」と叫び、日本人を憧憬しつゝ日光をあびて居ります。

では又いづれ

八日

若野秀穂

昭信会諸兄

(昭和二一・二一・八)

述懐

さかしらのことあげせずにこゝろよりむつばむ友はすくなしとおもふ

しかすがに人を容れざる偏狭のわが身の性質きを正すべくあり

もろともにゆづりあひつゝ歩みゆかば道きはまらむことなかるべし

かたくなのこゝろをひらきにぎはしき友の世界に入りゆかむとす

仰ぎ見る星の光は遠けれどまがはぬことのためとかりけり(昭和二一・二二・二五)

昭和十二年〜十三年——二十六歳〜二十七歳——

九月八日夜

家人はすべて寝ねしが父のみは我のかへりをまぢめてくれし

日毎ひとつとめにいづる老いし父のわづかのやすらぎは熟寝じゆまにあるを（昭和二二）

松山城跡にて

草の根にすがりてのぼりたまふ父君のあとにつづきて我ものぼりゆく

低けれどゆくにけはしき城址にのぼりてたてば遠山も見ゆ

たちまちに眼界ひらけうちつづく水田ながむれば立ち去りがたし（昭和二二・四・二七）

ひとのこころゆたかにつむむ春風のごとくあらむとつねに思へど

おのづから仇のこゝろのなびくまでと仰せたまひし大御歌はも（昭和二二・二〇・二五）

黒上先生のみ霊の大前に

年毎にみまつりの席につらなれど今年はことに思ひ深しも

のこしましゝみ書緋けばおのづからこゝろのさはり消えてゆくなり

ゆく道のいよよせばまりくるしむときみ書緋けば心ひらけゆく(昭和二二・一〇・二五)

十日夜

長き間くぐもりてありしをただにいはずまちゐてくれし友らのこゝろよ(昭和二三・五・二〇)

六月十二日夜よめる

をろがみていただく飯にちよろづの人のこゝろのこもれるこゝちす

八百万の神うけたまへ手をあはせをろがみまつる賤のこゝろを(昭和二三)

三年前の思ひ出

みちのくの山路にまよひしその折にみちしるべせしかつこゝろ鳥のなつかし

人知らぬ山畑に一人あふむきてみ空のみ魂よばはむとせし

生れしゆ縁ありにしなつかしき人々ただにこほしかりけり

なつかしき人らとさかり人知らぬ山辺にありてほとほと泣きゝ

つかれはて身もほとほとに果てなむとせしときみ空にかつこゝろの音きこえぬ

来よ来よと我をみちびく鳥の音に後をし追ひて山をくだりし

そのかみを思ひたどれば今もなほよろこびいさむこゝちするなり（昭和一三・七・二〇）

女学生の和歌について

ぼくの友人が或る女学校の一年生の作文を受持つてゐて、ぼくはその友人にあふ度に、「生徒に短歌を詠ませなさい」といつて居つた処が、夏休の宿題に、何でもよいからと、大体和歌の作法を教へて、創作を命じた処が、生徒がよろこんで、九月のはじめには、一人平均二十首づつつくつて来たといふ。ぼくは頼んで見せて貰つたのである。大きな包をかゝへて帰宅し、電灯の下で見ると、興が湧いて来て夜の更けるのも忘れる位である。歌の勉強になるので、暇を見ては読んでゐる。中に川柳の如き吹き出す様なものあり、俳句をつなげた様なものあり、シキシマノミチにかなつて、美しい少女のこゝろもちをスナホに詠じて、胸打たしむるものもある。時局柄、兵隊さんの上を偲んで詠んだ歌には真まことそのものがある。

赤だすき男々しくかけたるますらはは姿勢正して決意語れり

今日もまた出征の兵を送りたり日の丸小旗しかとふりつゝ
街頭に立てる少女の千人針父に送るや兄に送るや

朝夕はうすらさむさをおぼゆるに北支の空はいかがあるらむ
右は同一作者である。皆立派な歌である。

別の作者が、言葉づかひが粗雑ながら

我が軍はどこまで守る我が兵士かゝげた日の丸ばんざいばんざい

と、マトマラスとはいへ忠義感情の極致に近い所をうたひあげようと努力してゐるのは
うれしい。(月刊『学生生活』昭和十三年一月号)

昭和十七年〜十八年 — 三十一歳〜三十二歳 —

婦 還

横町をまがりてくれば我家のまへに人々あつまりて居り
近づけば人ら気づきて驚きの声あげ我にあいさつをしぬ
我もまた胸とどろかしあいさつの言葉もしどろ頭をさげぬ

そのかみに変らぬ友の面影をけふはつはつに相見つるかも

亡父を偲ぶ

我がかへり待たずして逝きにし父のあとをとぶらひにけり心をこめて
胸の上に経文のせて安らけく逝き給ひしときけばやすけし
四十九日喪にふくしながら語ること自ら亡き父上の事のみ
亡き父をしのぶよすがに身振手ぶり真似つゝわらふはらかなし
ありし日のことども偲びはらからと夜毎かたりぬ夜のふくるまで
うからやから集ひて語るありさまを亡き父上は守りますらむ

早春詠草

さ庭べに我が降りたちて軟きま土ゆ草の生ひいでしを見つ
古ぼけし鉢の中なるひからびし土ゆ生ひいでし草もありけり
狭きうちに閉ぢこめられて汝がいのち守り来しかと思へばいとほし
物言はぬ草木をながめ徒らに過すこの身のくるしかりけり

二月二十六日

掘ばたの上越す風は寒くあれど堤の上は草生ひにけり
ときはなる松のさ枝のみ空さしそびゆる姿眼にすがすがし
暮れかゝる堤の上に一人たち思ふこゝろは人知らざらむ

小田原にて

ものおもひしばし忘れつ都路ゆ来りて相模の海辺に立てば
広き海につづく松ヶ枝青々と日に輝きて目にしむごとし
春いまだ浅しといへど南に向ふ海岸草青みたり

春霞たなびく沖辺ゆよる波はとどろき来てはひきてまたよる
岸に碎けよする白波ひきてまたよするはげしさ意志ある如し
箱根山と相模の海の間にもつづく浜べは御幸白浜(昭和一八年二月)



田 所 広 泰

この冊子の遺歌・遺文にしばしば見られる
“田所広泰さん！”といふ先輩について

亜細亜大学教授 夜久正雄

戦時中に死歿された学徒の遺歌・遺文を集めた前回刊行の『いのちささげて』と、その続編であるこの『続いのちささげて』の両書に登場するいくたの文中に、その執筆者

たちにとつての当時の「日本学生協会」理事長であつた先輩“田所広泰さん”のお名前が、よく見うけられます。

それでこの続編の巻末に、その田所広泰さんのことを、少々ご紹介しておきたいと思ひます。

「田所さん！」と僕ら後輩が、今も変らぬ畏敬の心をこめて呼びならはしてゐる故田所広泰氏は、旧制一高・旧制東大法学部を卒業された新進の学徒でありましたが、終戦直後の昭和二十一年六月十八日に、三十七歳の若さを惜しまれつゝ、疎開先の岩手県盛（さかり）町で肺結核で病歿された方です。

田所さんは、一高在学中の昭和四年に、故黒上正一郎先生（翌昭和五年九月二十一日、教へ年三十歳の若さで肺結核で病歿）が創立された「一高昭信会」（聖徳太子と明治天皇の御人格、御学風を敬仰しての会）の、創立期会員四人のうちの一人でした。しかし、その四人の同期の新井兼吉・河野稔の両氏は、後、昭和七年一月に次々に病歿されて、お二人連れだつて黒上先生のあとを追ふ形となつたのです。他の一人の会員は、漢文を専攻してのちに、東大教授となりましたが、早く「一高昭信会」グループから離れてしまつたため、田所さんは、黒上先生亡きあと、言はば独力で会を育成していつたのです。のちの「東大文化科学研究会」（月刊・『学生生活』誌を発行）、さらにのちの「日本学生協会」「精神科学研究所」（月刊・『新指導者』誌を発行）の創立、運営を主導されて、当時の「学生運動」の指導者となつたのであります。それでこゝでは田所さんを偲ぶよすがに、残された遺歌の中から、

まづ次の連作十首を引用してご紹介のはじめとすることにしました。

「黒上先生」と題した昭和十年のものです。

師の君をいたも恋へども在りし日のいや年さかりゆく悲しさよ

み書くりかへし読みは来つれどしたはしきみ声きかずに五とせすぎし
なつかしく笑ませる君にいめのほか語りまつりしときはなかりき(註 いめ 夢)
朝な夕な机の上の師の君の写し絵をがみ来は来たれども

われら稚きころに堪へしこれの世の重き悲しみ消ゆるときあらじ

よろこびの去らば去りなむうつし世のつきぬ苦しみに貫き生きむ

みくにいまだならざるになぐさまむことは求めず生きゆくあひだ

二日あはぬとたよりによびて語らしゝそのみたよりはいまもよめども

徳島のみ家にかくりたまひにしことあまりにもまことにしあれば

いく千とせこのようつるとも君にあひしありし日こゝにまたかへらめや

田所さんのこの歌には、少し口ごもるやうなしらべの中に、亡き師（黒上正一郎先生）をしのぶ悲哀と、それを克服しようとする強い意志とがこもつてゐます。田所さんはその多感な少年時代に、父君（海軍中将・田所広海氏）を失つてゐたのです。いつであつたかその時の悲しみにふれて、父君の墓碑の文字を書いた時の気持を私に話してくださいと、ほとんど毎日やうに田所さんと顔をあはせてゐましたが、僕の性質もあるのか、さういふ話をしたことはめつたになかつたので、いまでもよく覚えてゐます。

田所さんがいはれるには、父君の志を継がうとして海軍兵学校を志願したが、近眼のためにそれがかなはず、志望を変へて東京府立一中から一高文科にすゝんだ、とのことでした。海軍とは異つた方向ではあつたのですが、田所さんの右のコースは、いはゆる世間でいふ出世コースでしたが、そこで「信仰の師」ともいふべき黒上先生にめぐりあつたのです。

田所さんの生涯を貫いてゐる宗教的心情は、おそらく父君を失つた悲しみに発してゐるやうです。その悲しみのなぐさめともなつたと思はれる黒上先生とのめぐりあひ、そ



黒上正一郎先生

の下での、兄弟よりもつと親密な交流のある「同信生活」その楽しい求道の日々も長くはつづきませんでした。せいぜい二年間にもすぎなかつたでせう。黒上先生は病み、亡くなられ、つづいて、師の面影をともに仰ぎながら生涯を生きることを誓つた親友の河野・新井の両氏も死んでしまひました。田所さんの強烈な意志は、この悲哀の底から生れ、悲哀によつて鍛へられたのです。黒上先生も田所さんも新井さんもみな一人っ子で、ともに早く父親に死に別れたやうです。「一高昭信会」の初期を彩る濃密な友情と信仰生活との合一は、この辺にもその原因の一つがあつたかと思ひます。

田所さんにとつて黒上先生の悲願を継承するといふことは、単に「一高昭信会」を維持することや外面的な発展をはかることではありませんでした。また単なる研究の継続でもありませんでした。黒上先生が、その著書『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』現

在は、社団法人国民文化研究会で復刻出版)の中でくりかへし言つてをられるごとく、それは
△研究そのものも亦現実生活に於ける(聖徳太子に対する)憶念の信の実現を念として、同
信師友の協力によつて無窮に相続せらるべきと共に、又それは(太子の)御心によつて開発
せしめられたる研究者の信念告白を内容たらしむべきものである^ヨといふごとき、実人
生における信の相続であつたのです。太子の言はれる「^{じぎょうけた}自行化他の^{ぼさつぎょう}菩薩行」を日々の生
活に実現すること——そこに黒上先生の遺志の継承も太子の讃仰も集中するものであり
ました。これはもちろん、国民生活全体として実現せらるべきものであつて、数名の青
年同志の能くするところではありませんでした。しかし田所さんたちは、黒上先生に導
かれてその課題に身を捨て、——現世の榮達をかへりみずにとりくんだのでした。

このやうにして、「一高昭信会」の中に用意され蓄積された思想生活が全国的規模に拡
大したのは、主として小田村寅二郎氏はじめ田所さんにとつての数名の後輩の活動が契
機となつたのです。僕もその仲間の一人でした。「一高昭信会」と同じやうな「同信団
体」が全国の旧制高等学校、専門学校、旧制国公立大学に結成され、その横断的連絡

は、「日本学生協会」(昭和十五年創立)と名づけられました。「一高昭信会」の機関誌『伊都之男建』(いつのをたけび)は、「日本学生協会」発行の『学生生活』誌に生長しました。田所さんは、毎号巻頭言を書いて指導的論策としましたが、さらにこの雑誌に歌欄を設けてその選をし、歌論をも展開しました。それらは、三十前後の年齢としては、実に超人的な活動でした。

元来、黒上先生のご思想、信仰は、どちらかといふと宗教的教育的の傾向が強くて、政治的活動を目ざすものではありませんでした。しかし、時代の危機感と田所さん自身の天稟と環境とによつて、田所さんの活動は、政治的活動に向つたのです。そこで、「教育改革の思想運動」が、「反共運動」となつてゆきました。さうしてつひに戦争指導方針として打ち出されて来た「マルキシズムまがひの社会変革思想」と、真正面から対決することとなつたのです。つまり、当時喧伝された「百年戦争論」の中味には、「戦争を革命へ」といふ「革命思想の危険」を、「翼賛会運動」には、「一国一党の全体主義」を、「国防国家論からはじまる軍政論」には、「軍部独裁の軍国主義」を、「独伊ソ日同盟論」には

「共産主義の戦略」を、「南進論」には、「親ソ援ソ傾向」を看取して、軍人の政治独裁による社会革命よりも、むしろ自由主義財閥の支援する政党政治の方が実害が少いであらうとみたやうです。つまり、全体として当時の戦争指導方針としての「新体制の思想動向」と対峙して、明治憲法を中核とする旧体制に基礎を置く思想運動を展開したことになります。これは、田所さんが母方の関係から岡田啓介（海軍大将・総理大臣）の甥に当ることから来る情報にもよつたのですが、主としては思想的の検討によつて得られた結論であつたと思ひます。

かうして田所さんは、昭和十八年二月、主として「軍人の政治干与と統制経済」との批判によつて、同志十数名と共に東京憲兵隊に拘置され、半歳の後出所しましたが、出所の条件として、その主宰する「精神科学研究所」（昭和十六年一月創立）および「日本学生協会」の解散、ならびに「二ヶ年間の政治活動の禁止」を命じられました。憲兵隊で拘置した理由は、昭和十八年二月十五日「第八十一回帝国議会衆議院決算委員会会議録第十回」の速記録によると「反戦・反軍・平和主義者」の故をもつてでありました。戦後

の今にしてみれば、光榮ある拘置ではありましたが、当時に見れば、反戦反軍主義者の烙印らくいんを押されて政治的発言を禁圧されるといふ、いはば戦時下の政治犯として軟禁されたわけで、苦難の極でした。つづいて行はれた反東条運動の嫌疑による再度の拘置は、病身の田所さんに起ちがたい傷痕を与へてしまつたのです。憲兵隊による政治活動の禁止命令の期限が二十年八月三十一日、すなわち、敗戦の降伏文書署名の日であつたことは、くしき暗合でした。憲兵隊の命令が時効になつて、田所さんが自由の身になつた時は、同時に発令者である憲兵隊ならびに軍そのものの解体した時でもあつたのです。しかしその時既に田所さんは、再び起つことのできない病床に呻吟してゐました。稀に見る蓋世の見識と忘我捨身の勇氣とは、かうしてつひにふたたび陽の日を見ることなく倒れ去つたのです。田所さんこそ、明治維新の志士を継承する昭和の国士といふにふさはしい人物であつたと思ひます。

戦時中、反戦・反軍の故をもつて政府や軍から弾圧された人は戦後英雄視されましたが、田所さんは、戦後は逆に超国家主義者の故をもつて公職追放の対象とされました。天才はその時代に容れられないといひますが、田所さんにはたしかにさういふ悲劇的な

ところがありました。今日「国民文化研究会」の先輩として活躍してゐる高木尚一、小田村寅二郎、加納祐五、故桑原暁一の諸氏は、田所さんと終始行動を共にした人々であります。

田所さんの生涯と思想とについてここに述べつくすことはできない。それは正に、一篇の劇詩であり、現代史の研究のテーマでもあると思ひます。こゝには、その思想行動の概略を寸描したにすぎません。しかし、われ人ともに挙世時流に流れ、権勢におしつぶされた戦争中のことをおもふにつけ、明治天皇と聖徳太子との研究に専念しながら「反戦・反軍・自由主義者」の烙印を押されて弾圧され、戦後は「超国家主義者」とされて、祖国再建への道そのものも封殺され、なつかしい友人からもはなれてただひとり疎開先の旅宿に、老いたる母と妻と乳呑子とをのこして死んでいつたその心情をおもふと、僕にはことばありません。文字通り万斛ばんこくの思ひを胸にして死んでゆかれたにちがいないと思はれるのです。

終戦直後、占領軍が日本に進駐して間もない昭和二十年十二月に物資も食糧もままな

らぬ中で、僕らは勇を鼓して、薄い雑誌『興風』と名づけるものを東京で発刊しました。その第二巻第四号（昭和二十二年八月号）は『田所広泰歌集』と副題して編集されてゐます。そしてその表紙には『敗戦直前の病床詠』が掲載されてゐますが、その遺歌には、昭和二十年八月八日と日付が付されてをり、福島の疎開先での、痛切な悲歌ともうかがへます。病床の田所さんは、当時、老母と若い妻と幼児と一緒にあつたといふことです。

病床雑詠（昭和二十年八月八日）

みちのくの旅路に病みて臥りつゝ砕くるおもひ人の知らなく

我を柱とたのます母や妻子らの面見るごとに心に泣かゆ

夕日かけかくろひはてし西山の木々たちこめてひぐらしの啼く

乳房すふあ子のふる手のうらもなきその手を見れば心ぞいたき（註 うらもなし、無心な）

同（同年八月十一日）

朝よりとのぐもりつゝひやゝけきけふ夕まけてわれは入院す

あ子が泣くこゑもきかえずさびしかる宵々ならむ今日よりの後

そして、八月十五日の終戦のあと二十四日を経た折には、

病床雑詠（同年九月八日）

をれ／＼のやすきをねがふこゝろのみ世をおほひけりくらきこの世や

長き汽笛夜空にひびき旅枕おもひは遠し都かたの方に

をやみけむ雨の夜道をかたらひてゆく人こゑにこの世をおもふ

いきどほり身にみたずとやあまりにも静かなる世をけふもなげきつ

このまま田所さんは立ち上ることができず、日本再建の雄図を胸に、翌昭和二十一年六月十八日、岩手県盛町の客舎で三十七歳で死んでゆかれたのであります。

のち昭和四十五年、僕らにとつて待望の書であった田所広泰遺稿集が『憂国の光と影』（四六判五〇〇ページ）と題して、この『いのちささげて』の出版元と同じ社団法人国民

文化研究会から発行されて、多くの人に深い感銘を与へてゐます。亡くなられてから年月がたつにつれて、ますますその人物の豊かさと識見の大きさが感じられて、今の世にあらば、と憶ふ心まことに切なるものがあります。田所さんが身をもつて当った時代の弊風は、今日も昔と変わらず、田所さんの魂は今なほ現代を叱咤しったするごとくに思はれます。その意味で、田所さんの思想と生涯の価値は、そのあとをつぐものゝ肩にかかつてゐるわけで、今早急に定めることはできないやうに思はれます。

補 記

「日本学生協会」に連なる同信の学友は、本書ならびに本書の前編『いのちささげて』に収録した方々の外にも、全国各地に数多くをられました。今回、この遺稿集を編むに当って、関係者はそれ／＼手を尽してその消息をたづねましたが、未だに消息を知りえない方も少なくありません。そのほとんどが、学徒出陣により、戦地に赴いた人であり、おそらく戦陣において命をさげられたものと思はれます。引続き、その消息をたづねる努力は続けますが、こゝで一応の区切りをつけることといたします。

一方、戦死等の事情は知りえたものゝ、収録すべき遺稿を入手しえなかつた方も数名に及びました。こゝに「前・後二編」の上梓にあたり、その中の九人についてご芳名を記し、もって追悼のまことを捧げる次第であります。

(香川亮二記)

吉田 文 勇

大正十年五月五日、神奈川県に生れる。昭和十四年三月、県立横浜三中（現、緑丘高校）卒。神奈川県師範学校に入学、昭和十六年三月同校を卒業、直ちに横浜市本牧国民学校訓導となり教壇に立つてゐたが、翌十七年八月、仙台東部第三〇部隊に入隊。昭和十八年七月十六日、アリューシャン群島方面作戦中、洋上に於てアメリカ軍の攻撃にあひ、壮烈な戦死を遂げた。時に数へ年二十三歳。

彼は剛毅果断、竹を割つたやうな性質で、小柄な身体に眼をくりくりさせて語る姿が印象的であつた。スポーツマンだったが、静かに思索にふける一面をもち、師範学校時代は「精神科学研究会」に所属し、寮風改革運動の参謀役であつた。横浜大空襲の後、御両親をはじめ、消息がとだえ、墓前にぬかづく術はない。

小 淵 文 二

大正九年六月十九日、群馬県明治村に生れる。高崎商業を経て、昭和十三年四月福島高等商業学校に入学、昭和十六年三月同校卒業。在学中「日本学生協会」に連なる「稽照会」（学内団体）に所属し、昭和十五年七月の「菅平全

国学生合同合宿」に参加。

陸軍に入隊の後、北支戦線で自動車事故のため負傷、現地陸軍病院から高崎陸軍病院に転じたが、昭和十九年二月二十五日死去。時に数へ年二十五歳。

高橋貫二

愛知県安城市に生れる。昭和十五年三月、県立刈谷中学を卒業、福島高等商業学校に入学、昭和十七年九月同校を繰上げ卒業。

在学中は「稽照会」に所属し、例会には欠かさず出席し、一年生の夏「菅

平全国学生合同合宿」に参加。卒業後、陸軍に入隊し前線に出動、昭和十九年七月十八日サイパン島に於て戦死。

山下達雄

大正九年三月三十一日、父正、母初女の三男として熊本市に生れる。県立御船中学を経て、熊本高等工業学校土木科に入学、昭和十七年九月繰上げ卒業。在学中は「熊本高工同信会」と繋がりを持ち思想の錬磨につとめた。卒業後、海軍技術見習士官として入隊、最後は飛行場設営隊



山下達雄

の中隊長としてグアム島に進み、米軍上陸するやこれを迎撃し、昭和十九年八月十日、奮戦玉砕した。時に数へ年二十五歳。海軍大尉。

海軍技術見習士官に合格したとき、家族に送った次の歌が残されてゐる。

我が道は定まりにけり電報は海軍技術見習士官に合格

南洋の父にもとどけと大なる声もて叫ばむ我が合格を（註 父君は陸軍中佐、陸軍士官学校教官を務め、当時スマトラに出征中）
父君よよろこび給へ達雄めもあとつぎ得たり海軍合格

大正八年七月二十七日、父基の長男として札幌市に生れる。道立札幌商業を経て、昭和十三年四月、福島高等商業学校に入学。思慮深い重厚な性格から西寮々長に選ばれるなど、学友間の信望が厚かつた。二年生の折、縁あつ

て「稽照寮」に入寮、毎朝の御製拜誦、『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の輪読を通じ、五人の寮生とともに友情を深めつゝ研鑽した。

昭和十六年三月卒業。陸軍に入隊し渡満。さらに南方に転じ、昭和十九年九月八日、マーシャル群島マニエラップ環礁タロア島に於て戦死。時に数へ年二十六歳。両親にあてた次の歌が遺されてゐる。

あたらしき夏の戎衣によそほひてひたすらゆかむやすくにのみち

大正十年二月四日、群馬県高崎市に生まれる。高崎商業を経て、昭和十三年四月福島高等商業学校に入学「稽照会」に所属し、皇紀二六〇〇年の学内

記念文化祭には、日本精神史展の資料蒐集、作成に力を注いだ。昭和十五年

七月には「菅平全国学生合同合宿」に参加した。

昭和十六年三月卒業後、慶応義塾大学に進んだが、病を得て帰郷、昭和十九年九月自宅に於て逝去。時に数へ年二十四歳。

昭和十年五月二十五日、父薩治、母タマコの長男として山口県に生れる。

井澤善治

郷里の中学を経て、昭和十五年四月、徳島高等工業学校土木工学科に入学、

学友青砥宏一氏とともに「徳島高工同信会」に属し、学風の改革、研鑽につ

とめた。

昭和十八年九月卒業、直ちに海軍予備学生として海軍航空隊に入隊。昭和十九年九月二十六日、対潜哨戒を兼ね、台湾の基地から基地員輸送のためマニラ方面に飛行中、敵機と交戦、台湾東方洋上に於て戦死。時に数へ年二十四歳。海軍中尉。

孝忠

康

大正十一年三月二十五日、父一雄の三男として岡山市に生れる。県立岡山

第二中学校、国学院大学予科を経て、国学院大学道義学科哲学科に入学、

東京「正大寮」に入寮。昭和十八年十二月一日学徒出陣。中部第六六部隊に入隊、朝鮮を経て北支那歩兵下士官候補者隊（予備士官学校）を卒へ、北支派遣甲第一八三二部隊に



康 忠 孝

在隊中、発病。内地送還となり、昭和二十年二月二十二日、大阪陸軍病院に於て逝去。時に数へ年二十四歳。彼は常に笑みをたやさぬ温和な学生であつたが、三井甲之訳のファウストを写したノートに「昭和十七年十一月中旬開始、昭和十八年一月二十日筆写了」と記してあるなど、内に着実、ひたぶるなものを秘めてゐた。

生しょう野の春はる生を

大正十年二月十六日、大分県大分郡庄内町に生れる。昭和十五年三月、台北第二商業を卒業、台北高等商業学校入学。吉野圭一氏（本書に収録）のすすめにより「神随会」に入会した。彼は生来寡黙、刻苦勉勵の日常であつたが、些事にこだはらない一面もあつた。この度令兄積善氏との連絡で初めてわかつたのであるが、彼の姓はイクノではなくシヨウノであつた。学友はすべてイクノと呼んでゐたが、一度も訂正を求めたことはなかつた如くである。

昭和十七年、三年生の時、台北の国民精神研究所において、神随会（中西旭教授指導）を中核とする二泊三日の合宿が、台北高商一、二年生全員の参加で行はれた。彼は班長（一学年三班編成、一班



生野春生

約五十名)の一員として、自由討論、短歌の創作と批評及び輪読等に於て、生来の粘り強さで班員の指導に當つた。この合宿は参加学生は勿論、傍聴の諸教授にも深い感銘を与へ、後に、第一師範、台北高校、帝大予科、新竹商業等の代表者合宿にと進展する原動力となつた。

昭和十七年九月、台北高商卒業、同年十月一日、台湾軍第三部隊に入隊。北支に転じ、昭和十八年十二月保定陸軍予備士官学校を卒へ、見習士官としてジャワ防衛義勇軍幹部教育隊へ転属した。この教育隊は、インドネシヤ民族で構成する軍隊の將校要員を教育する部隊——スハルト現インドネシヤ大統領もこの部隊で教育を受けた——であり、彼は二回にわたつて小団長(日本軍の小隊長に相当)要員の教育に心魂を傾けた。昭和二十年八月終戦の大詔を拜して義勇軍解散の後、人の嫌がるジャカルタ外港タンジョンプリオクでの港湾労務班指揮の任務を淡々として引受けた。しかし、英軍との折衝等に心身を消耗して病を得、同地からボゴールの病院に送還される途中、インドネシヤ独立をめざす狂信的な回教徒の襲撃にあひ、一行十二名とともに、熱愛してゐたインドネシヤ民族の一団の手によつて非命に斃れた。時に、昭和二十年十一月十二日、数へ年二十五歳。

あとがき

昨年、本書の「前編」を上梓することが出来て、永年の念願が曲りなりにも実現し得たときの喜びは、今なほ忘れ得ぬものがある。いまこゝにその「続編」を完結して「戦中」期に尊い生命を捧げられた亡き友らのみ霊のみ前に、これを捧げ得ることは、編集委員一同のこの上ない喜びである。

さきに本書の「前編」『いのちささげて』が世に出るや、若い方々のあひだに、この本の輪読会が持たれてゐるとの報告や、また、深い感銘にさそはれたとの感想が沢山に寄せられた。亡き友らも、きつと喜んでくださったことと思ふ。

二書を編了してへて感ずることは、本書二編に集録した四十六名の方々は、例外なく「親思ひ」であり「兄弟思ひ」であり、また「友情に殊のほか篤い」人々であられた、といふことである。それは、今日の若い人たちにも、きつと共鳴共感される事柄であらう。「国を思ふ」といふことの具体的内容は、「親にまめやかに仕へる」ことであり、『教育勅語』のお言葉「兄弟ニ友ニ、朋友相信シ」での生き方にきはまるのであらうか。それを、身を以て行ぜられたのが、本書に見る亡き友らであ

つたのである。わづかの時間の余裕——三分間といふわづかな時間にも、友への便りを書き送つてゐたのが、本書の人達の生き方であつた。さうせざるを得ぬほどの「友情」が生き／＼として躍動してゐたのである。これだけでも、いまの世に雄々しく再現せしめるべきだ、と思ふのは、ひとり私ただけではなからうと思ふ。

いま一つは、こゝに収録した文中から、なき友らの精神生活が、実に「鋭敏な情意」を内包してゐた、といふことに気づかされたことである。二十歳前後の若者でありながら、人生の根源に直接する数々の言葉を、自づから表現し、また、永遠に語り継ぐに足るやうな言葉を、沢山に残してをられるのである。このことは、この人たちの在りし日々の生き方が、たぐひなく充実した精神生活であられたことを、よく物語つてゐるのではなからうか、さう思はずにはゐられないのである。

なほさいごに、この二書を通じて多くの方々によって集められた遺稿は、かなりの数にのほつてゐた。これらの遺稿を前にして、これを今日まで大切に保存してこられた尊いお心を、本当に有難く思つたことであつた。

編集の作業は、お一人お一人の姿を、できるだけ如実に伝へたいと念じながら進めたが、限られたページの中に収めるために、止むを得ず、かなり多くの原稿を割愛させていたゞくはかばかかつ

た。どれを収録すべきかの選択に、委員は一度ならず、二度、三度と繰返して討議にかけたのであるが、果してまことの姿を伝へ得たであらうか、といふ心配は依然として残つたまゝである。たゞ、亡き友らのみ霊の御諒恕を乞ふのみである。死歿せられてから三十有余年、今こゝにまがりなりにも、亡き友の精神の軌跡をとどめえて、これを後の世に伝へ得ることができたことは、ただ、みたまのふゆによるところと謝し、また、出版に當つてご協力を惜しまれなかつた多くの方々に、心からお礼を申上げる次第であります。

在天のみ霊よ、とこしへにみ国の行く手を護らせ給へ。

(編集委員ほか協力者一同)

昭和五十四年四月二十日 第一刷
昭和五十五年六月一日 第二刷

頒価 九〇〇円 一六〇円

編者 社団法人 国民文化研究会

理事長 小田村寅二郎

発行所 社団法人 国民文化研究会

104 東京都中央区銀座七―一〇―一八

(柳瀬ビル)

電話 〇三(五七二)一五二六、七
振替 東京(七)六〇五〇七番

続 いのち ささげて
―戦中学徒・遺詠遺文抄―
国文研叢書 No. 20

印刷所 奥村印刷株式会社

東京都千代田区西神田一―一―四

落丁乱丁のものはお取り替えます

国文研叢書 (新書判)

No. 1	夜久正雄 著	古事記のいのち (改訂版) 原41年・改48年	316頁
No. 2	桑原暁一 著	日本精神史鈔—親鸞と実朝の系譜 41年	279頁
No. 3	高木尚一 著	弁証法批判の歴史 42年	241頁
No. 4	小田村寅二郎編	日本思想の系譜—文献資料集・上巻(古代・中世) 42年	309頁
No. 5	小田村寅二郎編	日本思想の系譜—文献資料集・中巻その1(近世I) 43年	317頁
No. 6	小田村寅二郎編	日本思想の系譜—文献資料集・中巻その2(近世II) 43年	409頁
No. 7	小田村寅二郎編	日本思想の系譜—文献資料集・下巻その1(近代I) 44年	403頁
No. 8	小田村寅二郎編	日本思想の系譜—文献資料集・下巻その2(近代II) 44年	381頁
No. 9	川井修治 著	歴史と人生観—マルクス主義の超克 43年	283頁
No.10	小田村寅二郎編	欧米名著邦訳(明治)集—文献資料集 45年	483頁
No.11	桑原暁一 著	続 日本精神史鈔—花山院とその系譜 45年	310頁
No.12	夜久正雄・山田輝彦共著	短歌のすずめ—創作と鑑賞 46年	309頁
No.13	夜久正雄・山田輝彦共著	短歌のすずめ(続) 46年	316頁
No.14	桑原暁一 編	ヨーロッパにおける—マルクス主義批判論集 48年	338頁
No.15	夜久正雄 著	白村江の戦—7世紀・東アジアの動乱 49年	324頁
No.16	桑原暁一 遺著	国史の地熱—聖徳太子と楠氏の精神 49年	293頁
No.17	戸田義雄 編	日本における—マルクス主義批判論集 51年	320頁
No.18	三井甲之 著	明治天皇御集研究 52年	354頁
No.19	本 会 編	いのち ささげて—戦中学徒・遺詠遺文抄 53年	450頁





